十一月號

女人藝術

附錄「女人大衆」


榮養の合理化を……
最も容易に實行する方法として本品の御愛用を御奬めします。
森永ミルクチョコレート
一個五錢・十錢・廿錢
チョコレートのみが持つ獨特の榮養と味ひは幼き者に力を！若き者に勇氣を！老たる人々に喜びを與へます

資生堂の
數種の効用をかねる
白粉下クリーム

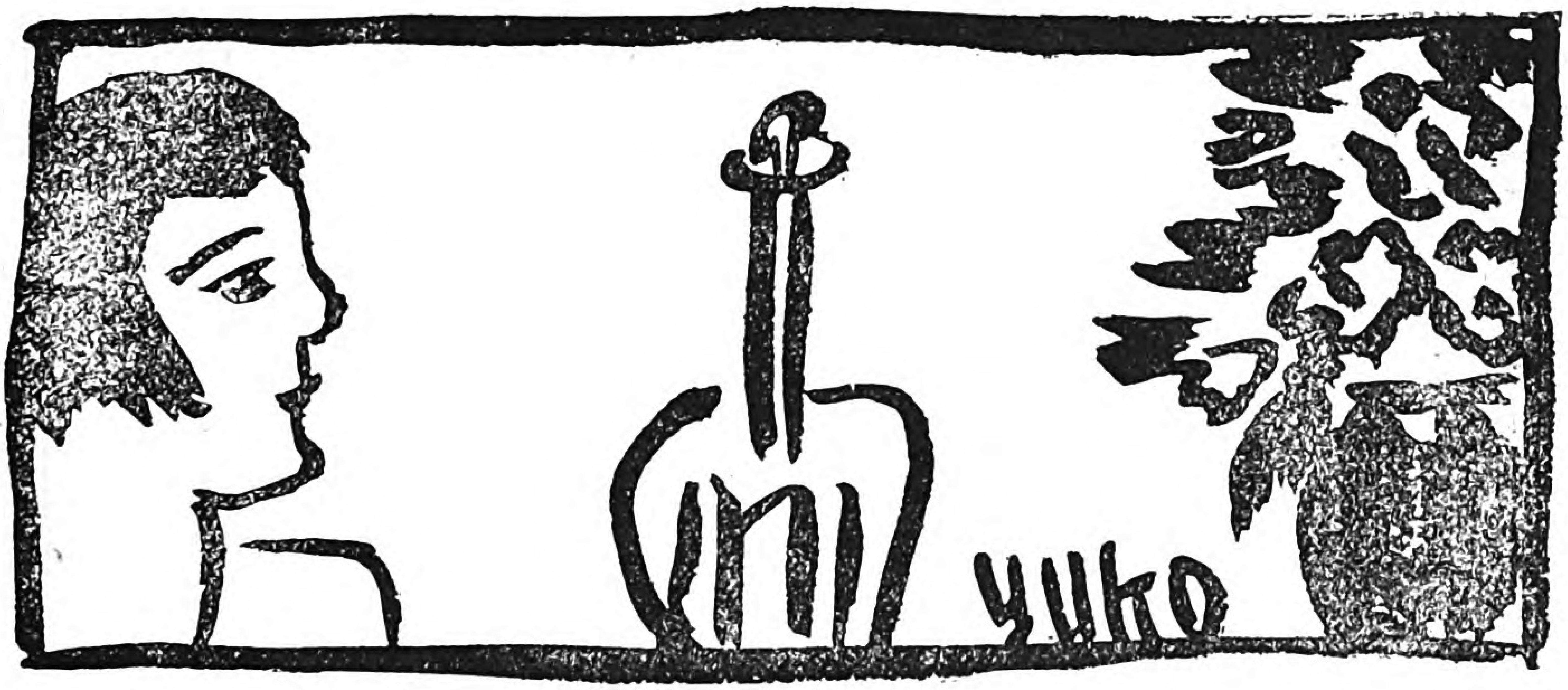
濃化粧下クリーム　濃化粧下用專問で白粉原料が入てますからお徳用です（五〇）

スムーシンクリーム　濃、淡化粧下、美顔用に良い理想的の品であります（一、〇〇 七〇）

コールドクリーム　皮膚の榮養料、マッサージ用、白粉下に適してゐます（八〇）

資生堂化粧品

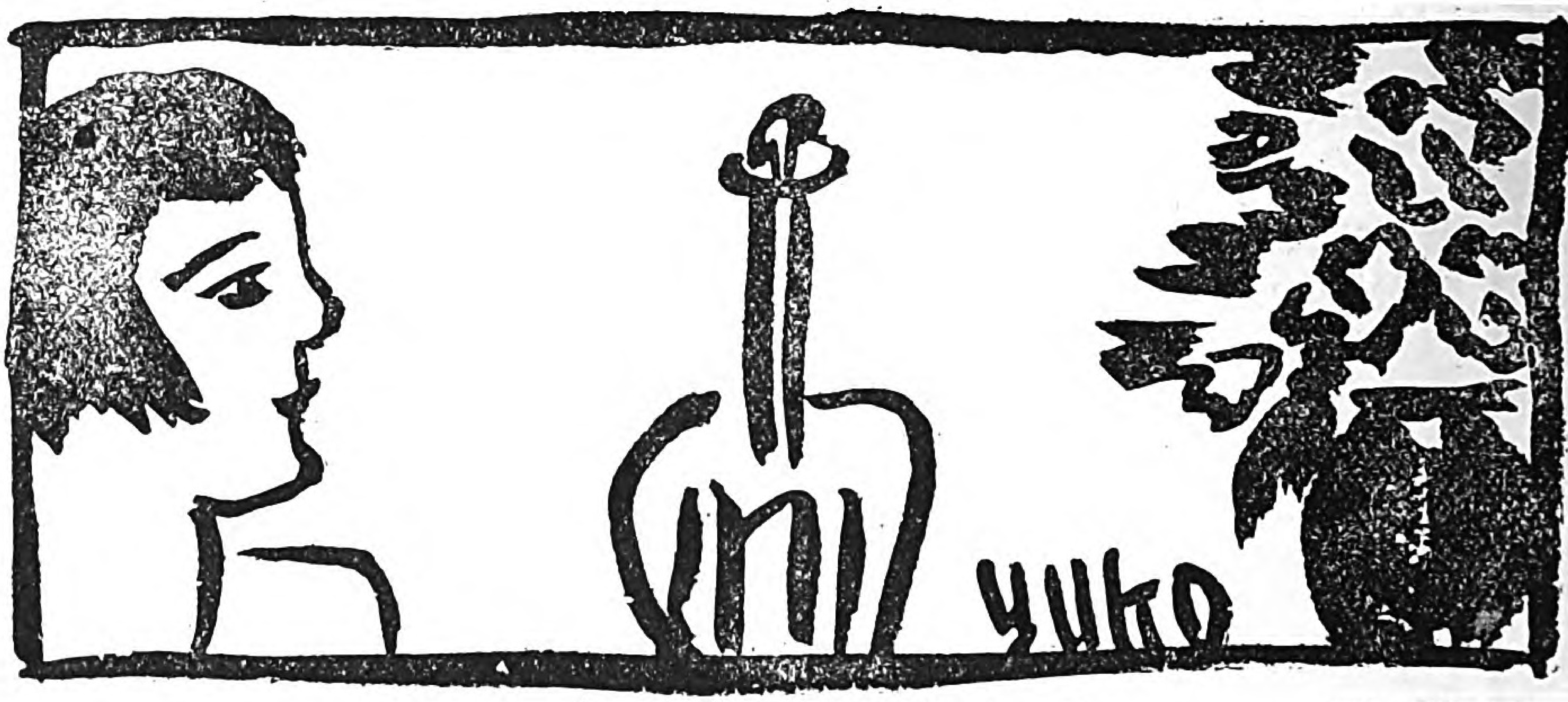
各地資生堂チエインストアーにあり



女人藝術十一月號目次

—禁轉載—

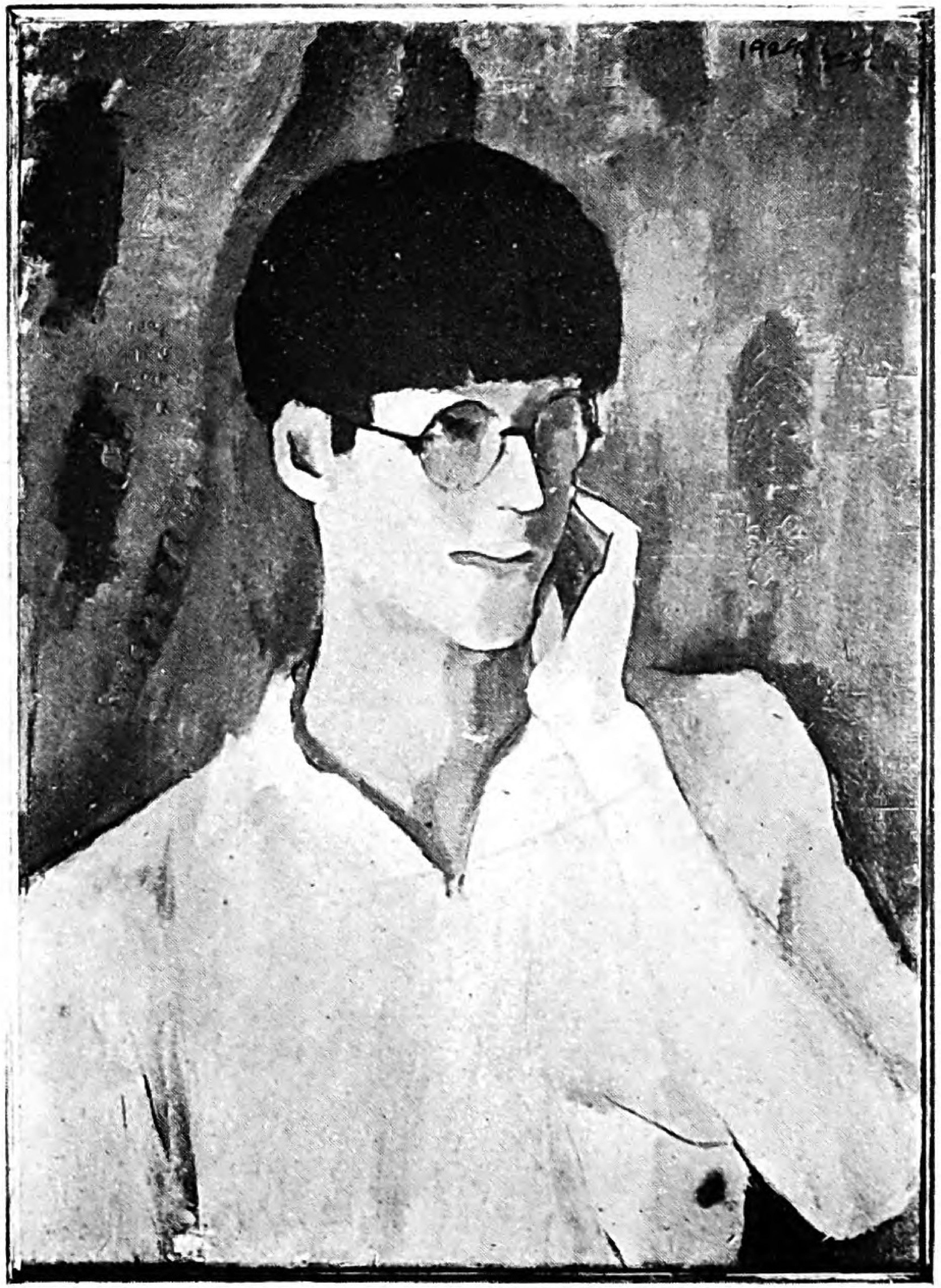
生活と風景



附錄 女人大衆



——白樺の秋——



深澤紅子筆

—男の顔—



甲斐仁代筆

—玉椿—


上
ヒゲタ醤油
ママ
おかわりしてもいゝ？
ヒゲタのお料理って、とてもおいしいね
▼最寄の酒醤油店にて
御買求めを願ふ



かつて日勞黨婦人部の指導者として活躍してゐた織本貞代氏が、今度龜戸町の工場地帶をえらんではじめた婦人勞働女塾の生徒さん達である。こゝは專ら勞働組合の婦人闘士、婦人指導者を養成するのが目的で、委員は織本氏をはじめ、東洋モスリン、東京モスリン工場に働く女工さんたちである、現在三十人程の目覺めた女工さんが未來の戰線の闘士たる可く熱心に勉強してゐるが、大變好成績で、二日に一人の割合で入學者があり、漸次教室の手狹さをさへ感じる程だといふ。勞働運動の左翼戰線が完膚なきまでに蹂躪されつゝある時、時機を得た有意義な計だてとして諸方から注目されてゐる。

科目は午前と夜間に、勞動運働の理論、實際を教へる傍ら、裁縫、生花、料理など、女一人前の教養を忘れないといふ中々行き屆いたやり方で、あまり家庭的な雰圍氣に親しむ餘裕のない女工さん達は、土よう日の夜の料理の時間など嬉々として通つて來るといふ。(寫眞はまさに試食仕樣とする織本氏と生徒さんたち)。



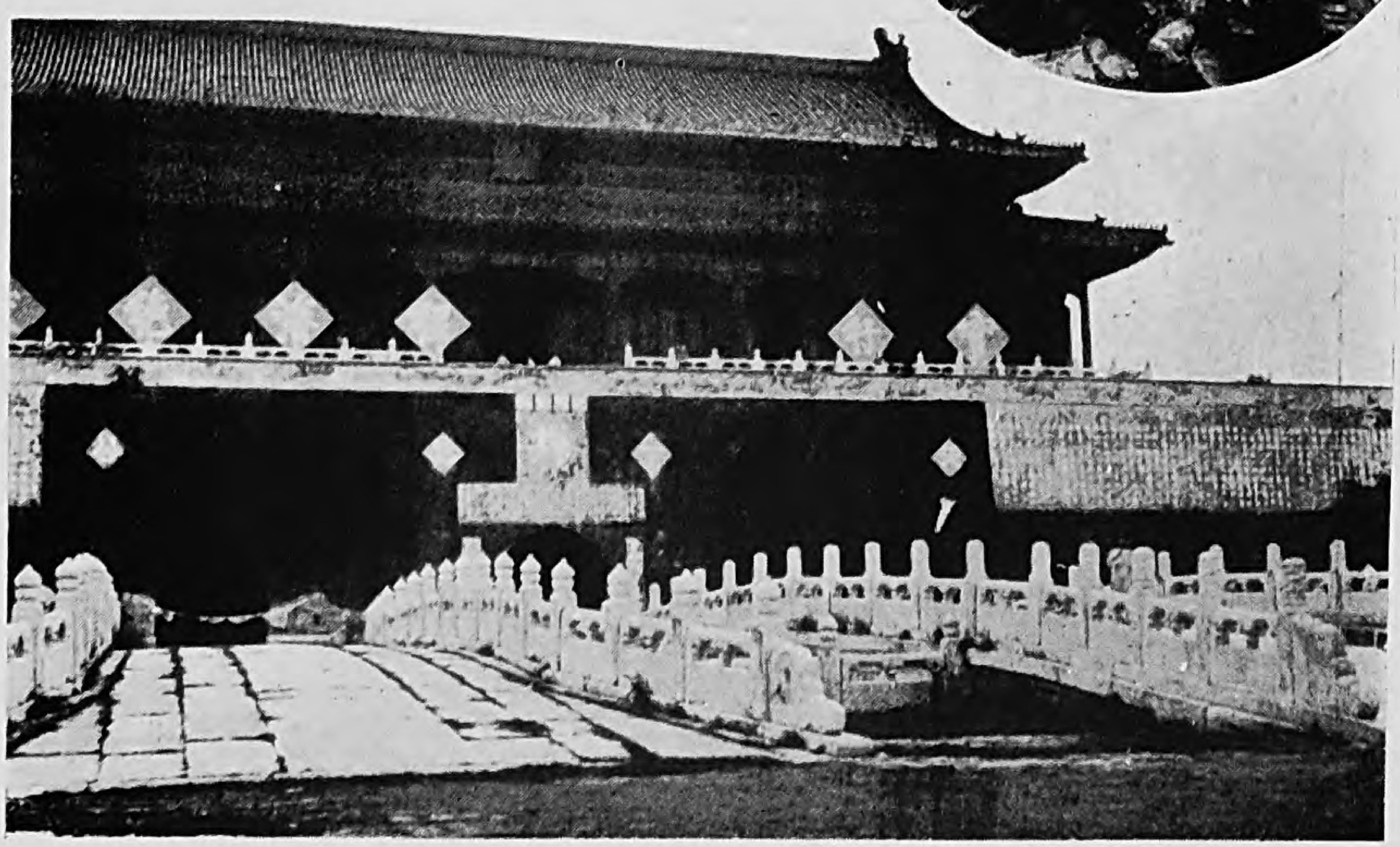


──北平舊宮城内──

上──中海公園の壁畫──

中──中海公園の一部──

下──三海公苑内南海公園、天安門──



明眸禍

菊池寛作（婦女界連載）

脚色 野田高梧

監督 池田義信

撮影 濱村義康

明眸禍の唄 吉井勇作歌 杉山長谷夫作曲

栗島すみ子主演

岡田時彦第一回出演

渡邊篤
岡田宗太郎
横尾泥海男
齋藤達男
日守新一
高田稔

鈴木歌子
高松榮子
岡村文子
吉川滿子
川崎弘子
高尾光子

大衆

十一月號 25錢

大衆實話

見よ！實話界に新生面を展かんとする本誌の飛躍！

彼女が特種になる迄（女大生の私生活と新聞記者の苦衷）……奥榮一

未亡人○○稼業（未亡人を専門に稼ぎ廻る老婆の話 彼はどうして生きて行つたか、讀まねばとても想像出來ない餓鬼道物語）……山道小夜子

或る饑渇地帯（今の世にもこんな哀れなことがあらうか？三篇共に實見者の話）……大道寺浩一

工場・鑛山慘死物語 三篇……布施金重

大衆講座 第二講 無產黨財政理論の研究……平野學

地方自治體と無產派の進出……編輯部

關東消費組合聯盟の分裂と勞働者消費組合運動の展望……岡本利吉

◇日本勞働爭議皮切物語……米原久雄

東京芝公園四號地ノ四 大衆社 振替東京八〇五〇一

獨占資本主義の好典型 國定教科書の生產者に與ふ

時代の尖端に動く人々（學徒の巻）……ABC

本誌獨特のプロ派大衆小說

支那革命秘話 聞える曉鐘……藤枝丈夫

麥の穗のやうな女……德永直

自由黨秘聞 加波山事件……落合三郎

◇海外モダン讀物五篇◇

□三人の紳士……EATER
チエムス・ブランドの聖書
變物の蒐集家
外交的手腕

□米國盛場レタン評判記……MOKA

□赤い結婚……マラシキン

十月號即日發禁
讀者は發禁に備る爲め直接申込まれたし

◇醉どれの太陽（プロレタリア文學の最高峯、貴重なる典型。サウエート・ロシアのモボ・モガを完全に描寫した雄篇グラートコフは セメント[redacted]の作者としても有名である）グラートコフ 井田孝平譯

女人藝術

十一月號



大講演會豫告

檄!!!

檄に全女性の尖端を切つて邁進する私達は、想念と感情とを單にペン先からのみほとばしらせるには飽き足りぬ。私達は街頭と會堂とを問はず、溢れる觀念と熱情とを叫びたい。ここに「女人藝術」の辯論部の存在理由がある。そしてこれまであらゆる機會を利用して、全女性の代辯者として秀れたる論者を送つて來た。今やまた高秋清爽の時、私達は左記のメンバアに依つて熱烈な要求を社會に投げようとする。火を吐くところ恐らく世耳を震撼せずば措くまい。

來聽を祈る。

女人藝術秋季

時日　昭和四年十月十八日(金曜日)

場處　數寄屋橋朝日新聞社階上講堂

切符　金參拾錢・當日會場・新宿紀之國屋書店

◆講演者氏名◆

演題	講演者
雜感	宇野千代
數の力	ささきふさ
新らしい短歌	中河幹子
無産婦人の立場	松村喬子
絶叫と實行	生田花世
創造的生活	望月百合子
題未定	小寺菊子
此頃の感想	神近市子
五分の感想	今井邦子
感想	辻山春子
婦人社會的地位	中島幸子
浮浪人の言葉	林芙美子
題未定	岡本かの子
題未定	村山壽子
題未定	織本貞代
世界の獨占形成及びその問題	中本たか子
藝術について	平林たい子
反戰運動と文學	戸田豊子
一言	長谷川時雨
近代女性と文藝と	八木秋子



八木、高群兩氏のアナーキズムに對する駁論

隅田龍子

前がき

この一文は「女人藝術」八、九、十月號の八木氏及び高群氏のアナーキズムに對する駁論である。

マルキシズムとアナーキズムの相違は、一見共産主義社會を目指す點に於て一致するかの如くであるが、アナーキズムはプロレタリア黨の獨裁の問題、戰略戰術の問題、即ちプロレタリアートの歴史的役割と任務とを抽象的「自由」の下に否定し去る最悪の日和見主義であり、それ故にマルキシズムとは全く立場を異にしてゐる。

アナーキズムは、最早や歴史的に批判克服された思想ではあるが、更らに又アナーキズムも凡てのブルヂョアジーや改良主義者の如く理論と實踐をバラ〳〵に切離してゐる點に於て、現實の問題に對してはそれ自身無力である。

一　氏等の云ふ自由と、我々[illegible]の自由との根本的相異

八木氏は、凡てのマルキシストは理想社會の認識を誤つてゐると、大見得を切つて居られる（八月號九五頁）

いかに誤つてゐるか？氏について聞かう。氏はレーニンの國家と××の中から左の文を引用して

「かくして、世界に於ても、早や何等の搾取の可能もなくならば、一人の地主も一人の工場主も（引用文には工場もとあるが、一人の工場主もの誤りであらう。）もはや存在せず、或る者は飽滿し、他の者は飢ゆると云ふが如きことがもはやなくなるならば、――かゝる事態に對する何等の可能性も全くなくなり了つたならば、その時こそ始めて、我々はこの機關（國家存力による獨裁機關）をぼろ靴の如く捨てるであらう。かくして始めて何等の××もなく何等の搾取もなくなるであらう。」

と、更に、エンゲルスの國家による他階級の××が不必要となるに從つて、「國家は自ら眠りこむ」と云ふ言葉を引用せられて後に、此獨得の見解を花々しくも展開して居られる。

「それは、（レーニンの、一人の地主も一人の工場主もない、搾取する者もされる者もない社會）民衆が權力の支配に慣れ、奴隷の服從を服從と意識しなくなつた狀態――云ひかへ

れば、人間の自由意識が完全に磨滅して苦痛を苦痛と知らぬ文字通り眠り込んだ状態でしかない。從つて、その得るところの「自由」は、みづからの意志によらず强制され諦めさせられた末の自由である。」

「眞の幸福な（どんな幸福か？　隅田）社會生活は人間の自發的創造的意志（何のことか？　隅田）によつてのみ生れる――。」

　氏は更に、マルキシズムの社會は獨裁支配に一歩を始めるに反し、アナーキズムの社會は、

「不完全な個人の自由（不完全な個人の自由とはどんな自由か？　隅田）に發生し（どんなに發生するか？　隅田）爛漫と花咲く自由へと限りなく伸長して行く聯合社會である。」

　かくして氏は、爛漫と花咲くアナーキズムの社會を空想することによつて、レーニン主義の國家死滅の過程は理解されるよすがもなく、從つて、ソビエートロシアの勞働者はあらゆる幸福と自由を奪はれた。ロシヤの社會生活を幸福であると宣傳するのは陰謀であり僞瞞であり、たゞロシアのプロレタリアは極度に不幸であるのみだと、我身の不仕合せの如くに歎いて居られる。

　この馬鹿々々しい、まことに「曇り日」のヒステリー患者の如き愚にもつかぬ「獨白」は「爛漫と花咲く自由」にあこがれる少女の夢の如くに、たはいもないものである。

　第一に氏は、「自由」と云ふ概念に對しては恰で無智である。現在我々の前にあるブルヂョアの自由とプロレタリアの自由とを區別して見ようともしなければ、プロレタリアはいかにしてプロレタリアの自由を獲得するのかそれらは少しも明にしてゐないではないか！

　マルキシストは左樣な考へ方や、物の見方はしない。此等の如くに「花咲く自由」にあこがれて、現實の社會生活から、從つて相反するブルヂョアの自由とプロレタリアの自由から目を掩ふやうなことはしない。

　資本家はどんな自由を持つてゐるか？　資本家は勞働者を搾取する自由（正に氏等の好む爛漫たる自由だ。隅田）を持つてゐる。賃銀値下げと馘首に對して反抗する勞働者のストライキを××のドロ靴と×××で蹂躙し、プロレタリアートの前衛を檢擧投獄する自由を持つてゐる。

　プロレタリアートはどんな自由を持つてゐるか？　プロレタリアートは餓死する自由しか與へられてゐないのである。プロレタリアの要求する自由は氏等の云ふ個人（資本家も×××長も、××官も引つくるめて？――隅田）の自由を要求してゐるのでは斷じてない。

　プロレタリアの要求する自由は彈壓と戰ひつゝ、ストライキの自由、無産階級の言論集會結社の自由、×××活動の自由である。

　我々は個人の自由をではなく、プロレタリアの自由を要求して戰つてゐる。我々は資本家地主の搾取と抑壓とに對しては無慈悲な鬪爭をもつて答へて行かなければならぬ。

　プロレタリアートは資本主義の墓掘人である。資本主義社會を××し、ブルヂョア獨裁を××し、プロレタリア政權の新らしい機關をもつて其れに代へなければならない。何故ならば、ブルヂョアジーは最も絶望的な、且つ狂暴な反抗なしには、自己の歴史的地位を新しい階級に讓ることが出來ないからだ。彼等は再びブルヂョアジーの曾つてありし日の華やかな生活を取戻すべくあらゆる死物狂ひの反抗をつゞける事なしには滅んで行かないからだ。それ故にプロレタリアートはブルヂョアジーの反抗と暴力を粉砕しなければならぬ。

　我々は、資本主義社會から社會主義社會への過渡は×××な、或は平和的の、又は行政的の困難な鬪爭の時代だと思つてゐる。氏等の如く「爛漫と花咲く」春の如くやつて來るものだと空想してゐない。氏等の頭はまことに單純である。人間の意思や個人の自由を叫ぶことによつて、プロレタリアートの政治行動を否定することによつて、「爛漫と花咲く」のどかな共産主義社會がやつて來るものだと信じてゐるらしい。こんなことはブルヂョア

の斷話しには面白いかも知れないが、勞働者農民は憤激をもつて聞くであらう。

氏はプロレタリア政權については素晴らしい無理解者である。だから歪んだ氏の目をもつて見れば正しいものが、曲つて見えるのである。氏のこの誤りは第二[illegible]の空想へと勇敢に躍進して行く。

「いひ代へれば人間の自由意識（どんな人間か？　搾取する人間か？　される人間か？　自由意識とはどんな意識か具體的にはつきり云はなければ解りません。隅田）が、完全に磨滅（完全に磨滅した自由意識とは何のことか？　隅田）して苦痛を苦痛とも知らぬ（まさか不死身にはなりますまい。隅田）文字通り眠り込んだ狀態（カルモチン自殺者ではあるまいし。隅田）でしかない」（八木氏）

氏はエンゲルスの「國家が自ら眠り込む」と云ふ言葉を使つて居られるが、エンゲルスの場合は最早や抑壓する何ものも亦××される何ものもなくなつた無階級社會に於ては一方が他方を抑壓する所の國家機關は自ら眠り込むに至ると云つてゐるのであり、氏はその言葉を「人間の自由意識が、完全に磨滅して苦痛を苦痛とも知らぬ眠り込んだ狀態」と云つて、人間の意識の說明に引用して居られるが、「自由意識が、完全に磨滅した人間とはどんな人間であるか？　苦痛を苦痛とも知らず眠り込む現實の人間はあるか？　氏はカゴの鳥を例に引いて居られるが小鳥と人間とを同一に見ることは、氏でなければ出來ない藝當である。

氏の頭腦は、實に小學六年生位の子供の空想よりも張り合ひのない幼稚な空想である。氏等は自由について語る。だがブルヂョアの自由とプロレタリア自由とを分析しない。氏等は××××社會について語る。だが、現實に、何から始むべきかを知らずいかにして其處に到達すべきかを語らない。かくて氏等の語ることは一つの空想であるそれ故に現實に對しては無力で反動である。

「私達はロシアのプロレタリアは極度に不幸であることを知るのみである。」（八木氏）

自らの空想を語り、空想をもつて現實を觀る氏等に、現實の至難なプロレタリア國家建設は「百花爛漫」の如く長閑でないことは當然である。一國に於て勝利せるソビエート聯邦のプロレタリアートは、自國に於ける舊支××の反抗を抑壓し、全地球の帝國主義國家の干渉から自らを防衛しつゝ國際プロレタリアの勝利のため益々その權力を强化し武裝せねばならぬ。氏等はこれに對してブルヂョアと口を揃へて「ロシアは不幸だ」と叫ぶのである。

二　政治行動を否定するアナーキズムは反動的ユートピアである

次に高群氏の方を拜見しよう。氏の論文（？）は冗漫極るものであるが、その中に一貫してゐるものは八木氏と同じく、プロレタリアの政治行動の否定であり、抽象化された「個人の自由」の思想である。資本主義死滅の過程に對する無理解は、アメリカ雜誌から得られたと稱する資本主義は蓄積から浮動へ集中から普遍へ、かくて自己分解により我々の理想の社會へ落ち込んでそこで破滅する——と云ふ珍らしい紹介をして居られる。

まづ氏のプロレタリア政治行動否定の理由を聞いて見よう。

「非政治的であるから、非實際的になりやすい、從つて小ブル的な危險がそこにあると云ふのであれば、同じ危險は政治主義の方にもある。彼等はあまりに「實際的」になりやすく、從つて妥協的、墮落的な傾向が强い。この傾向は無產黨の政治的經驗と共に愈々立證され無產者は「政治主義は非常に完全に小ブル的である危險がある」ことを知るであらう。」（九月號七頁）

「無產者が政治に參與することは、それだけ支配者に僞瞞されること、それだけ革命を遲

延せしめ、意識を緩和、そして墮落せしめることと考へる。(同十頁、傍點隅田)

氏等は、無產者の政治行動は墮落であり、革命を遲延せしめるとの理由をもつてプロレタリアートの政治行動を全部的に否定してゐる。果して正しいか？

我々は一切の階級鬪爭は政治鬪爭であると主張する。何故ならば、雇主に對する勞働者のストライキも、土地を欲する農民の鬪爭も國家權力によつて彈壓されてゐる。それ故に全勞働者の鬪爭は政治的性質を持つものであり、勞働運動を××的鬪爭に結合せねばならず、勞働者農民を抑壓するブルヂョア××に對する鬪爭は、究極に於て權力奪取の鬪爭である。

資本主義の矛盾は、全國的に勞働者をストライキにかり立て、一切の勞働者の鬪爭は漸次的にブルヂョア政府を脅やかすに至る。かくてブルヂョアを××しその國家を××する鬪爭は政治行動でありブルヂョアジーの反抗を××しこれを支配するためのプロレタリア的階級機關がブルヂョアジーに代つて政治權力を獲得するのである。

一勞働階級は專制政治の敵であると云ふ思想を宣傳することのみに止ることが、出來るか？ 否、斷じて否である。勞働者に對する彼等の政治的壓迫を說明するだけでは足りない（勞働者の利害が雇主の利害と對立してゐるのを說明するだけでは足りないと同じやうに）この壓迫の具體的發現がある度に彼等を××させねばならない。（經濟的壓迫の具體的發現に對して彼等を××させるやうに）然るにこの政治的壓迫は社會の最も異つた諸階級の上に及ぼされ、而して生活のあらゆる領域と職業的市民的個人的、家族的、宗教的、科學的、諸活動のあらゆる領域に於て發現されるのである以上、勞働者の政治意識を發達させるために、我々が專制政治に對抗する政治戰野を組織しなければならぬ。」（レーニン何をなすべきか。）

我々は八木氏や高群氏の如く無產者の政治行動は、無產者を墮落に陷れ、××を遲延せしめるものだとは考へない。反對に我々は、プロレタリアートの政治行動こそ資本の搾取とブルヂョア政府の××に憤激する大衆を××化し、階級鬪爭に參加させるものだと信じてゐる。もし我々が氏等の望み通りに、支配者の搾取と××の具體的な發現に對して反抗しないならば氏等及び資本主義は萬々歲であるだらう！

しかし我々は、雇主の賃銀値下げと馘首に對して、ストライキや示威運動を彈壓し、我我の勝れた階級戰士を×××してゐる××に對しては決××な鬪爭をもつて報いねばならず、それ故に我々は我々の勇敢なる政治的指導者團を持たねばならぬ。

過去の歷史に於て、奴隷制の社會に於ける奴隷達はその主人に反抗して一揆を起し暴動を謀み、內亂を惹き起した。しかし彼等は、彼等の鬪爭を組織的に指導する彼等の先頭部隊である所の政黨をつくらなかつた。そして彼等は、如何なる目標に向つて進むべきかをはつきり理解出來ず、從つて歷史の××的瞬間に於てさへ常に支配階級の掌中より他に出ることが出來なかつたのである。

「人類は資本主義にまで到達した。そして資本主義は都市文化のおかげで抑壓されたプロレタリア階級をして自覺せしめ、又國際勞働運動を發生せしめ、大衆の鬪爭を意識的に指導する所の社會主義諸政黨の中に組織された數百萬の勞働者を發生せしめたのである。議會主義なくしては、普通選擧權なくしては勞働階級のこの發展は不可能であつたらう。」（レーニン）

奴隷もまた彼等の主人に對しては反亂を起したのであるが、彼等は彼等の强固なる指導者團を持たずして敗北したのである。

人類は資本主義にまで到達した。生產機關を占有してゐる支配者團は軍隊を持ち、裁判所、警察、牢獄を持ち、組織化されたブルヂョア法律をもつてプロレタリアートを××す

る。プロレタリアートは封建時代の奴隷ではなかつた。この强大なる敵の××機關に對し彼等は彼等の闘争團を組織し、國際的に規律ある唯一の××××××××に結合統一され勝利せる勞働者農民の國家ソビエート聯邦を建設するに至つたのである。

プロレタリア軍の××××——プロレタリアート×の勇敢な指導による被抑壓者の政治行動こそは、資本主義を××し被抑壓階級を資本の鐵鎖から解放する×××闘争である。

しかるに氏等はこれら一切のプロレタリアの政治行動を否定される。氏等の主張は、××せる敵軍隊を前にしてゐながら、だが、組織に反抗してはならない。黨は「形を代へた支配者だから」つくつてはいけない。プロレタリアの武裝解除だ。そして人間の自由、個人の自由！　資本主義萬歳である！

「自由を目標とするものは、あくまでも自由の意識によつて戰ふ常住不斷自由の意識を確と持ち續けるそれによつてのみ目標に達することが出來る。」（高群氏、傍點は隅田）

高群氏の自由意志によつて戰ふとは何のことか？　勞働者農民は、資本家地主とブルジヨア政府の具體的搾取と抑壓の事實に對して闘争するのであつて自由意志によつて闘争するのではないのである。

常住不斷の自由意識を確と持つてゐればそれによつて闘争なしに平和裡に、百花爛漫の××××社會が果たして來るか？

凡ては明かである。アナーキズムこそ、大衆の××的エネルギーを（支配者と同じやうに）個人の自由、人間の自由を說くことによつて、日和見主義の泥沼に引づり込み、プロレタリヤ××を永遠の彼方に押しやる「形を代へた支配者」の役割を果たす反動思想である。

××××者は、アナーキズムの如く、資本家も、裁判官も、將軍も、地主も其他等々の一切の人々の抽象化された「個人の自由」や「人間の自由」を要求しはしない。××××者は、雇主により、政府によつて、立法的にまた××的に抑壓されつくしてゐるプロレタリアの自由を要求して個々の工場、一つの農村その發現が何處で、いかに些細な事件であつても雇主の横暴に對し、××の暴壓に對して闘争するのである。

我々はアナーキズムの如く自由を空想することによつて現在の歷史的瞬間に於けるプロレタリアの闘争を放棄するやうな馬鹿氣たことはしないであらう。

三　何故にプロレタリア獨裁は必要か

商品生產の發達の上に成長した資本主義社會は、資本家及び地主による生產機關の獨占と加りゆく機械の適用と技術の絕え間ない完成の基礎の上に益々强力に利潤を追求することによつて生產を擴大し發展せしめることを余儀なからしめた。

資本主義の向上發展に伴つて、婦人及び少年勞働の適用、プロレタリア化し農村から追放された農民、都市の零落せる中小ブルジヨアによつて絕えず補充される、產業豫備軍の形成、大量的な失業者群の生產、自己の勞働を賣るより外に何物も持ないこれらの巨大なプロレタリアート軍は、資本主義生產自體の機構内にあつて資本主義の墓堀人として訓練され統一されて不斷に成長してゐる。

勞働の社會的性質にも拘らず、生產機關の私有は、生產の無制限な擴張とプロレタリア大衆の制限ある需要との間に決定的な矛盾を再生產し、週期的に繰返される破綻と恐慌は資本主義を根底からゆり動かしつゝある。

產業資本の時代は、自由競爭の時代であつた。帝國主義の時代に入つて、自由競爭は獨占に代り、平常的な資本主義の發達は、殖民地再分割のための武裝的闘争の形態を取り始めた。

「帝國主義は資本主義的强力の中央から殖民地世界の最も遠隔なる隅々に至るまでのあら

ゆる國々の廣汎なるプロレタリア大衆を金融資本主義的金權政治の獨裁下に從屬せしめつつある。帝國主義は、その自然成長的な力をもつて資本主義社會のあらゆる矛盾を曝露し深刻化し、階級的抑壓を極度に高め、支配的諸關係の全體系を震撼せしめる所の世界的規模に於ける帝國主義戰爭の不可避性を招致し、そして鐵の如き必然性をもつてプロレタリアートの世界××へと導きつゝある。」

帝國主義は、死滅しつゝある資本主義である。全世界プロレタリアート——資本主義國の中央から殖民地、半殖民地の勞働者、農婦少年に至るまで、金融資本の鐵鎖にしばることによつて、國、民族、文化、性の區別なく全世界のプロレタリアを單一なる國際軍に編成し、自分自身の墓堀の軍隊を結成せしめつつ一方には社會主義の物質的條件を完成しつつある。

資本主義社會と、××××社會への第一步である社會主義社會との間には××的改造の時代が横はる。これがプロレタリア××の時代である。帝國主義の世界的敗北からプロレタリアートの世界的勝利への道は、プロレタリアの敗北と勝利の長い鬪爭の時代を包含する。一國に於て勝利せるプロレタリアートは世界××の基礎を擴大し强固にする。かくして帝國主義は獨裁をプロレタリアの世界××に席を讓りつゝ滅亡してゆくのである。

プロレタリアートの××は、反革命を克服しつゝ、また不斷に生起する數百萬のブルヂヨア的習慣の力を克服しつゝ社會主義社會の建設、社會主義的精神への人々の大衆的轉形、階級の漸次的克服、これらの偉大なる歷史的任務を遂行するものである。これらが完成されるに伴つてのみ過渡期の社會は××××社會へ轉換し始めるのであり、その時、抑壓機關としてのプロレタリア國家は死滅するのである。

「プロレタリア××は、舊社會の勢力及び因襲傳統に對抗する强硬な鬪爭である。××を伴つたり、伴はなかつたりする。即ち×××な又は、平和的な鬪爭である。それはまた軍事的であり經濟的である。——幾千幾百万人の慣習の力は最も恐るべき力である。鬪爭場裡に於て鐵の如く鍛えられた黨なくしてはかかる鬪爭を指導することは不可能である。」（レーニン）

氏等よ、氏等は遂にこの解り切つたプロレタリアの獨裁を信ずることが出來ずプロレタリアートの偉大な歷史的任務を理解することが出來ないのだ。

更にこの項につけ加へておくことは、氏等の云はれる如く政治に參與する或者の中には事實墮落する者がある。それは日本だけではない。世界的な事實だ。しかし、鈴木文治や安部磯雄や水谷長三郎が資本家の陣營へ移つたとて歷史的に見れば少しも悲しいことでないではないか！ 現に總同盟の大衆の間からは反幹部派の運動が、全國的に擴大されてゐる。我々は資本家に買收された幹部の足元から大衆の××的な進出が、ダラ幹を乘越えて左翼化しつゝある事實を見てゐる。而も、資本主義の行詰りは今後益々大衆を鬪爭へ驅起させずはおかないであらう。勞働階級の一部の者が帝國主義に買收され、運命を資本主義の發展と滅亡と共にし、資本主義の續く限り彼等も續くであらう。

四　プロレタリアートは如何に議會を利用するか

ブルヂョア議會はプロレタリア××のための國家權力の重要な一機構である。だが代議政體は國家秩序の一定の形態である、それ故に階級も階級鬪爭もまた何等かの國家權力も存在しない××××社會の形態ではない。從つてプロレタリアートはこれを××することを目的とする。ブルヂョア機關を××するためには議會を如何に××するかと云ふことのみが問題となる。

××××者は議會の演壇を、ブルヂョアジ

ーの僞瞞政策の暴露、社會愛國主義、改良主義幹部の暴露及其の誤れる思想の宣傳のために利用し、未だいくらかでもブルヂョア議會に對して信頼の念を持つてゐる大衆の幻影を切り離すために戰はねばならぬ。

選擧戰は、多數の投票かき集めの爲の鬪爭ではなく、それは後れたる大衆に、プロレタリア革命のスローガンを宣傳し、ブルヂョア政治の害惡を暴露するためになされる。それは廣汎な大衆を××鬪爭へ動員し、直接にブルヂョア××を××させるための鬪爭であつてブルヂョア議會を乘取るため、また組織的な仕事をするために行くのではない。飽くまで議會の中から大衆の××的鬪爭を助け議會外に於ける大衆鬪爭の目的及び任務に從屬しなければならぬ。

×××者は資本主義社會に於けるブルヂョア議會をかくの如く利用することを主張する。然るにアナーキズムは、

「無產者が、政治に參與することはそれ丈け支配者に僞瞞され――××を遲延せしめ、墮落せしめる（高群氏）

と主張する。そして氏等にあつてはブルヂョア權力とプロレタリア權力の見境がまるでつかないのだ。

「かの勞農ロシアの獨裁政治を支配しつゝある少數官僚などをも形を代へた支配者と云ふ意味で見てゐる。」（高群氏九月號十頁）

氏等の云ふことがいかにブルヂョアの云ふことゝ一致してゐるか、反動新聞日本を筆頭にしてあらゆるブルヂョア新聞、ブルヂョア御用學者、役人達は八木氏や高群氏と等しく「ロシアは不幸だ」、「ロシアは形を代へた獨裁國だから農民が、不幸だ」なぞと盛に宣傳する。

しかしブルヂョアの役人や御用學者は現在のロシアに脅威を感じてロシアの逆宣傳するに反して氏等にあつては、徹底的なプロレタリア政權の無理解から來る逆宣傳を云々することによつて、反動的な役割を果たすことになるのだ。

五　過程とは何んであるか

「過程と云ふことの恐るべき理由は、それが屢々支配者の僞瞞であり、またたとひ發生的にはさうでなくても結果として支配者の陷し穴に我から進んで落ち込むことになる點にある。」（高群氏、九月號十二頁）

「そこには必ず過程論が持ち出される。時期尙早とか、既成黨の中からとか、合法的無產黨によつてとか、共產主義者獨裁を通じてなどと云ふやうに、これらは凡て支配者の形を變へた亂舞にしか過ぎない。」（同、十二頁）

「過程論のあるところ、そこには多くの僞瞞が横たわり、詐術が行はれる（同）

第一に氏は、社會民衆黨、日本大衆黨、無產大衆黨、これらの合法的無產政黨の中に巢食ふてゐる種々雜多な社會民主々義者と共產主義者とを氏等一流の混合的觀念論をもつて一律に見て居られる。そしてそれ〴〵の發生の社會的根據をば正しく見ることなく、民政黨の中野某の過程論から×××者のプロレタリア獨裁論までの、それ〴〵違つた役割と目的をもつた。鬪爭團の過程論を少しも分析的に理解されるよしもなく、ひたすら恐れて居られる。

我々は社會を死んだものとしては觀察しない。複雜極りない變遷の中に社會の諸事實を見てゐる。卽ちマルクス、エンゲルスの辯證法的唯物論を、現實の××的變革の目的をもつてする現實認識の方法としてこれを適用し、あらゆる種類のブルヂョア的世界觀及びあらゆる種類の理論的及實踐日和見主義と鬪爭するのである。

我々は日本大衆黨から社會民衆黨に至るまでの社會民主主義者達の作つてゐる政黨をプロレタリアの政黨とは呼ばない。勞働者階級の一部ではあるが、左右社會民主々義者に率ひられる後れたる勞働階級の一集團であると見てゐる。そしてこれら幹部が、資本　義の最

も尖端に働くブルヂョアジーの忠僕としての役割を果たす過程は、その下にある大衆の左翼化の過程であり、帝國主義の發展の過程は資本主義國中央のプロレタリアから殖民地のプロレタリアに至るまで、國境、民族、性の差別なく資本主義の×××としての國際プロレタリアートを單一なる××に結合統一するの過程であり、資本主義×覆の過程はプロレタリアートの勝利の過程である。

「一の地位より他の地位への過渡を認識するの――即ち如何にして一つの歴史的段階が他の段階に過渡するか――あらゆる歴史的段階に於て吾々が、全連鎖を支配するがために把握しなければならぬところの最重要なる鎖の一環をつかむ最大の能力これである」（レーニン）

レーニンの云ふ鎖の一環は何によつて決定されるか？

敗北と勝利との長き闘爭の時代に、プロレタリアートの黨は國際的な連帶組織の上に立つて、國内的また國際的あらゆる諸條件の力の關係、歴史的に決定される諸情勢に辯證法的唯物論の方法を適用して分析、批判、攝取しつゝ、プロレタリアートの主要攻撃の方向を決定し闘爭する。この途上に於てプロレタリアートはブルヂョアジー及び、勞働階級の一部に派遣されたる彼等の忠僕社會愛國主義者改良主義者の僞瞞と裏切りとに對して假借することなき闘爭をもつて報いねばならぬ。それ故に階級意識ある國際プロレタリアートの過程は唯一つあるのみである。

しかるに高群氏はプロレタリアートの勝利の過程と、ブルヂョアジーの絶望的な沒落への過程と、資本主義に巣食ふ右翼改良主義者の裏切りの過程とこれらをバラ〳〵に切り離し、連關する全體の一部として認識され得ない。だから氏によれば何が何やらさつ張り解らなくなつて社會民衆黨も××黨も一しよくつちやにして、さて云ふ。

「それが彼等の壓迫の一つの形をかへた方法でそこには必ず過程論が持ち出される。時期尙早とか既成黨の中からとか合法的無産黨によつてとか、共産黨獨裁を通じてなどと云ふやうに、これらは凡て支配者の形を變へた亂舞にしか過ぎない。」

この無理解は更らに發展して

「いつたい過程と云ふものは、被支配にとつては好ましいものではない、被支配者は直ぐにでも自由の社會のくることを望むから。」

過程は好むとか好まないとかによつてもたらされるものではないのだ。資本主義が發展しないでプロレタリア階級が形成されるか？ 搾取のないところに勞働者の自覺と反抗があるか？　老いることがいかに苦痛でも人は刻々と死に近づくではないか？

氏等とひとしく、我々もまた「すぐにでも自由の社會の來ること」を望む。しかし實際にそんなことを考へるのは氏等の如き單純な頭の所有者にして始めて可能なことだ。我々は小鳥が空を飛ぶやうに容易に「自由の國」へ行かれるなどと夢見てはゐない。歴史的必然を理解し、次の鎖の一環」をつかむための酷烈な闘爭のみがプロレタリアに勝利をもたらし、かくして無階級社會へ過渡すると云ふレーニン主義の立場に立つものである。

六　小ブルヂョアは何人であるか

氏等と我々との相違は最早や明かである。氏等は空想的唯心論を自己の世界觀とせられるに反して我々はマルクス、エンゲルスの辯證法的唯物論をもつて我々の世界觀とする。

氏等は事物を生き〳〵した現實の歴史的進行の過程に於て把握することが出來ない。だから資本主義がもたらした「惡」の一部分の批判をなし×××社會を主張されるに拘らず事物を全體性に於て觀ることが、出來ないから一足飛びに「花咲く自由」の國へあこがれを表白するだけで、如何にして達するのか？　何から始めるのか？　張大に組織化さ

れ、絶えず絶望的な××をつゞけるであらうところのブルヂョアジーに對して組織的なプロレタリアの闘爭をひたすら否定して抽象化された「人間の自由、個人の自由」を説くのみである、事物を歴史的必然の進行過程に於て觀察することの出來ない氏等は、××運動を勞働運動に結びつけることを知らす、またそんな廻りくどいことに耐へ得ず、組織ある訓練と闘爭に無氣力なインテリゲンチャの瞬間的、突發的な熱烈な憤激の自然成長性の前に屈服するのである。プロレタリアートの組織ある、闘爭と訓練の歴史的進行の過程は、××運動を勞働運動に結びつけることの可能性に對して信念を失つた人々、また自分達の瞬間的な憤激と××的エネルギーとのやり場をどうしても恐怖手段以外には見出すことが出來ないと信じてゐる人々にとつて、まことにジイックザックな至[illegible]極る道なのである。

我々は、闘爭せずして「人間の自由」にあこがれ、歴史が決定する一定の段階を過程することなしに一足飛びに「自由」を欲する氏等の如き人々を指して　小ブル」と呼ぶのだ。

「爛漫と花咲く人間の自由」は恐らくこの地上のことではあるまい。それは基督の天國の花園か、佛敎の極樂淨土でもあらうか？　我我プロレタリアには想像もつかない樂土ではある！

七　機械の發達はプロレタリアをなくするか

高群氏の十六頁から十七頁へかけてのあの冗漫なおしやべりを見よ。我々はこんな馬鹿氣た論文を（いかに女人藝術がおとなしく取り入れたにせよ）堂々雜誌上に發表される氏の勇敢さには敬服してゐる。

「かくて機械の發達の最高峰にあつては、プロレタリアと云ふものは消滅し、そして技術師階級がそれに代るに過ぎなくなるであらうと云はれてゐる。」

驚異に價する機械の生産機[illegible]への適用は益々生[illegible]能率を高め、產業合理化政策は單純なる分業勞働に對し長時間安い賃銀で使用が出來る婦人幼年勞働の適用となり、成[illegible]勞働者の工場外への放逐等、これらは限りない勞働大衆の賃銀を引き下げ、失業者を增大せしめて勞働階級全體の生活を極度に惡化せしめてゐるこの事實は現在の社會に於ては機械の發達は益々プロレタリアを生産することを立證してゐる。

未來の社會に於てはどうであらうか？

我々は高群氏の如く、一[illegible]の技術師階級がそれに代る（生産に從事する）に過ぎなくなるものであり、それ故に「プロレタリアが、消滅する」などと云ふ理窟は何處からも引き出すことが出來ない。

第一氏等は無階級の××社會を信じて居られる筈であるのにブルジョアジーに代る「技術者階級」と云ふ新らたな搾取階級を認められるのは余りにも予盾してゐるではないか！　氏の云はれる如く一部の技術師階級のみが、生産關係に從事するならば、技術者ならざる他の巨大なる大衆は「××社會」の名の下に技術者によつて奴隷の如く征服され、婦人は技術者階級のために淫賣婦たるの存在となるであらう。

氏等よ、いかに物云ふことが、自由であるにせよ、物事は總じて、もう少し眞面目に考へるものである。

我々は、現在に於ける發達は益々プロレタリアの增大となり、プロレタリア國家に於けるそれは、各人の勞働時間が極度に短縮せられるものと思つてゐる。

八　女人藝術十月號「凡人の抗議」への若干の抗議

八木氏の論文もまた、マルクス、レーニン主義に對する完全なる無智を勇敢にさらけ出してゐる。

二三の點について抗議するに止める。

「國家論が示してゐるやうに侵入する資本主義各國、峰起する反××軍、國内がブルヂョアジーに對して防衞するために國家が必要であらうか。」（八木氏同誌十月號一四一頁）

氏等は必要でないと云はれるのか？　現に今東支鐵道を中心にして世界のブルヂョアジーは勞働者農民の政府ソビエートロシアをブッつぶし、自國のプロレタリア××を徹底的に打のめすため、またロシアの限りない廣大な土地をほしいためにスキもあらばと待構へてゐるではないか！　支那軍閥は國際ブルヂョアジーの援助によつて白系ロシア人を盛んに反抗させ、戰線に動員させてゐるではないか！　それに對して××が必要でないと云ふのか？

氏等はまことに「至つて珍妙」なものゝ見方をされるものである。

氏等の「この錯覺に誤られる人」は最早やないであらう。我々は氏等如きの人々を反革命的な非プロレタリア的なユートピアンとして我々の鬪爭すべき側の人々と考へてゐる。

我々は氏等に對して「勉強」をすゝめないであらう。何故ならば、「殘念ながら」氏等は「益々マルキシズムに對する疑念」をもち、自らの無理解さと、白々しきこじつけと、强辯とをもつてマルキシズムを曲歪する反動的ユートピアンだからである。氏等の單純な腦では辯證法的唯物論の世界觀はついに理解出來得べくもないのである。

我々は氏等に對してその「爛漫と花咲く天國」の建設のために勇敢に鬪爭して見られることをおすゝめする。我々はさうした氏等の反階級性をば實踐の過程に於て木葉ミヂンに紛砕して行くであらう。

「無政府主義――其の最も卓越せる代表者達（クロポトキン、ジャン、グラフ等々）が一九一四――一八年の世界大戰の際裏切つて帝國主義ブルジョアジーの側へ移行したところの無政府主義は、プロレタリアートの廣汎な集中的な、規律ある組織の必要を否定し、强力な資本組織に直面しては、其自身無力である。個人的テラーを說くことにより、プロレタリアートを大衆的組織及び大衆鬪爭から引離してゐる抽象的「自由」の名の下にプロレタリアートの××を否定しつゝ無政府主義はプロレタリアートからブルヂョアジーに對する最も重要な而して最も尖銳なる武器、卽ち其の××一切の鎭壓機關を剝奪する。プロレタリアの鬪爭の最も主要なる中心における如何なる大衆運動からも遠ざかつてゐる所の無政府主義は自己の全戰術、自己のあらゆる行動により、又ソビエート聯邦の勞働階級の××に對抗するところの行動によつて、客觀的には自己を單一の反革命勢力の戰線へ包入するところのセクトへと漸次轉化しつゝある。

（インターナショナル六回大會傍點は隅田）

一九二九、九、二六

ピレネーにて

長谷川　春子

此所でたぶん二十年ぶり位でランプに出逢ひました。なだらかな傾斜の小山の重なりの末が、所々に雪をかぶつた國境の連山で、あの向ふには血の熱いスペインの男や女がゐるのです。一草原の牧場に、牛に羊に、林檎の木に、穀に、赤い屋根の家がごく少しでそつくりアルフォンソ・ドヲデエのムシウ・スギヤンの山羊の話しです。空をながめ、山をながめ人に逢はずに幾キロも田舍道をあるく樂しさ、パリの郊外で隨所に出くわすサテイールはゐないやうです。

八木秋子氏の「藤森成吉氏へ」の公開狀が因をなして、端しなくも紙上に展開されたアナーキズム對マルキシズムの論爭について十月號に八木氏の駁文と並べて掲載する筈でした、「中島幸子氏の論文が締切り匆卒の場合で組置きの分と入れ違ひになつた事はその節新聞紙上でお斷りしましたが、筆者及び讀者に深く謝し、改めて掲載いたします。（編輯者）

アナーキズムへの一抗辯

中島幸子

「女人藝術」誌に現はれた最近の最も興味ある問題は、藤森成吉氏を中心として渦卷くアナーキズム對マルキシズムの論爭である。よし夫れが學問的な型に於いてなされたのでないにしろ、論爭の端緒は七月號の八木秋子氏の藤森氏に對する公開狀に發した。藤森氏は夫れに對し八月號の誌上で極めて簡潔的に一言述べたのみである。問題はそれで全く立ち消へたかの觀を呈してゐたが、九月號の「女人藝術」で高群逸枝氏は更に秋子氏の內容を擴充させて、所謂「小ブル藤森成吉に與ふ」といふ高踏的な標題の下に、該博な知識を傾けて論陣を進めてゐる。此れだけでは恰も藤森氏がアナーキスト高群氏に依つて完膚なき迄克服されたかの樣である。

然乍ら「女人藝術」が女性にのみ許された發表機關だけに、藤森氏は他に批判の批判を載せらるゝとしても、一時沈默を嚴守せざるを得ないであらう。私は且つてマルクス主義の旗の下に二つの拙小論を女人藝術誌上に發表させて頂いた關係上、高群氏八木氏の問題提起にいさゝか覺書きの程度で批判したいことを切に感ずるものである。

吾々の知る範圍內では、今迄なされたアナーキズムに對するマルクス主義側からの反駁に依れば、アナーキズムは單に形而上學的な抽象的概念の理論意識を把握してゐるに過ぎないと謂ふだけで、內容に立ち入つて批判をしたことは決して無かつた。此の事柄は、藤森氏の言辭にも妥當することであるが然し問題が現在の如く昏迷したからには、一層精密にアナーキズムを檢討することが當面の重要性を帶びた任務と思ふ。

吾々は、アナーキズムの理論發展を簡略に考察し、その缺陷の一般性を曝露して、マルクス主義の精髓を比較對照したい。吾々はアナーキズムの理論の史的發展の瞥見に當つて最も關心をそゝる人物はスチルナー、プルードン バクニン及び最近に於けるアナキストの最も先端に置かれてあつたクロポトキンである。今列擧した一連のアナーキストに共通な理論の本質的な命題は、一切の權力の否定にある。

勿論、スチルナーの理論の出發點は「自我」であり、プルードンは「契約」である。是等

二人は個人主義的な思想傾向が濃厚であるに反して、他の二人は悉く集團的で、バクニンは、集産的アナーキスト、クロポトキンは共産的アナーキストに屬してゐる。我々は、マックススチルネルの思想が哲學に於ける主權的觀念論に立脚してゐるのであるから、歴史的實在社會の眞實の解剖に無價値なものとして暫く論じないであらう。プルードンは、社會制度と政治制度の二範疇を區別して、前者は人間性に內在的なもので絕對的なものであるが、後者は權力が、その原理的な構成である廢滅される運命を有するものとなしてゐる。尠くともマルクス主義者の側では、人間性を樹立して社會を解釋する人々を空想家だとするのである。事象は不斷の成生の過程を辿るとき、人間性、道德的觀念すら絕對永遠なものではない筈である。だのに十八世紀の唯物論から王政復古のフランス史家、並びに空想社會主義に至るまで悉く皆人間性の發見に努力して來た。殊に十九世紀の空想社會主義者のサン・シモンは抽象概念の狹隘なる領域から逃避して、具體的な地盤に依據しやうと志向したが、結局は、同樣な誤謬をおかすに至つた。此の見地を辛辣に嘲笑した處のヘーゲルすら歴史的運動の說明の鍵を人間性以外に求めることを理解しながらも、絕對的イデーの發展の中に求めた。絕對的イデーすらも思惟の論理的過程の具現にすぎないのである。プルードンも之等の人々と關聯して同樣に空想家である。特に實在的な現實的總體物たる國家を擬制と思考したり、政治爭鬪を否定する如きは、代表的なプチブルである。バクニンは集産的アナーキストであつた。彼は徹底的に國家と共産主義を排擊した。然しながら彼の缺陷とするところは、ソリダリテイといふ絕對的な人間道德を信奉することにあつて、是の如きは充分形而上學的な墮落である。更に第四階級の政治的行動を否認するが如きは、非科學的との區別をなす歴史の階級爭鬪說を曲否するものである。最後にアナーキストの「父」たるクロポトキンは如何?! 彼は「近代科學とアナーキズム」といふ巧妙なる論文を發表して、共産的アナーキズムの方法論的導入を與へてゐる。だが彼は自然科學からの歸納法と演繹法を採用するだけで、辯證法は徹底的に排擊してゐる。自然科學に依據する限り彼の社會觀は機械論で、何んら社會科學に貢献する處はないのである。彼とても相互扶助や自由協約といふ道德原理で未來社會を提唱するに過ぎないではないか?●

マルクス主義のアナーキズムと共通なる個所は、その窮極的なる理念に自由世界の開にあることで之には何等異るところはない人間性を最高審判とするアナーキストは、人間の社會關係を說明することは出來ない。そして彼等の自由の表象は、必然の概念を隱蔽する。此の限りでは該自由は盲目的必然性に翻弄されるに相違ない。然しマルクス主義の自由は思惟の産物でなくて、必然を理解しての自由であつて、合則性の認識のうちにのみ自由はあるのである。此の限りでは高畠氏の謂はれるが如く、マルクス主義はアナーキズムの一範疇たり得ない、又であつてはならぬのである。マルクス主義が、アナーキズムを反駁する時、又それの反駁される時、最も問題となるのは國家論である。國家は、公的權力の集中であるとなすアナーキストは、國家を否定する。だがマルクス主義は、形式論理學的な否定でなくて、國家をも辯證法的な否定をする。卽ち階級對立の不和解性の生産物としての國家は、その本質たる階級にたいする統治の代りに事物の管理と生産過程の指揮とが現はれた時、自ら死滅する。アナーキズムには階級鬪爭理論が缺けてゐる。それだけでも嚴密な科學的理論ではないのである。マル

クス主義は、社會の運動法則を唯物辯證法の視野の下で究明し得る。

八木氏は、ソビエットロシアの獨裁を云々する。勿論獨裁には權力が必要である。その限りではアナーキズムの反駁の對象となり得るであらう。然しロシアの權力の階級的內容はプロレタリアでその形態は獨裁である。

八木氏は、ロシアの現狀を不幸だと謂はれる。だがロシアは第一次世界大戰の戰禍に依つて破壞された社會的施設を戰爭以外の水準に復歸する努力の困難を忘却してはならない。殊に外にあつてはロシアをめぐる資本主義國家の攻擊、內部ではブルジョア殘存物の反亂の防禦等々此れ丈でもロシアは急激に理想的に發展することは不可能でなくてはならぬ。高群氏は、更に獨裁そのものを云々する。卽ちロシアは事實上は共產黨の獨裁であると、而り、一切の革命的行動には黨なくしては成功は望み得ない。プロレタリアートには、その最も自覺せる最もよく組織せられたる部分の黨の活動なくしては自己を資本主義的搾取の羈絆から解放することは不可能である。又階級の前衞たる黨の存在を否定するものは、永久に經濟主義に墮落する小兒病である。階級意識ある組成された指導者に依つて導かれなかつたゝめに潰滅したパリーコンミユンの失敗の經驗は、這般の事情を如實に證明する。此の事を究明せずしてアナーキズム自由聯合を說き、そしてその社會は民衆の創造的意力と內在的組織力に依つて實現されるといふのは空想も甚だしい。又高群氏は、資本主義アメリカに革命はなく擬裝國ロシアに革命の生起したのはマルクス理論の終焉であるかの樣に語る。だがロシアに於いて一九一七年以前に資本主義は無かつたのか？　否世界資本主義の環として存在する國家の變革の過程は資本主義發達の程度を問題としないのである。ロシア資本主義に就いて高群氏が敢へて否定せずともロシアには革命當時、人民派が否定論を說いた。然しそれはレーニンに依つて徹底的に反駁しつくされたものである。

人は常に恣意的に物事を解釋する、然し事實は唯一しかあり得ない。（一九二九、八）

北平より

笠千鳥

北平の淋しさは秋のあはれを一層感じさせますが私共の仕事は大多忙、北平中の外科患者は皆己れのところへ來るんでと大威張りです。忙がしくさへあれば機嫌の良い人ですから、北平醫科大學へは一週に六時間講義に行きます。北平の貢買などは疲へいすると一方學生達は眞面目に勉强してゐるやうです。

南海中海の記事、見聞はせまいし筆はたたないから困ります。社の同人の方達によろしくお傳へ願ひます。誌上にてよく作樣を知り尊敬して居ります。女人藝術も各方面の女の人達にどの位しげきを與へて居るか分りません。あるブルジョアで、實際に興味だけでなく眞にプロレタリヤの存在が分つたやうな人がありますそれでは御體お大切になされん事を。今宵は中秋の名月です。桂の花を手折り、白きこまかき花にて葉は木せいの如く香りあり、月餅と云ふ圓いお菓子とを月にさゝげます。

兎兒爺といつて、兎の形をした神をまつります（玩物のやうなもの）ところが、今年から迷信だといつて禁止されたといひますが、趣味のことでこういふ風習はやめたくないと思ひます。支那では中秋節を尤も重く見ます。



文藝評價の規準

――文藝時評――

中本たか子

（最初にお斷りしておく。これまで私はあまりにパラドックスに執着し、アンチテーゼに支配されてゐた。今こそ私は、それが瞭りわかり、そのパラドックスやアンチテーゼがもはや私を包圍し進展させる力がないのみか、却つて私を昏迷に陷れ、私を突き落す大きな虚溝をかまへてゐることを見究めた。私は日夜、これまでの認識不足と似而非インテリ性とに責め苛まれた。こゝに私は踵を返して、消極を積極に、反動を建設に、逆説を認識に正しくおき換へる。そして、過去に犯したあらゆる誤謬と衣裳哲學を投げ棄て、更に私の過去に於ける言動の一切を切りすてゝ新しく躍進することをお傳へする）

はしがき

最初にこれについて論じやうと意圖した時、ブルジョア作品とプロレタリア作品の二系統の評價規準を定めたいと考へたが、今日になつて見るとブルヂョア作品に就いて云々することの必要のないのを悟つた。本年初頭から今日に至るまで、文藝評壇を風靡してゐる活潑なる論爭は、主としてマルクス主義文藝理論の根本的な檢討である。今や評家の悉くがこれに走り、ブルジョア文藝には一瞥をも與へないのは如何なる理由であらうか。云ふまでもなく、混沌として、崩壞過程を辿りつゝあるブルジョア文藝を評する勢が、もはや何等の積極的な意義を持たないからである。我々は、それ自身の內的矛盾によつて失ふものをして失はしめよう。そして常に、外的矛盾を蹴つて擡頭するものゝ爲に建設の勢をとるべきである。

今日まで論爭されて來たマルクス主義の文藝理論は、多數の論者によつてさまぐ＼に解釋され、定義づけられて來た。それを更に大別すれば、マルクス主義文藝理論を藝術的價値と政治的價値とに解剖し、これを二元的に見る者と一元的に論ずる者とを生じて來た。果してマルクス主義文藝理論は、融合のできない二元的價値を有するのであらうか。それの檢討を行ふ前に、私は先づ藝術なるものゝ究明から進まう。

一　藝術について

先づ、マルクス主義文藝理論の先導者達は、藝術の一般的解釋をいかになしてゐるか。

「私は思ふ、藝術は人が彼を圍繞する現實の影響の下に彼によつて經驗された感情と思想とを再び自分の內部に喚び起し、そしてそれらに一定の形象的表現を與へる時に始まる、と。」プレハーノフ。

「――あらゆる効用ある事物が社會人に美しく見えるのではない、しかし彼に美しく見えるものは、彼にとつて効用あるもの――即ち生存の爲にする自然との或は他の社會人とのその鬪爭に於て意義を有するもののみであると云ふことには疑ひがない。このことは、社會人に取つては、功利的觀點と審美的觀點とが暗合してゐる、といふことを意味しはしない。決してさうではない！　効用は理性によつて認識される、然るに美は直感的能力によつて認識される、第一の領域は――計算であり、第二の領域――は本能である。のみならず――このことは記憶する必要があるのであるが、――直感的能力に屬する領域は理性の領域よりも比較にならない程廣い……美的愉樂の重要なる特殊性は――その直接性にある。しかし効用は兎も角も存在する、それは兎も角も美的愉樂の根底に横つてゐる。」プレハーノフ。

『こゝに我々は藝術の二つの道、二つの理解を見るのである、人間は如何なる道によつて進むか、夢想、美の小さなオアシスの探求の道によつてか、それとも積極的な創造の道によつてかは、勿論、一部分理想の高さに關係する。」ルナチャールスキイ。

「藝術も亦全く同様であつて、凡ゆるその運命が自己の擔ひ手たちの運命によつて規定されながらも、同時に內的な自己の法則に從つて發達しつゝある。」のである。ルナチャールスキイ。

「確かに藝術は人間の本源的能力である。そして、藝術は斯くの如きものとして自らの法則を自分自身で作り出す。」メーリンク。

「藝術作品のコンポジションの性質は、一般に藝術の社會現象「生活に對する基本的見解、即ち全體としての彼のプシコ・イデオロギイの基本的方向と、藝術家の用ふる材料そのものゝ性質（言葉、色、石、等々）とによつて決定される。」マーッア。

これらの命題を綜合して分析して見ると、藝術は次の二要素から成り立つてゐるといふことになる。即ち、直感的能力によつて認識される美と、理性によつて認識される効用の計算とである。するとこゝに問題が生じて來る、前二要素の何れが主體であり、何れが客體であるかと。藝術史的解釋から始めるプレハーノフにそれをきかう、彼は人類の文化の發生を原始民族について考究し、次の結論をなしてゐる「原始狩獵人藝術活動の性質は明かに、有用な對象の生產及び一般に經濟的活動が藝術の發生に先行し、從つて亦その上に最も鮮明な刻印を押してゐることを證明してゐる……即ち勞働は藝術よりも古いといふこと、及び一般に人間は先づ對象および現象を功利的な觀點から觀察し、そしてその後初めて彼等に對する自己の關係において美的觀點に立つといふこと――！」

これによると、原始藝術の發生は、最初に効用から始まり、美はその從屬的地位にあつたのだ。さうして藝術の形態と性質とが確立して來ると、美は、目的の効用を傳へる手段となつて來る。先づそれは、遊戯によつて窺はれる。生活方法（効用）と快樂的手段（美）によつて傳へるのが遊戯である。この場合遊戯は藝術である。何故

ならば、遊戯それ自身は直接生産を行ふ勞働ではなくて、快樂的手段による目的の把握であるから。こゝで、我々は一寸プレハーノフが否定してゐるビュッヘルの言葉「遊戯が勞働よりも古いと同樣に、藝術は有用な對象の生産よりも古いといふのを信じたくなる。併し飽くまで勞働は藝術よりも古いのである。最初に勞働が存在し、その存在が藝術といふ意識を決定したのであるから。では、遊戯の場合は、といふと、この場合、勞働が藝術を決定し、藝術が勞働を習得させる、第二段階の藝術の作用に屬するのだ。

かくて發生した原始藝術は、その民族の文化蓄積の増大に伴つてその内容を增して來る。即ち、効用の豐富、複雑は、手段となる美の豐富、複雑を招いて來る。効用の分化は美の分化となり、効用の變遷は美の變遷となる。即ち目的は手段を變へて行き、功利は自ら主體となり、美は客體となつてしまつた。

併し、こゝでは藝術それ自身として見る時に、それが確固たる存在を持つと、他の何者でもないそれ自身の形態を持つ。それは人間がそれ自身の形態を持つやうに、或は宇宙の總ての存在が各自身の形態を持つと同樣に（さきに擧げたルナチヤールスキイ、メーリンクの引用を今一度參照）そして、藝術はそれ自身の儘で常に變化し發展して行く。例へば、人類が原始民族の狀態から今日の變化發展を來したと同じに。藝術それ自身の形態とは、さきに云つた功利を美によつて傳へることである。ところが、功利の標準形態と性質とは常に變化し、美の標準形態もそれに伴ふが、美の性質（抽象）は變らない。即ち美が藝術の生産手段となることに變りはないのだ。

そこで、藝術は貨物生産と甚だよく似てゐるといふことが出來る。貨物生産の形態は

$$W\left\langle\begin{matrix}P_m\\A\end{matrix}\right.\cdots\cdots P\cdots\cdots W'$$

Wは生産品、P_mは生産手段、Aは勞働力、Pは生産を示す。

この公式は直ちに藝術へあて嵌められる。

$$W_{\text{藝術}}\left\langle\begin{matrix}P_m\ \text{美}\\A\ \text{功利}\end{matrix}\right.\cdots P\ \text{表現}\cdots W'_{\text{藝術品}}$$

これは藝術の形態の公式である。そこで貨物の生産がなされるには資本の性質は次の如き分類となる。

$$W_{\text{放下資本}}\left\langle\begin{matrix}P_m\text{不變資本}\\A\ \text{可變資本}\end{matrix}\right.\cdots P\cdots W'$$

藝術亦この如き分類となる。

$$W_{\text{藝術}}\left\langle\begin{matrix}P_m\text{不變藝術性(美)}\\A\ \text{可變藝術性(功利)}\end{matrix}\right.\cdots P\text{表現}\cdots W'_{\text{藝術品}}$$

これは藝術の性質の分類である。かく、藝術性を不變藝術性、可變藝術性の二種に分けると、私の說は一見逆說に陷つた觀がある。といふのは、私は前に云つた「効用の分化は美の分化であり、効用の變遷は美の變遷である」と。この言は、以上の二種に分類しても正しいのである。不變藝術性と云つても、何も千古不變の藝術性といふのではない。これは生産の場合に固定された藝術性で即ち生産手段であり、効用を可變藝術性と呼ぶのは勞力に相當するからである。可變藝術性は常に不變藝術性に交互作用を及ぼし、常に提携して行くものである。これの說明をするに、例を經濟方面から引かう。放下されたる資本は、可變資本（勞力）を生産品の價値によつて恢復し、不變資本（機械、原料、補助材料）は永久不變であるものでない。不變資本は常に磨滅し、或は機能を失ひつゝあるものだ。故

にこれの恢復を生產品の價値に含めなければならない。たゞこれだけの說明では可變資本と不變資本とは對立してゐて、何等交互作用をなさないかの感がある。そこでマルクスは云つてゐる「勞働力の購買に放下されたる資本部分は、對象化されたる勞働の一定の分量であり、從つてそれは、購買されたる勞働力の價値と同樣に、不變なる價値の大きさである。だが生產過程そのものゝうちに於ては活動しつゝある勞働力が放資されたる價格（原文には九〇ポンドとあるのを便宜上價格と改む。中本）の代りをなし生ける勞働が死せる勞働の代りをなし、流動的なる大きさが休止的なる大きさの代りをなし、可變的よりの代りをなす。その結果は、ある增加分だけ增大したるVの再生產である（中本註Vは可變資本）」こゝに於て、可變資本（勞働力）は常にそれの運動によつて、不變資本（生產手段）を恢復して行くのである。そこで「資本家的生產の立場からすれば、この全經過は、勞働力に轉形されたる最初の不變的なる價値の自己運動である。過程とその結果とは、この自己運動のお蔭である。」

更にこの不變資本と可變資本は、恐慌を以てする資本の破壞を來した時に、いかなる作用と提携を示すか。ブハーリンは云ふ「再生產過程が停止し、勞働過程が限小され、乃至は局部的に全然休止される場合は、現實の資本が絕滅される、使用されない機械は資本ではない。搾取されない勞働は、それだけ生產が失はれたのである。利用されずに存する原料は何等資本ではない。利用されずにあるか未完成のまゝに橫はる使用價値（新造の機械であつても）や、倉庫の中で腐つてゐる商品は、いづれも資本の破壞である。これはいづれも再生產過程の停止によるものであり、現存する生產手段が現實に生產手段としてはたらかず、運轉されないところからのみ生ずる。此場合生產手段の使用價値と交換價値とは無に歸してしまふ。

しかるに第二には、恐慌による資本の破壞は價値の大量の價値喪失を意味する。……商品價格の破滅する場合である。これによつて使用價値は何等破壞されない。一が失ふところを他が獲得する。」

この引用はあまりに脇道へ外れたであらうか、私のいふことはそれからである（讀者よ反面をむかないで下さい）私は以上の定理を藝術の解釋に當てることが出來ると信ずる。これはあまりに窮窟な似而非マルクス主義的な解釋であらうか。何も私は、藝術の解釋を資本論に結びつけなければ氣の治らない程マルクス狂ではない。唯理解の便宜上、それを借りるのである——

故に、以上の貨物生產の公理と同じく、藝術の場合も亦、可變藝術性が常に不變藝術性を運動によつて恢復して行くのである。即ち功利——イデオロギイ（可變資本）が美（不變資本）を修復してゆくのである。例へば、狩獵種族は、藝術（裝飾）の對象を專ら動物と人間に採つてゐた。それが文化蓄積の增大によつて農業生活に入ると、その藝術の對象は植物的となる。之等藝術對象（美）の變遷はとりもなほさずその生活根據となる効用（イデオロギイ）の變遷からである。そこでマルクスの言葉を借れば「藝術的變遷の立場からすれば、この全經過は、功利に轉形されたる最初の不變的なる美の自己運動である。過程とその結果とは、この自己運動のお蔭である。」

かくの如く不變藝術性と可變藝術性とは交互作用と提携をなすものであるが、一旦その均衡が破壞された時にはいかになるか。即ちその均衡破壞は藝術的恐慌である。その時には再生產過程（可變藝術性が不變藝術性を修復する過程）が停止し、表現過程が限小され、

乃至は局部的に(美に於てか功利に於てか)全然休止される場合は、現實の藝術は絶滅される。つまり美のない功利は藝術になり立たゝず、目的のない美は藝術とはなり得ないのだから使用されない美は藝術でなく、攝取されない功利はそれだけ表現が失はれたのである。利用(價値轉形)されずに存する素材は何等藝術ではない。價値は轉形されずにあるか、未完成のまゝ横はる使用價値(新たに發見された美でも)や、頭の中で意圖されたまゝでゐる素材(プラン)は、いづれも藝術の自己破産である。これは、いづれも藝術の再生產過程の停止によるものであり、現存する美が現實に生產手段としてはたらかず表現されないところからのみ生ずる。この場合美の使用價値と美の作品價値とは無に歸してしまふ。

　しかるに第二には、恐慌による藝術の破壞は價値の大量の價値喪失を意味する。……作品價値の破滅する場合である。これによつて可變藝術性と不變藝術性との再生產過程は何等破壞されない。一が失ふところを他が獲得する。

　この藝術恐慌の第一の場合は、藝術の內的破壞であり、第二の場合は藝術の相對的價値喪失である。

　以上で、藝術の形態及びその機能の說明をしたつもりである。ここで誤解を避けたいのは、さきに擧げた藝術性の二分類卽ち不變藝術性と可變藝術性とは二元的なものではない。これは實に、一にして二ではなく、その中の何れか一を失つた時、忽ち藝術の破壞を招くとはさきに說明しておいた通りである。

　人類の文化に藝術が存在すると、それは歷史的存在と發展をつゞけて來た。それは全く人類が歷史的存在と發展をなしたと同じに。そこで、藝術の生存目的が、生物のそれと同じ目的性を持つことが云へる。先づ、これには種族維持と個體維持の二つの目的性がある。

藝術 ＜ 不變藝術性(種族維持)―美―快感―間接目的
　　　　可變藝術性(個體維持)―功利―思考―直接目的

　種族維持は本能であり、個體維持は意志である。本能は直感能力によつて快感を吸收し、意志は純粹理性で思考し、目的を計算する。プレハーノフが「直感能力に屬する領域は理性の領域よりも比較にならない程廣いと云つてゐるのは、個體に及ぶ本能の力の大さを語つたのである。假りに我々に例をとれば、我々は無目的に動く本能に支配されることの大さに愕く。そして本能に組することは容易く、意志に組するには努力(困難)を感ずる。「美的愉樂の重要なる特殊性は――その直接性にある」とプレハーノフの云ふのは、行動(又は形態)に於ける直接性をさすのであつて、その目的性は間接である。何故ならば、我々が食物を求めるのに美味なるものを喜ぶ。それは美が直接に行動を訴へて來るからであつて、目的は美味と云ふ手段によつて營養素を攝取することである。この場合美味は目的の從屬的地位にある。こゝで、美味の爲に美味を求め歩く食道樂のことを以て誰か駁するならば、それは論にはならない。何故なら美の爲に美を求めるといふことは、藝術の末梢段階に於ける行爲であつて、さきにも云つた再生產過程の破壞であり、基本段階に於ける目的性ではないからだ。美味の爲に美味を漁る食道樂の行爲は自己保存の目的を忘れた、均衡のない本能の無制限の消費である。故にこれは忽ち藝術的恐慌に陷つて來るのである。

　普通、藝術を檢討して、可變藝術性は常に變化し、不變藝術性は割合に緩漫に變化するやうに云はれてゐるが、これについて調べて

見よう。浪漫主義の作品と自然主義の作品と表現主義の作品とを比較して見ると、可變藝術性と共に不變藝術性の變化を發見するであらう。功利の變化は美の變化を誘はずにゐない事を知るであらう。ところがかういふことは云へる。同一の功利を持つ人（或は時代）の作品で同一の美を持つてゐる作品が、その個體が變る毎にその內容（功利）の形が變るといふことが。これは、貨物生產に於て、不變資本はそのまゝであり、可變資本もそのまゝである時、可變資本の形態部面で、百人が八十人になるとか五郎が三郎に變つたとかの變化はある。故に、その抽象性に變化はない。故に、可變資本の抽象性に變化運動を來す時に、不變資本も亦抽象性に變化を來たさずにはゐない。藝術に於ても亦然り。（引例を省く、個々の例を擧げて檢討されたし）

次に、藝術の鑑賞・批判は、いかなる形を示すか。私はこれを公式で現さう。

作品—表現—感覺＜美—直感能力—主觀—鑑賞／功利—思考—客觀—批判

鑑賞は、美が直感能力に訴へて得た主觀的な動きである。批判はその功利を思考した客觀的な動きである。然りと雖も、鑑賞の中にも功利の思考は交り、批判をする時も美の直感を排除することは出來ない。こゝに藝術を評價するに最も注意すべきことは、ルナチャールスキイの左の言葉である「美學的なるものゝすべての差別的規準が個別的に發達して評價者の心中に生きてゐる、彼は獨創性と美とを、美と偉大性とを、滑稽と典型とを混同しない、彼は、現象を最も適當な見地から觀察し、それを享樂したる後は、炯眼に彼の內部に存する凡ゆる缺點を剔抉しながら、批評的にも彼を觀察する。嚴格に見地を區分し得る能力は重要な美的能力である。」

即ち、美學によりて生ずるところは批判からである。「美學は評價に關する科學である。」とルナチャールスキイはいふ。彼が普通一般な「美學は美に關する科學」だと定義しないところに、マルクス藝術理論としての重要さがある。マルクス主義美學の特殊性は、評價に關する科學的な考察を歷史的客觀的になすところにある。

二　比重と均衡

「或一つの文化の勃興期には內容が尊重され、滿開期には內容と形式とが調和し、崩壞期には形式が過重される。」と或先人は云つてゐる。これを藝術に徹して見れば、構成部面に於ける內容と形式の比重の現象に當る。私は上の言葉を尊重する。これはいつの時代にも當て嵌まる定理である。

今日我が國のマルクス主義藝術及び理論を許する人の中には「文化の勃興期には內容が尊重される」その傾向を持つて、マルクス主義藝術及びその理論をやぶさかに許してゐる。之は決して妥當な評價ではない。「內容が尊重される」の故を以てマルクス主義藝術及びその理論を嘲笑し、否定するならば、それは甚だ歷史的客觀的な藝術考察を缺いだ議論だと云はざるを得ない。

今や、マルクス主義藝術は、一文化形態の中の勃興期に當つてゐる。故に「內容が尊重される」時期にあるのだ。何故「內容が尊重される」かといふに、勃興した精神の鬪爭的意力の尖銳さは、未だ充分に熟して來ない形式と步調を合してゐられないからである。內面の欲求の强い時には、我々は屢々形式の努力を忘れてゐることがある。噴出する內容は形式の不備を踏み越えて、果敢に文化獲得に

闘爭する。が、マルクス主義藝術は今日動かすべからざる現實であると共に、もはや內容偏重を脫して、したがつて比重關係を脫して藝術の均衡に努力しはじめてゐる。これは戰旗一派及びその他の活潑なる藝術に於いて、窺はれる。

藝術の內容と形式が比重關係にある時は、未だ充分なるものとは云ひ難い。藝術の完成は內容と形式の均衡にある。併しながら、その藝術が內容尊重の時期にあつたからとて、それの存在を否定することは出來ない。すべての文化及び藝術は、その實現的形態を通過せずに發達することは不可能だからだ。

均衡の努力に動き出したマルクス主義藝術に於て、それを指導する理論が內容尊重にのみ聲を高めてゐるやうに見受けられるのは、決して形式を閑却した爲ではない。マルクス主義藝術の當面の主要なる任務は、文化獲得である。史的經濟的文化の樹立である。故にこのためには、現存せる資本主義的文化と闘爭すべく動員された一兵卒となる。その故に形式的方面は公約數となつて、主として內容的な動きに注目し、それのレポートとなつてゐたのである。

均衡の努力は重大である。さきにも述べた、藝術の形態及び目的から見て、それの完全なる發達は內容と形式の均衡の場合にのみ見る。マルクス主義藝術が比重の域にあつたのは、階級的主觀主義にゐた時だ。均衡に努力を向けだしたのは歷史的客觀主義に立つたからだ。從つて藝術の表現手段は、前者は分析的レアリズムであり、後者は綜合的レアリズムを努力する。綜合的レアリズムはマルクス主義藝術の本道であり、藝術の歷史的考察から來た辯證法的發展である。

私はこゝに躊躇なく均衡のとれたマルクス主義藝術作品を列擧し得る。「太陽のない街」(德永直氏)「能率委員會」(同)「蟹工船」(小林多喜二氏)「一九一八年の記錄」(橋本英吉氏)「暴力」(武田麟太郎氏)「賃銀奴隸宣言」(岩藤雪夫氏)「鐵」(同)等々……。

藝術が均衡を得るのは、決して尖銳なる內容の萎縮を意味するものではない。尖銳なる內容にまで形式が成長して行つたのである。現今のマルクス主義藝術全體が、均衡に到達することは、もはや後幾何をも餘さない。マルクス主義藝術は決して內容尊重にのみ偏しないで、形式的努力にまで意をそゝぎつゝあることは頷づかれるであらう。理論家達も今や漸く比重を脫して均衡にそのカメラを向けつゝある。技術的、構成的な論點が、今や次第に聲を集めつゝある。

併しながら、藝術を評價し、その評價の規準を定めるに當つてはマルクス主義藝術論家達は頗る嚴肅な態度をとる。即ち、先にも述べた通り評價に關する科學的な考察を歷史的客觀的になすところにある。これは純粹理性による批判であり、認識による有効なる指數の計算である。こゝへ持ち運ばれるものは藝術の比重や均衡ではなくて、美學の規範による尺度をあてる內容である。何故にさやうになるか、次にそれを述べよう。

三　文藝評價の規準

既存せる文化に對して擡頭した文化が、前者に對して闘爭し、その位置を獲得せんと努力する時には、必ず形式を以てせずして內容を以て當る。殊に唯物論に立脚する文化は、イデオロギイ的であり理智的であり、批判的である故に、內容に重心を置く。「物質」と「創造」の二大要素を組立てる唯物論の藝術に於て、イデオロギイがそ

れ等の要素を構成するのである。多元的な物質を一元的に統制するのはイデオロギイの役目である。イデオロギイのない唯物論の藝術はあり得ない。何故ならば、唯物論それ自身から考察して、「物質」と「創造」とは唯心論と背反するものであつて、それの科學的、相對的な價値を認識し、肯定するものにはイデオロギイより他にないから。

すると、イデオロギイは唯物論の藝術にとつては最も中心的、强制的な力となつてくる。そして、イデオロギイの價値は、藝術の內容の價値となつて、藝術の價値をまで支配して來る。こゝが唯物論の藝術と、唯心論の藝術との重要な分岐點である。之まで唯心論に於て極力排除して來た功利が、唯物論の藝術に於ては、目的を決定するのであり、價値を決定するのである。

藝術は生活の反映である。されば、現代の動的な、革命思想、生産を基調とする社會生活等を反映する藝術は、唯物論の藝術を置て他に求めることはできない。云ふまでもなく、これ等の生活層はプロレタリアート及びそれに絡る社會事象である。このプロレタリア階級が、文化獲得のために生産する藝術が鬪爭意識を尖鋭にし、藝術を鬪爭の武器となすのは、決して政治的目的遂行にのみ驅使されてゐるのではない。功利の價値を强調するのは、藝術それ自身の目的に歸因するのである。故にマルクス主義藝術及び文藝を評價するに當り、その理論家達が內容を尊重する理由が頷づかれるであらう。

マルクス主義藝術及び文藝を評價する基礎は、マルクス主義實踐の評價に關する。科學的な考察である。これは實證美學に根據をおく。從來の美學が先驗的方法で形而上學的な體系を整へようとしたのに反し、實證美學ではあくまで經驗に基礎をおき、實踐に價値を定める。勿論この美學の中にも認識論と倫理學との二分派を持ち、眞善美の一致に見地(アプリオリ)を立てる。見地は常に生物學的、科學的根據より發し、生活を助長する一切が眞、善、美に歸趨する所にある。これは人間の理想である。理想は人間の全的活動である。我々はそれに向つて、本能的に、或は思索的に絕えず充實をはかる。現代に於て我々の理想となるものは、マルクス主義的社會建設（勿論生活建設も含まる）並びに文化建設である。されば、マルクス主義的實踐を評價することは、我々の理想の評價である。こゝに云ふ理想とは形而上學的なユートピヤではない、現實の努力の向上線をさすのである。

我々の現實の努力の向上が增大するにつれて、我々の快樂（美）も亦增大する。故に快樂は直接的な感覺より生ずるのではなくて、理性の判斷によつて仲介される方が多い。與へられた對象を評價する時、その價値の重大さは終局的な快樂に依存する。卽ち、評價する對象に含まれた生活價値の判斷が、美學的評價の結果となるのである。こゝに於て、美學的評價の規範が、マルクス主義の實踐的價値に歸決してくるのである。

すると、これは、快樂（美）の思惟を行ひながら、イデオロギイ（功利）の評價を主眼として來る――勿論、さきにも述べた通り、功利と美とは二にして一のものであり、この二つが理想に向つて華々しく發展し、努力し、常にその全的運動を怠らないのである。美は從屬的地位にあり、價値決定をなす時功利のみ呼び出すとは云へ、その功利の中に美の含まれてゐることはいふまでもない、――イデオロギイはマルクス主義を規準とし、そのパーセンテージは卽ち藝術價値のパーセンテージを示すことになる。マルクス主義藝術及び

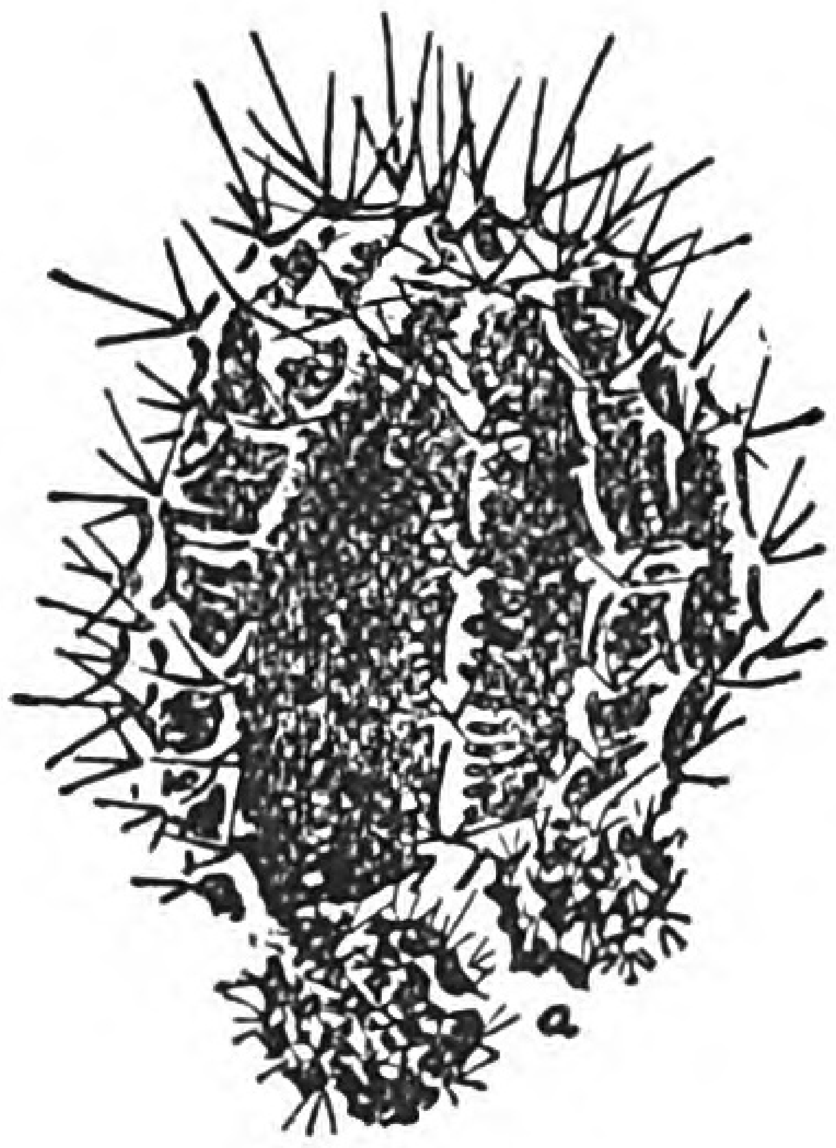
文藝評價の規準は、マルクス主義實踐の努力にある。この努力の增減が、その價値の增減となる。

これで、現存せるマルクス主義文藝評價の規準について、甚だ粗略ながら述べたつもりである。が、世の評者達の藝術の、政治的價値と藝術的價値との二元的見解によりて生ずるのは、大抵は次の事項である。即ち、マルクス主義文藝以外の文藝に就いてゞある。併し、それに就いても、少しも疑義し、躊躇することはない。常に藝術の價値は一元的であり、階級的立場より歷史的客觀的になすことである。此處に最も完成せる美を持つ藝術品があるとしても、我々はその美にのみ心を動かすことはなし得ないであらう。若し、美にのみ心を動かし、その功利の思惟を忘れる鑑賞、批判をなすならば、それは基本觀念たる階級的立場を忘却した行爲である。我々は常に階級的尺度を以て現實のすべてを知ると共に、現實以外のものにも當らなければならない。古典に對して、屢々階級的尺度を疑ふ者は、未だその階級觀念の把握が確實でないからだ。芭蕉の藝術がその時代に百パーセントの價値を持ちラフアエルの繪が中世紀に全的價値を代表してゐたにしろ、今の我々から見れば、甚だしく價値の喪失を見る。即ち、それ等の持つ功利が我々を動かさないと共に、それと同じ大さの美の喪失を見る。

だが又一方に於て、我々は階級的立場に於てなされない藝術のすべてに對して、それの價値の全部を否定するのではない。歷史的客觀的な考察は、それに或種の價値を認めさせるのである。藝術それ自身の歷史的發展過程に於ける。それの段階的目的性による藝術の價値は、假令それがマルクス主義の規範に據らないにしろ、その程度の價値はあるのである。ゲーテに對するメーリングの評は、あまりにも高い「蓋し、ドイツ文化の道場の中で偉大になつたあらゆる人々の中で、ゲーテ程混り氣のない、偉大な、不朽な藝術家は嘗てなかつた。」と。併し、（こゝに於ける併しこそ重要である）藝術の歷史的發展過程に於ける價値を認識すると共に、更に階級的立場より再吟味することを忘れてはならない。何故ならば、第二段階に於ける價値の思惟こそは、我々をして歷史的辯證法的發展を遂げさせるものであるから。第一段階に於ける價値の思惟にのみとゞまるならば、我々の位置はその時代に固着して、何等歷史的進展はありはしないのだ。そこで、プレハーノフは十八世紀のフランスの藝術を檢討したる結びに於て「――趣味の判斷は疑ひもなくそれを語り出す個人の功利的考慮の缺除を前提とする、といふ見解の爲の場所が殘される」と云つてゐる。趣味のために古典の藝術の前に足踏するのは、その個人の性癖に歸因して、何等階級社會についての思慮から生ずるのではない。だから、それは、人間の全的な理想ではない。古典はともかくも大きい。古典はともかくも完全に近い。古典はともかくも永遠的である。が、そこに我々が、階級的觀念の尺度を當てるならば、歷史的に發展し、變遷して來た人類社會の精神文明史の動靜を見出すであらう。そして、プレハーノフと共に「――『社會の觀念の進行』はその階級とその階級相互の鬪爭との歷史を反映する」と結論するであらう。そして、古典の價値を階級觀念の尺度によつて改めてはかることを妥當とするであらう。

社會時評

永島暢子



街に溢れる失業者の群れ

放漫政策で買つた政友會內閣に代つて出現した濱口民政黨內閣は必然的に緊縮主義を眞向にふりかざした。議會に於て協贊決議した國費の豫算を實行豫算の名目の下に削減を加へそして、一にも緊縮、二にも緊縮で、緊縮の嵐は、日本全土を吹きまくりつゝある。その結果は、產業の合理化をより一層强力化し、人員淘汰を行はしめ、失業者は街に溢れ、不景氣は刻々に深刻化し、今や正に飢ゑと死は、全無產階級に野火の如く燃えひろがつてゐる。即ち九月五日より十日まで六日間、市內簡易宿泊所に於ての失業狀態を見ると、

町名	宿泊人員	失業人員
富川町	五一七	四五七
向島	五六八	三三五
田中町	八五四	五八〇
濱園	一、四〇二	一、二七〇
合計	三、三四一	二、七〇〇

の如くであり、屋外勞働者の賃銀は、一圓二三十錢より七八十錢位であるとするも、仕事のない日が多いため、平均にすると二十錢位の極少額にすぎないのである。この二十錢でどうして生活を維持して行くか？　しかしこの統計は、勞働者層の悲慘困苦を語るのみではなく、事務勞働者層に於ても切實なる問題であるのだ。八日中の統計によれば、求人數は五萬六千百六十九名に對して、求職者は六萬九千二百五十二名、しかも就職者は、僅に一萬九千九百六十三名にすぎないといふ（中央職業紹介所事務局調査）この統計を如實に見せたものは、東京市電の產業合理化に表はれた、芝浦工場の整理問題であり、市役所吏員二千餘名の大整理である。市では行き詰つた財政難打開のために、本廳で六百名、電氣局で二百餘名、雇員四百五十餘名、復興事業局千三百餘名合計二千五百五十餘名の整理を斷行し、現在の經費より、五分の剩餘、二百萬圓餘を浮き出させやう事を公表した。赤ン坊の手にある人形の如く、いつ首をもがれ

るかも知れない吏員諸君は、悲痛にも、自ら給料の五分引きを申し出で、それによつて失業者を出さゞる事を懇願してゐるも、市長は市の破産を救ふためには、お氣の毒だが止むを得ないと冷然たるものである。働く時には、愛市だ、愛國だとてうまい事を言つて働かせ、さて無用となる時には、弊履の如き態度に出づるのは、權力、支配階級の常だが、また、政友會内閣時代には、平氣で打ち樹てた經常豫算を、濱口内閣の緊縮の聲を聞いて急に破産云々を持ち出し、大騒ぎするのを見ても、支配權力がいかに民衆ゴマ化しの政治をしてゐるかゞわかるであらう。

かゝる支配階級の態度にも、溫順羊の如くであり、あまりにも紳士的である事務勞働者諸君に比して、すべて行動を以て自己を表現する勞働者は、同じく市の從業員にしても、職場代表者會議を開き、その代表六十餘名が市役所に押しかけ、市長に面會を求めて、一解雇絕對反對、二、賃銀四割四分値上げ、三、人夫負請業者撤廢等他十一項を掲げて、生活權確立のために鬪爭し、また京濱自由勞働者組合代表七十餘名も、一、失業者を救濟せよ。二、市吏員の整理を中止する意なきや等を以て市役所に押しかけて市の態度をたゞし、演說、デモンストレーションをなすなど、氣勢をあげた。かゝる組織的勞働者の行動に反し、ルンペンプロレタリアートの或部分は、絕望的自殺をなし、或部分は、直接的掠奪の行爲に走り、九月一日より十二日までに、警視廳管内の强窃盜の被害二十二件など、人心をして極度に不安ならしめてゐる現在である。

かゝる喧ましき世相に驚いた濱口内閣は、井上藏相をして『緊縮政策と失業問題とは別だ。事業主のうちには、政府の緊縮政策をよい口實にして從業員の整理をする者も出るかもしれないが、これは緊縮政策をやらずとも、早晩倒壞すべき運命にあつた基礎薄弱な事業である。』事を言はしめてゐる。が、それなら何故、新規事業の絕對不許可、事業繰延べ、經費極度の縮少を稱へながら、農村に對しては義務教育費補助の增額、米繭價調節、中小商工業者にとつては資金の融通擴張、都市勞働者に對しては、失業救濟の充實を麗名したか。こゝに於ても私等は、勞働者農民を飢と死のルツボに追ひやらずとも、爲すべき政策あるを知る。即ちかく濱口内閣が、大童になつて金解禁に死に身となり、緊縮々々の政策をとるのは、畢竟、世界帝國主義××に對する準備であり、支配階級の斷末魔を救はんが爲に他ならないのだ。

勿論失業問題は、今が今起つた問題ではない。マルクスはこの失業群即ち産業豫備軍に對してかう述べてゐる。

――勞働者の過剩人口なるものは、蓄積の、又は資本制的基礎上に於ける爲めの發達の必然的産物であると同時に、また資本制蓄積の槓杆ともなる。否資本制生産方法の存在條件の一ともなるのである。それは資本が、恰も自己の費用を以て養成したものであるかの如く、全く絕對的に、隷屬せしめてゐる所の、自由に利用し得べき産業豫備軍なるものを形成するのであつて、資本の變轉常なき、價値增殖のために、いつでも搾取し得るやうに、準備された人間材料をば、現實的人口增殖の制限から獨立に造り出すのである――。

即ち失業問題は、資本主義發展に伴つて必然的に起るべき問題であつて、必ずしも日本にのみ限られたものでなく、世界的現象である。故にこの問題は、濱口内閣が、緊縮政策をとると否とに拘らず、當然爆發せねばならぬ經濟的社會的狀勢に立ち至つてゐたのであるから、自己地盤の確立のために、民政黨が、この問題をとりあ

げたのも亦自然の事であらう。

されば內閣は、從來の內閣と比較して、一步具體的策を進め、第一に失業防止を目標とし企業調節委員會を中央と、事業の多い地方に設けて、政府直營事業、公共團體の事業等と連絡をとり、または新事業認可の手段を講ずるなどをなし、第二は失業救濟を目標として、一、現在冬季に於て行はれてゐた勞働者救濟をもつと擴張し、且時期を制限しない、二、失業救濟のための事業はなるべく許可し、且その事業に對しては、勞力費の二分の一を國庫より補助する事、三、朝鮮勞働者を歸國せしめて內地勞働者の失業を緩和し、且都市には地方よりの勞働者を入れない樣にする。四、職業紹介所の改善卽ち紹介所の增設、機關の連絡の完備、經費の增額等を以てすると大々的に宣傳しやうとしてゐるし、東京市は目の前の失業救濟のために、一千萬圓の工事を起し、三ヶ月間に延人員百萬人救濟の計畫をしてゐる。

產業の合理化、緊縮政策による事業の縮少、不景氣に對する無政策等によつて失業者をドン〳〵出しながら、防止、救濟など云つたとて事實はより深刻に生活難をまき起して行く事は事實だ。

こゝに於て私達は、理論的にも現實的にも資本主義的制度下に於ては、頭底失業者は徹底的に救はれるものではなく、政府の一切の施設は、徹頭徹尾ビホー的であり、民衆の眼を覆ふものである事を知つた。しかも失業問題は、單に失業者間のみの問題ではない。この群は當然、勞働者の職を脅やかし、賃銀の低下、勞働時間の延長、馘首の不安等を以て逆に資本家の攻勢力を强力化し、その虛につけ込む資本家は組合加入の自由まで奪はふとのしかゝり、支配權力は、ますます〳〵勞働者の××化を彈壓すると共に、奴隸根性を培ふ事に專念するであらう。

この狀勢を勞働者は如何に逆轉せしめねばならないか。

まづ勞働者は、この問題を、失業者も工場に働く者も一樣に自分の問題として取りあげねばならぬ。一、失業保險制の實施、二、養老年金制の實施並に少年勞働者の禁止（勿論少年は國家で養育する義務がある）三、最低賃銀制の確立、四、同一勞働に對する同一賃銀、五、七時間勞働制。六、組合加入の自由、

以上のスローガンを掲げて果敢に鬪爭する事なくしては、勞働者は到底自らの階級を救ふ事は出來ない。支配階級のお情けに、爲すがまゝの御馳走におとなしくあづかる間は、現在の饑餓線以上に上る事は出來ないのみでなく、死は早くも笑顏を以て忍びよつてゐるのだ。何故なら、支配階級は、勞働者をその線においてのみ、自分自身の懷を肥やし、存在を完からしめる事が出來るのだから……。

疑獄事件と敎化運動

田中內閣が詰腹切つて總辭職をなした時、そのドサクサまぎれに許可した私設鐵道の事件に關しては、當時より旣にその惡臭は世人の鼻を衝いてゐた。それが昨年の大典にからまる賣勳疑獄より端を發し、小川平吉、天岡直嘉氏その他の名士實業家が續々と拘引收監された。かく所謂顯官名士が、愉容赦もなく法の前に照らされるのを見て、民衆は、法の公平峻嚴なるに眼をみはつた。

司法權の獨立は、久しくブルヂョア政治家法律家によつて稱へられてゐる所のものであつた。それが實現されたのであらうか。高位高官に在るもの、瀆職、收賄等の罪名によつて獄に送られた者も少くはない。然し今回の樣に、芋蔓を引く如く、醜類の頻發した事件

も亦珍らしい。さてこそ司法權は、公平にその地位榮譽に關せず法にはづれたものを裁からとしてゐるか。から報じた向きもあつた。

司法權は、本當に公平に發動するものであらうか？　元より司法權といふも、畢竟支配權力の一部である。階級的對立より今は言ふのではない。支配階級の陣營内に於ても、資本と資本の競爭は、當然權力、政治的權力の爭ひとなるのだ。それは現在に於ては、民政黨と政友會との爭ひである。こゝに於てさへも私達は司法權は必ず公平でない事を知るであらう。

明治の初年民衆政治が口にせられ、政治熱が勃興した當初より、政治に關係すれば、家産を傾くるとは、朴訥な地方民の體驗より發する悲痛語であつた。國會代議士に打つて出で、縣會選擧に奔走し、財産をすりつぶして貧苦に陥つた事例は數限りなくある。しかし一方政治に關係する事は、金を儲ける方便であり、社會的地位を築く方策である事も亦誰もが知つてゐる。所謂現在の政治家で、一定の職業なくして堂々たる邸宅を構へ、贅澤な生活をしてゐる人の如何に多いか。またそれ等の間を泳いでるのみで生活してゐる連中の如何に多いか。この人達の生活は、何によつて爲されてゐるであらうか。私達はまづ相反した二つの政治家の生活を見る事が出來やう。

資本主義制度は、一切を金に換算する。智慧も才能も人格をさへ金で賣買されるのだ。金は一切であり絶對である。現在に於ける敗北者は、金を重大視しないによるのだ。當然金に向つて秋蠅の如く群り寄り、それを得る爲には手段を選ばざるの徒の出るのも當然の理ではないか。金と名譽を慾しい時には、その名譽をも買ふ事が出來る。大倉喜八郎氏が戰爭當時、石コロの罐詰を戰地に送つて巨利を博し、漸次國家に寄附した事によつて男爵をかち得た事は有名な事實である。現在の政治關係が金と權力との野合であり、腐れ緣の樣な情事關係にあるので人々が、殊に金に物言はせる政黨人が、疑獄事件を引き起す事は誰にも肯ける常識でわかる事ではないか。

箕浦勝人氏は政友會内閣によつて罪をあばかれた。宮田前警視總監は、和歌山遊廓事件に關係があり、數萬圓を收賄しながら、俄に職を解かれたのみで、有耶無耶に葬り去られたのも、政友會内閣時代に事件が明るみに出たからである。若し今度の賣勳事件でも、もう四ヶ月早かつたなら、これほどに顯官の怪我人は、出なかつたであらう。臭い物には蓋をしてでも自分達の利益をはかるのが、支配階級の常である。法網をくゞる事なんか意としない大膽さは充分持つてゐる。且自分達が、作つた法律であり、自分達が握つてゐる權力であれば、如何樣にも裏道を抜ける事は易々たるものだ。今春議會閉會當時、民政黨が厄起となつて久原房之助氏の震災手形、その他について糾明しても、一向効果のなかつたのも、つまり權力を握る政友會が强かつたからである。政友會は今回の疑獄事件を口惜しがり、よし、今に見ろ、我輩もあばいてやるぞ！　と意氣込んではゐるが、まづ政友會が再び政權にありつくまで覺束ないであらう。民政黨だとて自分の地位を知つてゐる。今議會解散は豫定の事實だ。今のうちに政友會の勢力を失墜せしめておかねば、無産階級の勢力は强力的になりつゝあるし、議會に絶對多數を得る事はむづかしい。疑獄摘發と國家總動員の教化運動に熱中する所以である。

思想善導と云ひ、教化運動といふも。つまりは、資本主義制度を苗床とする物質主義、拜金主義を覆ひかくさうとする僞瞞運動である。曾て床次氏が内相時代、浪花節を奬勵して日本主義？　を鼓吹した事があつた。今度もやはり、講演、浪花節、落語、琵琶、活動

寫眞を催し、金解禁、消費節約等の必要を書いたパンフレットや圖表を發行して、國民に國民精神の作興と經濟生活の改善を促すさうだが、今度もさぞかし、國費を徒費するのみで終るであらう。

最近頻りに物質文明の呪ひを聞く。精神文明のあこがれを聞く。そしてかくも國民が物質に汲々たるは、外國思想にかぶれたが爲であり、日本の國體觀念を忘れたが故である、などの說を散見する。冗談は言はぬ事だ。日本は資本主義の國ではないといふのか。經濟的にだけ資本制で國民の觀念は封建的であれ、とは、造花の花を土に植ゑて實を結ばせやうとする樣なものである。故に一方に敎化總動員の、精神主義の復興などと譯のわからぬ事をならべたてゝお祭り騷ぎしてゐるうちに、ます／＼種々の疑獄事件は展開され、物質主義、拜金主義が世にばつこするのだ。

日本大衆黨は、瀆職官吏死刑法の制定の要求を聲名してゐるが、階級的立場よりするならば、何もブルジョア政府に對してするがものはないではないか。疑獄に連座したきものはなさしめよ。彼等はそれによつて自らの墓穴を掘りつゝあるのだ。この事件を取り扱ふ限りに於ては、よくブルジョア社會のカラクリを曝露し、疑獄の意義を解明し、事實の眞相と鬪爭方針を示すこそ、無產政黨の爲すべき任務ではなからうか。

衞生行政の訓示と民衆

安達內相は、過日警察部長會議に於て「防貧の第一義は、國民の保健にある事」を力說しての訓示を與へた。卽ち統計的に見るも、大正十五年社會局の大阪に於ける調査によれば、貧民千戸中五百九十三戸約六割までは疾病が原因で貧困に陷つたものであり、濟生會病院巡回診療の個人本位の調査でも、その三割六分は、やはり貧困の原因が病氣であつたといふ。それ故に內相は內閣在任中の主力を衞生行政に注ぎ、大いに明るい社會を齎らす意氣込みであるから、警察官もその旨を體し、大いにその方面に力を盡せよ、といふのである。

なるほど貧乏と病氣は背と腹である。妻も働け、子も稼げと一家總動員の勞働をしてもカツ／＼にしか食べて行けない現在の無產階級の狀態だ、誰か一人でも、殊には主要な働き手である男子が病んだら、誰でも泥沼に足をすべらした樣に、ずる／＼と底知れぬ貧のドン底に陷ちて行く。貧しき門に孝子あり、とか、烈婦ありとか支配階級から見れば、美くしく喜ばしき孝子節婦は掃く程あるのだが、當人にとつては、あまりにも眞劍な生活苦の喘ぎではないか。それについて當局は、一、國民榮養の改善、二、風景地保健地の開發利用、三、結核豫防設備の充實、四、トラホームの豫防治療、五、癩豫防、六、地方病の豫防撲滅、七、救療事業の普及、八、狂犬豫防九消化器傳病豫防、十、阿片魔藥類の取締り等をあげてゐる。けれど、私達は特に次の項に注意せねばならない。「由來衞生事業には多額の費用を要するが、經濟國難の折柄、多額の費用を支出する事が出來ない。併し費用をかけずとも、その精神によつては、充分の效果をあげ得ると思ふ」

腹がへつてもひもじうない、と言はねばならぬ昔なら知らぬ事、物を食べねば、お腹の空く事を知る現代の無產階級にとつては、ただかうした漠然たるものでは何んにもならないのだ。結核豫防にしろ、阿片魔藥取締りにしろ、言はずともそれは必ずなすべきものである。併し一般民衆は、如何に多額の費用を要するも、切實に要望

するものは、執拗に果敢に要望せねばならないのだ。

病氣卽死と決定的の運命にある無產階級は、疾病保險の制定を要求し、國立病院、無料診療所、無料產院等の施設を欲する。どんなに傍からは、生きる事の無意義さを想像されやうとも、生きてゐるそれ自身に、ほのか乍らの喜びを感じるのは人間である。誰だつて死に度くないのに變りがない。疾病保險によつて僅かでも息をつき、自由なる診療によつて明日の命を豫想しやうとするのである。

濟生會病院、その他公私の慈善病院があると言ふだらう。けれどその數の不足と、質の惡さ、常務員の不親切な官僚的態度、手續きの面倒さは、よく病人をして安んじて治療を受けさせないのだ。また藥價以外の生活費は何んで爲して行くか。某市立病院は、朝十一時までの受付け規定であつても、既に定員に滿つれば十時が九時でも受付を打ちきらせる。日曜祭日その他の休みは諸官署と變りはない。病氣もその樣に機械的にあつてくれるとよいのだが、その方は事情かまわず重つて行く。限られたる工場勞働者は、健康保險法が曲りなりにも實施されてはゐるが、法が不備であるばかりでなく、儲けがないので醫者には嫌がられ、ヤレ鼻の病氣は駄目だの、齒は規則外だのと、ほんの鼻風邪程度のものしか診てくれないので、勞働者の不平の一つは、必ず健康保險法の僞瞞に集注されてゐる。

次には託兒所並に小學校兒童に榮養食を公給する事である。國立榮養研究所はなんの爲にあるか。所長佐伯博士は、無邪氣にも、自分の弟子は、東洋軒その他第一流のレストラントにコックになつてゐる事を自慢した事があるが、國費を以てする研究所は金持階級に享樂を提供する爲の基礎的研究であり、また支配階級の健康增進にのみ役立たしむる爲のものであるか。科學をさへ支配權力の維持のためにあらしむる現制度下に於ては、或はそれも當然かもしれないが、大衆は大衆の力によつて自分逹の爲に役立たしめねばならぬ。

日本榮養協會は、大正十四年四月以來、市內の四五小學校と協定して兒童に榮養食を供し、一ヶ年後の成績をとつた事がある。それによると、身長體重、胸圍肺活量、握力等目にたつて增加したは勿論、給食前の男兒の罹病率四・〇九だつたのが、一・五五となり、女兒は、四・四三だつたのが、一・一四といふ好成績である。(麴町小學校調査)

中產階級以上の子弟に對してゞさへ、かうも食物は身體發育に關係する。病氣豫防から考へても、無產階級の子に、榮養食の公給を講ずる事は政府の急務である。

衞生行政の主眼點は、病氣豫防と撲滅にあるはいふを俟たない。それで以上の三つを述べた他尙一つ加へたいのは、刑務所內、留置所內の衞生設備の改善、榮養食の供給である。留置所內、刑務所內こそは、貧乏人の巢窟である。中には小川平吉その他ブルヂョアの代表者も居ない事はないが、大凡そは貧故に、生きんが爲の最後の努力が法網にひつかゝつたのが多い。變態的性格者でない限り、誰が一切の自由を奪はれる樣な事をしたいであらうか。この淚すべき哀れな生の努力者に對して當局者はどんな態度をとつてゐるか。まづ留置所內を言ふならば、どんなに寒くとも一人當り薄い汚い毛布一枚ぎり、七八人に對して、二三枚の敷蒲團を貸したら、あすこの署はいゝぞと喜ばれる方だ。しかも下は、板敷に薄べりを敷いてあるのみである。食事は、小さい茶碗にしたら、やつと二杯半位の麥澤山の御飯に、おかずがチョッピリ、燒豆腐の煮付けならそれだけ二切位に澤庵の尻尾二切朝は味噌汁一杯で御飯を詰め込まねばなら

ない。刑務所だとて大同小異、日の目は見ず、運動は不足するし、病人健康人區別なく雜居せしめるので、傳染病の媒介體となつて出所する事は、決して噓ではない。當局は率先して病人を作つてゐるのだと言つても過言ではないのだ。この夏も衞生設備の不備から、市ヶ谷刑務所内に赤痢が流行し、三、一五事件で檢擧された村×醫×氏もそれに感染した事實がある。解放運動犧牲者救援會の家族團が一齊に司法省、裁判所に押しかけ、官憲の彈壓下をくゞつて、衞生設備の改善その他を要求したが、當時、獄中より、便器が室内にある爲に、頭痛がして困るとの通信をうけた。

防貧の第一義は健康にあるなどとそんな近視眼的な、低能的な解釋は私共のとる所ではない。しかしかゝる要求を提出し、戰ひとる事によつて、健康と幸福を保持する事も亦必要であらう。この意味に於て、民衆は要求に向つて鬪爭を開始すると共に、當局の行動に對しても亦、怠らず監視すべきである。(二九、一〇・三)

秋の目

上田文子

院展と二科

二三年見ないで、今年行つてみると院展の日本畫のつまらなさは私をびつくりさせた。一體、私は、小さい時は少し習つたこともあつて、私達の年齡のものとしては日本畫の技法に可成り理解と同情をもつてゐた筈なのだが、今度の院展などをみてゐると、理解も同情も何處かへ吹つ飛んでしまふ。若い人の作品が殊に不振なのに失望させられる。構圖稚拙、技法の極端な寫實化、等、悉く、描く人の藝術に對す立場の定つてゐないことを證明してゐる、私達は素人だから、テクニックを微細に批判する目はもたないがモチーフを窺ふことには可成り、寛容な理解をもつてゐるつもりである。技巧の整はない畫をみてもさして氣にはならないが、意圖の低級な或ひは幼稚な畫に接しる時、それが若い人の作品であればある程、たまらない憂鬱を感じさせられる。

現代に於いて、日本畫の技法はすでに死んでゐる。にもかゝはらずその中から何か時代に適應した美を見出さうとして努力してゐる青年の群をみる時、私はある意味でメーテルリンクの群盲を聯想せずにゐられない。

院展を出て、二科の會場へ入ると、ともかく、地下室から地上に出て來た樣に明るい快さを感じる。こゝでは、作品それ自身として未成なものにも、又單なる模倣にすぎないものにも兎も角、無方向でない淸新な意圖が感じられる。第一、色彩の强く、明暗のはつきりしてゐる丈でも、氣もちがいゝ。こゝではわれ〳〵の同時代人は胸をはりブラッシュを握つて、すべての近代的な科學的な美を彼らのカンバスの中に表現しやうと意氣込んでゐる、ある種の人々には既でにアカデミックな種類に數へられてゐる二科の出品畫にしても、若い人の作品にはわれ〳〵は殆ど退嬰的なものをみることがなかつた。

院展と二科——この二つの異つた印象はわれ〳〵に何を敎へるか。諸君は、古來、戰爭

に於いて被征服民族がその武器の進歩しなかつた爲に敗戰して、彼らの敵の奴隷となつたことを知悉してゐられるであらう。こゝでわれ〳〵は征服の爲ではなく、文化史上に進歩的役割を果たす爲には藝術家も又、最も便利な、優良な武器によつて彼らの道を辿らなければならないことを學ぶのである。

新築地の密偵

今度の新築地の帝劇公演では、三番目の密偵が一番面白い。マルセル・ユボーの原作、筋は大甘のメロドラマだが、作者が佛蘭西人丈に社會運動劇が定石的な類型に陷らず、一々の人物が相應、肉の付いた性格に描かれてゐるので存外薄つぺらでない。二幕目の勞働運動の闘士の家など、多少自然主義的だけれど誇張されない生活がしつとりにじみ出てゐる爲、本格的なプロレタリア演劇ではないにしてもある意味では中間層の觀客にも親しみがもてゝいゝとも言はれる、おしまひにスパイを殺さず追ひ出してしまふのもあくまで佛蘭西式だ。要するにメロドラマには違ひないけれどこういふ種類のものももつと日本に出ていゝと思ふ。



演出は土方氏の病氣の爲か、何だか統一されない箇所があつて鳥渡、見づらかつた。

役者では、山本氏のロールが矢張りいゝ。この種の強い役は一體格にある方ではないのだが、それをあの位にこなしつける技倆は推賞すべきだと思ふ。丸山氏のスパイ、高橋氏の老妻なども目立つてよかつた。

（一九二九、九、二九）

お斷り、今月は忙しくて、演劇時評が書けませんでした。來月はつゞけますから、あしからず。

秋晴快適

動物園

「ライオンの子がみたいなア」「ライオンの子がみたいなア」「獅子の子がみたいなア」校正の忙しい最中「動物園に行きたいなア」編輯室が動物園になつた様にみんなほえ出した。「社長さん獅子の子がみたくありませんかア？」「動物園に行きませうウウー」

歸つてから校正をすることを約束する。そこで女人藝術の編輯室は動物園をさして三時すぎから１２３。一行六人、又あたしが自動車の助手になる。

上野のお山は展覽會を控へてにぎやかだ。編輯室のおのぼりさんは斷髪洋装で動物園に入る。入口で切符を買ふのに大人六枚。買ひ手の素川さん少々氣がさしたらうと思ふとなかなか、一錢銅貨を十枚にぎつて「餌をやらうと思つてかへて貰つた」と濟してゐる。切符を受取る小父さんも驚いて笑つてゐる。

「居た、居た」「どら〳〵」「あら可愛いい」「猫より少し大きい位ぢやないの」「欲しいな」「やつぱり猛獸の子つて氣がするわね」檻の中で遊んでゐる三匹の子獅子は誰が何と云はふが知らん顔をしてふざけてゐる。母親は眠そうな眼をしてゴロリと横になつてる。「人間共何を云つてる俺たちの子だつて可愛いゝだらう」むこうのおりではまだ子のない獅子の御夫婦が散歩してる。この父親はいないのかしら」といふと、ウオー　ウオー　と裏の檻の



木魚の顔

―日本橋―７

時雨

前號「テンコツサン一家」――九月號所載の鼠小僧の住んでゐた、三光新道のクダリに、三光稻荷のあつたことを書きおとした。三光稻荷は失走人の足止の願がけと、鼠をとる猫の行衞不明の訴をきく不思議な商業のお稻荷さんで、猫の繪馬が澤山かかつてゐた。靈驗いやちこであつたと見え、たま、五郎、白、ゆき、なぞの年月や、失走時や、猫姿を白紙に書いて張りつけてあつた。その近くに鼠小僧の隱れ家があつたわけになる。

油町あたりの呉服商の細君であつた祖母が、鼠小僧の人柄なぞをどうして知つてゐたのかと思つたら、そのころ祖母夫婦は、樂屋新道――葺屋町、堺町、などの芝居に近い――の附近に住つてゐた。場番からで氣らくに暮したと見え、近所の岡つ引の細君と仲をよくしてゐたといふ。自然そんなことか　鼠小僧の引廻しも見たのであらう

七ツのアンポンタンに、九ツのアンポンタンに、十一、十二のアンポンタンにおぼろげ

中で吻なつてゐる。のぞいてみたらライオン、あんまりあばれるとみえて幾間でも檻に入れられてゐる。せまい檻の中で示威運動。
どこをみてもみんな餌箱がからになつてゐる。しよげた素川さん。「つまんないなア」やつと鹿の所でおいもの切つぱしを二皿みつけて大喜び。
立派な邸宅に住んでゐる河馬を訪問したみんな、つくづくみてつくづく嘆息して曰く、「一番いやらしくて一番こわいわね」この河馬の御夫婦はでも大變仲がいい。きたない水の中へもぐつてはしばらくたつとぬうつときみの惡い顔を出して、ハツと鼻から息を出してブルツと耳をふるはして水をはじく。目玉が一寸位突出してゐて、ぐるんとにらめまわす。水にもぐる時はシユツと耳たぶをしめてボゴボゴスウーツともぐつて反對の側から赤顔を出してぐるん。
前脚も後脚もくさりにつながれた象、今更ながらその鼻の街妙不可思議な仕事振には驚く。ジヤガイモをヒユツヒユツと十位ひたてつゞけにのみこむ。感心してみとれる素川さんに、いたづらつこの男の子たちが「ヤアあのオカツパエノグデカイタオピヲシメテヤガラア、チエツケチクセイノ」
白熊をみてゐたらカランカラン。もうおしまひのかねがなる。メガホンを持つた園丁がうしろからせきたてる。みんなフンフン鼻をならしてまだお猿とも遊ばないのに。……だてふの顔がなんとまあその日投獄された小川前鐵相に似てゐたことか。

ながら近くの町の人の生活ぶりや、身近な人たちのそれがぼんやりとうつつてきて、言様のないさびしさと、期望しても〳〵満されない佗しさがあつた。譬へて見れば、お正月になつたら賑かだらう——賑かだらうといふ膜然とした思ひのなかに、子供の空想と希望と理想が充滿してゐる。それが元旦の夕方ちかくなると、あゝ、もう日が暮れるのにと、どうしていいかわからない物足りなさが憂鬱をもつてくる。それにも似た——事はまるで違ふが、日々にぶつかる餘義ないさびしさだつた。
ある日、あたしは母の父の顔を穴のあくほど凝と見た。この老爺さんは寺院で見る大木魚のや　な顔をしてゐた。木魚は小さいのは可愛らしいものであるが、大きなのが菌を敷いて座つてゐると、かなりガクガクとした平たい四角である。老爺さんの顔も大きな四角なお出額で腭も張つてゐる。そのくせ鼻は丸く安座をかいてゐて小さい目は好人物といふより、滑稽味のある刺身に似たこれもけんそんな眼だ。白い髭が鼻の下にガサガサと生へて、十二月の野原の薄のやうな頭髪がデコボコな禿た頭にヒヨロ〳〵してゐる。惡口すれば、侏儒ともいへる、ずんぐりと低い醜い人だ。
その前にも逢つたかも知れないが、アンポンタンが意識した初對面の印象だつた。彼の身邊は石炭酸の香がプン〳〵した。
「ヘウツになる性だから、これは働きながらでは無理だ。」
さういつて女中を——臺所働きの女中をおさんどんと呼ぶころだつた。そのおさんが昨日足の裏を咎めたのを氣にしないでゐたらば、熱が出て腫れあがつたのを診祭して、養生にかへすやうにと言つた。
老爺さんが洋科のお醫者が出來るのも初耳だつた。あたしの家は頑固で、漢法醫にばかりかかつて煉藥だの、振りだしだのを飲ませ、外傷には貝殼へ入れた膏藥をつけさせてゐる

白い馬が勇者をのせて走つて來る。近づけばそれは動物園の小父さんが、殘つてゐるものはないかとみまわりのため、いやに足の短かい馬だ、いやろばだ、うまだ、ろばだ、どつちでもいい出ませう。

靜かに暮れてくる上野の山を歩きながら、桒川さんはまだ一錢銅貨をにぎつてゐる。そこで一錢づつ入れて目方をはかろうと評議一決、社長さん私は十四貫だと威張る。そんなにあるものかと衆口一致。ところがアッタアッタ十三貫八〇〇どこにそんなに肉があるのか　皆感心すると、膽と金の重味だとすまして帶の上からお腹をかるくたたいてゐる、憎らしい。それからみんなのを一々言あてる。八木さ　十五貫、山本さんちいつちやくつても貫があつて十四貫、桒川さん十二貫三〇〇、で營養不良。あたしは――あたしのは殘念ながら暗くつてみえなかつた。やつと一錢玉をなくして、それからうぐひすだんごのおぞうにとおしること（みどり）

――小池みどりのは殘念ながら、ハカリがピンと上つて、グル／＼廻つて、正確にしれないが、30.00+2=と五百目位にまけとく。

◇

爽やかな秋晴れの午後、キヨトンとした目付でおとなしく人々を見返へして居る駱駝、物欲しげに、會釋する鹿――中に別檻にゐる一頭の雄鹿が、與へられる餌も見かへらずに、お腹まで埿まみれになつて、角で土を掘つてゐる。檻から出て自由を求めたいのであらう。ライオンは可愛い三匹の小供が戯むれて

たから――洋科の醫者といへばハイカラなものと思つてゐたあたしは、石炭酸の匂ひに厳粛になり、この汚ない老爺さんに呆然としてゐた。

そのまた老爺さんの言語がふるつてゐる。」

「長谷川氏は元氣かな。」

長谷川氏――あたしの父で、彼の婿である。常盤津の師匠の格子戸へ犬の糞をぬつた不良若衆で、當時でのモダン代言人である。あたしは彼のデコボコ頭の凹みにたまつた埃をながめた。

以下、その老爺さんの生活の斷片で、アンポンタンの眼に映つたヒルムの屑である。

すべてのことに、轉々とする人を見るとさびしい焦燥を他人ごとながら感じて、石が汗をかくやうなにじみだす涙がこみあげてくる時がある。生れながらの性もあらうが、ピッタリと、ものに廻りあはぬ悲しい人たちなのである。蠶でさへ心にあふところのあるまで、繭をかける場處を選んで、與へられた木の技の、果からはしまで歩き廻る――それは何やら滿されない本能の求めなのではなからうか――老爺さん湯川氏も、自分の本質を空しくして、ただ長く生きた九十年の生涯である。

老爺さんは、湯川といふのも自分の本姓ではない。仙臺屋敷に生れたから仙臺様の藩士だらう。お留守居役だともきいたが、廻米の事に明るかつた。父親も其役だつたと見える譯があるから、江戸で生れた東北系の人である。

廻米とは仙臺領の米を船で廻してくることで、その領地米を江戸邸で受取る役人なのだ。江戸詰の藩士の錄高通り全部米で與へたものなのか、或は金に代へて渡したものなのか、私はよく知らないが、當時のお藏前の大町人や、濱方の者などとの取引關係から數算

居るので人だかりが多い。ライオンの小供はとても可愛い。寝て居る母親に悪戯しては散散ふざける。見物人の方へ走り寄つて來ては金網から可愛い顔を突き出す、其の度に子を思ふ母親が、後からついて來ていけない〱と促がす。可愛らしい小ライオンに並べて、之は又大きな無器用な顔の持主の河馬は一番面白い藝を見せてくれた。偉大な體軀を起すと、口でもつて、鐵棒の戸をあける、ザブンとばかりに、水の中にもぐり込む、大きな波動が立つたと思ふと、二間程先に、ポッカリと、滑けいな顔を表す。上半を浮かして眞正面を向いた樣は見られない、こけ茶色のなんだか物をぶち壞した樣な何が何處だか分らない顔をして居る。同じ類でも路上を走る馬の方がまだしも餘程美人だと思つた。陰欝な住家に鎖で足をつながれたお馴みの象さんがゐる。特有な鼻で一生懸命にお食事最中、馬鈴薯だ。雪の國を思はせる白い岩の上に居る北極熊の所へ來た時、もう時間が來たと見えて鈴が鳴り出した。(美智幸)

◇

誰かが言つた。獅子はいい、立派な男ぶりだ。たいしたものだ。不快な人間より好きだ。虎は——あの寢そべつたまま、與へられた肉なんぞ見向きもしないところがいい、なんて美しいんだらう、落附いた美男だ、貴公子といつた誇りをもつてゐる。豹は——キライだ。河馬——あゝ××さんに似てゐる。耳をクルクル廻すといつたら嘘だといつた人があるが、ソラネ、ホラ、水から出るとクルクルと

にたけ、世估に長じてゐなければならない、いはゆる世渡り上手の人物でなければならないのに、湯川氏はみいいりのよい父祖の職をきらつて御直參の株をかつた。㋑直參といへばていさいはよいが、木つ葉旗本、貧乏御家人の、その御家人の株を買つて、湯川金左衛門邦統となつたのである。湯川といふ姓は、無論買つた家の姓で金左衛門も通り名である。しかも、養父——名ばかりの、御家人株の賣手が拾歳下なので、嘘の年齡が出來上つたために、娘たちを妹にして幕府の人別帳に記入して貰ひ、とにかく御直參にはなつた。が、すぐに幕府は瓦解した。株を賣つた眞の德川家御家人の一人は、先見の明をほこつて小金貸でもはじめたであらうが、みじめなのは新湯川金左衛門邦統であつた。

尤も老爺さんの妻の父親が、上野輪王寺の宮に何か教へてゐた中川某といふ旗本で、法親王が白河へ落ちてから建白書のやうなものを置いて死んだ人であり、身寄りにも上野の彰義隊で死んだりした若ものたちもあつたから、算盤をはぢく武士より直參武士になれと進められたのかも知れない。とはいへ新御直參一家は、五月十六日朝の官軍上野攻めで狼狽てた。いよ〱敗軍ときくと逃出す騷ぎで、什器を池のなかに投込んだり——上野山下の商家では店の穴藏へ入れたといふ——井戸へ入れておいたりして逃出した。老爺さんの二女——總領娘はある大名邸に御殿奉公をしてゐた——私の母は九歳だつたが、男番にしてゐたので小刀を差して連れられて逃げた。吉原の土手下で夜を明した時、どこのものかが名物の土手の金つばをくれたが、その大きさとうまさを何時までも忘れなかつたと言つた。さうして此新御直參一家はみづから沒落し、德川十六代龜之助樣のお供、靜岡蟄居といふはめにおちた。

品川から出た二艘の幕府の汽船に押し積まれて、靜岡へまでもつてゆかれる幾百戸かの家族——それは德川にしても厄介ものだつたに違ひない、ついてゆかねばならぬといふも

風車のやうに廻す。オヤ、も一ッ發見した。水にはひる時に、鼻の穴も耳もツボマルのだ。で、耳も退化し、鼻も退化し、目球も退化しちやつたのだ。だが口は大きいね。(みんなちよいと自分の口を氣にするのが、向ふ側のガラスにうつる)白熊は可愛い、まつ黒な、人の好い眼をして、そのくせ利口さうだ。

動物連の方でもいつてるだらう――何いつてやがる、お前たちのザマを見ろよ、みぢめなオタンチンドモではないか――(カバ)

チヤンバラ

小池綠

今日もまた疲れて少しふら〳〵になつてゐる社長さんを引張り出して、諸事節約の折から電車でね　朝日新聞社の藤田嗣治氏の展覽會に行こうと市ケ谷の驛に來てみれば、信濃町四谷間脱線のため黒山の人。「タクシー」みなまで云はせないで「大丈夫大丈夫」ぎうずめの電車におしこまれた社長さん世にも哀れな顔。「たまに電車に乘る決心をしたので電車の方で今日は何だか樣子が變だなんて事で脱線したんだらう」皆が面白がつていぢめる。

展覽會を看終つて新聞社を出たのは夕方。ラッシュアワーのおびたゞしい車と人と音響の往來の中を、「大丈夫？　大丈夫？」とおつかなびつくりの社長さんをひつぱりながら銀座に出る。優子さんはアテネに行くので一人仲間からぬける。ガアガアゴウゴウブウブウ、銀座通りの騷音と人の波は社長さんの神經をおびやかす。そこで暴力團長この時とばかりえへ〳〵！　と威張つて社長さんの腕をむんづ

の中には、かうした一家もあつたのだ。靜岡へいつたからとて何の當があるのではなし、百姓泣かせがいちどきに流れこんだのだつた。命と體だけを積んでもらつた故、勿論たいしたものは持つてゆきはしない、家財はみんな捨ていつたのだ――こんな時だとて、上のものの方はどうにかなつたであらうが――耕す土地とてさうあらうわけはなし、無祿無扶持になつた小殿樣たちは、三百年の太平逸樂に奢て、細身の刀も重いといつた連中である。忽ちにして畑の芋盗人となり、奥方は賃仕事をして糊口をしのいた。

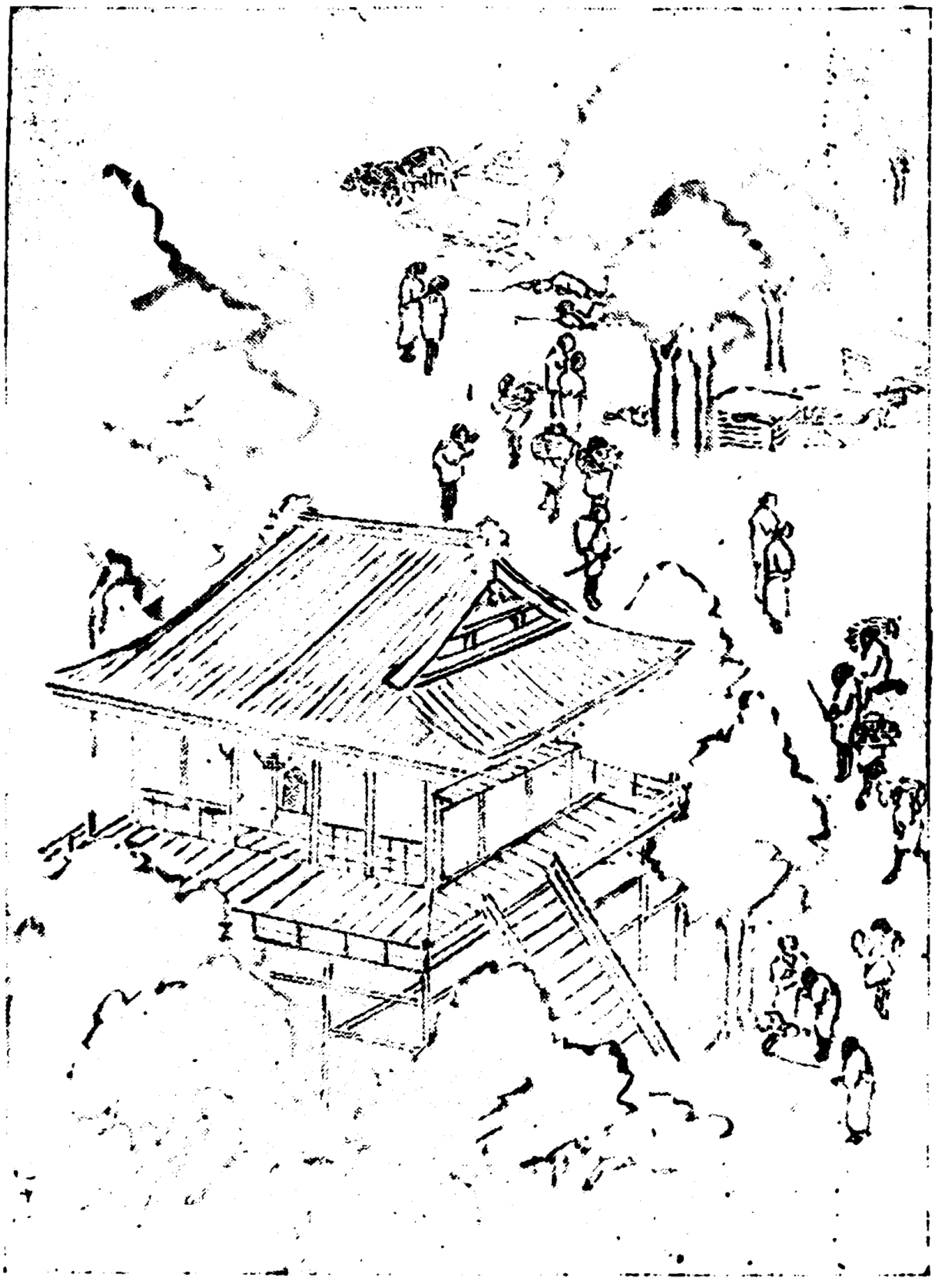


とつかんで「ダイヂョブ、ダイヂョブ」とゆうゆうこつち側からあつち側へ渡るのである。

　エスキモーで「何を食べる」と聞かれたみんな「先づ食慾娘は何？」といふ。云はれておとなしく「今そんなに欲しくないけれどみんなと同じもの何でも」そしたら社長さん大きな聲で「驚いたねえ、こんな事を云つて、この娘にでもそんなにたべたくない時があるの濟ましたつてだめだよ今更」實を云へば、朝から先生を攻め落しに社に行つてやつと行く事に決つたところが、それはおひるすぎで、あたしのおなかは大雨にたたかれた地面の樣にへつこんで仕舞つた。しかし先生のおなかたるや不思議なんで、朝起きてから（勿論おひる頃だけど）朝ごは　までの間はどんなに長くても平氣といふ重寶さ。先生の朝食あたしや山本さん（先生のとこにゐるおとなしいむすめさんの）おひるごは　がならんでから、お客樣、お客樣、お客樣、やつとごはんのすんだのが三時半、エスキモーではその凹んだおなかゞ丁度平面以上になつてゐた頃だつたのでいかな食慾娘も「あれとあれとあれ」とは云へなかつたつてわけ。

　でも食べだせばお隣りの園子さんのパンまでムシヤリ〳〵で「そうらどらん」。

　素川さん一人おくれて來てたべながら「社長ん（ここで一つ首を振つて）チャンバラみませんか」うんゝ云はない社長さんをつかまへてチャンバラでよろこんだ小池みどり、「ねえねえねえねえ、チャンバラも面白く



——七十一老・故長谷川渓石筆——

湯川氏の家では不用になつた袴が商品に化けた。仙臺平や博多の財袋がつくられて賣られた。お百姓がお客樣なのであるが、賣手に怖れて近寄らないのと、賣る方でも氣まりが悪いので、七夕の星まつりのやうに篠の枝へ幾個もくくりつけて、百姓の通る道ばたに出しておいて錢に代へた。

てたまには。ねえねえねえねえ、畑違ひのおいも食べてみなくちや、ねえねえねえ行きませう」社長さん目を白黒させて「行くよ行くよ」さあしめた。「修羅城って大阪城落城の」「ひつぱり出して、ケヤンバラまでみせようつてはじめから決めてたんだらう」「いいえ決して、素川さんが云ひ出さなければ、私はおとなしいからチャンバラのチヤの字も」「うそばつかり、その代り圓タクをうまく交渉するんだよ」この間動物園の歸りにうまく交渉して一圓ときめたので圓タク係になつてしまつた。ところが社長さん一圓とせつかくきめて乘ても最大限度に大きな娘たちが乘ので氣の毒がつて「運轉手さん、ほんとに一圓でいいの」「運轉手　お腹の中では下さる分にはいくら澤山でもとは思つてゐてもそこがその交渉ずみの後、つまらなそうな顔で、「結構です」「そいぢや二十錢だけ余けいあげるわ」――なのである。それで交渉掛は何にもならなくなるから横で「諸事節約、一圓タクシー」とにらむのである。

それで今度は無事に一圓で神田の日活館まで、どうぞこちらへで寫眞はまだか〳〵と思つてついてゆくと三階の休憩室、あら!! 案内してきた女給さん濟して、「あとしばらくで一回すみますからおまち下さい。」

みんなチャンバラはうれしいが朝から疲れてゐた社長さんを引張り出してその上封切の日なのでめちや〳〵に混んでゐる。元氣のない社長さんをみて少し心配で惡くなる。素川さんは自分の仁丹を豫備薬にと差出す。ひつ

幕府の瓦解は御直參と威張つた旗本、御家人の墜落ばかりでなく、大名も廢藩置縣となつたから、湯川の姉娘も歸つてきた。ともかく、わびしさのつゞく中に振り袖姿の年頃の娘を見る事は親達は嬉しかつた。此娘だけが失はずにゐた衣裝道具を、失はさずにおかせたいと思つた。とはいへ用捨なく生活の代は詰るばかりである。それを助けるためにお供の連中は遠州御前崎に鹽田をつくれとなつた。

あたしの母は十二になつて、屈強な體力をもつてゐた。姉と妹二人はどうにもならなかつた。彼女は小船を漕いだ。彼女が今でも一番戀しい景色は、遠州御前崎の今切れの渡しのところと味方が原だといふ。彼女は早抹、父親をはげまして自ら小船を漕いで鹽濱へとゆく。十二の彼女の海水の撒きぶりには及ぶものがなかつたほど終日を働きくらした。

と姉娘に緣談が起つた。親たちは江戸がへりの娘の美しさゆゑに――と思つた善人である、先方が旗本で、旗本が口をきいてくれるのだからといつた具合で悦んだ。仲人が來た。夏のことで、白扇をサラリと開くと懷から贈物の目錄書と、水引をかけた封金を出して乘せたが、

「芽出度御受納くださるように」

と丁重に述べておいて、下げた頭をあげると、動作のゆつたりした湯川氏が手をださぬうちに、扇の要をくるりと向けかへて

「御同樣に、此方樣からも御贈りでござらうから、諸事節約、緊縮して――」

とかなんとか、濱口内閣のやうなことを言つて、もつてきた結納金をまた懷中に入れてしまつた。それでも好人物な、他人を疑ふことをしない夫婦は、悦びだけを受入れ、悦びの意だけを空つぽで渡した。

――あたしの母は今でも言ふ姉さんが味方が原の秋草の中を、馬に乘つて美しい振袖を

ぱり出した手前どんなに混んでゐても椅子一つはみつけなくちやあとあたしたちは大童になて、人で一ぱいな二階に行つたが悲しいかな天無情、一回すんでもちつともすかない。補助椅子も出さない緊縮滿員振。やむを得ず、一番前の道路の所にしやがんで前列の椅子の人の足を出す所に腰かけることにする。寫眞をみながら椅子〳〵と思つてふりむく。やつとの思ひで社長さんをひつぱり出して「そうらチャンバラだつて劍に面白いでせう」つて威張らうなんて思つてゐたのに「もうこりた」なんて云はれては一大事である。あきらめた社長さん床の上に腰かけながら哀れ落城する大阪城のカツドウシャシンをみてゐる。可哀そうな物語りである。忠義片桐且元が志むなしく城を退ぞく。

袴をはいた淀君が出て來る。「袴をはいた時にはあんな風に白いえりを澤山出すものではない。——クスン、シユン、シユン——扇の襟に——シユン。

桐一葉落ちてコ城の秋を知る。——河の堤にひゞく二頭の馬の足音、且元と重成の別れ。シユン。水星篇の終り。パッとついた電氣にぬれた目頭らがはづかしい。やつと椅子をみつけて腰かけて一安心。みんな一所に近く集る。火星篇。夏。冬の陣に大阪方の勇士は對記し、重病をして弟にたすけられ馬にくくり けられて來た且元の姿にみる人の涙サンゼンと下る。生者必滅會者定離。歸りの交渉濟のタクシーの中で「社長さんたら、淀君の袴はなんて文句を云ひながら、泣いてるんだも

着ていつた。これはお前にやるよといつたものまでみんなもつていつてしまつた。お嫁にゆくとなつたらケチになつて、何もかも持つていつた。姉さんが御奉公に出たころは、家も富貴だつたので、市ヶ谷のあまざけや（有名だ呉服尾）で、好みで染めさせたものばかりだつたが、私は子供心にもこの嫁入りの仲人が變だと思つた。昔のお金は小判で重いのに、包んできた水引のかかつた奉書は薄つぺらで輕かつた。よつぽどたつて嫁入りさきにたづねていつたら、連合ひも、姑も、姉も、みんなあたしの姉さんの着物を着てゐた。

無力の巧んだ一種の略奪であつた。流石の御直參湯川氏も考へさせられた。これではならないと働きものの二女を伴れて江戸へ出た。江戸には住みすてた邸もある、池の中には何かしらが殘つてゐやう、深川佐賀町の廻米問屋には自分の妹が片附いてゐる。商人には障りがなかつたといふことが彼を心强くさせもした。

紅紫を踏んで箱根の山も越した。以前の住家へゆくと玄關の南側にたつた提灯は古びきつて以前のままだが上方の藩の侍が住んでゐて、取次の男が大きな眼をむいて睨んだ。家賊なぞしらんと——だが深川の商取引の活潑さは昔どころではなく、潑溂として、大きな機運が動いてゐた。義弟の佐賀町の廻米問屋石川佐兵衞の店では、仙臺藩時代の彼の緻密な數算ぶりを知つてゐたので手を開いてむかへた。働きものの小娘は氣むづかしい伯母の小間使ひになつた。

だが、人間をあやつる傀儡師はなんといふいたづらをしやうとするのか、この湯川氏が、働きものの二女を藝妓に賣らうと思つたり、また、この小娘が未來に教育界の先驅者となららとしたのをさせなかつたり——彼女に手習ひを教へた女學者が、この子を養つて自分の意志をつらぬかせたいと懇望したが許さなかつたのだつた。

石川佐兵衞は暗愚でも、時流が廻米問屋といふものを悳んだ。そこに湯川氏の數算と長

の「芝居は下手でも格好は變でも可哀そうなところではやつぱり涙が出るよ」素川さんすかさず「でも面白かつたでせう」

おとづれ

三日月の美しく匂ふたそがれだつた。御病中の田山花袋先生からの音信が器の匂ひもあざやかに編輯の机の上にのせられた。筆力の勇坤なる病體とはとても思はれない。長谷川への私信ではあるがこゝにかゝげることをゆるしていただいて先生の御健康を傳へやう。

脚本集賜はり御厚意のほど難有御禮申上候病氣もやゝよろしく候間樂しみて拜讀いたしたし度存候三上君の序文もよく粧訂も見事に近頃になき感じよき集と拜見いたし候一讀の上は何とかつたなき感想も述べたしなど存居候先づは御禮まで、草々不一。

三日　　　　田山生

時雨樣おもと

◇

時雨脚本集では激ましの言葉を諸方より受取つて作者はよろこんでゐる。菊池寛氏が讀賣へ評を書くといはれ、武者小路氏も讀後感を日日へよせらるといふ。秋田雨雀氏からは御著「時雨脚本集」一部御寄贈くだされありがたうございました。時々拜見したものにもなつかしく眼を觸れることが出來、あなたの生活の歷史の展開といつたやうなものも暗示されてゐるやうな氣持ちがされます。女性作家には、日本ではまだ〳〵多

年の蘊奮が役に立つて石川の家運はあがつた。その頃の湯川氏の知己の名は自毛村であるとか三野村だとか淨々たる大實業家となつた人たちである。石川屋は三井物產前身の如しだともきいたが、やがて石川屋は沒落し、それよりずつと前に湯川氏はまた動きだした。あたしが知つた老爺さん湯川氏は、それからずつと後の彼だつたのだ。

あたしの家で——彼のいふ長谷川氏の宅で、彼のために小晩饗會が催されたことがある。彼の老妻や、他の娘や、娘たちの婿なども寄りあつまつたが、客座敷ではなく、常の食事をする室まで、各自膳で車座になつてお酒も出た。

「いや、どうも、かくお手厚い御饗應にあつては恐縮のいたりで——」

木魚の顔が赤くなつて、しどく豊に、隱居じみた笑ひを浮べて、目をショボ〳〵させながら繰返していつてゐた。

「老爺さん、こんどこそはひとつモノにして下さい、なにしろ君にいためられた皆が浮かばないよ、此方の家だつて、なんだかんだつて大變だあね。」

さういつたのは姉娘の婿——遠州では仲人にたつた旗本だつた。

「それは大丈夫だ、こんどはウンと皆をよろこばせる。」

もうその頃は七十位だつたのであらうが、遠くへ單獨でゆくやうな樣子だつた。

「味噌も米も困らないやうに送つてあるから。」

と彼の老妻はつぶやくやうにいつた。そしてみんなが何處へか送つていつた。

「牛肉の佃煮でも送つてやつたら——」

父がその後母にむかつていつてゐた。

「だが、今度もあてにはならないぞ。」

くのハンデキャップがあることを痛感します。よくやつて居られましたね。先驅的な意味でだけでもあなた方の歩いて來られた道は紀念されていいと思ひます。先はお禮まで。

近松秋江氏からは

秋夜讀書の好季と相成り申候處脚本集御寄贈下され難有存申候。貴婦の戯曲は小生かねて愛好するところに有之候。

松茸と牛肉の味よろしき候に相成候。下戸もつい數盃を過し申候。御近處の三河屋などもよろしく候へども、三上大盡は近ごろ一向吾等老人を齢ひ致しくれ不申候。

ビラマキ

今日は四時から市内のビラマキ。聯盟の松川さんと二人は一先づ心齋橋通の混雜の中へ入つて行きました。その交流する人波は、あたかも新内親王殿下の御命名の佳きで日はあり、日曜日の事とて、明るく華やかで、身動きの出來ないほどの混沌さであります。私たちは其の中で女人藝術大阪支部發會式講演會のポスターを前にブラさげて、青と赤のビラを左腕にかゝへて、英雄のやうに勇ましく朗らかに、目ぼしい人達に、さつさと渡しました。急テンポで目的を遂行してしまふ事が目標だつたのですが、一時間足らずでとうとう××さんが、きら〳〵劍を光らせてやつて來ました。黑山のやうな群衆の中で松川さんが何か云はれて居ります。松川さんが私のう

さういふふうに彼は二年も三年も慓然とゐなくなつて、現れるとムッツリとした風貌を示し、やがてまた人々に送られて、至極滿足さうなニコニコ顏で出かけた。

さうした祖父の存在は子供たちからは忘られがちで、祖母は末の娘と二人で住んでゐるものだとばかり思つた。上野下の青石横町に住んでゐたころも、根岸のお行の松のすぐきはに、音無川の前にゐたころもさうだつた。老嬢になつた娘のミシン臺とたんすが一掉あるきりのわびしい暮しかただつた。どうしてこんなにガランとしてゐるのかと思つたが、それはみんな湯川氏が硫黄發見に入れこんでしまうのだつた。たま〳〵とまりにいつた時祖父が歸つてきたりすると、妙な風躰をした男がぞろ〳〵くるので嫌でならなかつたが家に歸つて父に訊くと、父はまたかといふようで、

「老爺さんまた瞞されなければいいが」

と呟やいた。彼の周圍のものは、謹少な家祿放還金をみんな老爺さんの硫黄熱のために失はれてしまつてゐるのだといふことを、あたしたちも段々に悟つた。

なにが湯川老人をそんなに硫黄狂人にさせたか知るものがない。ともかく四十年からの彼の事業である。重に北の方を歩いてゐたが小笠原島あたりにもなんのためか長くゐた。山のめききは凄いほど當つたが、訓練にも工夫をつんだが、悲しいかな老爺さんの發明は、丁度お直參の株をかつたのと同じやうにいつも世界の年代からおくれてゐる。强情で頑固なところが最進智識をすこしも求めやうとしないで、自己流の工夫でコッコッやるのだつた。そのうちに年月は十年も十五年も飛び去る。老爺さんの頭はだん〴〵凸凹が多く深くなつて、黴がはえたやうにそのくぼみに埃がたまる――

ある時、ヒョックリと現はれた湯川氏は赤い毛布をマントのやうに着て手拭で咽喉のと

しろへ來て、『本署へ來いと云ふのですよ』と仰言るのです。見ると、やせて小柄な淺黒い××さんが、私にも目くばせ見たいな合圖をして、二人を連れてゆくのです。私は時間が惜しいのと、ポスターやビラを、取りあげられると、かなはないと思ひましたが、その他の心配はしませんでした。却つて、どんな風に、叱るものなのかと思つて、私としては經驗も欲しいですし、輕々とその？　ついてまゐりました。新戎橋の交番で、私たちは遠慮さうに、外に立つてゐましたが『まあ入れ』と云ふので、私が生きに立つて中へ入りにくにこしてゐました。

『本署の方へ届けあるんだろうな』

『えゝ、本部の方から届けてあるでせうと……』

『でせうとはあかん、許可證を持つとるか、許可證を!!』

極めて、野暮なかん高い聲で、けんせいいたします。

「本署へ電話できけば直ぐわかるが届けてあるならこゝへも通知が來とる筈ぢや。君が長谷川時雨か？』このこと許りは、たゞ、ダアと許りに參つてしまひました。

巡査は、さつきから、ポスターと、ビラを一生懸命にらみつけてゐます。

『この名前の中の、君はどれぢや』

『私たちはその名前の中には居りません』

『そんな事をやつてゝ何ぼうもうけるのや？』

『ちつとも、まうかりません』

ころに結びつけてゐた。山籠りから急に自分の家にもゆかず長谷川氏をたづねて來たのである。いそがしい父の小閑を見ては膝をすりあはせるやうにして座りこんでゐた。いつも鑛山のことになると訥辯が能辯になる——といふより、對手がどんなに困らうが話をひつこませないのだ。父は他人の紛糾事件で家族に飯をたべさせてゐるのだから、煩はしいことをきくので頭が一ぱいであつたらうに、例の大木魚の顔がムッと前に出たらダニのやうに離れない、私は子供ながらハラハラした。父の前からはなる丈離れてゐるやうに家族は心懸けてゐる。父も子供にも小言もいはない位に離れてゐるのに——で、私は好奇だからでもなんでもなく、なるだけ大木魚の老爺さんの顔を自分の前にもつてくるやうにした。一體アンポンタンは家のものから遠ざかつてポカンとしてばかりゐたのに、木魚の老爺さんとだけ話をするのでよつぽど妙だつたかもしれない。

「おぢいさんに恐山へでも連れてつてもらうがいい。熊とおぢいさんと二人で住んだ。」

そんな事を大人はいつて笑つた。アンポンタンと湯川氏はポツンポツンと問答をはじめる。

「おぢいさんの頭はどうしてからデコボコになつたの？」

「小笠原島で龜の子の卵をあんまりたべたので、勢ひがついてデコボコになつてしまつた」

「小笠原島の龜の子つて、大きいの？」

アンポンタンは、背中に題目を彫られた大きな龜がつかまつて、も一度海にはなされるとき、お酒をのませたのを覺えてゐて、その二尺五寸もある甲を思ひうかべてゐた。

「さうだよ、大きな龜の子が揃つて出て來て、濱の砂を堀つて、ズラリと並べて卵を生んでゆくのだ。人間はそれを盗むのだからいけないな。」

「おぢいさんも盗んだの？」

「さうだよ、盗んで幾個も食べた。」

『年は何ぼうや』

『私は二十五です』と私が云ひますと松川さんも『私は二十一です』と云ひました。

『まうかりもせんことをして叱られんでもえゝやないか』と云ふのです。私はこの言葉にはさつと顔いろが變る程の、れんびんを持ちました。これに似た言葉を、私は七年前にも同じ××から聞いた事を忘れられないでゐます。震災前の年でしたが、私は小學校敎員を止して上京する都合になつて居りました。その時東京で世話になる筈になつてゐた或る文士が、私の身元調べをしたらしいのです。巡査が家へやつて來て財產や經歷を調べてゆきました。

『小說家のところへ行つて何をするのですか』と巡査が聞くので、『私も小說家になる積りです』と若い私は遠大の理想を、ぶちまけました。すると、巡査は「學校の先生をするよりも、小說家になる方が、金がまうかりますか』と云つたものです。

私は七年前に聞いたその聲をはつきり思ひ浮べ、彼等も又、無產階級の懊惱を持つ恐怖病者的な神經の持ち主だと思ひました。『法律は、知らなんだと云つて、あんた等を許しやあせん。今度は斯ふ云ふ法律が出來ました、云ふて一々云ふて行きやせん。とにかく本署へ連行して告發するからついて來い』何てまあ、調子の强い言葉であることでせう。

『私たちは本當にちつとも知らなかつたものですから、すみませんでした。もう配りませんから、許して頂きとうございます』二人は

「なんのために食べたの？」

「長生をするためにさ。」

「何故？」

「硫黃を――質のいい硫黃を製造して――硫黃の出る山はウンと見てあるのだけれど――お前のお父さんが承知さへしてくれれば……」

おぢいさんは刀豆煙管をジュッと吸つた。

「恐山に熊が出るの？」

「出てくるがなんともしない。」

「どんな風にしてゐるの？」

『紙帳とていつてな、紙で張つた蚊帳みたいなものを釣つて寢るのだ。寒さよけにもなるしな。火を焚いておくと、熊はくるがおとなしいよ。』

私は熊の子と友達になつてもいゝなといふ氣持ちになる。紙帳のことは、「淺間が獄」といふくさ双紙でおなじみになつてゐる。星影土右衛門といふ月代のたつた凄い男が、六部の姿で、仕込み杖をぬきかけてゐる姿をおもひだし、大きな木魚面の、デコボコ頭の、チンチクリンの老人を凝と見詰めた。

「おぢいさんは硫黃山へ何もかもつぎこんでしまつただつて？」

「出來上ればみんなを悅ばせるのだが――」

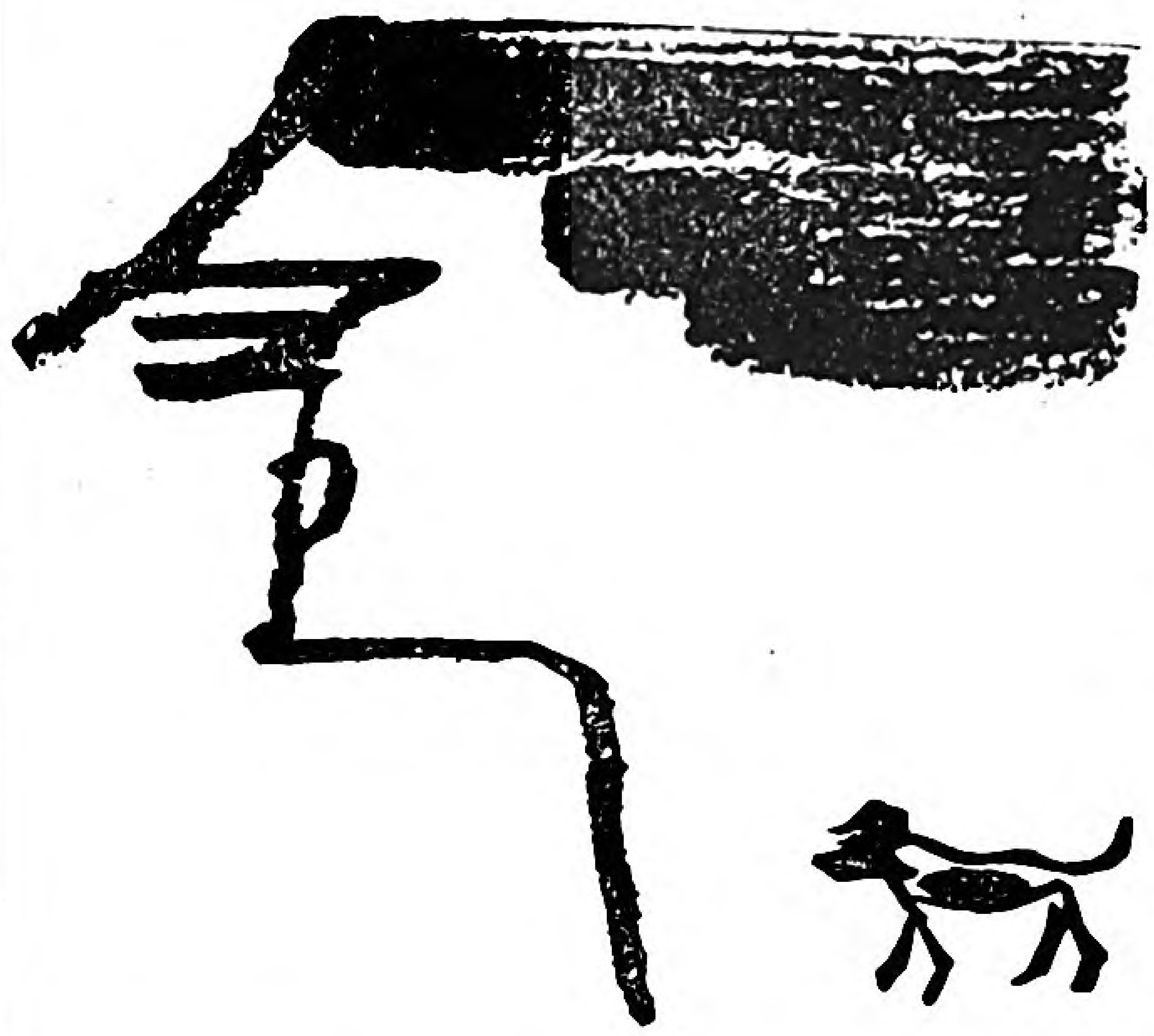
おぢいさん版下を書くやうに細かく綺麗な字を帳面一ぱいに書きつけたのを出した。分らない私にも說明しやうとした。四寸ばかりな算盤をだして幾度もはじいた。

老爺さんの根氣に負けて、父が福島縣下へ連れてゆかれたのは、盤臺山だか吾妻山だか

交替にあやまりました。本署へ行けば、刑事課長を知人的に知つてゐますので、大丈夫だと思ひましたが、逃げるに如かずなので、私は小憎らしい柄で、板にはつかないのですが、いかにも、しほらしく、なさけなさそうに、素直な顔つきで、終始花を持たせてやりました。ところを聞くので、北ですと云ふと、「北だけぢや分らん北は廣い」と云ひます。
「北區曾根崎」と云ふと、
「商賣は何ぢや」
云はない方が無事なので、無職だと云ひますと『オヤジに食べさせてもらうとるのか』
まことにどうも、どろつき的質問では赤面いたしました。そこへ温厚篤實な顔をしたかしこそうな××が入つて來ました。前の××が最敬禮をした處を見ると部長さんらしいでした。前の××が力こぶを入れて一件を報告に及びましたが部長はおだやかに、二人を歸してくれました。それだのに前の××はまだ憎々しげに云ふのです『罰金をとるぞ、罰金を。たゞで働いて、罰金取られたらゑらい損やないか』ですつて。
『一週間位前から願ひを出しておかなきや駄目だよ。それでも　土曜、日曜はめつたに許可にはならん。皆、有名な女流作家許りで、これには、危險な事も、わいせつな事も書いてはないから　いゝが、街路に立つて配つてはならん』
（と部長は、特有の私的感情らしいものを離れて云ひました。
『ぢやあ、カフエーなどへ、はつて置いて

が破裂したすぐあとだつた。父はへトへトになつて歸つて來て座らないうちにいつた。
「出來るだけのことならしてやらうよ、あの年でたいした氣根だ。」
あの老人が、山へはひると仙人のやうに身輕になつて、岩の上なんぞはピョンピョンと飛んでしまひ、險しい個所ではスーッと消てしまつたやうに見えなくなる。氣がつくと遙か向ふでコツコツ何かやつてゐる。さながら、人跡未踏の山奥が、生れながらの住家のやうで、七十を越した人などとはとても思はれない。山の案内人などの話でも老爺さんが一足踏み入れて、あるといつた山に硫黄のなかつたためしがなく、歩いてゐると、ふと向ふの山の格好を見て言ひあてる。土地の者たちも神樣のやうに言つてゐるといふのだつた。
「だが、宿は溫泉だといつておいて赤湯だの、ぬる湯だのと、變な板かこひの小屋へ連れていつて、魚の御馳走だといつてどぜうを生のまま味噌汁の腕へ入れられたには——」
とすつかり閉口してゐた。でも、どうやらかうやら父から出資させる事になつて老爺さんは欣々と勇んだ。情にもろくつて、金に無頓着な父は、細かい計算をよく嚙まなかつた。損德よりも、ただ幾分の出資を捨る氣でしたのだつたらう。
老爺さんが得意になると、今まで冷笑してゐた親類のものが手傳ひ志願を申出た。自分たちも損をしただけ取りかへさうといふ、御直參旗本の當主や子や孫である。
梅干幾樽、澤庵幾樽、寢具類幾行李——種々な荷物が送られた。御直參氏たちは三河島の菜積がなければ困るといふ連中であるから、行くとすぐに一人づつ落伍して歸つて來てしまつた。そして言ふことはおなじだつた。
「何しろ、一鍬いれるとプンと强く硫黄が匂ふのだから、胸が苦しくつて飯も食へない。」
老爺さんの硫黄はよく出來た。しかし近間の山林は官林なので、民有林かち伐木して蒔を運ぶのに、嶮岨な峯を牛の背でやつた。製錬された硫黄も汽車の便がある土地まで牛や

ふやうに頼むのは差支へありませんね』
『そりや勝手や。それでも又女給にビラ撒かせたりしちや、あかん、みんな手に貰うてもそこらへまき捨てゝ行くやないか。君等は又それを拾うて、歩きやあすまい』馬鹿々々しく口數の多い××は又それ丈つけ加へ更らに『一軒々々、入れて歩くのはかまやへんで。五圓づつの罰金を取つてやらうと思ふたが今日はこらへてやる』で、けりがつき二人は、解放されました。一丁程行つて、同時に、プツと吹き出してしまひました。それから私は一人で目ぼしいカフエー、床屋、本屋その他いろんなところへポスターをはつて貰ふ事を頼みに歩きましたが、それ等の人々は、皆溫い心で、引きうけてくれました。(洋子)



馬が運んだ。東京や横濱へ送られると、運賃と相殺でフイになつてしまう。

其後も幾多か繰返された失敗のあとで、晩年を湯川氏夫妻は長谷氏に引きとられた。八十を越しても硫黄の熱は燃てゐた。小さい机にしがみついたまま、贅澤は身の毒になると、螢火の火鉢に手をかざし、毛布を着て座つてゐた。例により珠算と、細かい字と、硫黄の標本をつくつたり、種々にして手に入れる硫黄の一つまみを燃したり製煉したりして、庭隅に小さな釜をこしらへたりして首をひねつてゐた。その頃は父も閑散な身となつて佃島にすんで土いぢりをしてゐたので、一所に植木いぢりはしてゐたが――たま〳〵粋な容などが來て、海にむかつた室で晝間の一酔に老爺さんもよばれてほろよひになると、とてもよい聲で哥澤の「白酒」を素人にはめづらしい唄ひぶりをした。

もう大人になつてゐた私が吃驚すると、老人の老妻は得意で、

「おぢいさんは、お金を湯水のやうにつかつたいゝきな人ですよ。」

と彼女も小聲で嬉しさうに口の中で何か唄つた。

「おぢいさんには面白いおはなしもございますのさ。私がね、誰かの初のお節句のをり、神田へ買ものにゆきますとね、前の方に、粋な女達にとりまかれて賑かにゆく人がありますのでね、おやおや、何處の大盡かと見ますとね、小つぽけな旦那で、黒ちりめんの羽織で、お刀がチョコンと突つぱつて、その風采のみつともなさつてつたら、あたくしが吹きだしますとね、その人が後を振りむきましたのですよ、どうもあの老爺さんに違ひないのですが、あたくしもよく似た人があるものだと思つて感心いたしましたが……」

クスクスおばあさんは笑つた。その結果がふるつてゐる。

「よくまあ、あんな綺麗な粋な女が惚れたものでございますねえ。」(此項つゞく)



男

深水澄子

彼等は
非常に矜りにみちた姿勢をして
街上といはずビルディングといはず
劇場といはず
あらゆる場所を游泳する。
だが、みんないちやうに
埃まみれな心臟をしてゐるから、
わたし達は始終
不潔な氣體を浴びせられてゐる樣なものだ。

そして彼等が
わたし達に呼びかける言葉は
イミテエション。
なんと揃ひも揃つて



無作法な眸差(めつき)をしてゐることだらう。
わたしは決して
すぐれた娘ではないけれど
そんな男達にしか相當しないほど
無價値な人間でもない筈だ。

五月の様な男はゐないのか。
さまざまな流行や
貴族風の社交法や
混合酒の種類や
アメリカ人の様に女を愉しませる技巧なぞは、
まるつきり知つてなくていゝ。
弾力のこもつた肩と
はれやかな貌(かほ)と
それから聰明な情熱と
たくましい勇氣と
眞實を愛するこゝろと
ふくよかな情操を、
そなへてゐさへしたら。



わたしはどんなにいゝ戀をするだらう。
かしこい健康な愛情を燃燒させて
彼のまはりに
たのしい華を咲かせ、
彼の生活をいつも
日向の樣にあかるくする。
寂寥だの倦怠だの
そんな不幸がふたりのあひだに
しのび込む隙間なんか
絕對に拵えはしない。

しかし
野心と虛僞のほかに何があらうか。
わたしのそんな
はづかしいほどつきなみな願ひさへ、
たいさうむなしい。

取澄まして濶歩しよう。
ほがらかな朗かな獨りだ。



陽かげ白き日にうたへる

古川陽子

ひざまづき
思ふことの多き日
吾心悩む。
母ともならむ日の近く
など哀しませんいとし吾兒を

吾が生める兒を
夫は胸に抱きて口吻くる日の
温きシーンを夢見つゝ
涙する。
あゝ涙する。

新社會相

池邊まさ子

一秘結社「II會」のこと

	職業	年齡
司會者		
岡部　菊子	富裕な未亡人	六三
會員	主人の職業	
小野田里子	會社員	三五
松村　美子	醫師	三三
道川れい子	音樂家	三一
管　道子	會社員	三〇
濱田イツ子	銀行員	二九

「II會」の趣意
IIは愛に通ず。夫婦愛を意味するものとす。夫婦愛の根元はその過半は性的にありと斷定して、我等同志は會の組織に由つて、これが研究をなさんとするものなり。かゝることは、單に夫婦間の問題にあらずして、實に大なる社會問題なれば、公然を憚らずと言へども、便宜上これを祕密結社の名義のもとに置くものとす。
「II會」の組織
○司會者は發起人たる岡部菊子未亡人とす。
○會員の人數に制限なけれど、當分右の五夫人となす。
○毎週一回日を選びて岡部邸に集合すること。
以上

こうした「II會」なるものが、現在郊外一等の住宅地××町の一部に組織されてゐる。司會者の岡部菊子とは、十數年前まで可成活躍してゐた實業家の未亡人で、今は遺產のお蔭で氣樂な隱居の境遇である。また會員の五夫人は、何れも岡部邸の附近に自宅を構へた相當に敎養のある夫人達ばかりだ。

先づ、司會者が華美な實業家の未亡人で、會員は何れも結婚倦怠期にある婦人であり、會の趣意たるや、性的研究にありと聞けば、誰でもその內容は豫想し得ることだ。

然し、この會は文字以上に非常に嚴然たる祕密結社で、右の六名の外には、その存在をさへ知る者はないであらう。

「II會」を組織するに至つた意志を、菊子未亡人に聞けば、

「會とはあまりに大仰らしく聞えますが、內容の性質上その嚴肅を期するため、こうした形式を採りました。會合の時間も工ロチック になる恐れがありますので、白晝に私宅の座敷で、茶菓を喫しながら、眞面目にお話合をいたします。私が、いゝ歲をして、もう女のすべてを卒業した今頃、何故物好きにこんな會を始めたのか、とお疑ひになるやうでしたら、一應辯明さして頂きませう。」

彼女の亡夫は、立志傳中の一人で非常に思慮深い努力家であつたが、女のことゝなると思ひ切り不仕だらで、そのため彼女は若い頃

から人知れぬ苦勞をした。といつて、彼は決して彼女を嫌つてゐたのではなかつた。

「お前の純眞な愛情には衷心から感謝してゐながら、何故彼奴等商賣婦の性的魅力に打ち勝つことが出來ないのだらう。」

と彼はよく言つてゐた。だからと言つて、かの商賣婦の持つ性的魅力――性的技巧――を彼女に要求することの我儘であることを、彼はよく知つてゐた。

兎角社會から我儘を補助されてゐる男といふものは、妻から精神と肉體との兩方面の滿足を要求するもので、若しその何れかが缺陷してゐる時は、遠慮なしに他の女から吸入しやうとするものだ。

圓滿な家庭と、貞淑な奥さんとに守られながらも、浮氣する男の心理はそこにあるらしい。然もその性的魅力なるもの、如何に根强きことぞ。

「で、私は夫の滿されぬ氣持ちを思ふと、そう一概に詰責する勇氣も出なくて、一人で悶え苦しんだものです。」

それが、夫の亡くなつた後彼女は、しんみりと當時のことを追想してゐるうち、始めて自分の大きな失策に氣付いたのだ。

「何故、私は性的技巧を研究しやうとしなかつたのだ。潔癖に、卑しい恥づべき事だとのみ斥けてゐたのだもの。」

今になつて亡夫の我儘を責むるより彼女は、自分の不注意を、取り返しのつかぬその不行屆きをどれだけ悔いた事だらう。こうした辛い人生の一大失策に基因して、この「II會」は組織されたといふ。

然しこうした種類のものは、餘程の理解を持ち合ふ間柄でなければ、輕々しく口外すべきものでない、といふことに、菊子未亡人の並ならぬ苦心の跡が伺へるのだ。何しろ五年間彼女は會員の候補に腐心したそうだ。

一方會員である一婦人の正直な氣持を伺へば、

「單に愛情のみ吸ふて生き得る者は別だけれど、私達都會生活を營む者、殊に毎日外で働く男達には、至るところに誘惑が待ち構へて居る。そして現在の社會制度は公然と男の要求を滿足さすべき機關を備へてあるのですもの。餘程家庭婦人は確かりして、その原因を積極的に除くべきです。性的技巧の研究といつたとて、女が男のよりよき玩具になるやうに努力するのではなく、如何にして牡鹿を飽食さすべきか、といふ美味の献立に過ぎぬのです。」と。

「II會」はそうした料理人等の唯一の研究機關だ。お互ひに忌憚なく實驗談や感想を披瀝して結婚倦怠期を打ち破り、フレッシュな果物の風味を永續させようといふにあるのだそうな。

二　新職業「結婚」

（A）ナヽ子の手記

時代の創作だと、得意になつてゐるマネキンガールとて、人間の商品化ではないか。商品でも木製のお茶盆なれば虫の蝕きつこはないが、精巧な押繪の羽子板ときてゐるので、いくら側でヤキモキ言つたとて、矢張好きな虫は寄つて來る。近頃のやうにお役人の目が多角形に光つては、女給もダンサーも收入の上に大きな打擊を受けやう。といつてお堅いところで黴臭い女教員は月收五六十圓、女事務員なれば三四十圓が普通、これでは下宿代と電車賃を引き去つて、腰紐一つ買へやしない。

然し溢れるほど居る學士様が辨當代で勤めてゐる當今では、女が鼻を並べて歩かうといふのはちと無理らしい。社會の裏面から正札付きの貞操を賣り出す女が多くなつたとて、その女のみ責むる譯にはゆくまい。だが最近どうやら貞操の定義が動いてきたらしい。

トラピストは鈴蘭匂ふ北國の聖地だけにあるのでなく、眞實の貞操を金庫の裡に秘ひ込んで、勇敢にも肉を社會に奉仕する吉原邊にも轉つてゐるのではないかしら。また賣笑婦のなかにかへつて多くの處女が光つてゐるやうな氣もする。

兎も角私は、何物にもこだはらずに職業を探し歩いた。そして步き疲れて銀座裏のカフエーで一杯のコーヒーを啜つてゐると、ポンと私の肩を叩いて、ニキビだらけの鼻をクンと鳴らした者があつた。顔馴染のK青年だ。

「僕は、貴女を一生懸命に戀してゐるのです。ナヽ子さん、僕と結婚して下さいませんか。」

私の職業意識はピンと刎ねた。

「私、迚ても我儘で贅澤屋よ。」

「僕は奴れいのやうな女は嫌ひです。」

「失禮でございますが、貴方のお生活狀態を知らして下さいませんか。」

私は試驗官の樣に、出來るだけ胸を張つた。

「あの、この春卒業たばかりで、まだ國元から仕送りを受けてゐますが、結婚が決まればすぐにでも就職口を探します。」

下士卒のやうに彼は固くなつた。

あゝと私は大きな欠伸をした。野暮な質問をしたものだ。あの浴衣模樣のうつすら浮いた袖裏がどうして見えなかつたのだ。

私の結婚申込控帖の二頁にはS青年とあつた。

年齢　廿七。
淺草田原町の下駄屋の伜。
感じ、　七點
容貌　八點五分

私は六頁目を繰つた時、この邊で我慢しておかうと決心した。

布河は今度の賞勳問題で少々痛い目を見た政商の三男坊だ。

早速電話で呼ぶと、彼は頭の天頂にポマードを取り殘したまゝ慌ててやつて來た。カフエーでカクテルを舐めながら話はすぐ決つた。その夜下宿に歸つて帶を解くと、「おえりでも買つて下さい。」と小さく書いた紙包が落ちたので、裡をあけてみると、十圓紙幣が三枚這入つてゐた。

結婚請願お聞屆の手金か。

結納二千圓には田舍のお母が目を廻して飛んで來るだらう。

何とうまい職業ではないか。社會に氣がねしながら貞操の安賣をしてしまふ女達は頭が惡いのだ。私は、公然と、貞操のせり賣りをしてゐる。その上「結婚」に就職してしまへば、マネキンガールから虛榮だけを拔き、ダンサーの歡樂を抓み出し、蒲鉾型リングの安全地帶を闊歩しやうと言ふのだ。そして貞操の價値が暴落すれば新たに就職するまでだ。

（B）　リエ子の言葉

「全然趣味が異ひます。生きる方向が反對なのですが。私がいゝ詩に陶酔してゐる時、あの人はビルマの地位は北緯一〇度から廿八度と、暗誦してゐます。」

リエ子の夫は中學校の地理教師であつた。

「薄野呂よ。牛のやうな感じ、牛とはよく言つたわ。また牛のやうに忠實よ。子供の面倒なんか私よりよつぽど氣がつくのですもの。その點だけは感謝するけど。」

リエ子は卅で廿五の青年と戀に陷ちた。青年は女が全部を與へないのを物足りなく思つたが、リエ子はあの人と同棲してゐる以上、青年を不純にしたくないと思つた。

もうあと二年すれば青年は専門學校を卒業するし、卒業さへすれば安全な就職口が待つてゐる筈だ。

「今更あの人と別れて職業婦人になるのは臆劫です、いえ縦令なつたといつても、二人の子供までは養つてはゆけませんからね。それよりも、こうして貞操さへあの人に預けておけば、大威張りで生活出來るのです、あの人はパトロン兼下僕で、私は涼しい顔して暮らせるのですもの、この世智辛い世のなかにこんないゝ職業はちよつと見當らないことよ。あと二年間私は安全な「結婚」の職業婦人に満足してゐる心組よ。」

九州の片田舍にも、こうした職業婦人が居た。たゞそれと、意識しないまでゞ職業結婚を餘儀なくされてゐる婦人が今の社會にないとは言へない。

醉語蹣跚

小島きよ

この夏は暑氣はらひてんで、二三日つゞけて燒酎を呑んだ――めいもくだけは世間ていがいゝが、實は御あしの方の都合でやむなくだ。從つて肴の方も安くうまい冷やつこかなんかで。

燒酎と豆腐は食ひあはせだとは聞いてはゐるが、なあにと性來の無頓着からかまはずやつた。まさか豆腐の故でもあるまいが、そのあとで吐いたり下したりのひどい目にあつて――なあに、丁度胃の弱つてゐたところへ燒酎を呑みすぎたからだ、と負け惜みを云ひ乍らも、用心の爲けふは一日絕食した。

夕刻になつた。豆腐やのラッパを聞くと、やつぱり一杯やりたくなる。すき腹で天井板を眺めてゐると、いぢきたない想ひがそれと湧いてくる。

丁度つき加減の茄子ときうりのお新香、枝豆、それだけでよい、酒も千福あたりでがまん――どころか日本酒であるだけでも結構。一杯やりたいな、酌はたぼ――こちらが女だから、酌はまぶとでも云をふか――など贅澤は云はない、呑み相手なんかなくとも手酌で結構。

去年は、今頃丁度鄕里の父親のとこで居候つてゐたが、でも每晩、母親のおつき合ひで、――私の家では父親は甘黨で母親が左利きだ。母親は每晩二合近くの晩酌をやる、父親はおつき合ひでちよくに四五杯、でまつかになつてゐる――私もお情けのおしきせと云ふやつできまりが一本、でも母親の目をごまかしながら、ちび〳〵每晩やつてゐた。枝豆は每晩おきまりだし、私の好きな、たこ、蟹――尤もこれは多のものだが、でも大好物だから夏でもうまい。――たまには、鮎の甕やき、鰻、水貝、あらひ、ぐらひは食はしてくれた。

酒は勿論日本酒、灘の生一本に限る。白鷹、褒紋、菊正、とくれば申し分ない、が私の鄕里の酒も惡くはない。廣島だ。加茂鶴、千福など、東京へくれば二三流どこだがわるくはない。加茂鶴はこつてり重く甘口で素人むきの酒だ。ほんとの酒呑みにはあまりむかないかと思ふ。大阪へ行くと白鶴と云ふ酒がばかに評判がよい。數年前、汽車の食堂で始めて白鶴と稱する不味いのを呑まされて、――多ぶんにせものだつたのだらうが、――以來、白鶴と云ふ酒に好感を持たない。

酒仙牧水の和歌にもあるやう、酒は靜かにたのしむ酒が一等よい。雨につけ雪につけ、月に花に酒はたのしい。靜夜、香をたいて獨りたのしむ、などと云ふ幽しい享樂は自分達のやうな貧乏人にはとても味はへないことだが、獨居の雨の夜など、雨の音をきき乍ら獨り酒くむ靜かな氣持などほぼそれに近い境地

だらうと思ふ。

　心の合つた友人達と、酒くみ乍ら、想ひを談り人生を論じ、毒舌をたゝかはすなどもまた面白い。時には高唱舞踏もまた愉快だ。しかし、呑む程に酔ふほどに前後を忘れ量を越え亂に及んでは、――トラになつちや、ハヤハヤ外道と申すより外ない。が、とかく酒呑みは意地汚なくあとをひき、はしごをやり勇敢にトラになつたが最後、翌朝は青菜に鹽、穴あらば這入りたく消えも失せたい程、あはれびんぜんな格好となる。

　妙齢な？　女の子のくせに、どんなとこへでもどん／＼這入つて酒を呑むので、――尤も近頃流行のカフエは厭、――ずいぶん癪にさはることやお可笑しいことやばかばかしいことにしばしば出逢ふ。その一つ二つを。

　三四年前の話。加六の菊正が呑みたい、加六の菊正が呑みたい、と、やに辻潤が加六の宣傳をするので、どんなうちかと物ずきに一人で出かけて見た。銀座三丁目邊の細い露路の奥にある小さな高級縄のれんとでも云ふやうなうちだ。尤も、その頃の東京市長だつた西久保と云ふ人やその他それに類したエライ人達が定連でエライ、ブルヂョア對手のうちだと後できいたが、とにかくその時私は一人で勇敢に這入つて行つたら、そこの主婦さんらしい人が私のことを不審相にジロ／＼眺める。『酒を呑まして下さい』と云つたら、『今日はおやすみです』だつて、すぐ眼の前に二三人の高級サラリーマン型の洋服紳士が腰かけて呑んでゐるぢやないか、莫迦にしてやがらア、多少でも下地がはいつてゐれば何とか文句も云へたのだが、相憎その時シラフだつたので、不覺にもすご／＼引きさがつた。

　それから一二週間後、呑んべの玉生君に逢つたら、

『二三日前、宮島君と一緒に加六へ行つたらおかみさんが、五六日前に變な女の人が一人で酒を呑みにきた、と笑つてゐたが、君ぢやない？　どうもあんな所へ女が一人で酒呑みにくるなんて君以外にあるまい、たぶん君だらうつて話してゐたんだが、やつぱり君だつたんだね、――惡いことはできないね、』

　玉生君はにや／＼笑つた。

　一昨年の夏のこと。少々きこしめしてゐた私は神樂坂を歩いてゐた。東京で、ほんとに純粋なうまい泡盛を呑ます、岡バーと云ふうちが飯田橋ぎはの江戸川べりにあると聞いてゐたので、酔つた勢ひでフラ／＼とそのうちへ行つて見る氣になつた。

　堂々とたくましい絆纏着の人達が、狭い酒場に充滿だつた。『いらつしやい』と云ふかけ聲で引くに引かれず、断髪洋装の私は片隅にやつと腰をかけた。――變に場ちがひな格好をしてゐるから刑事でもつくかも知れない。とイヤな豫感がした。

　少々きざなせりふかも知れないが、――おゝ親愛なる我が兄弟たちよ、と云ふ氣持で、私は愛すべきはつらつたる絆纏着の同志達に愛情こめた好意を送つたつもりだつた。ところがわが兄弟諸君は、このモガまがひの妙ちきりんな私に、異端、敵意の瞳を投げつけた。少々たじ／＼の態で小さな泡盛を一杯乾すと早々逃げだした。

　と、背後から、『大分お好きのやうですね』と聲をかけた奴がある。てつきり私服だな、と見ると、確か岡バーの片隅に見た背廣の男だ。最初の豫感があるので私はこの男を悉皆刑事にして了つて敵意を持つて對手を見た。

『女だてらに、好きなものですから何處へでも這入るんですよ』私は洒々として云つてやつた。男はしばらく私の様子を窺つてゐたが變に間の抜けた調子で、『實は、私の家内も好きでしてね、……どうです。その邊で一杯やりませんか』――私の家内も酒が好きでしてね、だつて、随分へマな刑事だね、『今日は島渡急ざますから、……私、小島きよつてものです。御不審だつたら××署できいて下さい、××署ではよく知つてゐますから、』高びしやに出てやつた。

　こちらが名を名のつたもので、

『ええ、僕もこう云ふもので……』男は名刺入れを出して、どれにしやうかとまごまごと迷つてゐた。まさか刑事の肩書の名刺も出せまい。やがて渡された名刺を見て私は苦笑せずにはゐられなかつた。何と思つたかこの男ローマ字ずりのを私にくれた。そして、僕の家内も酒が好きで、……とまたブツブツ繰り返し乍ら神樂坂の方へ消えて行つた。この男に名刺を貰つた處は丁度神樂坂署の前だつた。

何の場合にでもだが、酒の場合にも亦、女であるが爲に損——精神的に——をすることが多い。前記の樣な目に度々逢つてきた。が、今では隨分場かずを踏んできた故か、大ていの處で平然と落ちついて呑めるやうになつてきた。

ほんとの酒呑みはカフエでは呑まない。氣の利いたおでんや、縄のれん、小料理屋。それにもまたぴんからきり迄ある。高級なところでは、日本橋のなだや、酒仙、銀座の青柳新橋のあらせ、江戸銀、有樂町の富可川、本郷の百萬石、神樂坂の赤びようたん、淺草の丸留、ぐつと落ちてなかや。自分達のやうな貧乏人には淺草がいい。神谷、やまに、三友野口、どぜうや、その他澤山、勿論ここでは酒をたのしむなんて酒落れたまね はできない、たゞ安直に醉をかふだけ。

私が近頃ちよい〳〵行く氣の利いた酒場を一軒紹介する。四谷見附の近所、角店で長野屋と云ふうち、一方が酒屋で一方が酒場になつてゐる。酒は安價で相當なものを呑ませる肴もやすい。客種も靜かだ。十八九の桃われの娘が二三人居るが美人で淸潔で品がよい。決して客の傍へなどべたつかない。左黨のかた、近所へいらしたら一度寄つて御らんなさい。

と、醉語蹣跚でなく空腹でひよろ〳〵と冗らないことを書き並べてゐたら、緑い顔をして友人が訪ねてきた。月給日だと云ふ。ぢや、長野屋へでも、と筆を擱くことにする。

蝸牛角上爭何事　石火光中寄此身
隨富隨貧且歡樂　不開口笑是癡人

（伯樂天）

生きる

——農村挿話の一——

山本有子

その頃この村には帽子工場が出來るうわさで持ち切りだつた。町はづれのこのA村は半農半勞働者でいつぱいだつた。霖の繭が長雨でくさつて麥稈眞田が戰爭で下つて、その日その日の米代にさへ困ることが多かつた。

清子の父もある日青い顔をして歸つて來た。それは「生」といひ得る感じから遠いものだつた。右手は高く肩口につられて、ぐでんぐでんに醉つぱらつた胴巻には幾らかの銅貨と、手にクワイコ狀が振りまわされてゐた。

「とうとう切りあがつた。善美への送金も駄目だなあ」

薄暗い電燈のもとで、ヒヘイし切つた妻の足だ。赤土色の光澤を失つた頭髪が明日の米代を恐迫して居る。

「もう仕方はネエワナ、清子でも學校を下して帽子會社で女工を募集しとるけん、あそこへでも行かせるぢあ」

トウキビのやうにやせた父の、指のない左手がだまつて妻を打つた。亂醉でトロケた瞳に右手のキズの血がにじんだ。

妻はだまつて夫を見た。まるで思想にチッソクした豚の魯鈍さを持つて、赤茶けた髪がうるさく額に垂れるのを無感動な表情で拂ひのけて古籠のつくろひの手をやめなかつた。

「善美の授業料は來月か。困つたもんだナア五十圓もの大金は出來る筈がネエワ、俺のクビキリ代全部でも足らんワナア」

ベルトに喰はれた小指代がたつた、三十圓だつた。

「小指だから後の仕事に差しつかえる事もないだらう。工場の方はよして百姓でもする方がお前のためだぞ」

いかめしい髯をはやした理事の精一ぱいの同情の言葉と、三十圓の小指代と、クワイコ狀だつた。

「仕方はネエ醬油屋の旦那に賴んで見やう。」

貧しい蚊とり線香の煙りが長い間トラホームで眞赤に爛れた妻の目を涙で充滿させた。

「さうしやうか」

妻の赤茶けた顔が水引の麗々しい慰籍料の文字を凝視した。アイロンでのした様なうすい三枚の紙幣に、理事の精一杯の同情をかんじた。明日の米代だけは出來た。

この村の中央に八千代帽子工場の赤い屋根がかたむいた。農家と自由勞働者の百間長屋を、威迫してゐた毎朝數百人の少女工が流れ歩いた。帽子工場の設立はこの村に大きな救濟だつた。自由勞働者に甦生の喜びをもたらして來た。

小學校に通つてゐる女兒はみんなカバンをすてゝ工場に通ひはじめた。清子も安ポプリンの簡單服で通ひはじめた。

——東京行進曲——や——紅屋の娘——てう凋落小唄——を覺えた。しかし彼女の青白い額に頭痛膏がはられて、髪の毛は色を失つて行つた。彼女の食慾の減退と憔悴は母の腹部の隆起に反比例して行つた。

「母ちやんけふは仕事を休ませてな、からだがだるいケンナ」

「横着もんが……」

小指を失つた畸形的な手がつゞけさまに彼女の頰を打つた。空虛な音をたてゝ、土間にたほれた。彼女はどす黒い血をはいた。

「馬鹿野郎！ 何をグズグズしとる。早う行かんか」

追撃してくる父の毆打を忍んで默つて工場に行つた。輕い力のない咳が續けさまに出た。

「淸ちやんあんたの姉さんは何をしよる？」

「學校へ行きよる」

「お目出度いのは家のもんばかり、一生懸命にもうけた金を社會主義者に送つて、のんきなもんやな」

——社會主義者の妹——

「きやうていなあ（恐ろしい意）」

（「あげいな者に物を言ふのもきやうてい[illegible]

晝食の時給仕が彼女を呼んだ。事務所には物々しい警官が居た。職業的なたくましい瞳が清子の全部に注がれた。

「お前が秋丸善美子の妹か？」

「はい」

恐怖と壓迫に引き歪んだオドヲドした答えだつた。清子の手には一ヶ月前父にあたえられたと同様なものが與えられた。「社會主義者の妹は會社に置けぬ」蔓のやうな感じのする社長の言葉に重い壓迫と屈辱と反逆を感じた。つゞけさまに出るかるいセキに道がデコボコに見えて、歩くのが苦痛だつた。

すゝけた五燭のもとで困り切つた親子三人はだまつてうづくまつてゐた。誰も一言もきかなかつた。一寸でも物を言つたら涙にブッさけそうな氣がした。小さい弟達は臺所でボテトの取り合ひをしてゐた。

「馬鹿ッ！　三つ公」

父の毆打にお中が破れさうな聲でないた。

「そら又はじまつたぞ」近所の哄笑の聲を細い背に感じながら胸の苦しさを默つて堪えてゐる清子だつた。

K市の場末に福進樓といふ支那料理亭があつた。沈滯した汗ダクの中に青黒い汚れた支那人のコックが赤い唇に無氣味なうす笑ひをうかべて衰退した支那民族と底弱なコムミニストを思はせた。

「女給にでもなつて、姉さんだけは卒業させ度い」

そんな可愛いゝ決心から、清子は福進樓に給仕女として雇はれた。眉のひき方をおぼえた彼女は、ますます焦悴して行つた。その夜の新聞には共產主義者の檢擧が麗々しく報道された。社會改造を夢見る馬鹿者達を、冷笑する新聞記者の才筆は、良民達に極端なアヂテイションを結果した。

その頃から清子の下に無產者新聞やパンフレットが送られるやうになつた。彼女はむづかしい理屈は分らなかつた。けれども新らしい言葉や力強い勞働者達の繪は、切實な眞迫力と新らしい魅力をもつて彼女の魂をしびれさせた。時にくる四五人連れの髮を長くしたするどい眼の勞働者達の話から、豚小屋への憧憬にグロテスクな幻想を作つて一人樂しんだりした。

鄕里に歸つた姉の力で八千代帽子工場にストライキが起つたことも新聞に報道された。清子は默つてパンフレットを讀むことに幸福を感じた。次第に疲れてゆく體に唯一の慰藉は新聞とパンフレットになつて行く事を、强く意識した。（一九二九・九・六）

面會に行く

野田山れい

何時もよりズッと早く起きた。今日こそいよいよ面會が出來る。私はやつと手にする事の出來た面會許可證をもう一度展げてみた。
「本當に單なる友人關係だと云ふんだね？」
「えゝたしかにさうなんです。」
「そして君の所にゐるやうになつたのは何時ごろからだつたかね？」
「二月の初め頃からでした。」
「うそは云ふまいね？」
　さぐるやうな目で私の胸のあたりをヂロヂロながめる。
　こんなこと云つていゝのだろうか？。差つかへはないか知ら？　胸がどきんとして呼吸がつかへた。あいまゐな言ひまはしで、色んな事をつゝいてみた揚句、恩に着せがましい言葉をつけ足してやつと許可された面會許可證なのである。私は懐ろへ大切にさし入れた。大久保驛で待ち合せた〇さんと二人で途を急いで行つた。〇さんは昨年の三月十五日事件で入獄した夫君に面會にゆくのであつた。
　門のところに番人が立つてゐる。そこで案内を乞ひ、要件をのべると番號の札を渡される。私の札は六十一番だつた。左右に途が分れてゐる。左は差入れの方だ。差入れのことは何べんも來て知つてゐる。右の方へ曲つてズッと奥の方へ行つたところに、面會證を差出すところがある。こゝでまた被告との關係要求の點などについて念をおされた。
　控室には種々な犯罪の面會人がゐた。目を泣きはらした不仕合せな人妻もあれば、不孝な息子を持つた母親もゐた。
　こゝこそあらゆる人間の不仕合せのより合つてゐる所だ。向ふの隅に、洗ひざらしの浴衣を着た若い女が、少しも顔を上げずに泣いてゐる。衿の白粉がねずみ色にはげてゐる。
　赤ん坊を抱いた若い洋装の女が、面會室の方から歩いて來る。近づいてみると、三、一五事件でやられた△さんの細君だ。まだやつと十九で二ッの子供のお母さんだ。
　女學生のやうに若くみえる。
「どうでした？」
「えゝ、とても元氣なんですよ。だけと私がこんなカッコーをしてゐるものですから、何だか變なかほをして……。」
　やつぱり中にゐる人達は外にのこしてある妻の生活狀態が氣になるのだろう。
「失敗しましたわ、私洋装なんかして……氣がつかなかつたんですもの。」
　△さんはきまり惡さうにスカートのあたりをながめた。抱かれてゐるこの赤ん坊は、その父が入獄後に生まれたのであつた。この赤ん坊は父の姿を生まれ落ちるからガラス窓の向ふに、アミガサをかぶつた、しかも顔だけの姿でしか見たことが無かつた。
　そして、それはちようど寫眞を見るやうに位置も姿も一ぺんも變らないのであつた。
　異様なこの父親の姿の前に二ッの赤ん坊はなつかしい手をさし出さうとはしなかつた。
　母親の胸にかほをうづめて、何時までもけゞんな顔をして、面會室の方ばかりながめてゐるのであつた。
△さんと私は顔を見合せたまゝ言葉が無かつた。そして私の番は仲々來なかつた。
　私にはその日が初めての面會であつた。私の面會しようと云ふ×さんは私達五人の同居人の一人であつた。
　四月十六日の朝（それはあとで五時ごろだと分つた。）私達の玄關の戸がドン〳〵と、はげしくたゝかれた。何事であろうかと半分ほど目が明いた時には、はや五六人のスパイが枕元でどなつてゐた。その日は相憎く裏の錠を忘れてゐたのだ。
「檢束だ。總檢だッ……皆んな起きろ！」
　何事だ、一たい？。私達は直ぐ起き上る氣にもなれず、しぶしぶしてゐた。
「文句云ふとこれだぞ。」驚いたことに、彼等はピストルを持つてゐて、チラリチラリ見せびらかしながら聲を大きくした。私達は目をこすりこすり仕方なく起き上つた。
　お互に誰もしやべらなかつた。皆んなどうにでもしやがれと云ふ様な顔つきをしてゐた

た。どの店も閉まつてゐて、街燈が黄色く浮いてゐた。スウーと寒さをかんじた。私は衿巻きをかき合はせた。

×さんだけは、ナワで縛られて、右と左とに二人づゝスパイがついてゐてはなれなかつた。先頭に連れられてゆくその×さんの横がほは流石に青白くみえて居た。向ふへ着くと私達は一人一人別に留置場へ入れられた。皆んないろいろ檢べられたが、翌日歸された。しかしこの×さんだけは何日經つても歸つて來なかつた。そして、とうとうこの市ヶ谷へ廻つてしまつた。

それを知つた時私達は「さうだつたかな」と力のぬけた氣がした。間もなく×さんから手紙が來た。重に差入れのこと、そして面會に來て異れといふことが書かれてあつた。それには女の方が都合がよさゝうだから君にたのむと特に私に宛てゝ書かれてあつた。

中に入つてゐることの不自由さを思ふと、差入れのことや面會にゆくこと位にはこと缺かせてはならないと思つた。

私は早速、差入れ願と面會願との書き方を作つて、部屋の壁に貼りつけた。

そして直ぐにもゆきたいと思ひ、またゆけると思つてゐたけれど事實はなかなかさうはゆかなかつた。

面會願

收容者 ××××

右ノ者ニ差入レ其他ノ用件ニツキ至急面會致度候間此ノ段御願申上候也

面會人 住所氏名 印

秋山豫審判事殿

面會要項

一、

二、

三、

差入願

被告 ××××

右ノ者ニ左ノ物品差入レ下サレ度願上候

月 日

差入者 住所氏名 印

市ヶ谷刑務所長殿

差入物品々

一、

二、

三、

何と云つても、金の入る見込み無しに、四五人が、何しても食べなければならず、裸でゐるわけにもゆかず、それが丁度時候の移り目だつたので、衣更へと云ふ程でなくとも、ともかく多の着物を着つゞけるわけにもゆかなかつた。

カウリを逆さにしてシャツだけで我慢する者もゐるし、ねまきであつたのをのりつけして、やつと割當てることが出來たと云ふやうな狀態なので、皆んな氣になりながら思ふだけの半分も、四半分も叶へられなかつた。

×さんからは、ひつかけひつかけ手紙が來た。私はその度に、せめて三錢で叶へる手紙の中に、差入れにも面會にもゆけずにゐることの申譯を、その謝罪の氣持ちを、文字に書かれる言葉の百倍もの氣持ちでしたゝめた。「御申越の本ときもの二三日中にはかならず差入れます。面會にも近日中かならずまゐります。何時もおくれてすみませぬ。」

私はいつも知らず知らず同じことを重ね書きした。

面會と云つても、裁判所まで行つて面會許可の手續きを經なければならず、そして、それが裁判所と市ヶ谷との時間の制限が同刻なので一日ですますことは出來ない。何しても二日かゝらなければならないのだ。二日かゝる時間のことはどうかなるとしてもその交通

費がつくれなかつた。

それに此方へ來てから間もないわたしには、日比谷公園の中にある裁判所と云ふのが何か分り難い所に思へて仕方がなかつた。勿論皆に聞いてもみたし、分るやうに敎へてもくれたのだが、皆んなも忙しい仕事を持つてゐるので、話半ばにしてその儘になつてしまつたりして、今日まで延びてゐたのだつた。

「六十一番、野田山さん……」

私は立ち上つて出かけた。面會室から五六間ばかりはなれた所に十分ほど待たされる。すると大きな女の人の聲がきこえて來た。

あんな大きな聲でなければ通じないのか知ら。あんな聲が出せるだらうか？　私は胸がわく／＼して來た。

まもなく大きな聲が止まつた。出て來たのはやはり、三、一五事件でやられた□さんの奥さんだ。晴々としてニコニコ笑つてゐる。

「うまいことしましたわ。向ふの奴があなたと私を呼びちがえたんですよ。中途で看守が氣づいてね、何だ彼だと云つたんですけどとう／＼がんばつて思ふだけしやべつちやつたのよフフ……痛快だわ……。」

看守の方で私と□さんの奥さんとを呼びちがえたのだつた。そのために私の會はうとする×さんは思いもかけぬ同志の細君と會へたわけだし、□さんの細君は夫君とそしてもう一人の同志の×さんとに會へたことになるのであつた。

「さう、それはうまいことをしましたわね。」

私は言葉の終らぬ前に面會室の方へ走つてゐた。敷居をまたいでも頭が上らなかつた。

「やあ。」

聞き慣れた×さんの聲。

私ははじかれたやうに頭を上げた。

ガラス窓の向ふにアミガサをかぶつた×さんの顔が笑つてゐる。こゝは三間四方程の、天上の低いトタン屋根の、バラックみたいな建物だ。

午前十時と云ふに普通の部屋のやうにパッと明るくない。

向ふの方へ廊下が通じてゐる。看守がノートを持つて立つてゐる。

この間差入れた單衣を着てゐる。衿の所がきちんとかき合はされてゐるのが目立つ。ながい間陽の目を見ないためか、前より顔色が白くなつたやうだ。

私は口がこはばつたやうで聲が出ない。

「皆んな丈夫でゐますか？。」

私は私から言はうとしてゐた言葉を先に取られてしまつた。さうすると×さんの元氣さうな言葉で私に力がついた。

「ハイ皆んな丈夫で折角やつてゐます。あなたはどうですか？　金はありますか？。」

私は一時(いつとき)に言葉をつゞけた。

「元氣過ぎるほど達者だ、金はあるとも……あり過ぎて、そつちへ送らうと思つてゐた所だよ。今日來てくれるとは思はなかつた。」

如何にもうれしさうに×さんは笑いを大きくした。

「しかしこゝへ來ると云つても時間や電車賃が大變だらう、無理に來なくてもいゝよ、實際大變だからなあ！。」

おゝ、何をおつしやるのでせう、あなたは！

私は返す言葉が出なくて泪がこみ上げて、來た。×さんは少しも笑を消さうとしない。

×さんはきつと私達外の者に心配をさせないやうに意識して笑つてゐるのだらう。

さう思つて私も笑つてゐた。

看守は×さんと私のかほをかはるがはる見ながらペンを動かしてゐる。

話はと絶へ勝ちだ。私達はたくさんしやべる言葉がない。私達は無言の中に、こゝろを通はせる外にどうも出來ない。さうして時間がたつて行く。

やがて看守が手をあげて、許されたものをひきちぎつてしまつた。

私達はサヨナラをした。

×さんはもう二人の監視につれられ、アミガサ姿の脊中を向けて奥の方へ消えて行つた。一九二九、八、一。

何故生れた

島あやめ

黴毒性の骨膜炎と云ふ、全身の骨と云ふ骨がうづく惡性極まる病氣を、私は勞働者の父親から受け繼いで生れてゐた。

私のからだにその徵候が現れたのは、私が三池炭坑のすり鉢のやうな勞働者街のその底に下積みになつて田虫が膿んだやうにバラックの林立してゐるなやで、一人前の働き手として、選炭機部に通つてゐた十六のときなのだつた。

「モルヒネが一番よかばい」

父親は、何處からか藥を手に入れてきては、私に服ませた。

「ほんにおぬしにはすまんばつてん、ゆるして貰うより仕樣がなか」

父親は、酒を呑んだときは定まつてさう云つて泣くのだつた。

「運命と諦めとるけん」

私は父親を宥めた。

十八の秋、金受の日に、今から思へば世の中で一番愛してくれた父親と別れて京阪地方に旅立つたのだつた。

「二年間丈、巡禮をすると罪が消へて乾度治るげなけん」

父親は、イナリさんのおつげを信賴して私を手離したのだらうか。

新聞勞働爭議は惡戰苦鬪した。幹部と云ふ幹部は殆んど捕らはれた。

「裏切者が又三名出た！」

「秘密本部があぶないから……に移動だ！」

「爭議團員に就ても油斷してはならぬ、スパイがゐるか分らないぞ！」

「今朝からまだ、みんなに飯を喰はせてないんだ、米も金も無くなつた！」

こうした、秘密本部と爭議團との傳令の役が陳さんと私との役だつた。

この仕事は一番多忙だつた。全くのところ肺患の陳さんにとつても、私にとつても一日つ中をかけ徊つてゐねばならぬこの仕事は重荷すぎた。

遂に陳さんは爭議團で咯血してしまつた。そして誰からか、私の病氣も合せて、みんなに發表された。

「あの女はモヒ患者なのだ、藥がきれると氣狂ひの樣になつて病氣が發作するんだとさ」

「氣持の惡い奴等ぢやねえか！」

「俺なんか、あんなになつたら死んぢまつた方がいゝや」

こうして、嘲笑のまなざしは私等を取り卷くやうになつていつた。

不治の惡疫を持つ者が、何だからつて生き

てなんかゐたいものか。私だつて、これ迄何遍自殺を企てたか分らないんだ、だがその都度、何かに邪魔だてられては生き上るのであつたのだ！。

一體、私等に生きてゐると言ふことが死んで終ふことと、どれ丈の違ひでよいのだ!?

いつだつて！、いつだつて死にたくつてならないんだ！。

Hさんの親友だといつて、夜おそく不意に陳さんを訪ねた青年。

「××署から、出したH君の手紙は旅行してゐましたので今先見たのですよ、それで飛んでやつてきました。」

青年はさう云つて初對面の挨拶をした。

一つの布團に寢てゐる私は、寢た儘で一寸頭を下げた。

「大變、H君が君のことを心配してをりますよ」

Hさんと云ふのは陳さんの先輩なのだつた。

陳さんとHさんとの關係は、陳さんがまだ朝鮮にゐて沖仲仕の下まはりをしてゐたのを可哀相に思つたHさんが、同道して一緒に內地に連れてきたのに始まつてゐた。

そして陳さんはこのHさんに助けて貰つて中學を三年まですましてゐた。

Hさんは、自由勞働をして食つてゐる社會主義者だつた。

新聞勞働爭議にもHさんは中心になつて働いた。そしていま、××署に檢束されてゐるのだつた。

このHさんにとつて、陳さんは世の中で一番可愛い人なのであつた、だから陳さんの肺病を世の中で一番心配してゐるのはこのHさん丈なのだつた。

Hさんが廿九歲で、陳さんは廿一歲なのであつた。

「僕の家は大津の驛から東に眞直ぐに三丁程行けばいゝのです、すぐに判りますから、明日からいらつしやい」

「本當に明日からおいでなさいよ、僕、ちやんとしときますから」

「ね、君！、さうなさいね、明日から」

「でもよいでせうか!?　病氣が病氣なのですからね!?」

陳さんは氣兼ねに訊ねた。

「いゝですとも！、いゝですとも！、肺病なんて僕あ何とも思つてやしませんよ」

「難有う！」

やせこけた陳さんの手は思はず青年の膝の上に差しのべられた。

それから三日目の夜十二時近くに陳さんと私は大津驛に着いた。

陳さんはあんなに歡待されてゐるのだからよいとして、流石に私は陳さんについて、青年の家に厄介に行くのだと思へば、誰一人として私を世話してくれる人のない丈に何となしに卑下を感ずるのだつた。

と云つて、其では自分で何とかする丈の元氣も見込もありはしないのだ。

少くとも續けて一時間くらゐは、さつさと歩けるのでなくては、孤り喰べる仕事だつて出來はしないのだもの。

廿日間あまりの爭議團での、過度の勞働がひたをしに病氣をひどくさせたのだ、そしていまの私は、誰かにしがみついてゐなきや仕樣がないではないか！

「今夜は驛前の旅館で寢ないこと？」

あの夜、青年から陳さんは拾圓を貰つた、勿論、電車賃、二人分の藥、と消費してゐるにしてもまだある筈だ。私はそう思ふと甘へずにゐられなかつた。

「そうしてもよいです」

「すみませんけど」

「面倒だから夫婦つてことにして、とまりませうね、その方が無難でいゝですから」

私は歩き乍ら云つた。

「おまかせします、宜しく」

陳さんはかすかに笑つた。

私達は、一番汚さうな家を選つて這入つた。時間が時間なので、女中はすぐに寢床をとつた。
　やど帳には、住所も姓名も年齢もでまかせに、とにかく夫婦らしく書きつけた、で、勿論、寢床は一つつきりだ。
　年齢なんか、本當は陳さんが廿一で私が廿五歳なのだが、妻の方が齢上では不自然だと思つてさかしまにした。

　布團の魅力は私を有頂天にした。
陳さんは、ズボンをたゝんだり、熱を檢つたり、京都から買つてきた粉藥を服んだり、するのだつたが、私は先づ先づ布團の上に四ッン這した。
　布團のにほい！。
枕のにほい！。
布團のにほい！。
　々々々々々！。
枕のにほい！。
　々々々々々！。
私は、づきつ〳〵とうづく、身體のことも打ち忘れて、思ひつきり布團にだきついた。
「ね、陳さん、思ひつきり今夜は眠りませうね！　うんと、うんと、腹一ぱい！」
私の心臟はこの頃にない喜びに波うつた。
　陳さんが買つてくれたモルヒネ散はあるし、それでこの布團の上で眠れるのだ私は嬉しい！。
　でも、陳さんは苦しさうだつた。頻りに勢のぬけたせきをするのであつた。
「陳さんは苦しい？」
「何だか、喉のところがむづ〳〵するんですよ、又、血を咯くのでせう」
陣さんは、風呂敷包から、食鹽とチリガミとを取り出した。
　食鹽は咯血した後で、鹽水にして呑むのだし、チリガミは咯いた血を拭く爲なのだ。
　そして陳さんは、靜かにからだを横たへた。
「貴女は今夜大變良いやうですね」
「え！、藥はあるし、布團の上に寢られるし今夜は、さわ〳〵してゐるのよ。でも、あんたが惡かつたら、何時でもおこしてね、脊中をなでるわよ」
　だが、私たちは、私がそう云つて藥を服むべく起き上つた瞬間に於て、根こそぎ、このよろこびの凡てをひつたくられたのである。
　旅館には附物の臨檢にあつたのだ。
宿帳を持つて這入つてきた二人の警官は、住所姓名年齢を再び訊問するのだつた。
　然し、でまかせに書いたのだつた私には、不意打ちに訊ねられても、書いた儘の事がさつさと口に出ない、私はまごついてしまつた
　彼奴等がそれを見破らない筈はなかつた。
「馬鹿ッ！」
「夫婦ではあるまいがッ！、おまけに僞名で投宿しやがつたんだろッ！、嘘をぬかすと爲にならぬぞッ！」
私は頭つからどなりつけられた。
「どうせ、きさまらは、大阪か京都あたりから？　駈落して來やがつたくらゐのことだらう、さうぢやろがッ！」
「いゝえ！、決してさうぢやありません。私たちはたゞのお友達なのです。僞名にしましたのも決して惡いことがあつての仕業ではないのです。これから屹度、こんなことは致しませんからこんど丈おゆるし下さいませんか、お願ひでございます」
だが、彼奴等は聞きつけなかつた。
「何が友達ぢやと、一つの布團の中に寢やがつてをいて！」
「携帶品を持つて、二人とも警察に行くんぢやい」
と、陳さんに云つた。
「勝手に、てめえらが持つて行け！」
「きさまもぢやッ！」と、私に。
「その人は病氣で歩けないんだ、俺丈行けば用は足りるぢやないか」
「默れッ！」
陳さんの言葉扱ひが亂棒だからなのか、彼奴

等の一人は、私の髪の毛を摑んで、からだを立ち上げた。

「何と云ふことをしやがるッ！」

陳さんは、さう云つて、いきなり手首に咬みついた。

噛み裂いちやつたのだ。

このまゝすませる筈はなかつた。

陳さんの顔は、むくれ上つて、眼を血走るまで、なぐり飛ばされた。

そして、宿屋の若衆にまでひどく取り扱はれ、警察に連れて行かれた。

そして、青二才の留置場××の××に、亦しても陳さんはぶたれた。

そして、私等は別々に、芋俵のやうに箱の中にけりこまれた。

陳さんは、ブタ箱の中に這入るとすぐ、又多量の血を咯いた。

隣房に在てそれを見ても、噫！　私はどうして上げることも出來はしない！。

「苦しい？。堪忍してね！　私が悪かつたわ！。私が悪かつたのだわ！。」

陳さんは半死のやうになつて、どす黒い多量の血の中に、顔をぶちつけてゐるのだつた。

「僕を殺すと云ふのか！、

僕の血液の一滴までも、肺病菌に呑ませると云ふのか！

殺せ！

呑ませろ！」

陳さんは、かなきり聲で、悲痛な囈言を云ひつゞくるのだつた。

「騒しいやい！」

××が入口のところまできては、どなりつけていくのだつた。

翌朝、かけつけてきたHさんの友人の青年は、陳さんのこの有様を見て、倒れんばかりに打ち驚いた。

同じやうに、陳さんの容態に狼へてゐる×長は、青年に對つて、ひたあやまりに頭を下げて詫びた。

何故、頭を下げるんだい！　何故か？　何故か？、知つてゐらあ！。

「斷じてこの儘ではすまさないぞ！、この儘で引き退ると思ふのか！」

青年は、斷呼としてゆづらなかつた。

「僕をぶち殺すと云ふのか！

僕の血液の一滴までも、肺病菌に呑ませると云ふのか！

殺してみろ！

呑ましてみろ！」

青年の家に運ばれて、一室に寢かされても、陳さんは悲痛な囈言をくり返しつゞけた。



長流記（その十五）

山田邦子

お慶さんと佐千子とのながい間の友情がわれて行つたのは何と言つても江木恭をなかにおいての事であつた。それならば江木恭に戀をしたのかと聞く人があつたらば二人とも神樣の前でも強く／＼頭を振るであらう…それなら何故？　とたづねると、それには細かくこみ入つた女心のもつれとでも言はうか、どう解剖していゝか入りこんで分らないやうな二人の心のもつれ合ひがあつた。

江木氏に親しんでゆく佐千子の心は夢々戀愛といふやうな範圍のものではなかつたが、それを不快に思ひ嫉妬に近い感情で怒つたお慶さんの心も亦戀愛から來るものではなかつた事は佐千子にもよく解つてゐた。

佐千子は江木氏の愛人の梅子が××病院の寄宿舍に居て男名前の手紙をやる事が出來ない處から幾度もたのまれて自分の名で自分の筆蹟でその上書をかいてやつてゐた。江木氏の藝術家的精進と見たものに對して心から敬服して男手で水を汲んだりごはんを炊いたりしてゐるそのまづしい食卓に時折のめづらしいお菜の類を持つて行つてやる事があるとしてもそれは全く戀愛的心理をふくんだ贈物ではなかつた。…佐千子の方はさうであつたけれど、どういふのか佐千子の自然のうごきのなかに人を引附ける處があると見えて、およそ佐千子が豫期しない戀愛的雰圍氣がいつとなし佐千子の身をめぐるやうになり、佐千子と言へばその雰圍氣を持つた女性のやうに見られるかの感があつた。その意味で因果とでもいふべきか――自分では無意識にうごく平氣な表情でもが人を引附けてくる…さう

いふ事でも一半の責任を負へとでも言ふやうに責められて來ると途方にくれなければならない佐千子であつた。……一直線な生れつきの氣性から敬服して來ると心をあげて讃美せずには居られない詩人的心理と、前に述べたやうに永年別れてゐた親たちに親しんで行けなかつた心の愛情の缺乏とが、人なつこい、人に傾到しやすい弱いところのある性格をつくつてゐて……そのくせどういふのか所謂戀愛の纏綿たる感情をきらつて、どこかさつぱりと頼もしく力になり合ふといふやうな友情を求める心があつた。丁度江木氏が夢中になつてゐた愛人があつて、そして男らしい仕事に沒到して精進な生活をつゞけてゐる事が不安なしに敬慕してゆかれる動因となり、以前佐千子に戀愛感情を持つた人とは言へ、そのとなへる人道主義に、もうすつかりそういふ事情は流れ去つたもの、（一人の愛人を持つた人故）と信じ切つて、安心して他意なく親しんで行つた。――佐千子は年が若くてほんとうの男心といふものを知らなかつたのだ、それだけ世間知らずで人情の機微にふれ得なかつたのであつた。……

ところが後年江木の書いた小說によつて見ると江木氏は佐千子に對してやはり不純な男心をも持つて寄つて來たのであつた。一方の心で佐千子に淸い友情をちかひながらいま一つの心でまざ／＼と男の多元的な心を動かさずには居なかつたのである。自分の人道主義の立ち場から言へば不幸に育つて優しい心を持つてゐる梅子を救ふ事は使命的の事であり、心にかなつた梅子を得た事は運命のめぐり合程神秘的に考へたい。然しながら曾て自分がひどく魅惑を感じて自負心の强い自分としては不安を感じながらも一度言ひ寄つてみて手ひどくはねつけられた彼の女がその後自分の立ち場を轉換して彼の前に出た時他意なく親しんで來る彼の女を見て何となく過去の自分の恥をそゝいだやうな勝ち誇つた氣念を感ずると共に、佐千子に對する見はてぬ夢のやうな氣分が心の底を往來するのをどうにも出來なかつた。自負する人道主義の立ち場からそれが調和しない心持だけに自分を責める代りに佐千子の天性の魅力を指摘してそれに責めを負はせ、友情の破れた與に彼の女の欠點と思ふ處を誇大に表現してさういふ點で自分を反省の外においた小說を書いた。

「お慶さんがね、僕が貴女の家にいつも行つて自分の家に來ないつて不平を言つてゐるらしいな……さういふ樣に考へなくてもいゝと思ふが……」

江木氏は佐千子の家に來るとよくかういふ事を言つた、又或る時はロダンの彫刻のエハガキを持つて來て

「これはお慶さんがほしがつてゐたのだけれど……お慶さんにだまつてゐらつしやい」

さう言つてその繪ハガキを佐千子にくれた。その前後、佐千子は神經衰弱のやうで、何事もない平和の日に急に死ぬ事がおそろしくなつたり、そしておそろしいと思ふと今もう息が絶えるやうな氣がして全身がケーレンを起したり心臓がはげしく苦しい程打つたりし

て夜中に醫者を呼ぶやうな事が折々あつた。そして醫者にすゝめられて壹二時間程代々木の原を散歩する事にしたが、一人散歩するのはじきにいやになるので此事を江木氏に相談すると丁度自分も散歩して疲れた頭を休ませるのはいゝからといふのでそれから二人は連れだつて毎日代々木の原を散歩した。そしてその頃代々木の原を越へて初臺の丘の上に轉居してゐたお慶さんの家に立ち寄つて來るのだつたがそれが何となくお慶さんの氣にさはつたらしかつた。お慶さんの態度はどこか打ち解けないものがあつた、それを二人は歸り途に批評し合つた。

「實にいやだな、お慶さんは僕たちを誤解してゐるんじやないかな」

さう言つて江木氏は足元の草をポン〳〵とステッキで力まかせに打ちたゝいた。

「さあ……」

佐千子は薄い笑ひをして心のなかで一寸おもしろがつた。事實佐千子にはわるいくせがあつて、はじめお慶さんに江木氏がうそを言つた――朝から佐千子の家に來てゐたのに今來た處だなど……その時は佐千子は實に不快な氣がしたけれど、その後江木氏がお慶さんがかう言つたとかお慶さんに內證にしておけとか妙に佐千子の淺はかな遊戯心がそゝり出されてお慶さんがいら〳〵するのがおもしろくなつて來てよけいに江木氏に自分だけ親しんでゆくやうな樣子をたとへばプリズムに光線を屈曲させて反射させるやうにお慶さんに向つて投げかけたい、さういふ氣持を持つやうになつた。これがほんとに後で考へて佐千子の自責を感ずる處でお慶さんに事情をすつかり打ち明けて謝したい氣持がするのである。お慶さんも佐千子に對して可成陰險な技巧を弄した事は知つてゐるとしても。

川端さんはその頃勉强をはじめて病床のそばに机をすえてトルストイのコザックを英書で讀んでゐた。佐千子は江木氏にすゝめられて毎日一時間づつ近い江木氏の家に通つて英書でサッカレーの小說を習ひはじめた、それが刺戟になつてお慶さんと川端さんは神田の夜學に通つてドイツ語の勉强をはじめた。

或る日の午後お慶さんが江木氏の處へ用事に寄ると江木氏の書齋に佐千子も座つて江木氏が熱心に英語を敎へてゐる處であつた。

お慶さんはあがれと言つてもあがらなかつた。用件がすむと本の包をかゝえてキルクまがひの木の草履を鳴らしながらサッサと出ていつた。

「お慶さんは僕が貴方に英語を敎へてゐるのを不快がつてゐる……フム……かなはないな……」

江木氏はキッと口を結んで目鏡を光らせてゐた。

お慶さんの家はその頃極端に經濟的に行きつまつて、電燈もガスも氣をつけてつかつたり、草履や牛蒡のやうなものまでも安物で間

に合せるやうになつてゐた。反對に佐千子の家では由井氏が或る大きな酒釀會社に一寸口きゝをしてやつた事があつてその頃の佐千子の家としては一寸まとまつたお金がはゐつたりして佐千子には新らしいお召のコートなど出來た。同時に佐千子の少女小說が本になつて過分の原稿料が手にはゐつたりもした。それまでも病氣がちな川端氏の家の日常の小使の時がりや時にその家計の一端も心おきなくお慶さんが佐千子に用たてゝもらつたり時に佐千子もお慶さんに小使の時がりをする事もあつたり仲よくやつてゐたのが續いてはゐたけれど、それがだん／＼お慶さんの方が借りる方にのみなつて來て勝氣な、いふうちにも佐千子とはいつも姉分の立ち場に居たお慶さんにはそれも氣のすまぬ一つの事になつてしまつた。佐千子はそれまでも時折に、以前上京して職のなかつた頃お慶さんに親切にしてもらつた事をしみ／＼と思ひ出して出來るやうになつて出來るだけの事はお慶さんの便利をはかるやうな事を忘れなかつたけれど、だん／＼心がもつれて來るやうになつて佐千子も意地になつて「あんなに蔭で私の惡口を言ふ位ならそんな話を持ちこまなければいい」など考へる事もあるやうになつた。お慶さんと佐千子とはほんとに親しい友情を續けて來たけれど心の一部にはお慶さんには佐千子のどこか底を割らない氣持が感じられていやであつたし又華やかに男性の讚美の的になつて實質以上に價値づけられると思はれてその名聲に多少の反感を持ち、さういふ點で自分の堅實な性格に多分の優越を感じてゐた――と同時に佐千子の方ではお慶さんの堅實ぶりはどこか世話女房の上の部を出でないものに感じられ、その直覺力の鈍いと思はれる點などで自分が立ち優つてゐるかの感を持つてゐた。・・・お慶さんはその時代の世間から一應は誰れにでも好かれたりほめられたりする堅實さは持つてゐたけど、藝術家として未來の女性を暗示する創造者風の性格者ではなかつた。・・・かうした心の一部の事も平日には互に心の底にかげをひそめてゐて互のよい點、卽ち佐千子はお慶さんの行き屆いたいろいろの點に感心させられお慶さんは佐千子の明るい、どこかそれで素朴な一本氣の處を感じて親しんでゐたのだが、今日になつてみれば互の心の底の反感が上の方に浮き上つてなか／＼握手が出來なかつた。或る日佐千子は江木氏の家に居て、英語を習つてしまつてからお慶さんの話にうつつて自分たちの何となく離れ／＼になつたのを嘆いた、そして江木氏に永い友情を願ふ心を話した・・・突然江木氏は手をのばして佐千子のそばに寄つた

「兄妹として」

さう言つて佐千子がハッとしてゐる間にその唇を佐千子にふれた。佐千子は當惑しそれを江木氏を辱しめないやうに退けていとまをして外に出た。近い道ながら佐千子は自分の家まで重い／＼歩みを歩んで行つた。・・・自分が今江木氏に親しんでゐる心に僞はない、かういふ兄があつたら、そして心おきなく友愛を盡し合へたら・・・

と希つたのはさうそではない…然しいくら兄妹としてと言つたとて接吻などするのはどうも氣がすまない、いやな氣持がする…けれどそれをいやだといへば自分の今までの心はうそととられるのだらうか…さういふ事をくりかへし思ひなやみつゝ我にもあらず江木氏の唇のふれた處を淨めるやうに拭きながら家に歸つて來たのであつた。…その頃の佐千子は接吻といふやうな事に心をひかれないのもほんとであつたが、一つにはいくら江木氏を尊重して親しんでも江木氏のところに非常にいやな處があつたのは事實であつた。齒ぐきを通していつも下あごに水のやうな唾のたまるその口、それで手さきをしめしては英語の辭書をうるさくひくので辭書には黑く垢がたまつてゐたがそれを江木氏は「僕の辭書は手づれでこんなですよ」と自慢さうに見せるのだが、事實手づれもあつたが半分はその口熱を持つた唾の垢である事を佐千子は思つていやであつた、その辭書は事實めくるたびに惡臭をはなつた。

佐千子は家へ歸つて一時間程考へた處で机に向つて長い手紙を江木氏に書いた。

自分が江木氏を兄のやうに頼んでゐる心に僞はない事、どんなにも末長く親しく親しくして預き度いと願つてゐる事、然し接吻といふやうな事は自分はどういふものか性來きらいでさういふ事をすると折角のいゝ感情をけがされてしまふやうな氣がして實に不安でならないから、さういふ事にならないやうにきれいな友情を續けて頂き度い事、自分の此言葉の爲に自分の眞心が僞ととられて絶交を申渡されるなら實に悲しい事だけれどそれはどうにも仕方ない事である…

といふやうな事を細々と氣がすむやうに長手紙にしてそれを女中に持たして江木氏の家に屆けさせた。

きつともう絶交される事だらう、まさか人道主義をあんなに重んじてゐる江木氏が他意あつてあんな事をしたのではないそれを斷つてやつたのだからずいぶん侮辱と言へば侮辱した譯になるから…さう思つて佐千子は不安な時を待つた…と二十分程して門があいて江木氏がやつて來た、佐千子はたゞかたくなつて机に身をよせたまゝ不安な疑問を持つた瞳でそこに這入つて來た江木氏をふりかへつて見た。江木氏はいきなり座敷の籐椅子に腰をおろして

「心配しなくてもいゝんです、よく分りました、これからほんとに淸くつきあひませう」

さう言ふ江木氏には他意なき表情があつた。



秋の唇

――放浪記――

林芙美子

十月八日

呆然と梯子段の上の汚れた地圖を見てゐると、蒼茫とした夕暮れの日射しに、地圖の上は落漠とした秋であつた。

寢ころんで、煙草を吸つてゐると、譯もなく涙がにじんで、細々と佗しくなる。

地圖の上では、たつた二三寸の間なのに、可哀想なお母さんは四國の海邊で、朝も夜も私の事を考へて暮らしてゐるだらうに――。

風呂から歸へつて來たのか、下で女達の姦しい聲がする。

妙に頭が痛い、用もない日暮れだ。

寂しければ海中にさんらんと入らうよ、
さんらんと飛び込めば海が胸につかえる泳げば流るる、
力いつぱい踏んばれ岩の上の男。

秋の空氣があんまり青いので、私は白秋のこんな唄を思ひ出した。

あゝ此世の中は、たつたこれだけの樂しみであつたのか、ヒイフウ…私は指を折つて、さゝやかな可哀想な自分の年を考へてみた。

「おゆみさん！ 電氣つけておくれッ。」

お上さんの癇高い聲がする。

おゆみさんか、おゆみとはよくつけたもの私の母さんは阿波の徳島。

夕御飯のおかずは、ゐつもの通り、するめの煮たのにコンニヤク、そばでは、出前のカツが物々しい示威運動、私の食慾はもう立派な機械になりきつてしまつて、するめがそしやくされないうちに、私は水でゴクゴク咽喉へ流し込む。

貳拾五圓の蓄音器は、今晩もずいずいずつころばし、ごまみそずいだ。

公休日で朝から遊びに出てゐた十子が歸へつて來る。
「とても面白かつたわ、新宿の待合室で四人も私を待つてたわよ、私知らん顏して見てゝやつた…。」
その頃女給達の仲間には、何人もの客に一日の公休日を共にする約束をして一つ場所に集合させて、すつぽかす事が流行つてゐた。
「私今日は妹を連れて活動見たのよ、自腹だから、スッテンテンよ、かせがなくちや場錢も拂へない。」
十子は汚れたエプロンをもう胸にかけて、皆にお土産の甘納豆をふるまつてゐた。
今日は病氣。胸くるしくつて、立つてゐる事が辛い。

十月×日

夜中一時。折れた鉛筆のやうに、女達は皆ゴロゴロ眠つてゐる。雜記帳のはじにこんな手紙をかいてみる。

――靜榮さん。
生きのびるまで生きて來たといふ氣持です。
隨分長い事合ひませんね、神田でお別れしたきりですもの…。もう、しやにむに淋しくてならない、廣い世の中に可愛がつてくれる人がなくなつたと思ふと泣きたくなります。
いつも一人ぼつちのくせに、他人の優さしい言葉をほしがつてゐます。そして一寸でも優さしくされると、嬉し涙がこぼれます。大きな聲で深夜の街を唄でもうたつて歩きたい。
夏から秋にかけて、異狀體になる私は働きたくつても働けなくつて弱つてゐます。故、自然と食ふ事が困難です。
金が欲しい。
白い御飯にサクサクと齒切れのいゝ澤庵でもそへて食べたら云ふ事はないのに、貧乏すると赤ん坊のやうになる。
明日はとても嬉しいんです、少しばかりの原稿料がはいります、それで私は行けるところまで行つてみたいと思ひます。
地圖ばかり見てゐるんですが、ほんとに、何の樂しさもない此カフエーの二階で、私を空想家にするのは、梯子段の上の汚れた地圖です。
ひよつとしたら、裏日本の市振りと云ふ處へ行くかも知れません。生きるか死ぬるか、とに角、旅へ出たい。
弱き者よの言葉は、そつくり私に頂戴出來るんですが、それでいいと思ふ、野性的で行儀作法を知らない私は、自然へ身を投げかけてゆくより仕方がない。此儘の狀態では、國への仕送りも出來ないし、私の人に對しても濟まない事だらけです。
私はがまん強くよく笑つて來ました、旅へ出たら、當分田舍の空や土から、健康な息を吹きかへすまで、働いて來るつもりです。
體が惡るいのが、何より私を困らせます。それに又、あの人も病氣ですし、厭になつてしまふ。金がほしいと思ひます。
伊香保の方へ下働きの女中にでもと談判したのですが、一年間の前借百圓也ではあんまりだと思ひます。
何のために旅をするとお思ひでせうけど、とに角、此まゝの狀態では、私はハレツしてしまひます。
人々の思ひやりのない雜言の中に生きて來ましたが、もう何と言はれたつていゝ私はへこたれてしまつた。
多になつたら、十人力に強くなつてお目にかゝりませう、いちか

ばちか行くところまで行きます、私の妻であり夫である、たつた一ツの信ずる眞實な詩稿を持つて、裏日本へ行つて來ます。お證を大切に、さよなら——。

——あなた。

フツヽリ御無沙汰して、すみません。

お證は相變らずですか、神經がトゲトゲしてゐるあなたに、こんな手紙を差し上げるとあなたは、ひねくれた笑ひをなさるでせう。

私、實さい涙がこぼれるんです。

いくら別れたと云つても、病氣のあなたの事を思ふと、佗しくなります。困つた事や、嬉しかつた思ひ出も、あなたのひねくれた仕打ちを考へると、恨めしく味氣なくなります。壹圓札二枚入れて置きました、怒らないで何かにつかつて下さい。あの女と一緒にゐないんですつてね、私が大きく考へ過ぎたのでせうか。

秋になりました、私の唇も冷く凍つてゆきます。あなたとお別れしてから……。

たいさんも裏で働いてゐます。

——オカアサン。

オカネ、オクレテ、スミマセン。

アキニ、ナツテ、イロイロ、モノイリガ、シテ、オクレマシタ。

カラダ、ゲンキデスカ。ワタシモ、ゲンキデス。コノアイダ、オクツテ、クダサツタ、ハナノクスリ、オツイデノトキ、スコシオクツテクダサイ、センジテノムト、ノボセガ、ナオツテ、カホリガ、ヨロシイ。

オカネハ、イツモノヤウニ、ハンヲ、オシテ、アリマスカラ、コノマ、キヨクエ、トリニユキナサイ。

オトウサンノ、タヨリアリマスカ、ナニゴトモ、トキノクルマデ、ノンキニシテイナサイ、ワタシモ、コトシワ、アクネンユエ、ジツトシテイマス。

ナニヨリモ、カラダヲ、タイセツニ、イノル、フウトウ、イレテオキマス、ヘンジクダサイ。

フミヨリ。

私は顏中涙でぬらしてしまつた、せぐりあげても、せぐりあげても泣聲が止まない。

こうして一人になつて、こんな荒れたカフエーの二階で手紙を書いてゐると、一番胸に來るのは、老いたお母さんの事だつた。

私が、どうにかなるまで、死なゝいで下さい、此まゝであの海邊で死なせるのは、みじめすぎる。

あした局へ行つて、一番に送つてあげやう、帶芯の中には、さゝけた壹圓札が六七枚もたまつてゐる、貯金帳は、出たりはいつたりで、いくらもない。木枕に頭をふせてゐるとくるわの二時の拍子木がカチカチ鳴つてゐる。

十月×日

窓外は愁々とした秋景色。

小さなバスケツト一ツに一切をたくして、私は興津行きの汽車に乘る。

土氣を過ぎると小さなトンネルがあつた。

サンプロンむかしロオマの巡禮の
知らざる穴を出でて南す。

私の好きな萬里の歌である。
サンプロンは、世界最長のトンネルだけど一人のこうした當のない旅でのトンネルは、なぜかしんみりとした氣持ちになる。
海へ行く事がおそろしくなつた。
あの人の顔や、お母さんの思ひが、私をゐたわつてゐる、海まで走る事がこわくなつた。

三門で下車する。
ホタホタ灯がつきそめて、驛の前は、桑畑、チラリホラリ、藁屋根が目につく、私はバスケットをさげたまゝ、ぼんやり驛に立ちつくしてしまつた。
「こゝに宿屋ありますか？」
「此の先の長者町までいらつしやるとあります。」
私は日在濱を一直線に歩いてゐた。
十月の外房州の海は、黒々ともれ上つて、海のおそろしいまでな情熱が私をコオフンさせてしまつた。
只海と空と砂濱、それも暮れ初めてゐる。自然である、なんと人間の力のちつぼけな事よ、遠くから、犬の吠へる聲がする。
かすりの伴天を着た娘が、一匹の黒犬を連れて、歌ひながら急いて來た。
波がトンキヨウに大きくしぶきすると、犬はおびえたやうに、キリッと正しく首をもたげて、海へ向つて吠へた。ヴオウ！　ヴオウ
遠雷のやうな海の音と、黒犬の唸り聲は何か神祕な力を感ぜずにはゐられなかつた。
「此邊に宿屋ありませんか！」
この砂濱にたつた一人の人間である、この可憐な少女に私は呼びかけた。
「私のうち宿屋ではないけ、よかつたらお泊りなさい。」
何と不安もなく、その娘は、漠々とした風景の中のたつた一ッの赤い唇に、うすむらさきの、なぎなたほうづきを、クリイ、クリイ鳴らしながら、私を連れて後へ引返してくれた。
日在濱のはづれ、丁度長者町にかゝつた、砂濱の小さな破船のやうな茶屋である。
此茶屋の老夫婦は、氣持ちよく風呂をわかしてくれたりした。
こんな延々と、自然のまゝの姿で生きてゐられる世界もある。
私は、都のあの荒れた酒場の空氣を思ひ出すさへおそろしく思つた。天井には、何の魚の尻尾か、かさかさに乾いたのが張りつけてある。

此部屋の灯も暗らければ、此旅の女の心も暗い。
何もかも事足りなくて、あんなに憧憬れてゐた裏日本の秋も見る事が出來なかつたが、此外房州は、裏日本よりも大まかな氣がする。
市振から親不知へかけての民家の屋根に、澤庵石のやうなものが、ゴロゴロ置いてあつたのや、線路の上まで、白いしぶきのかゝるあの蒼茫たる風景、崩れた崖の上に、紅々と空に突きさしてゐたあざみの花、皆何年か前のなつかしい思ひ出だ。
私は磯臭い蒲團にもぐり込むと、バスケットから、コロロホルムのびんを出して、一二滴ハンカチに落した、

此まゝ消へてなくなりたい今の心に、ぢつと色々な思ひにむせてゐる事がたまらなくなつて、私は厭なコロロホルムの匂ひを押し花のやうに鼻におし當てた。

十一月×日

遠雷のやうな汐鳴りの音と、窓を打つ鏘々たる雨の音に、私がぼんやり目を覺ましたのは、十時頃だらうか、コロロホルムの酢の様な匂ひが、まだ部屋中流れてゐるやうで、私はそつと窓を開けた。

入江になつた渚に、蒼い雨が煙つてゐた。しつとりとした朝である。母屋でメザシを焼く匂ひがプンプンする。

晝から、あんまり頭がズキズキ痛むので、娘と二人黒犬を連れて、日在濱に出て見る。

渚近い漁師の家では、女子供が三々五々群れて、生鰯を竹串につきさしてゐた。竹串にさゝれた生鰯が、兵隊のやうに並んだ上に、雨あがりの薄陽が銀を散らしてゐた。

娘は馬穴(ばけつ)にいつぱい生鰯を入れてもらふとその邊の雑草を引き拔いてかぶせた。

「これで拾錢ですよ。」

歸へり道、娘は重そうに馬穴(ばけつ)を私の前に出してこう云つた。

夜は生鰯の三バイ酢に、海草の煮つけに生玉子、娘はお信さんと云つて、お天氣のいゝ日は千葉から木更津にかけて、魚の干物の行商に歩くのだそうな。

店で茶をすゝりながら、老夫婦にお信さんと雑談してゐると、水色の蟹が敷居の上をガクガク這つて行く。

生活に疲れ切つた私は、石ころのやうに動かない此人達の生活を見ると、そゞろうらやましく、切なくなつてしまふ。

風が出たのか、ガクガクの雨戸が、難破船のやうにキイコ、キイコゆれて、チエホフの小説にでもありそうな古風な濱邊の宿、十一月にはいると、もう足の裏が冷々とつめたい。

十一月×日

富士山を見た
富士山を見た
赤い雪でも降らねば
富士をいゝ山だと賞めるに當らない。
あんな山なんかに負けてなるものか
汽車の窓から何度も思つた個想
尖つた山の心は
私の破れた生活を脅かし
私の瞳を寒々と見降ろす。
富士を見た
富士山を見た
鳥よ!
あの山の尾根から頂上へと飛び越へて行け!
眞紅な口でカラアとひとつ嘲笑つてやれ

風よ！
富士はヒワヒワとした大悲殿だ
ビユン、ビユン吹きまくれ
富士山は日本のイメージーだ
スフインクスだ
夢の濃いノスタルジヤだ
魔の住む大悲殿だ。

富士を見ろ！
富士山を見ろ！
北齋の描いたかつてのお前の姿の中に
若々しいお前の火花を見たが……

今は老ひ朽ちた土まんぢゆう
ギロギロした瞳をいつも空にむけてゐるお前――
なぜやくざな
不透明な雲の中に逃避してゐるのだ！

鳥よ！　風よ！
あの白々とさへかへつた
富士山の肩を叩いてやれ
あれは銀の城ではない
不幸のひそむ大悲殿だ

富士山よ！
お前に頭をさげない女がこゝに一人立つてゐる
お前を嘲笑してゐる女がここにゐる

富士山よ
富士よ！
颯々としたお前の火のやうな情熱が
ビユンビユン唸つて
ゴウジヨウな此女の首を叩き返へすまで
私はユカイに口笛を吹いて待つてゐやう。

私はまた元のおゆみさん、胸にエプロンをかけながら、二階の窓をあけに行くと、ほんのひとなめの、薄い富士山が見える。

あゝあの山の下を私は何度不幸な思ひをして行き返へりした事だらう。でもたとへ小さな旅でも、二日の外房州のあの亮々たる風景は、私の魂も體も汚れのとれた美しいものにしてしまつた。

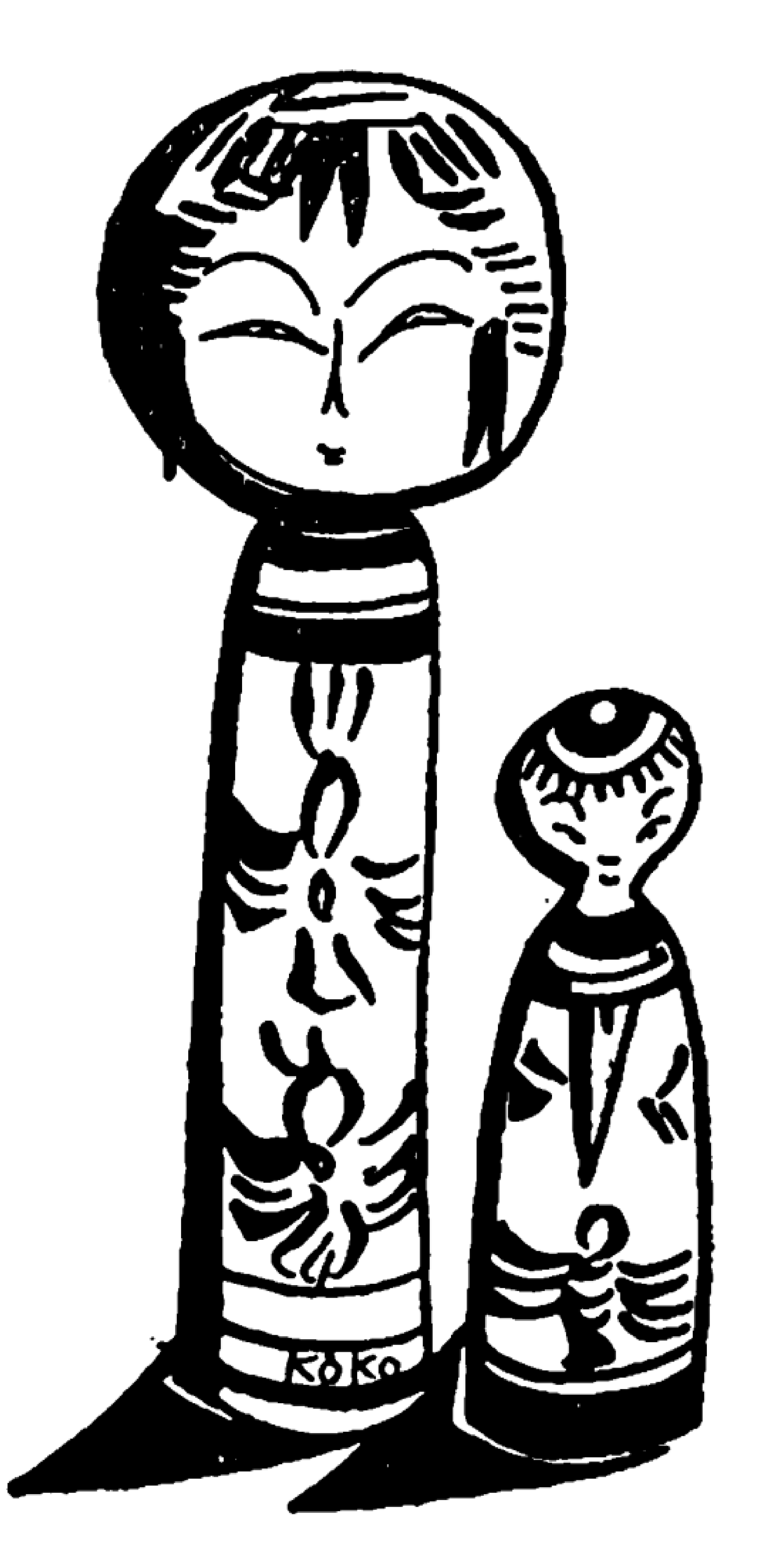
旅はいゝ、野中の一本杉の私は、せめてこんな樂みでもなければやりきれない。

明日から紅葉デーで、私達は狂人のやうな眞紅な着物のおそろひだそうな、都會はあとからあとから、よくもこんなチカチカした趣考を思ひつくものだ。

又新らしい女が來てゐる。

今晩もお面のやうにお白粉をつけて、二重な笑ひでごまかしか……うきよとはよくも云ひ當てしものかな――。

留守中、お母さんから、さらしの襦袢二枚送つて來る。



北平の秋

笙千鳥

　中秋の月のさやかさ――今は北平の三海公園とよばれはするが、つい先ごろまでは北京の都紫禁城の禁苑である。大液池に船をうかべ、高樓に箏を彈じた貴妃嬪御のありし日をそぞろに思ひださせる。

　だが北淸事件の際、各國兵のために、この庭園はかなり荒された、目ぼしい佛像などは持ち去られはしたが、だが今でも王家の老女達は、いかにすゝめても、ここに足を踏み入れることを、うべなはぬさうである。

　三海とよばれる名苑は宮城の西にあるので西苑といつた。

五龍亭、蕉園、瀛臺の三つに分れ、大液池を三つに分けて、北海、中海。南海といふ。いろいろ委しい由緒を書くと案内記じみるから止めて、北海は今から五年前、馮玉祥が宣帝を宮城から追ひ出して、北平を自分の統治下としたとき開放して、水に乏しい北京在住人を樂しませた。南海、中海は國民政府となつて、今年から開放された、銅子兒(トンズル)二十文――五錢の看覽料だ。

　日本人は――日本の絃妓を侍らして、この池で昔の大名の隅田川舟遊もかくやとばかりの豪遊をやる。もつとも近頃は、支那人のモボ、モガが跋扈して、闇に咲く花もあるといふことである。

　看覽者に繪はがきを賣り附ける男が、塔の蔭などで、そつと、いかがはしい畫を買へとすすめる、あさましき限りである。

　宣統廢帝の舊殿を見て、もし古への李白の如き詩家があつたらなんと詠ずるであらう。

　五年前の十月重陽のころ、土匪にひとしい馮玉祥の兵に追はれて、皇后とともに、日本公使館へのがれられたのだ。鉢植の菊花や、葵などが、からからにすがれて、卓子の上にはむきかけた林檎などそのままである。女官たちの部屋には、手函などくつがへり、紙反古が、取りちらされたままだ。どんなにあはただしくのがれたのか、當時のさまが眼にうかぶ。

小サロン

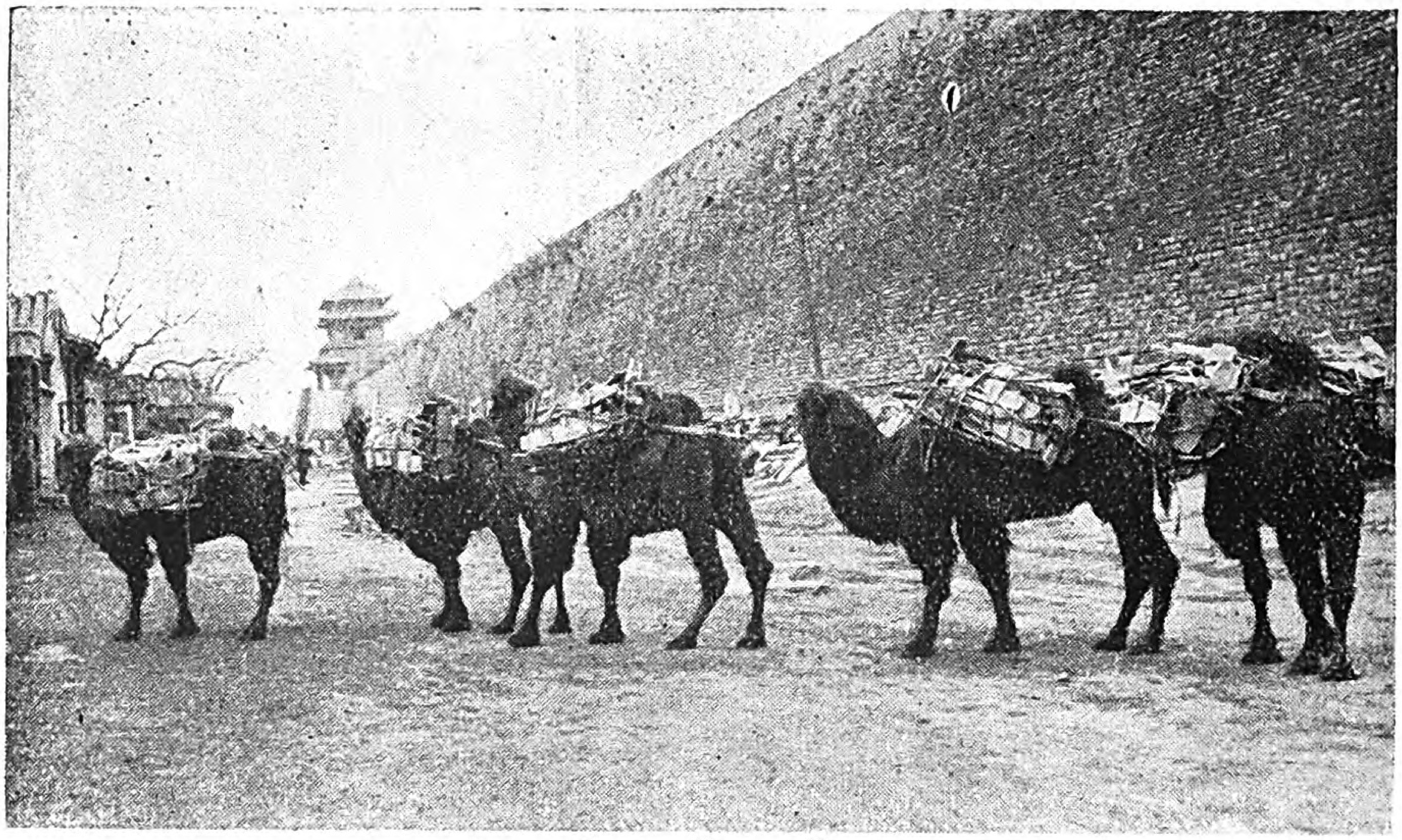
生田花世女史の弟さん思ひは知人の間ではつとに知れ渡つてゐる大低の人が春月氏の名前の次には弟さんの話を聞かされた度數をかぞへる程弟さん思ひの女史、二人のうち上の満知郎さんを失つて一層切なるものがあつた。ある日ひとりぽつねんと座つて、いとしい弟さんの事を思ひ出してゐた。

「可愛い！　たつた一人の弟よ」生田さんが戀人のやうにやさしく弟さんの面影をいつくしんでゐるところへ、玄關の戸ががらがらと開いた。とつさに直感した花世女史は、愛撫の思ひをこめて呼んだ。

「三四郎かい？」生田さんの言葉つきのやさしさは日頃から有名だところがそれつきり物音がしない「三四郎かい？」聞こえなかつたのかと思つて二度聲をかけたが返事がないので不思議に思つて出てみると面喰つてつつ立つてゐたのは望月百合子氏のパパ石川三四郎氏だつた。二度びつくりした生田女史、後で「あんなやさしい聲を出してしまつて、望月さんに怒られなければいゝが――。」

♤

百合子さん、パパはなんていつ



北平城外

南海の居仁堂は、一時大總統府として張作霖が豪奢の居であつたここだけは、まだ瓦も壁も落ちず、去年の榮華をおもはせてゐる。

この三海公園のほかに、景山が新たに開放された。景山も、やつぱり宮城内の庭園で、人工の假山だけれど、古色蒼然として風光明媚だ。煤山ともいつて、元の世祖が都を北京に定むるとき、築城に先ち、閉城不虞の場合を顧慮し、石炭を山積して造つたものださうだ。明末崇烈帝の時、賊將李白成が北京に迫り、遂に城内に入つた。

帝嘆じて曰く『我民を苦しむるのみ』と、太子を遁れしめ、劍を以て長平公主を斫り、皇后を自盡せしめ、妃嬪數人を斬殺し、煤山に登り、衣襟に遺詔を書し、帛を以て自から山亭に縊して崩じたまふた。この慘烈なる、歷史的の地も今は、萬人の泥鞋に踏まれてゐる。北海公園の中に骨董店がある。王家の什器を卽賣して居るのだ、生活費をつくる爲に、來遊の外國人をあてに。

このごろは、さかんに各王府—宮家が柏賣をやつて居ることを、新聞や、街の壁などに、廣告が貼り附けられてあるので知つた。かうなつては、面子も見得も無いのである、然しどこでもあることで、とかく商賣人の喰物にされ勝

てゐて？　と訊いたものがある。百合子さん、あの眼をパチパチとやつて「ウウン、パパはよく聽こえなかつたんだつて、そんならよく聽いておけばよかつたつて、どうしてなんですつてきいたら、三四郎や、なんてよばれた事この頃ないから、やさしく呼ばれて見たいつて。三四郎や、なんてよんでくれる人なんかもうないんだわ。」

♠ パリー歸りの吉屋信子女史の歸朝披露のお茶の會に招待された諸名士、諸女史、口を揃へてお美しくなつたと褒めたが一番最後に立つた三輪田元道さんの仰しやるには、全く吉屋さんは美しくおなりです、前から見てもお美しいが後から見ると一層お美しい。

♠ 作家で素人圖藝家のアルホンスカルルは自分の仕事に必要な書物を隣家の金持イギリス人に借りにいつたら、

「お氣の毒ですがだめなんです」と隣人は答へた。「本は決して持ち出さない規則になつて居るんですだがもしも私の家で一日中お讀にならうと云ふのなら、私は喜んでお許ししますよ。」

數日後のことである。多分この

らしい、出て居るものは、イミテイションが多いといふことだから。

さて北平のこのごろは獵官に成功した官吏や、重な外國人は南へ南へと行く。從つて地價、家屋の暴落は甚だしいが、いくら安くつても、さびれ行く土地を買ふものもなさそうだ。新築工事などは見たことが無い。

たゞ亜米利加系の、病院、學校、教會が、この廢殘の土地に、立派な建築を起して居るのが眼に立つ。目的があるばかりでは無く、まつたく金がありあまるからだらうと、强がつて居ても貧乏な自分の國や、自分たちをかへり見て、身がひけることおびただしい。


宣統帝の皇后

家賃は、半分位の値下げを大家が承知する、百五十圓位の家は、七八十圓の相場だ、家具なども歸國する人達が捨て賣りにするから、安いもので、ピアノが三四百圓で買へる。面子、面子といつて居た支那人も、かうなつては全く赤裸々だ、無いが意見の總仕舞で、日本も緊縮々々と、濱口さん達がやつきとなつて居るうちは、まだ花だ。

今年から節句も廢された。冠婚葬祭の禮も――だが、まだ金のあるところにはあるのだから、この冠婚葬祭をさかんに、やれる人はやつてほしい。といふのは、これは昔からの習慣では、富を分配して下層民を潤ほすといふので、出來るだけ多く錢を散じるのだらうだ。だから一度、婚禮や、葬禮をすると、かなり富が減る。これはいゝことだと思ふ。日本のやうに自分達の階級だけの見得に、金をかけるよりは意味がある。

舊都のおもかげは秋深うしての感が身にしみる。新らしく改造されるのなら良いが、一日一日とさびれ果てて、衰さとともに、一層哀れさを催させてゆく。

――一九二九、九、一七――

本の事件を忘れてしまつたのであらう此の隣人は作家の所へ如露を貸してくれと賴みに行つた。

「お氣の毒ですがだめなんです」カルルは躊躇なく答へた。「如露は決して私の庭から外へ持出さない規則になつて居ます。だがもしも閣下が私共の庭で一日中水を撒かうとおつしやるなら、私はよろこんでそれをおゆるし致しますよ。」

♠

洋の東西を言はず場所の如何を問はず女はもてるもの?

ある左翼の演說會で、吉例によつて早速入口から「ちよいとこい」をやられた女があつた。調べてみても大した事もないので刑事が返さうとするのを署長さんが嚴めしい顔をして「檢束!」とど鳴つた、が拘留の理由がない。演說會が解散して十一時になると歸される事になつた。すると連れに來た看守「せつかく來た女を返すのは惜しいなあ」

♠

好色であまのじやくなお殿樣があつた。ある時「身分の如何に拘はらず、國中で一番美人を側女にする」といふお布告を出した。

「私は美人だ」

「私も美人だ」



藤田氏 及び三人社の展覧會

熱田優子

今秋の我が畫壇を飾るべくはる〳〵歸國された藤田嗣治氏の個展が朝日畫廊で開催された。自國を出て十七年苦心勉學の結果これ程の人氣を一身に集めて歸へられたのだからその作品も相當の期待を以て見らるべきであらう。今度持つて來られたものは今年の製作の約六分の一との事であるが其の數は銅版を加へて約七十點程であるから其絶大な精力には少なからず感服させられる。

二三年前同じ朝日畫廊で行はれた佛展で始めて、一枚出品された氏の繪に接した。日佛藝術(雑誌)の口繪で見た時かなりうまいと思つて實物を見たらちよつと失望したのを記憶して居る。藤田氏も自ら云はれて居る樣に氏が繪を描く爲に最も苦心されたのはテクニックであつたと云ふが實にそれにたがはずテクニック——氏の場合に於ては如何にしたら異彩をはなち人の目を引き得るかと云ふ樣な——に重きを置いた繪である。氏は白い畫面に線で描くと云つた日本畫の畫法を油繪に取り入れた。外國の色彩的な繪を其のまゝ摸倣せずにそれらに對立させて氏獨特の境地を創られた。又氏は如何にしたら個性的な繪が出來るかと云ふ事を研究された。それは構圖やモチーフに充滿して居るエロイックな氣分等によつてかなりよく現はされて居る樣だ。こう云ふ氏の繪が佛蘭西人の眼をひく爲には相當成巧し得ただらうと云ふ事は想像し得る事だが我々日本人から見れば油繪具を用ひて描いた日本畫と云ふ程の感じとも云へるであらう。

今度の作品は油繪の大作二點と版畫を除いては皆デッサンである氏の最も特有な點は針金の樣に細い線を用ひて居る事だ。銅版の方は重に小品で、其の中に猫を描いたものが多いが、これ等は在來の日本畫家の作品をかなり摸倣して居るらしい。淡い色で彩色した上に毛なみを細くこまかく描き入れた方法はたしかに日本畫らしい。然し皆格構も面白く黑い顔に金色に光つた眼等なか〳〵巧みに描いてある。版畫の中では猫がよい樣だ。その他子供の半身や顔等があるが針金の樣な線が大變つめたくて肉からなつたものの感じがなく瀬戸か何かで出來た西洋人形の顔を思はせる。總じて氏の版畫は裝飾的と云ほうか小綺麗で唯眼に來

集るは集まるわ、自信の强い連中がわれもわれもと名乘りを上げてまかり出た。それが餘り多いので殿樣にもどれが本當の美人なんだか見分けがつかなくなつた。そこでお殿樣はおかんむりを曲げて「余は美人はきらひだ、一番醜女をつれてこい！」といつた。

今度は國中の女がわれも〳〵も醜女の名乘りを上げて、どれが醜女だか誰にもわからなかつた。そして結局美人でも不美人でもないと思つてゐた殘つた一人が一番美しい女だつたといふのである。

♠

上京したばかりの信州のある製絲株式會社長が、ホテルのテラスによつて、向ふ側に聳える巨大な建物を見上げて呟いた。

「途方もないものを建つたもんだな。だが、何だか奇妙な名前ぢやないか」

と側の社員を顧みた。社長の金線の老眼鏡にはどうにもややこしい片假名の陳列としか見えない。そこで若い社員は胸を張つて昂然と答えたものである。

「社長、あれは——グンデルビくにとみ(國富)と申しますのです。」

「ふむ。グンデルビ國富(くにみ)——なるほど何ぢやね、それは？」

るものしかないと云つて美術である以上裝飾的である事勿論可なりであるが、もう少し餘韻と云つた樣なものがあつて慾しいと思ふ。

次に作品の大部を占めて居るデッサンであるが、これ等は古く錆びた唐紙の色にも似た紙に、鉛筆と木炭をまぜて使つて居るのだらうか、如何にも紙に調和した墨色で日本の古寺の襖を見る樣である。裸體の男の樣々な姿態――パリで柔道の道場を開いて居られるのでその稽古に來る若者をモデルにしたと聞いたが――は隨分多方面から見て研究してある樣だが時に無理ではないかと思はれるデッサンがある。檻に入つた獅子の檻等も何だかデッサンに狂ひがある樣だ。奥行のない所から來る感じかも知れないが。人間の肉付きのモコモコした影はあまり强くなると少しうるさい。その逞しい肉付きを現はそうと努力して居るがそれがむしろ同一平面にある陰影に過ぎない感じで量的にはあまり迫つて來ない。女の方に却つてよいのがあつた樣に思ふ受胎告知の背物の襞の線等は全く日本畫にのみ見る線ではなからうか。

二枚の大作の油繪はこゝに並べられた版畫デッサン等に出て來る人物其他を一つの大きな畫面にまとめたものに過ぎない。併しこれ丈けの澤山なものを一つの中におさめる事はなかなかの努力であつたらう。氏獨特の白色を基調としたものでデッサン其のまゝに線で描いてうすい色彩がわづかばかり用ひられて居る。マチスが藤田氏の繪を、タブローではない、デッサンであると云つたそうであるが此の繪を見ると成る程色彩ばかりで描く樣な西洋人から見れば、デッサンとしか思へないであらうとよくそれがうなづける。畫布を白く塗りつぶしておいてその上にデッサンを描いたのだが、眞物のデッサンではかなり强く見える線が油繪ではずつと弱く見えて、惜しいかな薄つぺらな繪である。雜然と並べましたと云ふ繪であり、ロの惡るい人間はサーカスのかんばんと云ふかもしれない。二枚共略々同樣な作品だが、實に奥行がない。前に居る人間も後の居る人間も皆同一面にある樣だ。油繪が二枚だけだつたのも何となく物足りなかつたが結局何枚見ても同じだと云ふ氣がする。これだけ勉强されたのだからもう一と息努力されて形式ばかりでなくもつと內容的にグイとひきつける樣なものを見せて戴けたらと思ふ。氏の繪は「オヤすばらしいな」とちよつと立ち止つて見る繪である。だが眺めて居るうちに滲み出て來る味がない。テクニックはこれで充分である。どうぞ內容の充實したものの製作に努力していたゞきたいものである。

第一回三人社洋畫會

三人社と云ふ名前の樣に三人から成立つた展覧會である。しかも三人の女性である。其のうち甲斐仁代深澤紅子兩氏は女人藝術に毎號カットを描いて居られるから讀者はよく御存じの筈である。御二人とも二科の定運である事は已に知られて居る事である。橋本はな子氏は今度の展覧會から橋本と名

「グンデルビといふアメリカの大貿易商が國を富ましますために――つまり日本の輸出品をうんと買占めてですな、大儲けしやうってわけで日米共同出資の組織で建つたのでございます」

「とすると、むろん生絲も入つてるわけだが――いや、なかなかそんな旨いことは出來るものぢやあるまい。何ぢやね、あの窓に見えるいろんな金文字わ？」

「出資會社の名前でございます」

「ふうん相當大規模なものぢやな、よし……」

老社長はソフアに體を埋めて、考へこんだ。逆に讀んで見たら。

♠

信州のある地方で全盛の流行小唄を全く唄はない所がある。銀座節、波浮の港、ラヂオがあわてゝ禁止したり唄はしたりしてゐる時代に、これはまた奇特な事と、聞いて見ると、全町天理敎の信者で、流行節の代りに「助けたまへ天理王のみこと」をうたつてゐる。これをすゝめたのが饅屋のおやぢで、其家の看板に曰く、「宗敎は精神の糧にして饅は肉體の營養なり」だと。

乘る事にされたのだそうであるが原子はな氏と云へばその名を知つて居る方も少くはないと思ふ。帝展に出品して居られる。

この三氏がそれ〴〵異つた畫風の中に落付いた畫境を得て小さい展覽會ではあるが快い繪を見せて下さつた事が實にうれしい。一般に大きな展覽會よりもこう云ふ小さいものの方が個人々々としての長所や短所がゆつくりした氣持ちで鑑賞する事が出來てよいものだ。

甲斐氏は近頃色調にも畫風にもいよ〳〵落付いたしんみりした感じが深くなつて來た。柔はらかいなごやかな色だ。これは强烈な色彩の中に入るといさゝか弱すぎるので大展覽會では損であるが、こうしてじつと見て居ると滲み出る樣な味ひがある。心のむく儘に筆をとつてのんびりした氣持で描いた繪だ。山氣などは見たくもない。靜かな室に飾つて一人じつと眺めても見たい繪である。



「菊」は落ついたバックの色ににごりのない黄菊の色がしつとりと綺麗だ。靜物を一番澤山描いて居られるが、構圖が自由で馴れて居るのでどれを見ても相當面白い。やはり二枚の大きい靜物がよいと思ふ。果物では細長いカンバスに描いた林檎や枇杷等氣輕に描いてある。「長春公園にて」は小品だが實に好きな繪だ。カンナの花は唯赤いかたまり丈なのが少し物足りない氣もする。甲斐氏のは花よりも果物や其他組合はせた靜物の方が面白い樣に思ふ。甲斐氏について思ふ事はあまり早く落付いた畫境に入り過ぎてしまつて若々しい元氣を失つてしまはれない樣にと云ふ事である。

甲斐氏が一筆づゝ樂しんで描いて居られるなら橋本氏は反對に、湧き起る情熱で一氣にグン〳〵と描いてしまふと云ふ感じの繪だ。女性にはめづらしく地味な色調で力强い繪である。「鑛山に行く道」「秋の道」「街道」等それ〴〵よいが埋立地は點景人物等巧みで面白い場所に興味を持つて居られる方だと思ふ。滋い色調の中に所々に用ひられた朱色（ヴェルミヨン）がよくきいて居る。花の中では夏の花がしつかりして居ると思ふ。

深澤氏は又全々別な行き方をして居られる。巧者な輕快な繪である。洗煉された色を使つて單純らしく巧みにやつてのけてある。併し少し注意してみると細かい所になか〳〵技巧をして居られる樣だ。きれいな色の下に黑い線をのぞかせたりして。深澤氏の人物はもう出來上つたと云ふ氣がする。男の肖像はすつきりと器用に出來て居る。「赤い服」「こけしを持てる少女」等隨分無雜作に描いてあるが繪になつて居るから面白い。こけしを持つて居る繪は子供よりこけしを描きたかつたと云ふ樣な氣がする。そうではないかしら。「黑い服の少女」はちよつと魅力のある繪だ。「L孃の肖像」はまとまりすぎてわりに面白味が少ない。ジンジヤや百月草、りんどう等の花は色のハーモニーが美しい。灰色がかつた白い花の色。ローズ色、コバルト等の獨特な美しい色が灰色のバックの上に滲み出て居る。

甲斐氏の靜物橋本氏の風景、深澤氏の人物。各々異つたものを得意とする三人のこの展覽會が將來益々發展されるだらうと樂しみである。

（一九二九・一〇・六）

秋のピアノ

生田花世

「ああ、ピアノをならしてる‥‥おむかうの家で‥‥いい音色で‥‥」

ぢつと机の前にすわつてその音を追ふ‥‥その音が私の身體にさわるやうな氣がする、音の中にこちらがつゝまれるやうな氣がする、聽覺の意識なく（その實耳から入つてくるより外はないものを）きいてゐるといふしつかりした判別なく、音の觸感の中にゐる。風の音でも雨の音でもそれが、間隔をおいてくる音律であると妙に耳をかすれる。

ロ――唇などがものの味ひ、ものの寒熱にふれるのなどとちがつて、又、鼻のものの匂ひをかぐのなどとちがつて、耳の神經はおほらかに遠い音にたゞよふ。耳のところで、ワッと叫ばれる時ならば又かくべつ‥‥いつも耳は私の意識しない意識でその官能をはたらかせてゐる。ものの味ひ、もののにほひなどよりも音の忘れやすい理由でもあらうか。

然し私は耳の方は鈍い方ではない。だから西洋音樂の妙味なども十分に分らない。いい氣持にとろりとすることはする。そしてその音のする間すつかりのことをわすれて酔つたやうにはなる。しかしそれ以上のことは分らないらしい。

ものの音の中でと私の耳にたづねる。そのとき耳が答へるであらうことはおよそ次のやうなものであらう『私は何といつても風の音が一番すきです。いつか國の小松島といふ港のそばの砂濱をかざつた松林の中できいた梢に高い晴れた日の風の音の進み、忘れやすい風の音ではあるから、その音をかう〳〵いふ風な動きの音の進みだつたといふ風に説明は出來ないがその時の松風は、すばらしくよかつたのです。次が水の音。はじめて行つた伊香保の町の湯の音です。夜、電車から下りて停車場まへを、つまさき上りに木暮旅館の方へのぼり物聞山の下にかゝると、ざんざらざんざら湯の流れてくる音、何といふ快さだつたでせう。次が山彦、次が小鳥のなき聲、虫のこゑ（野原や土手や小松のかげになくこゑにかぎります）何といつてもいとしい人の聲の外は自然物の中できく音や聲の方が私はすきでした。

ものの音の中でいやなものはと私の耳にたづねる。そのとき耳が答へるであらうことはおよそ次のやうなものであらう『私はあの音をもう二度と再びききたいとは思ひません、地震の時の異様な地ひゞきを、それからいやな人の聲をそれから雨の日の子供のなきごゑ、春さきの猫のこゑ、このごろはあまりききませんが羅宇屋のチ――といつでも〳〵なる音、となりのうちのケンカ、へたな長唄のけいこ、謡曲のけいこ、同じ事をいくども〳〵くりかへすヴアイオリン…それから犬のキヤンキヤン聲ガス〳〵いふ蓄音器しかしにほひや味とちがつて、音の嫌忌といふものそれ以上いやなといふものにはあまりはつきり出あひませんでした』

いやともすきともつかないものの音はいかばかり多かつたことであらう、しかしそれにも一々、音としてのいろ〳〵の特色がある。出來るだけ、耳の敏感をと私は思ふ。

手習ひ

ゆく秋のつれづれ…黄ろい絹のかさの灯の下で、私は墨をする。何といふことなく手習ひをして見たくなつて。手習ひをすると心がしづまるからといつて、折々手習をするといふ風なことをいつてゐた人があつた。それはまつたくさうで、たとへ、心が亂れてゐないにしても、心を狭く深く限つて、よねんもなく文字かくしづかな樂しさは又格別のものである。

手習ひしつつふとおもふは自分の幼い時のこと、筆をもつのもよく分らないで、父や母にもたしてもらつた。指のあつかひが、なか〳〵器用には出來なかつたが、しかしとにかくも持てるやうになつた時の喜びよ。『い』『ろ』『は』と母に上から手をかさねてもつてもらつて、文字を書いた時のことよ。母が書くのか私が書くのか、おそらく、母の手が書くのだつたらう。『い』が書けたうれしさ。『ろ』の書けたうれしさ。そんな風にして、私は小學校へ出るまへに、五十音の大體をおしへてもらつてゐたものだつた。手習ひしつつ、ふとそのことを今夜おもひ出す。

さて、何を書かう、習字帖もないので、そこはかとなくらくがきする。

手習

朝な、朝な、手習すすむきりぎりす
美しき娘の手習ひや春の宵
小野炭や手習ふ人の灰せゝり。

はじめのと終りのとは、芭蕉の句、中のは今現在の俳人、村上鬼城翁の句である。

しかし、今は、ペンで書く人ばかりで水ぐきのあとうるはしき筆の手習ひする娘の人は少いに相違ない。ふと、そんなことをおもつた。

時雨の今昔

この音は、この耳に聽ゆる雨の音はまさしく時雨の音である。こんな雨の音を四月の雨にもきかなかつたし六月の雨、八月の雨にもきかなかつたとおもふ。寂しくしずかに絶えず、絶えず、それは同音律をもつて同軌道を歩む…音、音、音….

いろんなものの枯れはじめてゐる上に、――あさがほの蔓に、芙蓉の枯枝に、裂けた芭蕉の葉の上に――この長い呟きは、はてしもなくつゞく。

楓の木の上層の紅らみにふと目をとめた私は、『紅葉を染め出す時雨なるかな』とかう心からおもはずにはゐられなかつた。まだ二時すぎといふのに、くらいので、雨戸をすつかりしめる。そして、灯をともした部屋で、火鉢に手をかざす。別に手が冷たいといふのでもない、しかし、ふと、そんな風にして見るのも、これまた時雨ふる日の氣分であらう。

ところで今日のやうに朝から降り出してゐる雨は、外に出る人も傘をもつて出て行つてゐるし、雨の日の外出のいやな人は、晴れた時にといつて、うちにぢつとしてゐるであらう。ただ濡れてもいい木や草や石や川水などがこの雨の中で、じくじくしめつてゐるのだ。

初時雨しづかに渡れ桂川　（芭蕉）

川といふものは人も知るごとく長堤を伴ふ。都會に近いところなどはコンクリートなどで、灰色にぬりかため固い無雜作な堤防の方が多いが、田舍の長堤は、大凡その上に草を滿たしてゐる。さて、これからそのこまかな葉は、まるければまるいなりに、細長ければ細長いなりに、黄ばんでゆかうとする、その草のおびたゞしい叢群が、その堤防の上には溢れてゐるのだ。大河長堤、目もはるかなる草の褥（しとね）、それが時雨につゝまれてゐる風致を考へる、さうした河の渡舟を考へる。

渡しよぶ人は我なり初時雨　（芭蕉）
こゝに來て假初（かりそめ）ならぬ時雨かな　（同　）

かういふ風なことをそこはかとなく書いてゐた時に來客があつたので、出ていつた。その時開いてゐる玄關の外に、垣根の檜葉がそのそれぞれの葉の垂れ下りに、時雨しづくをためて白く凝つてゐるのが見えた。

白つゆや無分別なる置きどころ

といふが、これは

雨しづく無分別なる居りどころ

とでもいつて見たい。くだらぬことを考へても見る。

『さむいですナ』

と來客はいふ。

『ほんとに……一日降りましたね』

かういつて、私は、この間新しく買つたばかりの新綿のふくれてまるくなつてゐる座布團をすゝめた。客は、氣持よささうにその上に坐り、そして火鉢に手をかざした。

人々を時雨れよ宿は寒くとも　（芭蕉）

机にむいてからは芭蕉の時雨の句をひろひ出して味ふ。俳句のねらふところと、この時雨の心持とは、相呼應する。

しぐるゝや田のあら株の黒むほど　（芭蕉）
夕烏一羽おくれてしぐれけり　（子規）
松あればどこまでもゆく時雨かな　（成美）
松ばかり友にしてゐる時雨かな　（失名氏）
あれ聞けと時雨くる夜の鐘の音　（其角）
秋の山すそは時雨となりにけり　（成美）

最後に私は、次の有名な芭蕉の句を忘れてはならないのだつた。



旅人とわが名呼ばれん初時雨。

×

『むかし…むかし…時雨がふつた。』こんな風にいつて庭に降る時雨を見る。それは作りごとでも何でもない。次のやうなものを私は讀書の時に知つた。

一人の女
一人の男

いづれも、もうこの世の人ではない、とほいとほい昔のことだもの。

をとこ、せちに物いはんといひてきたり
門に立てるほどに、しぐれの降れば、をとこ
わたつうみの底に深くはいらずとも
時雨にだにも、ぬらさざらなん
せめていへば、よびて、すのこにすゑて物いふ、女
ふりとげぬ時雨ばかりに山びこの
聲をはかなくききわかずかな

時雨小景、何とほのかに浮び上る其の一場面だらう。

十月の終り——火鉢のこと——

秋も十月の終りに近づいて來たので、朝がさすがにうすら寒い。——起きるとすぐに、ガスで炭火をおこしてそれを八疊のへやの大火鉢に入れる。この陶器の大火鉢には一つの特殊の思ひ出がある。その思ひ出——何十年前の一つの思ひ出、——その昔の、私たち二人の嘗の感情が、火鉢の下にしいてある小さいふとんとともに火鉢の下に敷かつてゐる。それは、私たち二人のもつともかんなんな時の心である。家をもつた年の冬のことである。Sの仕事の方に大きい障害があつた。思ひもかけぬ世のつらさがピンと胸にもこたへた。その時に、たま〳〵入つて來た三十圓ほどの金の一部をさいて七八圓也で、この藍色の火鉢を、近所の古道具屋で買つたのである、その當時の私たち二人にとつては、又、三疊じきの書齋にとつては、この火鉢は大きすぎるのであつた。しかし大きいものを日常見てゐるのも一つの自己訓育である。この火鉢に火を入れる毎にこの火鉢に手をかざす毎に、この火鉢にタバコの灰ををとす毎に、湯のふく毎に、私たちの思ひかへさうとしたのは、昔のつらき、かなしき、まづしき日の心なのであつた。實際、私はその時の外、たゞの一度も彼の悲痛さを見たことはない。廿三のまだ世の中に歩き出さうとしたばかりの青年であつた彼は、身にあまるさてつの痛みに、びんのさけるやうに、心が裂けてその中でうめいた。そして、『なに…、やつて行くだけだ、もつと努力して行きさへすれば、こんな困難も却つてくすりになる…』といつて。しかしそのことは、數年の間のSの厭人のもとになり、厭世のもとにもなつた。世間によくある事で、若いための仕事の失敗だつたのである。今は笑ひばなし。

藍色の大きい火鉢に、秋のなかごろ、火をいれはじめる毎に、私たちは心をひきしめて、その苦しかつた昔の日をおもひ出す。火を新しくさしつぎつゝ今の平安をよろこぶ。



剱羽

時雨

四――のツヾキ

白けきつた座だつた。

座中のものがみんな、みんなの心を探る瞬間、暗の夜のようにひつそりした。

香の席なので遠慮をしてゐた煙管を、筒の音をポンとさせて吟中が引きぬいた。グッと來た癇癪を煙草を噛んで押殺した。

「太夫。」

咽喉にかすれた錆聲で荻江の家元がいつた。

「あなたのおはからひで――」

しんみりした瞳が輕く會釋して、小夜衣は風の渡る萩の花のやうに靜に身を振りむけて衣香をよんだ。

紅白の水引を二本あはせて輪に結んで、熨斗のかはりに三夜が折つた千代紙の大鶴、三寶がはりの文臺に矢羽根の簪と共に壁へはりつけた、半さんもらひますの紙が載せられた。

「お春さん、心ばかりのお祝ひ。」

小夜衣はその儘席を立つた。衣香は吟中と荻江の手もち無沙汰をすくつて、

「圍で薄茶でもあがつてお出なんし。加賀の落雁をもらひしたから。」

と誘つた。

半次郎は具合の悪い場合を、顎をつまんで空つとぼけた。お春は自分の前へ据ゑらた文臺を、小夜衣が室を出る時に、こんなものはいらぬといはないばかりに足で突きやつて、半次郎の膝の上にグイと乘りかかつた。

「天下晴れてだぜ。」

半次郎も厭味にお春の肩を抱へた。

五

時鳥が啼いて、三の輪の寮は青葉に暗かつた。はか〴〵しくない

小夜衣は廓へもかへれなかつた。

五月のはじめ、小雨の降る引けすぎ近く、水道尻の引手茶屋から歸る吟中は、一足さきをゆく落ついた足どりを、心できくやうにして、近よつてから低く聲をかけた。

「荻江の家元ぢやありませんか。」

「藏前へでもお出でしたか？」

眞直な傘を横にかしげて、聲をかけられた荻江は佇んだ。

昔からの十八大通の名殘で、藏前――幕府の米藏を預る――淺草藏前の大商人の間に、荻江節は流行してゐた。

「どうして、物騒だから、すつかりおぢけて　まひましてね。稽古どころぢやありません。」

全く、幕府の瓦解は扶持米を支配する御用商人には、自家の生死の問題だつた。彼等は不當な利益をつんで、王侯よりも驕つたくらしをしつづけきた三百年だつた。

「吟中さん、いよ〳〵どうも始まるね。」

「上野の方はどんな樣子でございますね。」

「今のところたいした勢ひだが、長く息がつゞいてくれりや、奧羽の方の氣勢もあがらうし、日和見をしてゐたものらも合體するだらうが――」

「德川三百年が、上野に籠つた若ものたちだけだとは、情ないことですなあ。」

吟中は眼がにじむやうな聲をふせた。

「大身の旗本たちは何をしてやがるのだ。大名なんて奴の表裏は、こりやあ頼まれないが、三河御譜代が、なんていふ醜體だ。」

「だが、將軍家御謹愼といふことを考へると、迂濶な盲動も出來ない。あたしは勝さんや、榎本を心だのみにしてゐるのだが――」

「そりやあまあ、お互に、今更他人はせめられやしませんがね、あなたが刀を捨てたのにはあなたの胸があり、あたしが、こんな馬鹿げた稼業に身をおとしたには、またそれだけの考へも苦しみもあつたからですが、自體なつちやゐませんなあ、今の奴らあ。」

「だからこそ、あなたも、さうした身におなりなのぢやないか。」

冷たく口をつぐんだ二人は、足許に目を落して――眞直にゆけば近いのを、言ひあはさずに斜に曲つた、歩みを揃へて。

――按摩の流す笛と、素見客のそそり節、何處もひつそりとしてゐる。

「これが廓かね？」

吟中はうらさびしく言つて見廻した。

「辻斬だ、押込みだで、金のあるものもないものも、みんな顫へあがつてゐるから無理もない。」

荻江はさう答へたあとで、

「吟中さん、あなたの甥御も彰義隊へお出ださうだが。」

「十八になつて、彼一人ぎりだが――」

「眞人間てやつあ、死に急ぐもので。」

熱いものが胸にこみあげてきた。

さびしい〳〵笑ひだつた。泣くやうな笑ひを聲なく、二人が互ひに自嘲した。

サクサクと泥濘を踏む足駄の音が後から來た。二人がやりすぐさうとすると、そのまた後から呼びかけた者がある。

「半さん、半さん。」

ヒタヒタと彼は追ひついた氣配だつた。

「どうも半さんだと思つたら、やつぱりさうだつた。」
「松公か？」
「お見かぎりですね、あの櫛の一件以來。」
「世の中がおだやかでねえからね。」
「全く物騒ですね、池の端の方なんか、暮れたら人つこ一人通りやしません。うつかり外へ出やうものなら、暗の中から、誰だッと來て、ギラリと光るんだから、膽つたまが縮みあがつちやはあ。こんな時世にや、命やいくつあつてもたりませんね、うつかりしちやあいられねえ。」
「そりようまた、なんだつて出て來たんだ。」
「無慈悲なことをいふよ、旦那にも似合はねえ。人間ひとりの生命でさあね、彼女が食物斷ちまでして逢ひたがつてやがるので――」
「で、逢つて來たのか。」
「格子さきだけでね。しがねえ身の上でさあ、職人なんて、職がなければ飯もくへないんだから、いくら女が命がねえつたつて、格子さきで顔だけ見せるのが闘の山さ。こんどの世にやあ、半さんのやうに生れてえ。癪を起した女を見捨て歸つて、これで途中でバッサリと、新刀の試しなんてやられりや、浮びやうはねえ。」
「そら！」
半次郎は懐から手を出して、バラ／＼と小粒を、松さんの差出した散蓮華のやうな掌へこぼしてやつた。
「半さん、後生がよござんすよ。」
「乞食婆のやうなことを言ひなさんな。だが、俺が廓にゐたといふ事を、お前の愛女のにも言つちやいけねえぜ。」
「何故ですい？」
「おらあ、小夜衣に突き出されたんだ。みつともねえからな。」
それなのに、今時分なにしに――松さんの顔にはさう書いてあつた。
「と、思ふだらうが、そこにやあ實も蓋もありよ。」
「なるほどね、あの娘さんが居たつけ。」
松さんはサラリと疑ひをはらして、ニッコリお禮のお辭儀も一緒にした。
「どうなんしても半さんは色男だ。」
取り詰めてゐる女には、醫者よりも此顔がと、松さん自身もまけない色男ぶつつて、クルリと後へ、鼠のやうに素ばしこく消えてしまつた。
微醉の半さんも裏町の方へ行つた。その、廓の水にしみきつた、背すがらを小暗に避けてゐた二人は見送つた。
「お春にも捨てられたのでせうか？」
「いゝや。」
吟中のいふのを打消して、
「あの後二人はね、鳥越の、矢藤大齋の別莊にゐた筈だが、半さんの方がもう鼻についたのだらう。」
「我々といひ、」
吟中はゴクリと唾をのんで愁くつぶやいた。
「あゝした男が多くなつたのだから、江戸も權現樣もねえ、メチャクチャになるのが當前だ。」
「上茶で流し込まなくつちやあ、おまんまが咽喉を通らないなんていふ罰當りどもは、一掃除されるのが當然さ。」
「家元、おたがひも覺悟しませうよ。」

「吟中さん、明日あたり、心靜に、二人で一段語りませうか？」
「いいでせう、しんみりと、人交しないでね。」
「まづそこらがあたしたちの總勘定さね。」
さだめない、人心の離別を二人は告げやうと約した。このさき幾年顏をあはせやうと、それはもうただの知己に過ぎない。
「では。」
淡い樂しみをもつて二人は別れた。

六

引手茶屋桐半の裏二階に、ひつそりとした籠つた客の一組、居つづけが氣をぬきに來たのとは違つて、人目を避けた對談ぶり、お瓶子のかはりにはわざ〱桐半の女房が通つた。
「と、いつた譯でね、半さん、お前さんはお春さんをいぢり破してしまひますよ。」
「嘘をつけ、お春が他人に破される女なもんか。」
半四郎はツルりと逃げる湯豆腐を、銀の箸のさきで追つた。
「お前さんによく似た、手にあはないお豆腐さね。」
對手は、いつぞやお春の供をして鼈甲屋へ來た、お咲だつた。小夜衣の部屋から桐半に送りとゞけてあつた、小夜衣の傍で半さんが暮した日の女夫箸なのを、輕くからかつた。
「違えねえ。」
半さんも鼻のしんでクと笑つて、自分の持つ箸から浴衣へ――平ぐけにまで眼をおとした。お咲の眼もいたづらに追ひかけた。
「何しろ、舍弟が座り込んだのぢやお春も驚いたらう。」
「半さんの弟にも似ない、强さうなお侍さんでしたよ。」
「おりやあ獨りだ、舍弟にやなつてるが從弟なんだ。强いなんて見かけだけよ、旗本に强いのがゐるなんと思ひや大間違ひだ、江戸つ子に男らしい男がゐねえのとおんなじだ。」
「おや、さうとばかりは言ひいせん。」
「お前の情夫や氣の毒だが、まあさういつたものだ。見ねえ、よく造つた細い細工だが、この錫はもう眞の鐵ぢやあねえ。それとおんなじよ、小意氣に磨いた江戸男に眞の男なんてありやしねんだ。」
「ぢや、なんなんだらう、化物かしら？」
「强がつてる奴も張子の虎よ、おれなんざ――」
ニヤりとして、空いた猪口をつきだした。
「まあ、ひとつ酌ぎねえ。」
「お前さんのやうなのが、眞の惡黨なのかね。」
お咲はだらしなくなつた膝の、淺黄ちりめんをかくすやうに褄をひいた。
「そいつも違はあ。生れた時つからの骨抜き野郎で、我儘がお前たちのいふ男らしさに見せるだけよ、變生男子つていふ獸物よ。」
お咲にはむづかしかつた。
「そんな赤ん坊の改名のやうな――」
半さんは咽喉ぼとけまで見せて笑つた。
「さうなんだ、赤ン坊の時に、男子には改名をつけちやつて、雌の形體だけ殘したんだ。」
「そんなばからしい事ばかり言つてお出ぢやしやうがない。お春さんはどうなるのさ。」
「此處へ連れて來ねえな、逢ひたくなつた。」
「呆れもしない、よくそんなことが言えたものだ。ざんざんなんし

といて、飽たから——」
「彼女には飽ねえ——といひたいが、あんまり濃厚つこいから、ちよいと家を空けたのだ。」
「あの娘はまた、的つきり小夜衣のところだと思つたから寮へ暴れて來たのを、丁度樓主さんが見舞にいつてゐて、廓へ連れてきて押籠めさ。」
「押籠められてもゐまいが——ひとつ、行つて見てやるかな?」
「半さんが?」
「行つて惡い事でもあるのか。」
冷たい眼だつた。
「でも、、半さん、それぢやあちいつと。」
「むしが好いといふのか? 詰らねえ義理だてた。買つた抱女の樓だからつて、娘の婿が敷居をまたぐのに遠慮をしなくつちやならねえといふ法はねえ。それに小夜衣でも居りあだが、あいつは寮にゐるんぢやあねえか。」
「おや?」
パンパンといふ小銃の音だつた。お八重は立ちかけた膝をがたがたとさせて、
「とう〱はじまつたのだよ半さん。」
と泣聲を出した。
曉方だつた。座敷の蠟燭は涙をたらして、花街の夜の底は赤く暗くにごつてゐた。半次郎は立つていつて窓の簾に手をかけた。初夏の夜空は雨に曇つて殘つてゐるが、雲のきれ間に青白いしののめはせまつてゐた。
時鳥が啼いた。

今の音を聞きつけた一二軒の家から、おなじやうに顏を出してゐる。
パチ、パチと小銃の音はつゞいた。
半さんはキユッと平ぐけを締め直すと言つた。
「お咲さん行かう。今のうちにいつておかないと、世間が騒ぎ出すとうつかり出られないぜ。」
「他の時と違うから、半さんが來ておくんなんしたら悦びいせう。」
お咲は亂れ箱に入れてある半さんの着物に腰のものをくるんで抱へた。
「ねえ、半さん、いよ〱大變なことになりいしたね、廓はどうなるんでせう。」
「江戸がどうなるのかも分らねえのに、吉原ばかり氣にしなくつたつていい。」
「でも、あちきやあ氣がかりで。」
「お前が氣をもんだつて仕様がねえ。お前たちやあ誰にも可愛がられるんだから案じることはない。」
パンパン、パンパン、パンパン——そら上野だと、何處もが急に騒ぎだした。その中を半次郎は丁字屋へ駈け込んだ。
丁字屋の店でも登樓客は大地震のやうに狼狽してゐた。僧侶で腰をぬかしたものもある。俳諧師だと僞つて通つてゐた宇滑もので、谷中の寺院へはもうはいれないだらうといはれて腰をぬかしてしまつた。
お春はお咲の知らせを聞いて、半次郎が顏を見ると、有無をいはせずに自分の室に引き込んで、今迄自身の寢てゐた、ぬくもりのあ

る夜具の中へ牛次郎を押込んでしまつた。

お春のはげしい情熱の催眠術は、その騒動の中で牛次郎をグッスりと眠込ましてしまつた。彼女はすました顔でお化粧をした。風呂をたてさせた。

何事があつても見苦しくないやうに――さうした覺悟は、氣位の高い遊女の中にもすけなかつた。客と一緒になつて顫へてゐるものが多い。大砲の音が響くやうになつてからは、どんなものでも落附いてゐられなくなつた。客も途中を氣にしながらも高い駕籠賃にいとめをつけずに歸つていつた。廣い樓内の中はガランとした。どんなものが這入り込んでくるかわからないからと、大戸を締て、出入りの者の家内が臺所の方へは幾組も寄つて來てゐた。

お春だけは滿足だつた。江戸が滅びやうと、吉原が燒かれやうとかまつた事ではなかつた。お春にやさしかつた人生はそのどつちにもない。彰義隊へいつたかと案じてゐた男が、鐵砲の音と一緒に飛込んで來たので、他人が不安になつた時彼女は不安が一掃され、美しく、一層氣儘になつた。

「誰がどうならうと、私に牛さんがあれば――」

であつた。親達も急にかはつたお春の機嫌よさに、牛次郎が來たのをさとつた。平日の分別など捨たやうに彼等もかまはなかつた。どうともなれ、お春がよろこぶなら、そして、何があつても金さへあればであつた。

だが、ふと、その騒ぎの中でも、牛次郎が來てゐるといふことが二階につたはると、小夜衣の友達たちは眉をひそめた。

「戰爭があつたつて、殺されてしまうまでは、あたしたちは丁字屋の抱遊女だらう。自儘に逃してもくれず、自分の命も自分でいとふことの出來ないほど、廓の仕きたりに縛られてゐるなら、樓主さんの方でも、どこが何處までも樓主としての義理がたててもらひたい。」

そんな思ひが、自分をあきらめきつてゐる遊女たちの、果敢ない反抗心をそそつた。小夜衣の妹分の此糸がきかなかつた。彼女はみんなの部屋を見舞ひにかこつけておとづれた。

おなじ店で、見立がへをされて自害した遊女もある廓の意氣地を知りきつてゐて、どうしてお春さんに牛さんを引き込ませたか、その譯をききませう。きかせずば、みんな揃つて店を出る――强い決心を此糸は樓主のところへもつて來た。

七

陰鬱な雨は小降みなく降つた。空には大砲の音がとどろいた。何處からともなくその度に遠近の叫喚が傳はつてきた。

「官軍の方が惡うございます。」

といふ知らせがつゞいてきてゐたが、午過ぎからは調子が變つてきた。

「今日中もちこたへれば、形勢を狙つてゐる諸藩の向背が定まるから、彰義隊のものだ。」

といふようになつてきた。だが、丁字屋の内所は別な火蓋がきられて、樓主は抱妓たちからの包圍攻擊をうけてゐた。

禿を連れて、新造を連れて、ツッと這入つてくる一組、一組。もし、今日のままで樓がつゞけてゆければ、どれもこれも、直には間にあはない、子飼ひからならした丁字屋の籠のなかの色よい小禽どもである。千金の鶯もある。目白もある、金雞鳥もゐる。どれひ

とつも手離しがたい代物だつた。
商賣品の優越なのをほこるよろこびで、裾をひいて、氣位高くはひつてくる抱女を一人〳〵今更のやうに眺めた。この女達をどう保護したら、すこしの怪我もなく安全にさせておけるかと、その心配も今朝から絶間はない。彼は、遊女たちが揃つてその相談に來たものと頼母しがつた。
「旦那さん、折入つて御相談が――
と此糸が言つた。それをお咲が忠義ぶつて押かぶせて、
「まあ花魁、貴女がさきに仰しやらないでも――」
「いゝえ他のことでないので、皆さんのお許しをうけて。」
此糸は嚴しく樓主の顏を見た。
「旦那さん、小夜衣は、道庵さまももう長うはもつまいとお言ひなんした。それでも旦那さん、あちきらは、お春さんに半さんを此樓へは引きこませられいせん。」
樓主の顏色はハッと變つた。
「これは變つた御相談だね。わたしはまた、今日の騷動を心配してみんな出てお出なのかと思ひましたよ。」
「旦那さん、地震の時には土藏へしまひこまれて、樓中の抱妓が、みんな燒死んだことさへある廓で、生命のことを案じたとてどうなりいんせう。證文や家が心配なのは旦那さんがたばかり、わちきらは、わちきらだけの考へよりありいせん。」
「すると、どうだとお言ひなのだ。お春はわしの家の後とり娘。半さんは――」
「小夜衣の間夫でござんす。」
樓主は顏をしかめた。と

「これお春、これお春――」
と母親の止るのもきかず、湯上りのちりめんゆかた、勝山に結つた初女房ぶりで、襖を荒つぽくあけてお春が飛出した。
遊女達にはお春は目もくれなかつた。父親にむかつてお春の言はうとしたのは、
――この遊女たちを、みんなおつぽり出しておしまひなさい。面倒くさい、金で買つて集めた女なのに、自分たちで集まつたやうな生意氣なことを言ふ。家の女郎でなければ大きな口はきけまい。
――こんな日が丁度いいではないか、巷へおつぽりだしてやるには――
彼女はクックと笑つた。
小夜衣だつて、病氣だつて、寮へ入れておくにはあたらない、證文を卷いてやるから、どこへなと好きなところへ行くがいい――
遊女たちは口惜しさうに眼を見あはせた。主人がほゝゑんだからであるが――
「そんな考へも、わしにもない事もないのだ。」
樓主はお春へともなく遊女達にともなく呟やいた。
「お春の我儘ひとつ通させられない位なら、資産があつても財寶のもちくされだから、なんとかしやうと妻とも言ひあつたこともあるのだが、こなた衆の身のことも思つて――」
「これお春。」
母親があはてて止めたが、お春は手箪笥の鐶をはづして中から年期證文を幾通となく、手あたりまかせにつかみだして、抱妓たちの顏を目がけて投げつけた。
――金で買へば、下駄もお前たちもおんなじだ、不用になればお

つぼりだす――

お春は手眞似をして、嘲笑つた。

お春にすれば、長年の欝積を一どきに叩きつけたのだ。一にも花魁、二にも花魁で、すべてが賣ものに華の、高慢ちきの女たちばかりだつた。お春は人間を憎んだ。男の面にも唾がひつかけてやりたければ、女は一層淺間しかつた。踏みつぶしてやりたかつた。男のおもちやになりながら、自分たちでなければ夜が明けぬやうに思ひあがつて肩で風を切る、――

男は賣らずに女ばかりが賣る――お春にはばからしかつた。金で賣つて驕ぶる――それもわからなかつた。

彼女たちには自由がない――そんな事がお春にわからう筈はなかつた。貧窮といふこともただ感じるだけでお春は眼に見ることも多くはなかつた。お春の目の前には、生れてこのかた、金を散じる人と散じさせる人の仲間だけだ。

散じさせるから偉いのか？ それがなんだといふきりだつた。生意氣な――小夜衣だつて此女たちの仲間ではないか。それなのに、主人の私にむかつて、半さんに熨斗をつけた、贈ものだと――

お咲が、ふとお春の激してゐる言ひたいことを半分さとつた。

「花魁がた、まあ聞いてください。」

溜涙を堪へて傾城たちが立上らうとしかけたのに、お咲は急いで聲をかけた。

「お春さんは、あなた方に言分があるのではないのです。お春さんの言ひたいのは、小夜衣花魁が、半さんに熨斗をつけてお春さんに渡したのだといふ事なのですよ。」

「さうだ。それはみんなも知つてゐる。」

此場をなるべく無事にすまさうとする樓主も口を添へた。

抱妓たちの決心はかたかつた。寄る邊ない身に今の世變は捨身の強さを何となく教へ、與へた。刄と火玉の雨の街へさらされて出てゆくことに躊躇させなかつた。

何處にゐても浮ぶ身ではない。それが彼女たちを強くさせた。とも角、小夜衣のゐる寮へ一同引きとらう――彼女たちは小聲で語りあはした。

禿のきくのは、先刻、ちらりとお春の居間を覗いたので、太夫について立上りながら愛想のつもりで言つた。

「お春さん、たんとおしげりなんし。」

思ひがけなかつたのでお春も顏を染めた。と同時に、初戀の若人も、この禿の太夫のためにと思ふと、怒りが噴きあがつた。

お春はジリジリ燒きつくやうに睨めた。男を掴んだ――絞るやうに掴んだ心嬌りが、一層闘爭心を昂らせ、お職の小夜衣を捻ちふせた氣持ちが、丁字屋樓中の妓女たちをすつかり蹴とばしてしまつてはゐたが、言ひたい事がいえないもどかしさは、體を暴風のやうに戰はせた。

其時店の若い衆がドヤドヤと押重なるやうに顏を並べた。

「どうも、上野の方が惡いさうで、へイ。」

それには誰もが、直には聲が出せないで唾を飲んだ。

「客の中に兩刀はゐまいな、殘つてるとすると面倒だぞ。」

「改められますでせうか？」

「俺にもわからないが。」

誰よりもさういつた樓主の顏色が惡かつた。お春はなんと拒もうと、半次郎をあのままにしてはおけない――

「とに角、花魁たちに怪我のないやうに――どんな馴染が來てもめつたに登樓ちやいけない。」
「旦那さん。」
此糸が、最後に立つて行きぎはに言つた。
「半さんはどうなりんす。」
「この際だ、お前方のいふなりに量らはうよ。」
「お春さんが御承知でかえ？」
「不承知なら勘當だ。」
「旦那さん。」
此糸は涙ぐんで言つた。
「そのかはり、半さんは、二階中で、命にかけても隱匿います。」
お春は煩さいものを拂ふやうに大きく手を振つて耳を押へた。そして兩手の人差指を二本揃へて見せて、外へ出てゆくと目の色で示した。

八

雨が一層はげしく降りだしてきた。大砲の音は近く響々と鳴つた。黄昏近くなると、ヒユー／＼と吉原近くの空まで小銃の彈が走つた。
廓の中は騷然としてきた。市內からの避難してくるものが日本堤下に固つてゐたりした。
お春は父親から、半次郎を一時何處かに隱した方がよいからと悟されてもいやとも應ともいはずに小判だけを三包とつて來た。自分の部屋にくるとさつさと着物を着代へはじめた。
家內のものも周章てゐると見えて、まだ燈火が來てゐなかつた。
半次郎は柱に寄りかかつて撫然としてゐたが、お春が來ると急いで煙草に火を點けた。妙に赤くポツンとその光りが浮いて見えた。
お春も灯のことは氣にしないで、急しさうに簞笥の中を掻きさがした。白い足の裏と、三ツ頭のくび筋が、體からバラ／＼にはなれたもののやうに見えるのを半次郎はボンヤリと見詰めてゐる。その間だけ二人とも自分よりほかのもののことは忘れてゐたが、お春は着物を出してしまつてから、灯のないことに氣がついたやうに手を叩いた。
お咲がすぐに來て、行燈をもつてきた。
「大變なことになりんしたねえ。廓へまで彰義隊の落人を改めに來るさうですよ。」
「なんだ、もういけなかつたのか？　あんまり早いぢやねえか。」
嘲嘲ながらも聲はさびしかつた。
「いけねえこつちやねえんだ、見つともねえ。」
「そりやさうと、半さんも早く逃げないでは。」
「それほどでもあるめえ。」
「そんな裕々したことをおいひなんして、御覽なさいな、お春さんはちやんとお仕度ぢやありんせんか。」
半次郎は振りかへつて忙しく訊いた。
「お春、ほんとか？」
お春は深くうなづいた。
「なんだつてお前までそんなに騷ぐんだ。」
「半さん、お前さんはなんにも知らないからですよ、彰義隊の騷ぎも大變なりや、此店のうちの騷ぎも大變なので。」
お咲はお春のうしろへ廻つて手傳ひながら、花魁たちとお春との

一件を手短に、大形に形容した。

「ぢやあ何か、お春を勘當しても、此糸の言條をたてやうといふのか？」

「さうすりや花魁で半さんを隱匿はうとおいひなんすのさ。」

「止めてくれ。」

半次郎は吐きだすやうに言つて顎髯の剃り殘りをさすつた。

「おらあとうから町人だ、旗本でも彰義隊でもねえんだ。刺身庖丁のやうな刀をさしやあがつて、衣紋ばかり氣にしやあがる武士なんざ大嫌えなんだ。だからよ、どんなお改めが來やうと逃げかくれはねえ。おらあ小夜衣の間夫は御免こをむつたのだから、二階でかくまはれる因縁はねえ。お春の亭主なら此處にゐて寐てゐたからつて、ちつとも差支へはねえんだ。」

「そりやまあ、そんなものですがね、此娘のお母さんの案じやうつたらありいせんよ。お金に不自由はないんだから、息抜きに何處ぞで遊んでお出なんしてもよからうにさ。」

「女子供つて——お前方、そんなに氣樂に今の時節を考へてるのか。」

「おつかないにやおつかないが。薩摩つぽは女にや優しいと言ふぢやおつせんか？」

お春は小判の百兩封金を三ツ、半次郎の前へ轉してやつた。

「薩摩つぽばかりぢやねえや。なんのときだつて女の強味はそこだあな、沈めたつて浮びあがるのは女だ。そこへゆくと俺なんざ、どつちつかずで浮びやうもねえ。」

半次郎は自分でも知らない間に腕組を深くしてゐた。

パチパチ煎り豆がはぜるやうな音がつゞいた。お咲は首をすくめて、半次郎の顏色を探るやうに見てゐたが、

「お春さん、もし何處へもお出でないなら、みんなの居る方に寄つてなさつた方がよかあありいせんか？」

と腰をうかせた。

「どつちの道、おらあ完全に、腰抜けの腑ぬけで通してみてえんだ。お咲さん、お前吟中や荻江のに逢つたらさういつてくんねえ。小夜衣は偉うございましたとね、うまい時に手をきつて、彼奴の顏は汚れませんてね。」

百兩の封を斷つて十枚、提げ煙草盆にさしてある懷紙をとつてくるんで、お咲にポンと投げた。

「また逢ふかどうか、世話になつた禮だ。」

半次郎は博多の帶をキュッと締め直しながら、

「お春、どうする？」

お春は立つて、男の胸のゑりもとを掻きあはせてやつてゐたが、突然腕を廻して締めつけた。

「どうするつていつてるんだあな、面倒くせえ。」

何とか言へとまで口のさきに出かかつたが、

「そいつあ俺が無理だつたが、いざつていふ時にや厄介だな。」

男の輕い舌打ちを、糸切り齒で食ひきつてしまひたいほどお春の憎みは唐突に來た。

——長く生ればかうした男の缺點ばかり見なければならない。いつそ殺してやらう。それも可愛いからだ——

お春は深くニッコリした。半次郎の小刀をもつて來て拔いて、差殺す眞似をした。

半次郎はドキリと、艶つぽくお春を見詰めて、
「死ぬつて――なんで？」
わざと分らないふりをした、白々しい眼を丸めて見せた。お春は小刀のさきで、行燈の紙へ疵を刻んで答へた。
――心中――。
半次郎は沈と目を凝した。二人が眼を見合はせて、心の底を讀みあつてゐるうちに、半次郎は怖くなつた、顫へあがつた。
此女に――この不具女に生涯つきまとはれたら、それこそ命短いといふ念が寒がらせたのだつた。
殺したら煩い。それに自分の手にかける氣になんぞはなれない。心中するといふのなら相對死だ。生殘つたつて一度一緒に死ねば女から怨まれる筋もない――生涯に一度位惚れた女と心中して見るのもおもしろい。
しかも今夜だ！
半次郎の意地の惡い心がほくそ笑んだ。ばかつ堅氣の奴は、祖先の佛前で腹を切つてゐるのもあるだらう。今ごろは血まみれになつて呻吟りながら、上野山内の森の木かげで雨たたきになつて死にかけてゐる奴もあるだらう。俺は死ぬ狂言だ。一番目の終りだ、二番目のはじまりだ。新らしい生涯を明朝からはじめるとして、對手にピンと跳ねる鯉だ、隅田川の心中もいいだらう――
「お誂へむきに、鳴物入りで、花火まであがつてゐやあがらあ。」
半次郎はお春の肩を嚴く抱てさゝやいた。
「おらあ刃物に厭れえだ。川だ。」
お春は承知したしるしに、肩にある半次郎の指を首を屈めて血のにぢむほど噛んだ。

――半さん、あたしが口が自由なら、お前なんぞに命はくれやしないよ。とうに、とうにあたしは貴君にと、たつた一言いひたい人があつたんだ――
お春はうつとりと、死の陶醉にひたりながら、心の底ではさうも言つてゐた。

九

相逢傘で二人は忍んで出た。
千住方面へ落ちる彰義隊が多かつたので、吉原道はかなり嚴しく物色してゐたが、お春を見ると半次郎を咎めなかつた。
今戸へ出ると、半次郎は、
「向嶋にするか？」
と言つたが、お春は首をふつた。お春は半次郎の袂をしつかりと握つて離さなかつた。
――深情といへば深情だがと、半次郎も惜いもののやうにお春の横顔をチラ〱と覗いた。
「どうせ死ぬのだ。場處なんざ何處でも構はないやうなものの、俺あ塵埃の浮いてるところはいやだ。」
半次郎はそんなことも、こんな事もいつた。
「空に小銃の花火でよ、袂には石つころのかはりに二百兩、これでお春と一緒だなんて、贅澤な心中だな。」
お春は流石に死ぬことで一ぱいだつた。半次郎でなければと思ひ込んでゐたままで死ねるなら、どれほど幸福かしれないが、そんな事は思ふまいとつとめてゐた。小夜衣や、樓の女に鼻をあかせるだ

けでいいのだと、それぱかりを思つてゐた。
　それでも生返つたら恥だと考へもした。自分は死に直すが、半次郎だけに生きてゐられては浮む瀬がないと悩んだ。手は强つかり組んだものの、互に對手をさきへ突きおとさうと心の中で爭つた。
　お春は突かれて、前へのめりながら、ハッとした瞬間に半次郎に縋りついた。二人は分銅をつけたおもちやのやうにフラ〳〵したが、爪さきに力を入れて蹈みこたへた。その刹那に、お春は、
「半さん」
　と押つぶした聲を出した。
　自分では氣がつかなかつたが、半次郎は吃驚して逃出さうとした。
「半さん、お前は死なない氣なのか。」
　お春は狂氣のやうに叫んだ。死なないのか、死なないのかと言ひつゞけた聲に、自分から氣がついて、ブル〳〵とふるへた。
「あたしは！」
　もう死ななくつていいのだ、口さへ自由なら半さんだつて――お春の體中に暴風雨が來た。煽風が卷上つた。堪へきれずガクガした。
「半さん、半さん、あたしは――」
　何もかもが一時に言ひたい。三ッ兒のやうな拙なさで、焦燥りながら訥つた。
「口が――半さん――うれしいッ。」
　お春が嬉しさに逆上ると、半次郎は血の氣がスーッと褪めた。口をきけば普通の女だ――そんな氣が頭の底のどこかでした。心中なんて眞つ平！
　秋の二百兩がばかに意識に來た。
だが、區限りをつけてしまはなければ――心中が緣斷りの手段になつてきた。おい、あつさりやつちやおうぢやねえかと言ひたいとき、お春は噴出するもろもろの慾念がおさえきれずに半次郎の首つたまにかぢりついた。
「半さん！」
　名を呼ばれた厭さに男はブルブルとした。
「お春、覺悟――」
　自分でもこしらへた、とつてつけたやうな言葉だと思ひながら、お春の腰をおすと、押しが弱かつた。お春は鮮かに身をかはして、ハヅミで半次郎の方がドブンと、一間半も前へ身體が反つた。
「薄弱者！」
　お春は唾を吐きかけるやうに罵つた。
川へはまつた情夫が死ぬか、生るか――お春は暗い渦を凝と目をこらして凝視めてゐた。大きなうねりが二三度河岸へぶつつけて、そのあとは以前のままで、引汐の流れは早く、雨足が消込んだ。
さびしさが、心にも體にも一どきに來た。自分も死なう、としたが死ねない。
　半次郎の腰にあつては眼につくと、長い袖にかくして來た刀が、傘と一所にあつた。涙はかはいてゐるが、聲のありつたけ、涙のあるつたけの動哭たさが、はちきれるほど胸に一ぱいだつた。
　お春は暗い水面をも一度見詰めた。
　初夜過ぎた三の輪の寮では、寮その家が顫へおののいてゐるやうに、暗の中に靜りかへつてゐた。今朝からの戰爭に、此處らには流

れ彈がはげしく來た。八ッ下りにはもう敗北沙汰で、落武者が逃げ込むの、官軍は見つけ次第に斬り殺すのと流言飛語を、よい附目にした略奪がはじまつたり、丁字屋の寮では、寮番の老爺よりほかは女ばかりなので、雨戸を閉てきつて一かたまりになつてゐた。

わけて今日は小夜衣の容體がよくなかつた。客色を賣る身の、花は時期をかざるものだと小夜衣は思つてゐた。散り時があると平日から身の引退を人に知らさず氣にしてゐたが、半次郎が情夫氣どりで居つづけるやうになつてから、廓の人は深い思慮もなく、美男の客は花魁の情夫ときめて通して、小夜衣がさうは思はぬうちに半次郎は小夜衣の半さんになつてしまつてゐた。お春さんがそれほどになんなら——小夜衣にこだはりはなかつた。お春のためを思へば、賴母しい夫ではない氣がしてだまつてゐるのは心が咎めた。

他人が思へばその爲の、思ひ嵩じた病氣と見られぬでもないと知りながら、いつまで生きても、誰のために生きる身なのか知れぬ、賣られた人形の生身の、いまが散り時で、花なら散り時であると觀じてゐたのである。一度病らひついてから、盛時の虚名をもつことの出來ない世界なのを、小夜衣はよく知りすぎてゐた。進められる醫藥も、深切でくれる祈禱札も、なぐさめも、心の覺悟を突きくづしはしなかつた。

晝間廓から見舞に來た時、禿の三夜も綾衣も店へかへしてしまつた。明日は自分も歸るからと——

時々千住の方で、小銃の音がするだけで、無氣味なほどの靜寂さが寮の内外に漂よつてゐた。

「息苦しいからすこし戸をあけて——」

と小夜衣は云つた。空が見たかつたのだつた。



衣香は、あれこれとの不安をかくして雨戸を二枚ばかりあけた。

「あの白いのは花菖蒲が咲いたのかねえ。」

「紫のも絞りのも、そりやあよく咲いした。雨が晴れたら、明日は庭へ行きんしよう。いつそ氣がはれてよいかもしれない。」

「雨はもうやみんしたか?」

「やみんしたよ。まだあぶないけれど——月が出るのかして、雲がきれて、何處か空が明るうおす。」

「贅澤だが、こんなときに、薄茶がほしいけれど。」

「白湯をたぎらして、よい加減にして來いせう。ついでに煎藥のことも言いつけてくるから、ちいつと時間がかゝりいす、招びたかつたらいつでもよんでおくんなんし。」

花魁は池の菖蒲の白い花に眼をひかれたかと、衣香は立ちながら、青蚊帳の中に白く透く、ほのかな小夜衣の顔に心をひかれた。

「小夜衣。」

返事はなかつた。蚊帳の裾の緋鹿の子がなまめくばかりで、室のなかは清寂が領してゐた。

「小夜衣。」

刄のさきが青蚊帳の裾をあげた。こぼれて出るものは炊きしめた伽羅のくゆりだけで、ほのかな白さに小夜衣の面はうごかずに匂つた。

「死んだのかしら？」

脅さうとしたものが脅された。小夜衣は白磁の勢至菩薩のやうに端然と微笑して、この世のものではなかつた。

袖をちぎつて覆面にしたお春は、やりどころのない鬱憤を蚊帳の釣手にあたつた。と、

「しでえめにあつた。」

と、縁側へ腰をかけて、袂をしぼつたり耳の水を出したりして、

「おさよ、おい、おきてくれ。」

といつたのは半次郎だつた。

「おらあ、すつかり感心した。そらお土産だ。」

コロリと二包みの小判。

「こりよう落さなかつたのが、まだしもの目つけものよ。」

刀が光りをひいた。半次郎は飛び退いて庭から凝と窺つた。

「誰だ。」

お春は眞つすぐにキッサキを突出し、雨戸に手をかけて立つた。

「お春か？」

半次郎はなんでもないふうにいつた。

「面白い女だ。そんなに俺が殺したいのか？」

お春は歌舞伎役者のするやうに、大上段に刀をふりかぶつた。

「お前もおらも、床の中ぢや、よく死にてえの殺してしまひてえのと口説の眞似はしたが、今日はお互ひにやつたなあ。これで怨みつこはあるめえ。」

お春は庭へ刀を投げ出した。

「小夜衣は死んだ。」

お春はプツリと言つた。

「殺したのか？」

半次郎は流石ギョッとして聲をすくめた。お春は先刻までの聲で、聲はなく頸を振つた。

「お春、ここへ來な。」

二人は縁側に差向ふと、どつちからともなく兩手を握り合した。

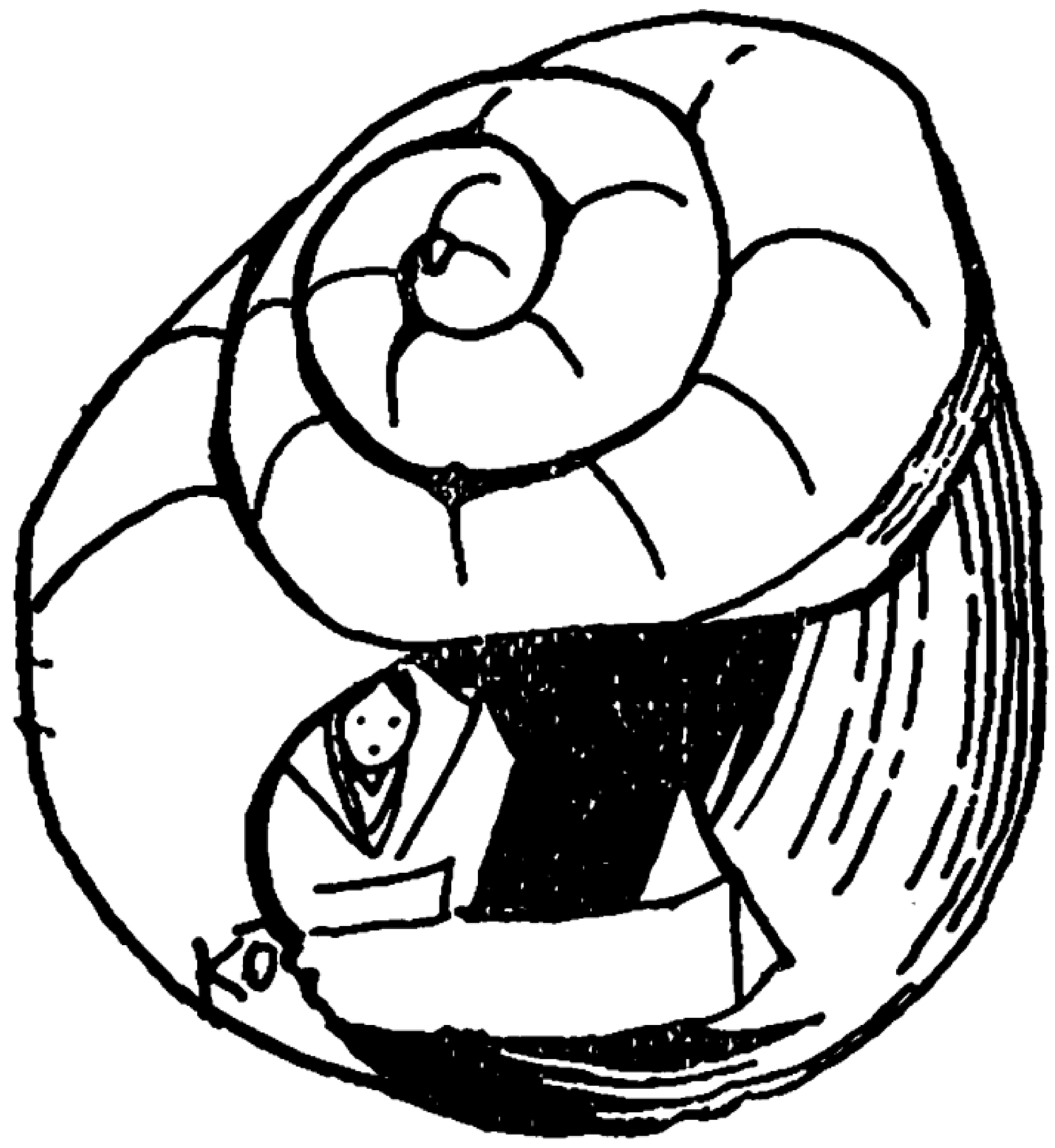
「お春、どうする。」

お春は半次郎の眼ばかり見てゐた。

「仲あよくするか？」

二人は意味の深い笑ひを受取りあつた。お春の眼はいたづらに燃えた。轉がつてゐる二百兩を目示して、それがあるうちだけ他人でなくと語つてゐる。

半次郎は脳のしんに針を打たれたやうにシンとした。この女にや、うつかりすると飲まれるぞと感じながら――（完）



女看守

川瀬美子

夫はいつになく上機嫌でかへつて來た。

佩劍ををガチヤ〳〵云はせながら、浴衣に着かへると、末の子をひざにのせて緣側へ座つた。

「おい。とう〳〵一人あきが出來たよ。」

「えゝい、ほんとう?」

胡瓜を切つてゐた友枝は、ひつゝつたやうな聲で聞き返へしながら手の甲でひたいの汗をぬぐつた。

「太田ね、あれが息子のところへ行つて了ふとかで辭表を出したんだ。二三日の中に二課長の方から、呼びに來て辭令が下るだらう。まあこれで一安心か?」

「まあさうなればね。」

わざと平然として答へたけれど、友枝の心は、風船玉のやうに輕くふくらんだ。

「しかしはじめ、いくらぐらひ與れるかしらん」

「取締りなら一寸少くなるが、授業士で入れば三十五圓はよこすだらう。」

夫の給料だけでこす月末の苦しい遣繰りを思つて友枝は微笑んだ十年近くの看守勤めからやつと部長に昇格した夫が逃[illegible]囚を出したと云ふ一夜の失策から、又もとの平看に下されて以來味はつた事のないゆとりのある氣持だ。

「十年もコツ〳〵つとめてやつたのに一夜の失敗でそれも自分でした事ぢやないのに平看に下すなんて、あんまりだ。いつそ辭表をた

たきつけてやればよい。」

その事件が起つたとき友枝は興奮して夫にくつてかゝつた。

しかし夫は胃弱で年中青べうたんのやうな顔をしてらつきやうくさい息をはいてゐた。今この職をはなれたらどこでこれだけの給料を出してやとつてくれやう。自分達夫婦つきりならそれでもいゝしかし姑と小姑がゐる。そして三人の子供が――どんな屈辱にたへても育てねばならない子供がゐる。

「子供をそだてるためには水火の中をもいとつてはならない」と云ふ古風な諺がいつか一つの本能の様に頭にこびりついてゐた。彼女は、御仕立物の看板がめぼしい結果をもたらさないのを知つて夫が看守であるばかりではなく、彼女自身も典獄にすがつて、女看守となる二重の屈辱にたへる決心をしたのだつた。それから三日目の朝監獄から小使がよびに來た。

久しぶりで薄色レイヨンの單帶をいそ〳〵としめると、胴が長くて尻の大きいのが目立つた。

監獄の中は、古い沼の底のやうにしめつぽい靜かさだつた。形式だけの試驗として、二課長の前で、監獄則をよませられてゐる友枝の目の下は男囚の作業場だつた。澁柿の色の囚衣にまじつて生のない機械のやうにつゝ立つてゐる看守達が目に止つた時、彼女はふとその中に夫の交つてゐない事を確かめたいやうな衝動にかられた。

辭令をもらつてかへる友枝は、上の男の子に夏のはじめから買つてやりたいと思つてゐた麻の夏服を買つた。

「かうなると、かつてやりたい物が一時に出てくるわ。」

夕飯の時友枝は夫をながめてほゝゑんだ。夫は、末の子の頭をなでながら笑つた。

「まあお母さんにどん〳〵かつてもらふさハヽ……」

しかし姑と、女學校に通ふ小姑とは、ひたいの下で目を見合つた。なづまない空氣がそこにあつた。

雜房の若い女囚達は、あらゆる慾望をもて餘してうづ〳〵してゐた。うばはれた自由の中からまだ殘つてゐるものをとり出さうと努力して彼等は監房の中を、掃除する事をみつけた、どの監房もどの監房も下にしかれた莫蓙は脂をしいたやうにぺか〳〵光つてゐた。

×號獨房は、鼻と眉とに特徴のある若い女だつた。

「×號ね、赤ん坊があるのよ、未決に入つたはじめよく乳をしぼつてたもん」

「うん、この間の入浴の時みたら乳首がくろかつたよ」

看守溜りでは最近未決から下りて來た×號についての話しがはづんだ。

「社會主義つて云ふ奴はどうして物好きにこんな所へはいつてくるんだらうね、あの女仲々別嬪で、それに私等よりずんと學問もあるらしいのに」

「あんな事して、あいつらは何がおもしろいのだらう。子供があり

やあ勿論亭主もあらうにこゝへ來ちやあ可愛いゝ亭主にも會へないのさハハ、――」

女達は黑い綿朱子の袴の腰をゆすつてうつろに笑つた。

看守長の未亡人で瀧川と云ふ女は自ら女看守長を氣取つて常々から他の女達に高壓的に出る女だつた。

友枝が最初から授業士として、かなり優遇されてゐる事に女特有の反感を小さい一々の行爲に表してとかく彼女を冷眼視した。

「野瀨さん」

女達がそれ〲の持場に出て行くと、瀧川は出口のイスにかけてゐる友枝に聲をかけた。

「日課表はキチン〲いきますか？」

四人にさせる作業の日課をくわしく正確にしるす日課表の記入には、馴れない友枝はかなり苦心してゐた。

「まあどうにか――。」

「どうにかぢや困りますね。出來なければ出來ないと課長さんに言つてやめさせてもらつた方がよろしいよ、大體はじめからあんな仕事をするなんて無茶だから」

「でも課長さんもわからなければ瀧川さんにきいてくれとおつしやいましたし、それに主人からもいろ〲敎はつてどうにかまちがはずにつけられますから」

主人と云つた時瀧川がたるんだ頰で一寸笑つたやうに思はれた。

「ともかく出來もしない事をしやうとしないで課長さんへ出來なければ出來ないと云つて仕事をかへてもらつた方がとくですよ」

瀧川の云はうとする事が――もつてまはつた侮蔑とあさましい利己心とがわかつて友枝は――そんな事ではへこたれませんよ――と心でつぶやいた。

監獄の門を出ると人氣のない廣つばの乾いたほこりが南風にまかれて目つぶしのやうに顏へきた、砂ほこりがざら〲結膜へたまるのがわかつた。眞岡の着物が足へまつはりついて歩きにくい。

友枝はふと目の前に、黑い薄物に白い腰卷きがすけて見える女の半身をみた。

「御苦勞樣」その猫なで聲とはにてもにつかぬけはしい視線が友枝の上に長く尾を引く。

典獄夫人だ。見上げた顏に、白粉がしはを埋め頭に鏝の跡が深い。

家の近くまで來ると心が和んだ。

「おかあちやん」

表で遊んでゐる末の子が袖にしがみついて來た。まだ乳離れをしきらぬ數へ年三つの末の子は、一番母を戀しがつた。

中へはいると茶の間で、姑がトラホームの中の子の目を、赤いきれで洗つてゐた。こつちへおいでと明るい所へつれて行つて、まぶたをめくつてみると上も下も目の中がざくろのやうに赤い。

「お母さん、めぐすりを買つて來てさしてやつて下さい。ホーサン

で洗つて」

姑は氣のない返事をした。

「一寸×號ね、あれなぜ入つて來たのか知つてらつしやる？」

寢苦しい蚊帳の中で、末の子の熱い寢息を左の肩に感じながら、夫にきいた。

あれはお前××レーヨンの昨年の爭議さあれの亭主も三年で入つてるよ昨年末の東洋一を誇る××レーヨン會社のゼネラルストライキは友枝の記憶にもあつた。當時の政府黨の要職にある社長を持つ會社側では正義をたてに團結して事に當る勞働者達の要求はことごとく否む事が出來なかつたその腹癒としてか法律の力をかりてその首謀者達を獄屋に送つた。

「亭主が首謀者で、それにあのストライキを勝たせたのはあの男の力だと云ふぐらいとても職工達からは人望があつたんだよ。あの女も中々しつかりした女で、やつぱり亭主と一緒に職工達を煽動してゐるんだらう。」

「それで一年とは隨分長いのね、先達あんなにやかましかつた市長の不正事件なんか長く引つぱつておいて結極は無罪になつたのに。それで一年ぢや長いわね」

「まあ、底には底があるさ、俺達にはわからないからくりがえらい奴等の間にはあるものだよ、しかし主義者は何てつたつて不利さ」

「子供があるんですつてよ。子供が――。子供迄振捨てゝあんな所へ這入なくてはならない樣な事するなんて私氣が知れないと思ふ」

「未決にゐた時誰かゞ子供が心配だらうつてきいたら子供の事位をさう氣にしてゐたら私達の仕事は出來ません、子供は仲間の者で育てゝゐてくれるだらうから安心してるつて云つたつてさ。それ位太々しい度胸がなくちやあこんな所へも入つてこまいて」

夫はかう云ひ終るとねがへりを打つた。その言葉は友枝がその女に感じた女特有の細いセンチメンタルな同情をふきとばした、女が――母が子供への愛着をさうも簡單に處理して突進してゐる未來の世界――、友枝はしばつてもしばられない光明と希望をもつてつい目の前まで展がつてゐる未知の世界の壓倒を感じた。

いかに子供への愛着がたへず判斷と推定を下す前に理性の上にはらひのけがたい重さでのしかゝり正確であるべき理性の指針を磁石のやうにグン〱ひつぱつてゐるかを思つて彼女は自分自身とその女とのはかり知れない距離に云ひ知れぬ興奮をよび起されて幾度かねがへりをした。

殘暑は油を煮たやうなしつこい暑氣をもつて襲ひ掛つて來た。

その朝友枝が日課表を、課長から受けとつて工場に行く途中での事である。

「何をつべこべぬかしやがるんだいこの野郎」

キン〱する瀧川の聲だつた、雜役の年とつた女が二言三言言葉をかへしたあげくの事だ。

瀧川はやにはに右の足をブルンとふりあげると老婆の肩をけつた、よろ〳〵とするのをつゞけてけつた。又けつた。老婆はよろめいてへたばつた。人間と人間との間の出來事とは思へない光景だ。

「もういゝでせう。およしになつても」

友枝は本能的に聲をかけた。

「んゝ大きなお世話だ。」

瀧川はけるのをやめて後で手をくむと友枝を正面から見すへた。

「んゝ、餘り囚人に親切にして旦那さんの二の舞を踏なさんなよ」

廣い肩をゆすぶつて工場の方へ行く瀧川の後姿に友枝はカッとした。しかもやりどこゝのないふんまんだ。囚人をどんな苛酷にあつかはうと出鱈目の理由をつければすむのだ。屈辱は無制限だ。

その頃末の子は引つゞいて毎日下痢をした。姑にまかせてある毎日の食物が悪いのかも知れない。牛乳が新らしくないのかも知れないと云ふ輕い疑念をはさんで友枝は姑によく注意した。

「そりやどうしても親が育てるやうにはいかんわい。何しろまだすつかり亂離れをせん子だからなあ」

奥齒に物のはさまつたやうな姑の言葉に彼女は不安になつた。

子供は元氣を失つて表へ遊びにも出なくなつた。右の手をひたいにあてがつてみるとジーンと感じるかなりの熱だ。靑い便がひつきりなしにむつぎをよごした。

「あなた、おつ母さんによく注意するやうに云つて下さいよ、私が云ふと角がたつから」

監獄でつとめてゐても友枝の感覺にはつきり子供の高い體溫が感じられた。

夜勤だつた彼女はカンテラを片手に監房を巡回した。女囚達のいびきが雷のやうだ。ふと彼女は×號の獨房の前で重々しいうめき聲をきいた。カンテラでてらしてみると若い女は兩手で腹をおさへてがまのやうにはつてゐた。

「どうしたの？　腹がいたむ。」

女が強くうなづくのを見るや否や友枝は監房の戸をあけて女をかかへるやうに病監へ運んだ。瞬間職務の觀念がぴんと頭へ來た。こゝでは人の世の人情は必要とされないのだ。彼女はその夜夫が當直であつた事を思い出して廊下をかけて行つた。

「馬鹿！　そんな事が上へ知れてみろ一ぺんに首だぞ」

「だつてあなた病氣な者はいくら規則だつて看病してやらなければ――。死にでもしたらどうするんです？　死にでもしたら――。」

「そこが規則ぢやないか。まあ今日の事はこつそりやつて次から氣をつけろ。」

友枝は夫とはげしく爭つた。

いつか職務をはなれた心で彼女は夫を仇のやうに思つた。

あくる日子供はあひかはらずの高熱だつた。姑は賣藥をのませたからその中に熱も引くだらうと云つた。

役所でのつとめの間もその子の事が、後頭部へ頭痛のやうにこびりついてゐた。引け時が待ちどほしかつた。

時間が來るといそいで課長室へ走つて行つた彼女はふと天井のかまちにつり下げられた男囚を見た。

看守が三方にゐてつり下げた男を代る／＼ふつた。しかしその男はぶらんこにでものつたやうに平然としてゐる。

狹衣だ。

友枝はこの男囚が夫からきいてゐた不死身の身體をもつてゐる男だなと思つた。

「畜生！　この野郎のからだは一體どうなつてるんだらう、くそいま／＼しい。」

看守の一人はかう云つて强くその男のからだをつきのめしたがキリ／＼とからだが廻つた外は、その男のやゝおどけた目付には何の變化もみられない。

他の如何なる囚人の心膽をもさむからしめるこのもつとも慘虐な道具もこの男には何の効果をもしめさない。

「野瀨さん。あんたこの頃朝は一番おそくてかへりは誰にも負けなさらんね」

瀧川の一本調子の聲がこの部屋へはいつて來た。

友枝が言葉を出さうとする上から聲がした。

「瀧川さん。あんたの靴はでつかいね、まるでボートみたいだフフン」

「だまつてろっ」

「畜生手前等しやべる所ぢやないッ」まづ看守の一人と瀧川が同時に叫んだ。

上の男はブランコのやうにからだをブラ／＼させながら仰山さうに首をすつこめた。云はうやうのない痛快さが友枝の心を走つた。

友枝は日課表を棚へたてるとだまつてユル／＼部屋を出て行つた。

かへると子供はスヤ／＼眠つてゐた。やがてうすく目をあけて水を求める子に冷たい湯をのませて彼女は浴衣をきた。

一日傍へついて看護をしてやれない自分自身に對する悔恨に似た氣持がふと湧いた。

二三日子供は小康を得た。

その日の正午すぎ看守溜りへかけて來る小使の姿が彼女に不吉な豫感をよび起させた。

「野瀨さん一寸――」

「あゝ」

みなまで云はせずに友枝はその小使の後についた。

役所の門から家までの風物は彼女の目にすべて無意味だつた。

「お母ちやん坊やがねえ」

上の子がとび出して來て彼女の手にしがみついた。

「それでどうしたんですおつ母さん」

「父ちやんが」
上の子が云はうとするのを姑がさへぎつてあはたゞしく云つた、
「お醫者へつれてつたよ、今にかへるだらう」
「一體どうしたんです」
「急にひきつけを起してね、水をやつてものまないんだよ」
その時友枝のとがつた神經に夫の靴音がふれた。
表へかけ出してみると、官服のまゝの夫の手にだかれた子供の顔の白ガーゼが彼女の心を打ちのめした。
「諦めろ、むかふへ行くとすぐだつたよ。みて貰ふひまもなしに」
うばふやうに夫の手からひつたくつた子のからだにしがみつきたいやうなかすかなあたゝかさがあつた。
夜近所の者が二三人通夜に來た、彼女はその死體をだきしめてはなさなかつた。
「坊や、母ちやんをうらまないでおくれ。母ちやんは坊やが――坊やがこんな事になるなら役所へ出るんぢやなかつたんだよ」
彼女はかうした事をくど〳〵云つては泣いた。子供のからだは靈の背のやうに底知れぬつめたさだつた。
子供の死體をみかん箱よりやゝ大きい棺に入れて形ばかりの葬式をすませると彼女は氣をとりなほして勤めに出ねばならなかつた。
夜勤だつた彼女はうすぐらい中にしば〳〵子供の幻をみた。生きてゐる事が無意味なやうなやるせなさをひし〳〵感じた。
ふと×號の女を思ひ出した子を死なせた。母と子を殘して入獄してゐる母と――この對象がふと友枝の心をつかんだ。
この町のどこかで母の乳をもとめて泣いてゐるであらうところのその女の子を想像した。するとその子の顔がいつか彼女の死んだ子の顔になる。
「私は餘りのかなしみに氣をどうかしてゐる」
じつとしてゐられなくなつてカンテラをとり上げると巡回に出た看房の一つ〳〵を規則的にカンテラでてらして歩いて彼女は×號の獨房の前まで來た。
ふと彼女は話しかけたいやうな衝動を感じた。
しかしカンテラの光にてらし出された姿は彼女の想像にはない女のねてゐる影だつた。
それは友枝にとつてどう思つてもわからない女の氣持だつた。
「あの女に子供があるつてほんとうかしらん」
彼女は輕い疑問を抱きながら廊下をトボ〳〵歩いた。
一九二九八、九、夜

草の實

長谷川かな女

拂ひきれぬ草の實つけて歩きけり
草の實をつけて歩きぬ紅葉林
散紅葉に猿戯れて日暮れゆく
冬紅葉子の輪を拔けて佇みぬ
沈む日を子に拜ませぬ冬紅葉
冬葉紅うなづきて帽を打ち振るよ
避けてゆく師走の人にさりげなし
冬ざれて焚く火に凹む大地かな
冬木立に獸の臭で嗅ぎ分くる
手袋をつかみて人を見送りぬ



熱帯

岡山恒子



おさだの病室と云つても
それは牢獄にも等しいうす暗さと狭苦しさ、そのものだつた。東と南が煉瓦が悉に入つてゐる黄ろい壁で北の方は便所に向つてゐたし、一方はカーテンとは名許りのよごれた饂飩屋の暖簾のやうな調子にかゝつてゐるのであつた。天井は云ふ迄もなく低く、そこにかやり線香の煙があくどくむせるやうに、立籠めてゐた。色目鏡なしでは歩けない此處の強い光線もこの一隅には何の恩澤もなかつた。

彼女は今うつら／＼と薄目をしては眠つてゐた。時々物に怯えたやうに、目を開くかと思ふとそこいら中をまじ／＼と無氣味に眺めたり、汗でべつとり額にくつつく髪の毛を掻き上げる目　を上げて急にさめ／＼と泣き出したりした。氷枕がガバ／＼と音を立てた。おさだは今又、昨夜から昨日からの考への續きを高い熱の中に考へ續けるのだつた。その顔は不幸に引き歪み、目は弱々しくとろんとしてそれでゐて一沫の何かしら反撥するものがギラ／＼光つてゐた。高い鼻と落ちた頬とのくぎれ目から涙が後から後からと流れ落ちた。それでも彼女は泣いて泣いて、泣いた揚句には幾分心も和んでガツカリして、又一寸寢付くと云ふ風だつた。

おさだが誰も死んだ事のないラングーン熱と云ふ名義で此の暗い部屋に寢付いたのは、四日許り前だつた。今が病氣の峠らしく熱も四十度近くと云ふ高さだつたが不思議に彼女は體全體がだるい外際立つた苦痛を感じなかつた。その爲に頭がぼんやりしたり、嘔吐を催したり、譫言を云つたりするやうな外の熱病の症狀は少しもなか

つた。で彼女の夫の儀作も妻の病氣に就いては少しも心配しなかつた。目鏡をかけた印度人のオールドミスの醫者も、こりやまるで關稅のやうなものだからと誰しも一度は必ずかゝるこの熱をたかをくゝつてゐた。そんな調子で皆彼女の身體の方の事許りを樂觀して、まるで彼女の精神と云ふものを無視してゐると云つてもいゝ具合だつた。が、實のところ、彼女の熱は新らしい馴れない風土から來たものでなく彼女の心の平靜が失なはれた爲に引出したものだつた、それはこの明治か乃至はもう少し前の女である、おさだの性格的の破產でもあつた。――

おさだは今泣いた後の少し輕い氣持から自分が今こゝでかうして寢てゐるのをまるで赤の他人のやうな氣持で、不思議相に眺めるのだつた。蜘蛛の巣と煤けた天井をぼんやり見乍ら一月前まであの田の中で蛭にくはれながら田の草を取つてゐた自分が――と思ふとほんとうに長い〳〵二十三日間の船の旅をしてかう云ふ處で寢臺と云ふ、床からひよつこり高いところで寢てゐる自分がどう考へてみても不思議に思はれるのだつた。それ許りでなく、かうしてねてゐるとバキ〳〵バキ、ガウッ！　と云ふすさまじい音がする。百姓許りの寄り集りの村の音とは似もつかない譯の判らない噪音である。その外、西洋館と云へば立派なお城のやうな高い江戶畫にある御殿のやうに美しいものだと許り思ひ込んでゐたのに、この自分の寢てゐる西洋館は？――向ふのトタン屋根は？…さう思ふと之も不思議の一つだつた。それよりもそれよりも、彼女にとつて尤も悲しく、まるで豫想外の事は、亭主の儀作と三年振りに逢ひ乍ら、しみ〴〵話も出來ない事だつた。たとひ自分が來る早々病氣になつたとは云へ、何が忙しいとは云へ…それは彼女に致命的の悲しさを與へるものだつた。それ許りでなくさすがのおさだにもそれと、うす〳〵判る事は儀作が妙におさだの前におど〳〵したり、彼女が何か云ひかけやうとすると、するりと逃げてしまふ事だつた。三年前まではあんな亭主じやなかつたと思ふと堪らなく悲しかつた。何が爲にかうはる〴〵亭主を尋ねて來たかが省みられた。變り易きは男の心と秋の空と彼女の村で云ひ馴らされてゐる言葉を思ひ出して、もしやと思つてみたが、どうしてもあの氣の小さい正直ものゝ儀作がと思ふと、そんな事を思ふのさへ恥かしいやうでもあつた。その癖船の中でカルカッタへ行くとか云ふ、西洋人の妾になつてゐる女の言葉が強い印象となつて、思ひ出されたりした。

――植民地の男なんてまるで動物だからね。私しや成るべく大きい金のある動物の方がいゝと思つて今のを持つてゐるけど、――牛年の間に、すつかり玉がへをしたかも判らないから、――まあさうしたら、泣き付いていや、をどして取れる丈金でもとつて、さやうなら、したろと思ふが――

おさだにとつては恐ろしい女だつた。かう云ふ女もあればあるも

のかと恐ろしさの餘り感心してしまつた程だつた。でも、彼女は船醉ひも我慢して一日も早く亭主に逢ひたさに幸福に胸をふくらましてやつて來たのであつた。あの子には氣の毒だが……さう思ひ乍らも足手纒ひの儀三の死がこんなにも早く、自分を亭主の下へ連れて來たのだとも思つて疫痢で死んだ四つの吾が子に感謝したいやうな氣持にもなつたりした。――と云つて、おさだは別に儀作と好き通しで、一緒になつたと云ふのではなかつたが、むしろその馬鹿正直で氣の小さいところなどにおさだは內心不滿を抱いた事もあつた位だつたが、かうして三年も離れてゐると、儀作のよかつた部分のみ思ひ返されて、一入なつかしく戀ひしさが今になつて增すと云ふ夫婦仲だつた。だが彼女が着いた最初の夕方チラリと店の古るぼけた籐椅子に腰かけてゐた、日本人の女を見た時それは女のみの感ずる敏感さでハッと思つた事を、おさだは忘れる事が出來なかつた。勿論その女について、儀作は一言半句も云はなかつたし、彼女も何とはなしに、きくのがいけないやうに思はれてそんな事はおくびにも出さなかつたが――

　それから食事の時にもいつも主婦顏にふるまつてゐるやうだし、儀作と二人ではいつも、日本語を使はずおさだなどには、まるで譯の判らない事をべちやくちや喋るのが氣になつた。女は下の店の方へ行き切りのやうな狀態で夜も向ふでねるらしかつた。雇ひ婆さんにしては印度人のお勝手をするのがゐるし、……――あゝ！　きつと！……やつと彼女は何かを發見したやうに泣きくずれるのであつた。まだ　の眞底ではそれを否定する氣持の方が强かつた。結局、あゝあの亭主に聞いてみたい。きかねばならないといふ位で。――

　而し儀作は、めつたに上つて來なかつた。と何かしら口惜しい感情がおさだの全身を走り廻つた。急に體中がカッ！と逆上せるやうだつた。

　長男の儀一がひよつこりやつて來た。彼は來るなりあゝ暗ら！と云つて電氣のスヰッチを捻つた。

「どうです。」

　さう云ひ乍ら、彼はじろじろ周圍を見廻した。見かけは煙草でもないかと云ふ位な顏付だつた。體全體から受ける感じは、がつしりとした肉付にも拘はらず、何となく張り切つてゐる肩先に蔭があると云ふやうな青年で、彼は茶色づくめのシャツとパンツで脛毛を出して、破れかけた靴をはいてゐた。現在産みの母親がかうしてはるばる遠い所から來て熱で寢てゐると云ふのに、彼は一向それらしい感傷を見せなかつた。が淋しい弱いおさだにはそれは何と云つても嬉しい事に違ひなかつた。

「なあ儀一、お前の務めてゐる會社は遠いのかえ。」

　母親はまづやさしく口を切つた。

「いゝや、そんなに遠くない。さうだ里數で云つたら三哩程。」

えゝ、三里塚!」
　おさだは鸚鵡返しに云つてほんとに吃驚した。この父親より一年程後でこちらへ來てそれでも來た當時には、ちよい〳〵手紙を呉れたが、生みの母親がお前達の顏が見たいから屑繭を賣つた臍繰で來たいむねを述べた時、全然反對して來るなと云つて寄越したこの長男の顏をおさだはまじ〳〵と見詰めた。何と云ふ事なしに目頭が熱くなるのを息子の手前耐えに耐えた。儀一の方では、何か決するところあるらしく、暫くぼやけた電燈の光りを見てゐたが、やがて早口にまるで何かに追ひかけられるやうな調子で云つて退けた。
「實はね、おッ母さ、どうせ判る事だから、一寸僕から話してをくが、あんた、親爺には、ちやんと後妻があるのだよ。」
　こゝまで云つて儀一は口を噤んだ。おさだの顏が見る見る悽慘な形相に變り、それが恐ろしい絶望の淵に沈んで行くのを目のあたり見たからであつた。若い彼はそれでも、惡い事をしたと云ふよりも、事實を話したと云ふスッとした氣持に捉はれてゐた。と云ふより、から云はねば仕方がないじやないかと、自分に云ひ聞かせた。先刻の階下でも儀作とおすみののつぴきならぬ喧嘩を見た上、病中の母親に云ふには少し可愛想だとも思はない事はなかつたが、事態はそんな事を云つてをられなかつたと、强いて斷念らめた。彼も無條件に悲しかつた。
――あんたがそんなに亢奮するから親爺もこの頃はおち〳〵よう眠らないのだよ。なあに、親爺の浮氣からじやない。斷じて――
　彼がさう前言して話した所によると儀作は商賣も大戰前後はよかつたが、段々不景氣風があちこちで吹くやうになつてからはさつぱりで、今の後妻になつてゐるおすみから三千圓程注ぎ込ませても、まだ印度人の金貸しに多額の借金があると云ふのだつた。商賣と云ふのは骨董商でビルマの金ピカの佛像、螺細工、眞珠貝の彫り物、柱掛、象の置物その他、日本の七寶燒の花瓶と云ふやうな直接生活に關係のないもの許りだつたので、景氣のいゝ船でどん〳〵儲けた支那人などが、何百圓と云ふ金高の物をどし〳〵買つてくれる時はよかつたが、それらの成金が將棋倒れになつたり、船がちつとも入らなくなつて隨つて船乘りが少しも買ひに來なくなつた後ではどうにも、店が立ち行かなかつたと云ふのであつた。
「ね、おッ母さ、僻んだり怒つたりしてゐる場合じやないのですぜ。おすみさんだつてこんな嬶アや子供のある人に何時迄もくつゝいてゐたくはないのだが、注ぎ込んだ金は一厘も返へらない。それも女郎や淫賣をして儲けた金をね――それかと云つてあんたが來たからつて何處かへ行くには金がなし、淫賣するには婆さんだし、氣の毒だよ。」
　最後に儀一が喋つて行つた言葉を彼女は何度も何度も思ひ返した。そして思ひ出しては、ベッドの上で身悶えした。
「あ――あ、さうだつたのか。」

彼女は黃黑くなつた夫のおど〳〵してゐる表情が判つた。日本語を避けて食をすますと、直ぐ店の方へ行く女の謎も解けた。さうして儀一が暑くて死んでしまふから來るなと云つた事もほゞ呑み込めた。と同時に何とも云はれない悲しさがまるで夏の夕立雲のやうに、もや〳〵と彼女の心に立ち籠めた。

「私さへ、來なかつたら」

心の一つが、かうも叫ぶのだつたが、彼女は、再びあの村へ亭主も子供もない今は實家の兄が實權を握つてゐる、小さい藁小屋のやうな家へ歸る氣はしなかつた。たゞさへ小姑虐めをする實家へなど、歸つて行かうものなら、まあどんなに、あの兄嫁が笑ふ事か、いや笑ふ位じやない。突き放して閾居も跨がせないだらう。

——亭主に捨てられたやうな阿呆!

さう云ふ兄嫁の顔が、目に見えるやうだつた。それでなくても、冬の手の千切れるやうな大根切干、夏の田草取り、夏蠶の炎天での目の眩むやうな桑摘み、畑の中に唸る蚊柱! そしてあのそれらの仕事から歸つて來た時のものも云へないクタ〳〵に疲れた全身のゐらさ!! ——彼女はとても歸る氣持はしなかつた。さりとて、三年目に亭主の下へ來乍ら病氣の枕下にも、ついてゐてもらへない亭主を思ふと、口惜しいより第一悲しかつた。情なかつた。

儀一はあんな事云ふけれどあの人はあの女の方が、私より可愛いいのだらう。——かう考へ込むと、胸がやき〳〵と煮え沸るやうだつた。今までまるで忘れてゐたあの記憶が、痺びれるやうに疼いて來た。

あ——あ!

彼女は儀作が三晩共、彼女の隣りの床臺やうのものの上に、花莚を敷いてある上で寢て彼女の所へ來なかつた事を思ひ出した。いゝやあの人は下へ行くのだらう……。彼女は熱の所爲かまるで三年間忘れてゐた××をいみじくも感じた。

おさだの泣き方が段々ヒステリカルに變つて來た。國を出る一月程前に死んだ儀三を、生きてゐるもののやうに名前を呼んでみたり

——あゝ私も死にたい、死にたい!

と連發したりした。そんな時儀作が黑い顔をおど〳〵して突き出さうものなら、彼女は威武高になつて喰つてかゝつた。まるで別人のやうであつた。

「浮氣者ッ 色氣狂ひ! ア、口惜しい。」

さめ〳〵と泣き狂ふのだつた。目尻の少し上の靜脈が、ピク〳〵痙攣する事もあつた。

おさだは今までにも時々空想として思つた死と云ふ事を、しみじみ本調子に考へるやうになつた。今までの辛かつた時には亭主に逢へると云ふ望みがあつた。何もかも、訴へる亭主と云ふ標柱があつた。が今となつてみれば彼女には、何もかもが絶望だつた。おさ

だにはその長男が云ふやうに、何も惚れたから一緒に居るのじやない之も一つの行き掛りさ――と云ふ意味などまるで判らなかつた。

「俺らア亭主だつて嬶アだつて、共産主義だ。專制主義は大嫌らひだ。何だつて――色、戀だつて、安閑としてゐられない世の中だからな――。」

若者のこんな氣持なんか、おさだには微塵も判りやうがなかつた。惚れたからこそ、國の妻子を忘れて何年と云ふ間、一緒に、いちやついておられるのだ。――とおさだにはおさだの見やうがあつた。彼女には落雷のやうに氣紛れな男の××など考へ及ぶべくもなかつた。現代のやうに複雜な愛の表現法を知らない。彼女には割つて云へば、自分と一緒に×××いや××××を守り續ける人――之が一番頼もしい彼女の夫婦感だつた。

さうしてさう云ふ夫婦仲だつたのに――

どんなに長くても十日以上はかゝらないと云ふ醫者の言葉だつたが、十日目にも彼女はまだ、床を離れる事が出來なかつた。お粥をほんの少量と梅干を一つづゝ食べる以外には時々氷をそのまゝ嚙る位で食慾もなかつた。彼女はこの頃から大分病的になつて來た。――寸した足音にも耳をすまして、夫がおすみを愛撫するのじやないかと疑つたり、殊に夜中など一睡もしないやうになつた。

とう〳〵おさだにとつて、最後の日がやつて來た。それは彼女が寢付いてから十一日目の眞夜中だつた。

彼女はガバと跳ね起きた。隣りの部屋を透かしてみたが、あたりが眞暗なため、何も見分ける事が出來なかつた。

烈しく胸がハア〳〵した。

彼女は全身を、嫉妬の渦巻に卷き入れた。と同時に素早い積極的行爲をとつた。夫の體にかぢりついた。異常な力で――

「おさだ！　おさだじやないか？」

と儀作のしはがれた驚ろきの聲がした。彼女は初めて夫の熱い昔のまゝの息づかひを間近に聞いた。全身が意生地なく、エリキに、かゝつたやうに痺びれて行くのをどうする事も出來なかつた。

「あんた――あんた！　あんたは今、――あの人と……」

後はさめ〴〵と泣いて、儀作の顏の上へ、口の中へ、ない程の頰へ、彼女は喜びの本能的の涙を雨のやうに降らした。

「あほらしい！　おすみと、今、そんな事があるものか！　氣を落ちつけてな――おさだ！　早うようなつて、え、なあ。」

おさだは三年振りに初めて夫の腕を抱いた。あらゆる感情の旋風だつた。

おさだは、目が冴える一方だつた。さうして、今そこで行つた自分の行爲、感情をむさぼるやうに、惚れ〳〵と、あかず　凝めてみた。

——早う直つてな——おさだ——

さう云つた儀作の言葉が耳に染みついてゐる。心からしみ〲嬉しいと思つた。彼女は何と云ふ事なしに、もう少し夫と語りたかつた。村の庵守さんがチブスで死んだ事や、春さの金さが儀一と同じ年だのに、この間肺病で亡くなつた事や、おとみが角三と名古屋まで夜逃げした事や、話す事は山のやうにあつた。そして自分がどんなに辛い思ひをした事か悲しかつたか——

——おさだはお姫さんのやうに上品だで、こんなど百姓のするいなひもの、なんか出來んとさ。——

あの二ッ池の堤のほとりで、一寸桑籠の肩を休めて、ぼんやり池の水を見凝めてゐた時、ガアンと投げ付けた兄嫁の言葉。

彼女は一段と目が冴えるに隨つて、砂を嚙むやうな味けなさを感じて來た。全身も急に一つ〱の骨がバラ〱になつて拔けて行くかと思はれる程だるく痛かつた。——三年間、自分の亭主と‥‥その事をおすみの上にあてはめて堪らない腹立たしさと、淋しさに唇を嚙みしめた。悲しい、口惜しい氣持だつた。因襲と道德で裏付けた絶對の獨占物が、まんまと、他人の口へ辷り込んでゐる、どうしやうもないもどかしさだつた。彼女にとつては、神が惡魔とキスするより、激しい絶望に違ひなかつた。一度落した足跡が永遠に消えないやうに、おさだの胸の中では、何もかもが、おすみと結び付かないものはなかつた。やがて彼女は身を投げて慟哭した。泣くさへ苦しくて息がつまるやうだつた。スヤ〱寢息を立てゝゐる夫の幸福さが羨やましかつた。腹立たしかつた。癪に障つた。

——今頃は誰の夢を見て——疑心暗鬼はおさだの瘦せた胸を喰ひ細い腰を拘木にかけた。彼女は小面憎く寢てゐる亭主を思ひつ切り蹴り飛ばしたい氣持を感じた。が直ぐ諦がゑらかつた。誰もかれもみんな蹴り飛ばして壞してしまひたい譯の判らない衝動に襲はれた

——ふと力强いものが彼女を嚙んだ。

彼女は全身が一つの大きなつばさのやうな飛躍を感じた。何とも知れない透明な夢心地だつた。彼女の目は今までに見た事のない異樣に輝いた。

「お、‥‥?」

おさだはおののいて叫んだ。

おさだは翌朝、店の前の舗道に石のやうになつて死んでゐた。鼻血がべつとり、口に流れ込んでゐた。

「おふくろがッ! おふくろがッ!」

郊外のマッチ工場に働いてゐる長男は、その母親の悲報に、今や上らんとする常夏の百度以上の太陽を睨みつけて叫んだ。

——みんな、世の中のせゐだ!! おッ母ア!! たくましい若者は肩を聳やかして、大まな拳骨で頭をぐアンと毆つて、反射的に顔を上げた。ネムの花の並木が前方を明るくしてゐた朝。——

一九二九、五、一三日作。



淫賣婦

戸川靜子

1

その年の六月十九日に、初航海のオハ丸は、疲れ切つてそれでも漸く息づきながら、北樺太、オハの海岸に投錨した。午前五時、すでに太陽は高く上つてゐた。

船が來た、船が來た、の叫び聲は次ぎから次ぎへと、宿泊所の日本人の眠りを覺まして行つた。その頃、北の街はづれの小道を、踊るやうに手を振り足をあげながら、女の子が一人一所懸命に走つてゐた。小道のどんづまりにポッツリ建つてゐる小さな粗末な小屋の入口でリーザは大きな聲で叫んだ。

「ナターシャ！　船が來た。」

リーザは小屋の扉を右足をあげてけると、勢よく中へ飛び込んで、もう一度聲を張りあげた。

「ナターシャ、船が來たよ。ナターシャつてば。」

扉がいきなり中から亂暴にあくと、すつとナターシャが首を突き出した。彼女の切れ長の眼が相變らずものうく見開かれて、リーザをぢつと凝視めた。

「お前見て來たの、リーザ？」
「事務所の園村に敎へて貰つたの。」
「ふん――お前又園村のとこへ行つてゐたんだね？」
ナターシヤの眼がちらつと曇つた。
「何時だらう。リーザ。」
「六時位、でもよく知らない。」
ナターシヤは暗い部屋を振り返つて、きびしい聲で怒鳴つた。
「時間だよ。もう歸つておくれ。」
薄暗い部屋の隅で、誰かゞだみ聲でうとうとなつた。リーザは飛び上つて外へ逃げ出した。彼女は、暗闇でうなつた男が誰だか知つてゐた。樺太石油の事務所の原つぱへ遊びに行くと、發電室から機關手のコレソフが出て來て、ちび、ナターシヤは御機嫌かい？と何時も聞くのだつた。
リーザは小屋の階段に腰かけた儘、むかむかしながらその男の顔を思ひ出した。
「厭な奴、コレソフ、厭な奴！」
と、リーザはきしくく音の立ちさうな痩せた兩腕を振りまはした。

2

六月の晴れた空に浮かぶ雲けナターシヤの走る方へと同じやうに流れてゐた。はだかの彼女の足は冷い空氣の中で踊つた。彼女は丘を走つて走つて、走つた――するとゑぞ松の若木が彼女の右に飛んで消えた。白樺がしろじろと左の方へ飛び去つて行つた。眼の前の原油の流れがまたゝく間に後になつてゐた。丘を上りきると、彼女の足がすーすーと前へのびるたびに、兩足の間から海の色が見えはじめた。黄色のプラトークを頭から取ると、それを振りまはしながら、彼女はゆつくり丘をくだつた。
海岸に出た時には、事務所の糧食部の日本人達は海岸事務所に集つて、風と波とに注意を集めてゐた。彼女は事務所から遠くはなれた岩壁によぢ上つた。體を乘り出すと、くだけた波は彼女の顔をぬらした。彼女は兩足を長々と岩の上にのばし顋を冷い岩にぴつたりつけて、熱心に船の姿を探しはじめた。青黒い海の色に映えて浮き上つてゐる流氷が流れてふつと角度の變る時に、キラリと白く鋭く輝いた。彼女の眼は、その光の中から辛うじて、小さな黒い船の姿を探し出した。彼女はすぼめた脣を開き、ものうく見開かれてゐる眼を輝かした。彼女の薄い神經質な小鼻がかすかに顫えた。
海岸事務所では船からの無線を受けてゐた。
――おい。氷に包まれさうだとよ。四五日荷上げは出來ないよ――四五日どころぢやねえ、そのうちシケでもくつて見ろ――
と、二人、三人とかたまつて立つて船を瀕覩めてゐる糧食部の洲中の叫び聲が、風にちぎられて飛んで行つた。
「兄さんが來たんでせう、オハ丸で？」

「うん。どうしたのかなあ。」

と返事をしながらも、若い園村の眼は憂欝さうにくすぶつて、氷山のかげにかくれて見えなくなりはじめた船の姿を追つてゐた。

ナターシヤは乳房と兩もゝをぴつたり岩につけた儘、何時までも何時までもぢつと顏をうつぶせてゐた。もう船を見ようともしなかつた。

3

五日目の朝、ナターシヤの走つた丘を、園村兄弟は反對に海岸から街の方へと突つきつてゐた。

「部長に、君の兄さんが初航で來るよ、つて言はれた時には僕は吃驚しちやつた。」

兄の章は顏をそむけた儘、何年かを過さなければならない土地の景色に眼を走らして默つてゐた。

弟の滿は今年は東京へ歸れる筈だつた。兄弟一緒に生活せる、と思つてゐたのが、雜誌社に勤めてゐる筈の章が、この會社へは入つて樺太へまはされて來る――と突然聞かされた時には、ぼんやりしてしまつたのだつた。

「どうしたの、一體？」

永い旅で、靑く澱んで疲れてゐる章の顏を滿は横からのぞき込んだ。

「二月二日だかの最終便ぢや、俺達の芝居も好成績だなんて書いて來ただらう？」

「その芝居でやめさせられちやつたんだよ。プロレタリヤ劇團なんかには入つて、夜業はしないし兎角怠けるのが社のお氣に入らなかつたんだらうな。もつともやめさせられたわけでも無かつたのさ。文句がうるさかつたから俺の方で出てしまつた。」

滿は、さう言ふ兄の顏を眺めて、部長に章が來ると言はれた時よりも、尙、ほう――としたやうな氣持になつた。少し出た額や白眼がちな憂欝な眼、そして人の顏を正視する事をしない妙なくせなど章の姿は殆んど二年前と變りはなかつた。

「俺は芝居の方もやめたよ。」

「だつて兄さん。芝居の事で……。」

「俺には遊び半分の流行かぶれのやうな劇團にはゐられなかつたからだよ。仲間の連中は皆んな會社や銀行やらへ勤めてゐるんだらう。芝居にすつかり體を使へばその首の方が危くなるわけさ、しつかりとぶつつかつてやれないのは當り前ぢやないか。さうかつて芝居だけやつてたんぢや食べては行けないからね、結局は食べて行かなきやならないんだからね仕様がないにはないんだが。」

と、言ひかけた言葉をのみ込んで、章は思はず足をとめた。

見下ろすと、うつそりと果もなく擴がつてゐる街が霧にかすんで眼の前によこたわつてゐた。丘になつて丘になつて、又丘になりながら、點々として粗末な木小屋のやうな建物が、その丘と丘の間に

散らばつてゐた。頂の尖つたゑぞ松とゞ松が、丘の上にすつくと立ち並んでゐるのを見た時、こんもりと丸く綠に繁りあつてゐる森を見慣れてゐる章には、突つぱなされたやうな淋しさだつた。荒寥とした街はづれの南には、石油タンクや櫓がおびやかすやうに聳えてゐた。

「何處だい？　俺達の宿舍は？」

「ほら、白い石の壁が見えるだらう、あれが事務所。それから左に五軒目」

「お前がよく言つて來た、ナターシャのところ何處？」

滿は默つて、直ぐ丘の下の木小屋を敎へた眼が急に暗くなつた。

「此の頃はどうだい？」

「あきれる位の氣持が起きるんだよ。ナターシャを東京へ連れて行ければ、とよく思ふのさ。兄さんさへ、うん、と言つて吳れゝば、リーザも一緖に連れて行くんだけれど。」

滿は一寸默つた。

「だけれど、ナターシャは、私が欲しかつたら何時でも遠慮しないで來い。金さへ持つてくれればあげる、つて笑つてゐるんだ。一番困る事は、自分のしてゐる事を何とも思つてない事なんだ。」

俺なんか自分一人の生活にさへあきあきしてゐる——と、章は、たとへそれが愛のためであるとは言へ、二人の女をかゝえて生きて行かうとさへ思つてゐる弟の元氣なのが羨しかつた。

「お前は元氣でいゝなあ。」

久し振りで涙のにじむ程の氣持にはなつたが、章は聲をあげて笑つた。

4

滿が東京へ歸つて二月もたつた頃、章は事務所で部長にねちねちした調子でやられた。君は此の頃、よく小屋へ出かけるさうですな。ロシヤ人の家へ遊びに行くのは氣をつけないといけない、殊にあそこは……。章は默つて部長の眞面目くさつた顏を見詰めた。

その日の歸りに、食堂舍へ行きながら、部長の言葉を思ひ出して靑白い頰に苦笑を浮かべた。その時、事務所の食堂から四五尺離れた洗ひ場の横手から、リーザの銳い叫び聲が聞えた。

「殺しちやうぞ。コレソフの馬鹿！」

リーザは細い腕に力をこめて、のつそりと巨大きな後姿を見せて歸つて行くコレソフに向かつて、大きな石を投げつけた。石がコレソフの嚴丈な首すぢに當つて血がにじみ出したのを見ると、電信工のニコライや糧食部の日本人達は、周圍から面白半分の叫び聲を、わあつわあつ……とあげた。

振り返つたコレソフの顏が赤く光つて、いかつい顎が怒りの爲に一層骨立つてゐた。リーザは赤黑いにちやにちやした土を顏半面にべつたりとつけて、靑白い額に紫色のすぢを浮かべて震えてゐた。

「畜生」

「殺しちやうぞ！」

と、リーザは夢中になつて叫んだ、が、次ぎの瞬間には、ひろつた石を握りしめた儘、大きなコレソフの兩手で首を強くつかまへられてゐた。殺しちやうぞ――と、リーザは氣狂ひのやうにわめいた。コレソフは眞赤な顔をしてリーザを見詰めた。握つてゐる手首に少しづつ力がは入ると見えて、リーザは小さく息をひくだけでもう喚かなかつた。見てゐた章は、思はず大聲をあげて怒鳴つた。

「何をしやがるんだ馬鹿野郎。手を放せ、放さないか。」

首をあげて章を見つけると、コレソフはリーザの體を急につき放した。リーザは章を凝視めながら激しい泣き聲をたてた、彼女は兩手で顔をぴつたりかくして走つて行つた。

「お前がリーザの代りか？」

「首をしめるならあんな小娘はおよしなさい。」

章はリーザの後姿を見送りながら、考へ考へロシヤ語を用つたが自分ながら變な氣がして笑ひ出した。コレソフは鈍い微笑を頬に浮かべて、眞直ぐに章に向かつて歩き出した。馬鹿力のあるコレソフが鈍い微笑を見せる時には、相手は大抵足のたゝない程の目にあはされるのだつた、その度に彼は罰金を取られたりしたが、今も、コレソフの顔には微笑が一つぱいに浮かんでゐるのだつた。

糧食部の連中はあはてゝ、コレソフと章の間をふさげてしまつた。今まではリーザだつたから安心して面白半分に眺めてゐた彼等も日本人の彼等の仲間となると笑つてもゐられなかつた。

章は田中と一緒に食堂の方へ戻つて行つた。ニコライも默つてついて來た。

「コレソフとは喧嘩をしない方がいゝよ、彼奴は無茶なんだから。」

と、田中はニコライがゐなくなると早速話し出した。

「それに此の頃ナターシャの事で一寸變になつてるから危いよ。今も君の事でリーザとあの騒動なんだ。もつともリーザに妙な事を教へたからなんだけど。君がよく小屋へ行くのを、コレソフの奴妬いてゐるんだよ。」

章は返事をしなかつた。終ひには田中も默つた。食事を終へると章は立ち上りながら田中に言つた。

「俺は小屋へ遊びに行くけど、君も一緒に行かない？」

章はその儘田中を殘して外へ出た。顔の皮膚が痛い程寒かつた、風と一緒に粉雪がふきつけた。雪が降り出したら、もうすつかりとぢ込められるだらう――と誰かゞ言つてゐたがと思ふと、此處で過す冬の永さがふと思ひやられた。

5

薄暗い部屋の隅に、リーザは膝を抱え背中を丸くしてうづくまつてゐた。章はそつと中へしのび込んで呼んだ。

「リーザ」

リーザは飛び上つて、恐怖に震へながら激しく手を振つたが、い

きなり飛びかゝつて章の首を抱きしめた。
「來た、來た、來た!」
と、彼女は泣きながら叫んだ。章はリーザの兩手を放させると、彼女の顏を光りの方に向けて見詰めた。そばかすのある小さな顏は涙と泥とで汚れ、感情の激しい彼女の眼は吊り上つてゐるやうに見えた。章は何時ものやうに部屋の隅のリーザの寢臺に腰かけて、リーザを呼んだ。
「リーザ」
此處へおいで——と眼で招いて置いて
「お前はをかしな子だ。」
と言ひながら笑つた。リーザはそろ〳〵章の傍へ近づいて、章の兩足へ頭をもたせかけながら床にうづくまつた。
「來た。來ただなんて……」
章が言ひかけると、リーザは章の膝に顏を押しつけて忍び笑ひをした。
「だつて、章はもう來て呉れないのかと思つたんだもの。」
「何故?」
「何故だつて?」
リーザは不思議さうに繰り返した。
「だつて章、お前はさつき私がコレソフに石を投げたのを見てゐたんだらう、私はあんな亂暴な子だもの。」
「石を投げたかつたら投げるさ。怒鳴りたかつたら怒鳴るさ、リーザ。」
「いゝ?」
「いゝさ。」
リーザは唇を嚙みしめて一寸默つてゐたが、眼を急に輝かした。
「お前のお國には革命はないの。」
「革命? ないよ。」
章は迷つて言ひなほした。
「多分ないだらう。」
「何故ないの? ロシヤにはあつた。何故お前のお國にはそんな事はないの?」
「色々な違ひがあるから。だけどお前にはわからないよ。急にそんな事どうして? リーザ。」
リーザは默つて章の指を固く握りしめた。風は一層激しくなつたらしく、冷い空氣は丸木の隙間から遠慮なく章の頸を刺した。何時もなら、クラブへ出かけてゐる筈のナターシヤが、自分の部屋から顏を出して二人を眺めてゐたが、章は氣がつかなかつた。
「コレソフはね、さつき姉さんの事を言つたのよ。だけど何故ナターシヤは惡いの? ナターシヤはどんな惡い事をしてゐるの?」
「お前にはわからないよ、リーザ。」
「何時も、ナターシヤは働いてゐるんだよつて、私に言つてるんだ

けど。」
「リーザはまだ小さいんだから、そんな事は知らなくてもいゝんだ。」
「默つて！默つちまへ。」
リーザは急に立ち上つて、ギラ〳〵する眼で章を睨みつけた。
「お前にはわからない、お前は知らなくてもいゝ、つて誰もかも言ふんだ。ナターシヤもお前までも。何故わからないんだ、何故知らない方がいゝんだ。」
リーザは怒鳴りながら、おどかすやうに細い指を章の鼻先へ突き出した。章はあばれる彼女を抱き寄せて、そつと髪をなぜた。學校へも行かないでこんな風に生活してゐる小さなこの娘に、どう云ふ風に説明したらよいのか章には解らなかつた。たとへその道を見付けたにして、ロシア語の達者でない章と、常語しか解さない此の娘とでは充分に言葉を通じる事は出來なかつた。
「アハハ……」
立ちすくんでゐたナターシヤが突然ひからびた聲で笑ひ出した。章は吃驚して立ち上つた。それから漸く落ちついてリーザを抱きなほした。
「クラブへは行かなかつたんですか？　早くおいでなさい。」
ナターシヤは章の傍へ腰をかけて章を見ながら默つて、首を振つた。

「お前はコレソフと喧嘩したんだつて？」
「しません。したら今夜はリーザとは遊べない筈でせう？」
「ふん……」
と、ナターシヤは横を向いて鼻をならしたが、急にいたづらつ子のやうな微笑を浮かべて、せか〳〵言ひ出した。
「今、リーザがあんたに聞いてゐた事話しておやりよ。私のしてゐる事がどんな事だか、私が何故惡いんだか。滿はよく私を責めたつけ。お前もあんな事思つてゐるんだらう。さあリーザに話しておやりよ。」
「ナターシヤ。私はお前の事を考へて見た事もないよ。それに、お前がリーザに話さない事を何故俺が話す必要があるだらう。」
「さう、お前の知つた事ぢやない。」
と、ナターシヤは面白さうに繰り返しながら、章の腕へ彼女の胸を押しつけた。
「ねえ、リーザ。お前はいゝ子だから今夜は章をナターシヤに貸してお呉れ。」
リーザはおびえた眼をあげて、ナターシヤの顔を見詰め、章を眺めてゐた。章は立ち上つて窓際の椅子に腰かけなほした。
「リーザ。又面白いお話を聞かせて上げよう。」
リーザは嬉しさうに、小さな彼女の腰掛と、臺所から椅子を一つ運んで並べた。

「ほーら、此處はリーザ、其處はナターシヤ、いゝなあ。」

リーザは手をうつて笑つたが、ナターシヤが默つて戸口の方へ歩き出すのを見て兩手をふるはしながらつぶやいた。

「行つてしまつた。」

章はリーザを抱き寄せて、古い記憶をたぐりながら、醜ひあひるの子の話をゆつくりし始めた。やつとの事で醜ひあひるの子が湖のほとりに來た時に——と話してゐると、リーザは章の肩に頭をもたせたまゝ、靜かな寢息を立てはじめた。

章は彼女の體を抱きあげて寢臺にのせた。かたむきかゝつた粗末な寢床に、ぐつたりと眠りこけてゐる彼女をぢつと見詰めてゐる章の胸を、永い間感じなかつたあのしみ出るやうな靜かな愛情が流れて行つた。章はヂヤキ〳〵に切られてゐるリーザの亞麻色の髮に唇をつけて、歸る事を忘れてしまつてゐた。

6

十一月七日、八日は革命記念日で樺太石油も休みだつた。七日の朝、遲くまでベツトを離れない章の耳へ元氣のよい歌聲が流れて來た。章は飛び起きて、窓を思ひ切りパッとあけた。

眞白い何處までも眞白に輝いてゐる雪の中を、工場から街へと、道のない道を練つて來る群集からその歌聲は響いて來た。彼等は赤旗を眞先に立て聲を揃へて革命歌を叫んでゐた。赤い色は白に映じてます〳〵赤く燃えた。何時の間にか章に竝んで窓に立つた田中は、眼を細めて長い長い行列を見詰めてゐた。

「日本人はあの中にゐないのかい?」

「勿論ゐやあしないよ。」

「ゐないのが當然見たいだね、君なんか一緒に歩いたらいゝのに。」

「冗談ぢやないや。」

「どつちがさ。」

と、章は田中の肩をたゝいて笑つた。

「今日はクラブで何かあるの?」

「活動に芝居位。今晩行かうか?」

「あゝ、行つて見よう。」

街を十字にくぎつてゐる四區の本通りを、事務所を通り過ぎてクラブへ行く途々でも、行き會ふロシヤ人達は二人に元氣な挨拶を投げかけて行つた。赤いプラトークをかぶつた若い娘が田中に微笑を投げて走つて行つた。單純過ぎる位な彼等の喜びが、オハの隅々にまづ溢れてゐるやうだつた。

芝居は、一人の女に對する親子の心の爭ひを描いた、悲劇だつた。言葉のすつかり解らない章には、悲劇と言つても、らしい——ので彼等特有の粗野なユーモア的氣分が多分に感じられて、鋭さはピンと響いて來なかつた。活動は、彼等の使用人の命は一匹のアラビヤ種の馬のそれに劣る、と云ふ意味のものだつた。ロシヤ人達はバラライカをひき、よく歌ひよく踊つた。そして非常によく飲んだ。章

は火酒に水を割つて飲んで見た。コレソフがコップを持つて來て章に握手を求めた。彼等全部の上に一つのものが流れてゐた。

八日には、章はリーザを小屋に訪ねた　相變らず薄暗い部屋に彼女は章を待つてゐた。間もなくナターシャがよろ〳〵しながら小屋へ歸つて來た。

彼女は髮に眉に眞白に雪をつけたまゝで、ほう……と赤味を帶びた顏を生々と輝かせてゐた。まる出しになつてゐる右肩の滑らかな肌を、雪がとけて流れた。彼女は雪にまみれた上着をづる〳〵とひきづつて章の傍へ近づいた。

「これは貴方樣、御機嫌は如何？」

章の顏をのぞき込んだ時、強い火酒の香が鼻をついた。ぐつたり體をもたせかけた、机が動くと、彼女の首も同じやうに前へ伸びた。彼女は立ち上りざま顎を突き出して、ふらふらと次ぎの部屋の方へ步き出したが、扉に手を伸ばした儘、足をぐらりと折つて前へのめつた。

「ナターシャ！」

リーザは飛んで行つて、ナターシャの胸の下へすばやく小さな體をもぐらして支へたが、ナターシャの重みで一緒に倒れた。

「章、ナターシャを起こしてよ。」

と、リーザは默つて眺めてゐる章を呼んだ。章はリーザに足の方を持たせて二人で寢臺へナターシャを運んだ。

「コレソフが來るよ、リーザ。」

ナターシャが頭を動かしながらつぶやくのを聞くと、リーザは章にしがみついて唇をゆがめた。

「又、彼奴が來るんだ。」

章はナターシャの顏を眺めた。スピルトか火酒でもコレソフと一緖にあほつて來たのだらう、彼女の顏はあづき色に光つてゐた。ペつたりと滑らかな額についてゐる髮の毛を、章はそつと指でつまんだ。

「リーザ。ナターシャはよくこんな風になるの。」

「寒い時にはからなの。それだつて、コレソフの奴が、飲ませるんだ。」

リーザは煖爐の前にうづくまつて戶口を睨みはじめた。風が扉をならす度に、彼女は飛んで行つて小窓から外をのぞいた。外は雪も止んで薄あかるかつた。三度目には彼女は急いで扉に錠をかけた。振り返つたリーザの眼が光つた。章はナターシャを強くゆすつた。

「ナターシャ。コレソフだよ。」

彼女はうすくあいた眼を章に据えてうつとりしたが、直ぐに起きて立ち上つた。彼女は立ちふさがつてゐるリーザを押し退けて錠をはづした。風に送られてコレソフの聲が聞えた。彼女は首を突き出して怒鳴つた。

「厭だよ。」

壓しつぶしたやうな太いコレソフの聲だ、又早口にべら〳〵と何か言つた。

「お歸りったら。厭だ、厭だ、厭だ、何度言つても同じなんだよコレソフ。さあ〳〵何時まで寒いこんなとこに立たせて置くのさ。早くお歸りよ。」

　ナターシャは構はず手荒く扉をしめきつて、それに體をもたせかけた。

「歸してしまつていゝのかい、ナターシャ？」

「何故悪いのさ。あんな汚い奴なんか。」

「汚い。汚いは宜かつたなあ。」

　笑つてゐる章を、ナターシャは疲れた眼で凝視めてゐた。

「だけどナターシャ、お前の商賣が駄目になるぢやないか。」

「お前がゐるものさ」

「俺はコレソフの代りにはならないさ。」

「ねえ章、お前は私が嫌い？」

　章は立ち上つて戸口に近づいた。此の女の口からこんな言葉が出たのが不思議に思へた。面と向つて、章はまじ〳〵とナターシャを眺めた。

「リーザ、さよなら、お休みなさい。」

　章は白眼がちな冷い眼で、最後の凝視をナターシャに與れて、それから扉をあけた。そのまゝ外套の襟を立てゝ、眼をさす寒さの中へ急いで飛び出した。ふと、追ひ歸されたコレソフの影を見たやうな氣がして、章は氣持が冷くなつた。

7

　翌朝、章が疲れてぐつすり眠つて起きた時には、ホヤハの街は一ツの事件から噂が噂を生んで騒ぎだつた。

　昨夜の中にコレソフが斧で殺されてゐた。郵便橋のステパンが、北の小道で雪に埋もれてゐた彼の死體を發見したのだつた。コレソフとリーザの喧嘩の時に、リーザが殺しちやうぞ、と叫んだと、ニコライが言ひ出したから、リーザは直ぐに民衆警察へ引つ張られた章が事件を田中に聞かされた時には、もうリーザが連れて行かれてから、一時間も經つてゐた。

　リーザを疑へば限りがなかつた。章が思ひ出す數々の彼女の言葉や動作は、總てその疑ひを增させる種だつた。喧嘩の後での彼とリーザとの會話を思ひ出すと落ちついてゐられなかつた。

　投げたかつたら投げるさ、怒鳴りたかつたら怒鳴るさ、リーザ——いゝ？　——いゝさ。殺したかつたら……とまでは口に出しては言はなかつたものゝ、リーザはそこ迄考へてゐたかも知れない。など、章は段々追ひ詰められて行つた。

　章は仕事の事を田中に頼んで置いて小屋へ出掛けた。途上を注意して行つたが、北の小道は雪で清められてゐた。小屋にはナターシ

ヤもゐなかつた。章は臺所へは入つて斧を探して見たが、手斧らしいものは見つける事が出來なかつた。歸りかけた時、靑醒めたナターシャが小屋へは入つて來た。彼女は章を見やうともしないで眼を伏せたまゝ、のろ〳〵した動作で薪を燃しはじめた。

「ナターシャ。お前はコレソフとひどい喧嘩でもしたのかい？」

彼女は怒つたやうに章をちらつと見た。

「あれからコレソフは來た？」

「來なかつた。」

「眞實に？」

「お前達は一度では信じないんだねえ、そのくせ何でも聞きたがるんだ。」

と、彼女は鋭く言ひ返したが、眼を章からそらして、燃えて來た木を見詰めた。

「コレソフが來なかつたのは眞實なんだよ。お前が歸つてから私はリーザと一緒に寢たんだもの、私だつてリーザだつてあれから、彼奴の顏も見なかつた。だけど章、私は何故コレソフを追ひ歸したりしたんだらうと思ふ。」

ナターシャは兩腕の中に顏をすつかり落してつぶやいた。

「眞實はあんな奴死んだつていゝんだ。私が昨日クラブへ行つた。彼奴につかまつたんだよ。飮んだのさ、二人ともぐた〳〵になつちやつて、えらい見幕だつたのは宜かつたんだけど……」

と、顏をあげて、ナターシャは眞赤な火がめら〳〵と燃え上るのを凝視めた。

「彼奴はワーリヤとも關係してゐたんだよ。彼奴には女房があるんだ子供があるんだ。それだのに彼奴はワーリヤとも關係してゐたんだよ。」

章は思はず眼をつぶつた。コレソフに子供が二人ある事も妻の名がジーナと呼ばれてゐるのも、妻の母親の名がワーリヤである事も知つてゐた。

「ねえ章、相手は女房のお母さんだよ。體を賣りものにしてゐる私だけど、彼奴に賣るには汚さ過ぎる、とその時は思つたんだよ。私も醉つぱらつてゐたのさ、だから彼奴を目茶目茶に怒鳴りつけてやつた。馬鹿にしてやつた。彼奴がそんな事を自慢さうにしやべるその氣持が堪らなかつたんだよ。終ひには自分でも何が何だか解らない位に癪にさはつて、泣いた程だつた、お前にはをかしいだらうねえ。ナターシャが人間の汚さを感じたなんて、言へばねえ。」

「ナターシャ、お前のところには斧はなかつたの？」

「斧？」

と、ナターシャは飛び上りながら叫んだ。

「お前までがリーザを？　お前までも？」

「臺所には無いやうだが、今までは使つてゐなかつたんだね？」

「斧は無かつたなんて言つたつて、お前も信じやしないんだらう

ナターシヤはつとめて冷く言ひ切つたが、彼女は眼に一つぱいの恐怖の色を浮かべて章を見詰めてゐた。

「勿論、リーザが殺つたんぢやないよ、ナターシヤ。お前が話して與れたおかげで、斧がもしコレソフの家の物だとすれば、誰が殺つたか直ぐに解ると思ふよ。俺は民警へ行つて來よう。」

ナターシヤは默つて顫える兩手を章の方へ差し出した。章がその手を靜かに握りしめると、彼女は激しく泣き出した。

8

章が斧を見せて貰ひに行く前に、リーザはすでに許されてゐた。自分が殺つたのだと、女房のジーナが民警へ自首したのだつた。直ぐその後を追つてワーリヤが、ジーナではなく自分だと言つて自首して出た。間もなくジーナは家へ歸されたが四五日してワーリヤも歸つて來てゐた。ジーナはコレソフの代りに働いて、二人の子供を育てなければならないから、と云ふ理由とワーリヤの懇願とで許されたのだ――と解つた。自然、コレソフとワーリヤの關係も知れて、其の夜酔つぱらつたコレソフが、二人の女に對してどんな態度を取り、後にジーナが斧を握つた氣持なども、同情をもつて口口に言はれた。章は興味を持つて事件の最後を見詰めてゐたが、二人の女が働いてゐる姿を、ロシヤ側の石油會社の工場の中に見かけた時には、どきりと胸をうたれた。

章は事件後、永い間小屋を訪ねなかつた。部長から手きびしい注意を受けたり色々の噂の種にされたりしたが、それよりも、リーザがあの事件からどんな變化を受けてゐるか、それを見る方が恐ろしかつた。リーザは事務所へは遊びに來なかつたし、ナターシヤは會ふ事があつても、すぐ眼をそらした。章の係りである郵便の方も暇なので、晝間はスキーの練習をしたり、夜はクラブへ活動を見に行つたり玉を突いたりして過した。

丁度その頃、滿から第二信が來た。

今は毎晩、築地小劇場へエキストラになつて通つてゐる事。エキストラの連中が一寸騒いだので、築地の御大さんが怒つたから次ぎの芝居の時には、多分全部がおことわりを喰ふだらう。僕の立ち場から考へれば、會社の餘暇に好きな芝居をやつたり觀たり研究方々してゐるのだから、文句を言ふ事はないのだが、エキストラの中に色々の人がゐて色々の立場にあるものだから、自然こんな問題も起きて來るんだ。僕等は巻添へを喰つたやうなものだが、僕一人が宜ければそれでよいと云ふ氣にはなり切れないから、皆んな一緒にやめさせられるなら、それでも結構だと思ふ。

僕は芝居をしてゐるうちに、色々美しい女を見る機會を得た。僕は千代田ビルのホールにゐる富志子さんにも會つた。今下宿してゐる家にも可愛いゝ娘がゐる、だが、僕はナターシヤを忘れる事は出來ない。僕が知り合ひになつた女の人達よりナターシヤが綺麗だと云ふのではない。彼女はその人達とはくらべる事が出來ない程汚れ

てゐるかも知れないが、もしナターシャを今の生活から引き離してその女の人達と同じ生活をさせて見るとしたら、彼女程飾り氣のない良い性質を持つた女はないと思はれる。僕はオハにゐる時、ナターシャを連れて來て一緒に住みたいと言つて、兄さんに笑はれたがまだあの氣持を捨てる事は出來ないでゐる、僕は彼女を自分のものにしたい、とは今は思つてはゐないが、彼女を忘れる事は出來ないでゐる。

章は二度繰り返して讀んだ。

翌朝早く眼を覺ました章は、窓を思ひきり開いて、息詰るやうな冷い空氣の中に永い事顔をさらしてゐた。日曜だつたので、同室の田中や他の二三人は馬橇で海の凍つたのを海岸へ見に行く相談をしてゐたが、章は朝飯をすますと仕度をして小屋へ出掛けた。

リーザは細くなつた兩手をのばして章にすがりついた。相變らず薄暗い小屋の中は外と同じやうに冷え切つてゐた。章は、默つて眼を大きく見開いた儘、何時までも手を放さうとはしないリーザを抱き上げた。

「一人で毎日つまらなかつたらうね。」

と、言ひながらリーザの手首をなぜたが、彼女はかすかに首を振るだけだつた。彼女の體は冷かつた。章は臺所へ行つて少しばかり小枝を探し出して暖爐で燃やした。

「リーザ、ナターシャは？」

「ゐるの。」

章はリーザを抱いたまゝ火の前に腰かけながら、ナターシャに聲をかけた。眉深く厚いプラトークで頭をくるみマントをかけたナターシャは、部屋から出て來て章を見ると直ぐに聲をかけた。

「何か用？……」

「用があるんだが、眞面目に聞いて異れるんでなきや言ひたくない……」

『あゝ一寸、お前は私が何時もふざけてものを言つてると思つて？」

ナターシャは章の靑白い顔を眺めながら、面白さうに元氣に笑つた。

「そんな難しさうな顏をしてさ、何？」

「ナターシャ、お前は此の頃どんな事を思つてゐるんだい？　正直に言つてしまふと、あの事件以來、俺はお前に會つてお前の眼を見る度に、お前の眼が私を輕蔑しないで下さい、と言つてゐるやうな氣がするんだが、俺の思ひ違ひ……」

「何ですつて、何ですつて？」

ナターシャは章の言葉を遮つて、床板をふみならした。

「誰が、誰が、もしそんな事を思ふなら私は生きてはゐられない筈ぢやないか。自分のしてゐる事が人から輕蔑されるだらうなんて思ひながら、生きてゐられると思ふの？　え、章、お前さんは思ふ

の？」
「だからと云つて、さう簡單に死ねはしないさ。お前は生きる爲にお前の體を賣つてゐるのだらうけれど、かへつてお前は命を減らしてゐるやうなものぢやないか。お前自身は正しいと思つてゐても他の人から見たら輕蔑に値するかも知れないし。」
　章は抱かれたまゝリーザが、兩肩をわなわな顫はしてゐるのに氣がついた。
「ぢあ、ナターシヤ、俺の思ひ違いだつたんだね。だけど解らないなあ。」
　章は溜息をついて言ひ出した。
「俺はお前達を一緒に連れて行きたいと思つたんだ。お前を連れて行くには色々の面倒な事もあるかも知れないが、全々不可能ぢやないと思ふよ。もし駄目なら駄目で、此處にゐてもお前の生活を變へるやうには出來るし、」
「待つて、章。お前がさう思ふの？」
「俺もさう思ふ、だけど、滿はお前達の事を一所懸命に考へてゐるんだよ。」
「さう、さう。もし私が情ないと思つてゐれば、直ぐにお前さん方の言ふ事を聞くだらうと思つたんだね？」
「事實、お前の生き方は眞實ぢやないよ。お前が此の生活を拔け出す氣持さへあれば……」
「お前が？　お前が心からさう思つた？　さうぢやなくて滿がさう思つたんだらう。そしてお前は唯ふら〳〵と來ちやつた、ね。」
　ナターシヤの顔は冷くゆがんだが、涙が一つぱいに眼にたまつてゐた。
「ねえ章、そんな餘計なおせつかいはおよしなさい、お前の柄ぢやない。私はロシヤが嫌いぢやないよ、私の位置が此處まで來たのだつて多分斯うなる理由があつて此處まで落ちたんだらう、それに、私は自分の生き方が辛いとも厭だとも思つちやゐないんだもの。」
「だけどナターシヤ、もしお前が滿を愛してゐるとしたら。」
「愛する？　私は滿と、此處にゐる大勢の男をくらべる事が出來るんだよ。章、私は愛するなんて云ふ事がどんな氣持だか知らないの。私のやうな女は此處にゐてこそ生きられるんだよ。」
「もう澤山。だがナターシヤ。だけどお前のそんな考をリーザには實行させないで欲しいよ。」
「リーザが私位になる時には、生きて行く他の道が屹度出來る、と私は信じてゐるの。」
「ナターシヤ・その時は？」
　ナターシヤは顫えながら立ち上つた。
「その時は多分私のやうな人間は、ロシヤにはゐなくなつてゐるのでせう。」
「ナターシヤ、お前は？」

彼女は両手を顔に當てゝ棒立になつた。

「お出かけなさい、ナターシヤ。もう何にも言ふ事はありませんから。」

そむけた章の顔へ眼を走らしたが、ナターシヤは默つて外へ出て行つた。リーザが章にしがみついて激しく泣き出した。

9

滿——

俺は又日本へ舞ひ戻る。總てのものを捨てゝ來た俺は、今度こそは又新たに捨てゝ來たものを拾ひ上げやうと思つてゐる。此處で過した俺の二年間は、俺がかぶつてゐた皮を一皮むいて呉れたよ。お前の最近の手紙には、ナターシヤの事が、一言も書いてないがお前の氣持もしつかりして來たらしいね。

滿——

俺は、東京へ歸ると決つた晩の、ナターシヤと俺との會話をお前に知らせやうと思ふ。

お前は最終便のオハ丸で歸るんだつて？

今日決つた。

さようなら、だけしか私には言つて呉れないんだらうねえ。

その他に何が言へると思ふ？

ねえ章。私は一晩——ねえ、一晩だけお前が欲しいの。お前には二度と會へない事は私には解つてゐるの。お願だから章一晩だけ。

章、お前は私を嘲笑ふ？

いゝや。ナターシヤ、俺は今晩來よう。

滿——

俺はその時、何の考慮もなしに、ナターシヤに來ると約束した。俺は一晩だけ完全に身と心でナターシヤを愛したよ、但し一晩だけだ。そして俺は、どんな言葉、どんな行動よりも、ナターシヤに眞實の道を敎へる力が此の一晩に籠つてゐると信じてゐるんだ。結果はまだ解らない。併し俺は信じる。

滿——

世の中を冷い白い眼で見て、別に恐りもせず悲しみもせず生きる事に慣れてゐる俺だと思つてゐたが、眞實はその下積みになつて唯もがきひきづられてゐた自分だつた事を、俺は此の二年間にはつきり敎へられたよ。俺はナターシヤのあの人間としての願ひの前に、うん——と答へた、あの心で生きて行きたい。

滿——

俺は九月二十日前後に東京へ着く事になるらう。リーザの事、それから俺の力で出來るだけ調べた色々の事、話がある。何れはつきりした日は知らせるから待つてゐて呉れ。



みちづれ

ヴイクトオル・マルゲリット
望月百合子譯

第二章

眞理に到達するには、注入されたる、あらゆる意見を、まづ放棄し、而して新らたに、根本から、自己の知識の全系體を建て直さねばならない。デカルト、

一

それから一週間後にボオルの結婚式が擧げられた。取引はその前にすつかり濟んでゐた。マルチネはボオルを欲しくてたまらないのに――始めは『生意氣な女でも』いまに見てゐろだ――自分の思ひ通りな取引をすることが出來た。彼はおとなしく、努めて反對しないやうに自制しながら、將來の利益を計つた。

彼はボオルの嘆願によりも、アニックの言葉に讓歩して――それは妻が好む仕事で、家庭生活を樂にするであらう處の利益だ――妻が今迄の仕事をつゞけて行くことに同意した。

持參金なしで結婚する代りに彼は、所得に對して條件をつけた。卽ち彼は彼の現在の財產を保存し、離婚する場合も、金錢の負擔は何にも負はないこと、そして、ボオルが、音樂家として得る所の收入の半分を、監督者として、また收益使用權者として、彼が自由にすることであつた。

その代りにまた彼は――唯我獨尊者にとつては、おかしな虛禮だが――結婚式を寺院で行ふことを許した。まあ、市廳の手續きがすんだら、極くあつさりと讀唱彌撒ぐらひ！

ボオルは、紅の敷物を、聖堂警手や、オルガンの華々しさを望んでゐたが、それは諦らめなければならなかつた。アニックの手厳しい排斥にも拘らず、彼女はどうしても、宗教的儀式を避くべからざるものとして固執した。

『あんたが何んと言つたつて、私にとつちや、結婚は神聖なんだか

ら……』

『宗教學校にゐた頃のやうな考はお棄てなさいよ！　宗教のことなんか實行してもゐないくせに……』

『あら！　私はまだ時には彌撒に行くのよ……』

『それや新らしい着物をこさへた日曜日にはねえ！　みんなから見られるために、花冠をつけて、白い着物を着るなんておかしいぢやないの！』

『ぢやどうするといふの？』

ポオルにとつては花嫁のヴエールは、聖體拜受式の時のそれのやうなもので、いまのやうに儀式が重んじられる時代には、墮落しないかぎり、女にとつてなくてはならない禮服であつた。

『だつて、貴女は何んにも信じてはゐないぢやありませんか！』

『私は、私が處女を守つて來たといふことが、若しそれで社會的利益がないとすれば、必要がないといふことを信じてゐてよ……』

『それや、少くとも論理的(ロヂツク)だわ！　おかしいことだけれど、論理的よ！……若し人々が汚ならしい笑ひを浮べて貴女を見ながら、祭壇に供へられた後に生血を吸はれようとする犧牲者を想像しても、貴女が何んとも思はないとすればね、だけど私はそんな習慣は野蠻人にはいいと思ふわ！……そんなことはかまはない。嚴密な意味で若し市廳が、貴女が考へるやうに社會的形式のためのものなら……誰も招待するには及ばないぢやありませんか……二人の證人も、登記と、署名と、さよならを……私だつたら、それで滿足だわ』

併し頑なポオルは――これはマルチネと同意見で――知り合ひと云ふ知り合ひに招待狀を出した。そして、彼女が、妹と共に巴里の代議士アメデエ、ジヤクマンに出席して貰ふことになつたので、マルチネはマルチネで、寶石商組合員懲戒委員會長と、名譽公證人をしてゐる田舍の伯父とを招んだ。巴里での數日間のお祝ひ氣分がこの老人を唆かした。

アニックとアメデエは、この日、メランコリックな印象を受けた。不快な露骨さや、招待客達――芝居かなにかのやうに、市廳でも、寺院でも、列をつくつて、寶石商人達、裁縫人達の順に並んだ――の失禮な好奇心や、レストオラン・ジレのランチの騷がしさや、またそこにはもう隣室に三組の結婚披露の人々がゐて、その人達の馬鹿騷ぎや、唄や、さうしたもの丶凡てが、彼等の結合の神聖な記憶を、一層尊いものに思はせるのだつた。

彼等はめいめいのアパルトマンを今迄通り別々に持つてゐた。

アメデエが、度々アニックの處に泊つた。そして日中は彼女が、自分の住居のやうに、ブウルヴアル・ラスパイユに住まつた。彼女は朝から來て、事務の指圖をしてゐた。そして家政一切はダンヴオア婆さんに任せきりにしてゐた。アニックはこの婆さんの忠實なのをよく知つてゐたし、何事にもよく氣がついて働らくことを知つてゐた。婆さんはそれをありがたく思つて、彼等の食事は特に注意して美味なものを調理するのであつた、彼等は大食家ではなかつたが食道樂であつた。

官能の合奏に同時に感動する彼等は、完全な調和を感じてゐた。幸福なアニックは彼の氣に入られることしか考へなかつた。彼女は彼を樂しませ乍らしつかりと引きつけるやうな細なことにもよく氣を配つた。彼の仕事机はいつも整頓して、而も花で飾られてゐた。撰擇のい丶小さな裝飾品や、繒は家具や壁を華やかに明るくした。しやれたネクタイは、アメデエの衣服簞笥を一新

し、彼の外見をも新らしくした。彼の友人達は次第に、彼の幸福相な樣子にも、服裝の變化にも驚ろかされた。

たつた一つの不一致が、だがほんの一瞬間——何故ならすぐ彼女かはつきりとそのことを説明したから——彼等の間に薄い影を投げた。それは金の問題だ……アメデエは——アニックが、五月の末に彼の秘書になつて、やうやく受けることを承諾した月に八百法の金では、いかにつゝましくても、若い美しい女が不自由であるに違ひないと思つたので——會計を共通にするやうにと願つた。

『だつて吾々はお互に全部的に與へ合つたのだから（丁度生活費の高いことを話してゐた、ある夜、彼は言つた。）僕は貴女が物質的なことではどんな心配もないことを希望するんですよ……僕のものは貴女のものだ。だから僕が貴女に上げるんぢやなくて、お返へしするです……貴女のものだけぢや、貴女は僕が好きなやうに生活することはできない……もつと豐かに……』

彼女は彼の言葉をさへぎつた。そしてやさしく言つた。

『私は何にも要りません。ほんとに、若し私が不自由なら、率直に私から貴方に申上げますわ。そんなこと仰しやらないで下さい……ありがたう……』

彼女は彼の失望した眼をみて、説明した。

『おかしいんですよ。私達の間に、少しでも……おゝ！議論は止めませう……いいえ、少しでもお金のことに話がふれると、私はいやなのです……殆んど怒りたくさへなるんです！……何故だか、分りませんけど……それは獨立者の過剩な傲慢かも知れません、多分』

彼女は彼が悲しんでゐるのをみて、彼の氣持を損ねたことを殘念に思つた。そこで彼を抱擁して言つた。

『分つてよ！……おゝ！私は、貴方のお心には、デリカテスと善意(ボンテ)しかないことを知つてゐます……だつて仕方がないぢやありませんか？……私はこんな潔癖をもつてゐるんですもの……それや馬鹿げてゐるでせう……けれど、……でこの話は必要が起つたときのことにしませうよ……それは私、お約束してよ。安心してゐて頂戴……』

彼はそのまゝ申出を中止した。別に氣持ちを惡くしはしなかつたが、一所になつてから始めて、彼女の中に、しつかりと城塞を築いてゐる魂の一角があるのに氣がついて何かしら淋しさを感じた。いま彼は、彼女を彼の仕事に結びつけたやうに、彼に關するもの、彼に觸れるものの凡てに結びつけたいと思つてゐるのに。たとへ、心の底では彼もまた彼女のやうに、金に對して相對的價値しかおいてないにしても、父親の財產から來た有價證券の監理をすることを不快とは思はなかつた。——その有價證券からは年五萬法程の利子がとれ、その四分の三を彼が相續してゐた。而も彼の財產は、司法省からの多大な收入によつて絶えず大きくなつて行つた。

アニックの協力は、彼女の注意深い事務のために實際上、一層彼の收入を增大した。彼女は、彼が選擧運動の準備に沒頭してゐたので、彼女に辯護させた二つの訴訟事件から、數ケ月のうちに、彼の傍に重大な地位を占めるやうになつた。ロオザの事件は、彼女が重病（チブス）にかゝつたので、四月の開廷期に延期された。

アメデエの變り樣は、三十五歳といふ年を若がへらせて、母親が——オオヴエルニユのモルヴァルの城にゐる彼女の許に、彼が休暇を利用して訪ねて行つたとき——すぐ氣がついた程著しいものであつた。モルヴァル夫人は嚴格なカトリック教徒のブルジョアで爵を

與へることもすると同時に、慈善をもする婦人であつた。そして利害關係のために、やはり嚴格なプロテスタン教徒に再婚したが、たつた一人の愛した男の子供に對する保護者としてのゆき屆いた愛情は些の變化もしなかつた。

『ねえ、アメデエはすつかり變つたとお思ひになりません？』と彼女は夫に言つた。モルヴアル氏もうなづいて、コメデイア紙でポオルの結婚の記事と、證人として彼の名前が連らねてあつたのを見たと言つた。新聞には『アルピスト・ポオル孃の令妹にして司法省の辯護士、アニック、ラムベエル孃、…辯護士にして巴里の代議士アメデエ、ジヤクマン氏…』と書いてあつたのだ。モルヴアル氏は田舎に引込んでゐても何んでも知つてゐた。そしてもう既に、ずつと前から策略家の『ラムベエルの小娘』がルボオに追はれて、このアメデエのまわりにつきまとつてゐることを知つてゐた。…

『俺はもうずつと以前からあの娘が來ることを知つてゐたよ。あなたにそのことは話したことだが…俺はあの娘の策略が成功しはすまいかと恐れる！』

國家の高官たるモルヴアル氏は、ジヤクマンを、社會主義思想にかぶれた、馬鹿正直で危險な人間だと思つてゐた。だから久しい前から自分の遠緣に當る娘を嫁にすることを考へてゐた。それは戰爭で何千萬と儲けた船泊所有者の娘で、アントアネット、セツソンと言つた。…

この娘はジヤクマンをある程度まで惹きつけて、彼の惡思想をだんく\なくさせることが出來るであらう。

『この緣談をはつきりさせなければならない…』とモルヴアルは言つた。

彼は渉禽鳥のやうに背が高くて干からびてゐた。そして頭は禿げ、頸が短かく、鷺のやうに長い鼻をもつてゐた。

アメデエは兩親に會ふ度に、彼等のあてこすりの的になるのであつた。それは始めは遠まわしに、やがて直接の非難になるのであつた。だから彼はなるたけ兩親に會ふ機會を遠ざけた。そして一二回の晩餐を斷つた。殊にモルヴアル夫人が、毎年行ふ十二月三十一日の晩餐會には出席しないことにした。それは家族的の集りで、今年け特にアメデエのためにアントアネット、セツソンも呼ばれた。だから彼は最後の瞬間になつて電話で斷つた。『不意の事件のために！』と言はれて、母親は失望してしまつた。『…明日まゐります。貴女に接吻しに行きます』

翌日彼が訪ねて行つたとき、兩親はモルヴアル氏の書齋に集つてゐた。彼は要心深く注意してゐた。…兩親は彼の要心を解かうとして始めは何んでもないことしか話さなかつた——がそのうちにモルヴアル氏はやさしく話頭を變へ始めた。

『昨日は君が來なくなつてほんとに殘念だつた。親戚中が集つたのに』

『僕も殘念に思ひました』

『アントアネットが…迚もよく唄つて、素敵だつたよ。あの娘は藝術家だ…』とモルヴアル夫人は言つた。

『全くだ！』とモルヴアル氏も言つた。

ジヤクマンは默つてゐる。モルヴアル夫人はつゞける。

『聲がよく透つてどんな樂器にも負けない程だつたよ』

そこでまた渉禽鳥が言つた。

『立琴にさへも…』

ジャクマンはやはり默つてゐた。そして喜劇はもう澤山だと思つて立ち上つた。すると、母親に危險を全部的に感じてゐたので、大芝居をして、彼の首を抱きしめた。『私達を信用しないのはいけないことだよ！　お前の私生活も、公生活もお前の自由であることは私もよく知つてゐます…お前は、どの點から見ても、私達を考へに入れないでいい程大きくなつてゐます。けれど、私達はお互に心と心で話し合ふことが出來ます。お母さんといふものはいつだつて息子の未來を心配する權利があるものだよ。その義務がある場合さへもあるものです』

彼は冷たい顔でぢつと母親をみた。それは母のやさしさも遂に氷を解かすことが出來なかつた顔だ。彼女は何を言ひたかつたのだらう？　彼女は彼が反抗的であるのを感じた。そして彼の無言の嘲けるやうな力の蔭にある異常な根强さを憎んだ。

殊にその根强さの原因となつたものを…。可哀さうな子供だ、自分の感情に欺されてゐるのだ！　殊に器用な慾の手に…彼女は柔らかく出ようとした。

『勿論、お前は自由ですよ。そして、私はお前の心持ちも、お前が無暗な所へ愛情を持つて行くやうな人間でないことも知つてゐますよ…お前は私達に一言も――遠慮して――お前の…あのラムベエルさんとの關係を話さなかつたけれど、私達はみんな知つてゐるよ。私はお前の生涯を考へないではゐられないんですよ。私はあんまりお前を愛し過ぎてゐます。はじめ、私達はお前にとつても、あの女にとつても何んでもない、氣まぐれだと思つてゐました…私達はこの若い…女が獨立してゐる人だといふことを知つてゐます…そしてまた美しい娘だといふことも知つてゐます…』

モルヴァル氏は咳ばらひをした。

『私は一時的の問題だと思つたものだから、今迄のお前の遊びと同様に、この氣まぐれをもそつとしておいたのです…』

アメデエは腕を伸した。

『お母さん、僕は貴女がどんな比較をなさることも赦しませんよ……』

『だけど…』

『ラムベエルさんは獨立してゐる必要はないのです。立派な女で、貴女が思つてゐらつしやるやうな『人間』ではありません。氣まぐれだなんて？　そんなお考へは棄てゝ下さい。僕はアニックを戀人としてではなく、妻として考へてゐます。僕が彼女に結婚を申込まなかつたのは、彼女がそれを拒絶することを、豫めよく知つてゐたからです…』

『それでもあの女はその他のものは君に與へたんだね！…』

モルヴァル氏は嗄れ聲で笑つた。併し夫人は手で彼の笑ひを制した。彼女一人がどこまでも相手だ。

『だからこそ私は恐れるんですよ！　考へてごらん、アメデエ。お前は…（彼女はなるたけおだやかな言葉を探した）この…お孃さんにとつては…遊びのお相手だ…だからあの女はお前を棄てるばかりではなく、馬鹿にもするだらうさ！…だつてどうも腑に落ちないおかしい處があるよ』

『貴女にはお分りにならないんです。ラムベエルさんは、貴方方が、お父さんもお母さんも、尊重すべく習慣づけられてゐらつしやる道

德とは正反對の道德を持つてゐる原理に從つてゐるのです。‥‥そしてラムベエルさんの原理といふのは、眞面目なので、少くとも僕にとつてもやはり、貴方の原則と同樣に尊重すべきものなのです。打算があるんですつて？あの女は無慾そのものです。何かいけないことがあるといふのですか？ アニックは純潔の化身です！』

『純潔だつて！ 戀人を持つてゐる娘が！‥‥』『それは、純潔にも、他のあらゆるもののやうに、見方によつて、いろ／＼あるといふ證據さ』とモルヴァル氏は皮肉に言つた。

　アメデエは肩をピクッと動かした。兩親を說き伏せること？‥‥否、不可能だ。彼はそれを知つてゐた。この場面を彼は豫期してゐたのだ。それは彼をセッソンの金力と結婚させようとするのに、旣にその場所はアニックに占領されてゐることを、彼等が知つた日から、必然的なものとなつてゐたのだ。彼は一擊のもとに、永久に彼等の計劃の準備を打ち壞す方がいいと思つた。

　併しわざと言葉には出さないが、彼等が彼の愛人の上に何か汚はしい想像をしてゐることを悟つたので、彼はきつぱりと斷言した。

『ラムベエルさんを非難すべきことは何にも、何にもありません。あの女が僕の名を名乘つてくれて、僕を本當に幸福にしてくれる時が來れば、僕は結婚しますよ』

　アニックの意志は、二人の戀を棄てゝまでも、あくまでも獨立者であらうとするやうに思はれて、事實、彼にとつては不安な程であつた、‥‥彼は法律上の手續きをすることによつて眞に彼女を自分のものにすることになるのだ――別居する理由はよかれ、あしかれ何にもないのだから、さうすることによつてよりよく――より一層完全に、自分のものにすることだ、と思ひ始めた。

『お前があの女と結婚するつて、結婚するつて！』と母親は息づまるやうに呟やいた。

　アメデエは同時に涉禽鳥の顏に輕蔑の色を見て、怒りを爆發させた。

『何故いけないんです？ 僕は貴方方の同意がなくてもいい年になつてゐると思ひますがね！』

『だけど、お前はあの‥‥（彼女はまた適當な言葉を探した）あの‥‥自由娘を愛しておいでだから言ふけど、どんな噂があの娘の上に立つてゐるか知つておいでかい。まあよく氣をつけて御覽なさい！』

『そんなものはみんな中傷です！貴女方は貴女方の社交界や、『上流社會』以外の者には、いくら立派な生活をしてゐる者にでも、貴女方の泥をはきかけるのです！‥‥貴女方の泥を！』

『さう思ひますかな？ だがこゝは君達の集會の一つではない！ まあ君のお母さんの言ふことをきいて見給へ‥‥』とモルヴァル氏も口を出した。

『さうです。どうぞ私に任せて下さい』

　アメデエは悲しく母を見つめた。どんな發明が並べ立てられるのであらう？‥‥義父は滿足に反身になつて、カフスを引つぱつた。それは貴族院で、稀れに風俗の紊亂に對して意見を述べる時に、砂糖水を一杯飲んだ後に彼がよくする癖であつた‥‥

　それから彼は唇をなめた。それはきつと、リシュリユウ町のある家の馴染客となつて一週一回の實行で、自分の憤慨の材料を秘かに仕入れる時の、秘密の快樂を思ひ出したに違ひない。‥‥

モルヴァル夫人は躊躇ふ樣子をした。

『お話なさい、お母さん！』

そこで彼女はやつと口を切つた。

『私達にこんなことを言はせるのはお前だよ……お前はラムペエルさんが、お前の秘書になる前に、ルボオの秘書だつたことを知つておいでだらうね！』

彼女はまつすぐに母親をみつめ乍ら冷然と言つた。

『知つてゐました』

『で、何故ルボオがあの女に暇を出したか知つてゐますか？』

『知つてゐます』

『まさか！　若し知つてゐるとすれば、お前は馬鹿にも當らない……お人好しでなければ腐り果てた人間だ！……お前のラムペエルさんはね、ルボオと結婚するためにあらゆる誘惑を試みたのちに、それを強要までしたんだよ。……それがあんまり執拗つこかつたので、たう〳〵ルボオが堪え切れなくなつて、追ひ出してしまつたのださうな、だからその復讐にあの女は強脅的な訴訟をルボオに對して起さうとしてゐるんだよ！　私達にはみんな分つてゐるよ……姙娠してゐることが分つたので、私達が暇を出したあのロオザにしたつて――今日になつて見ればほんとによかつたと思ふよ！――お前のアニックが――お前の妻が！――ルボオに責任を負はせようとしたんだよ……あの女が子殺事件からあんな作り話を考へ出したんだよ……あの女はかうして復讐が出來ると思つてゐるのさ。丁度お前に結婚したくないと言ひ乍ら、お前を誘惑したのとおなじです……そしていまあの女はしつかりとお前を引きつけてゐる！……結婚だつて！　私達がもう少し早く氣がついたら、こんな馬鹿げたことはお前にさせなかつたのに！　あの女の方が早かつた。あの女は獲物を捕えてしまつた。』激しい怒りが彼女のいつも蒼白い冷たい頬骨のあたりに朱を注いだ。

『それでみんなですか？』とアメデエは冷やかにきいた。

『それだけでは十分ではないといふのかい！』

彼は若々しく冗談を言つた。

『僕は氣むづかしやでせうよ！　それだけでは十分ではありません。併し若し僕の意見を申上げるなら、悪口は十分すぎる程です！　いま貴女が仰有つたやうなことをルボオが言つたとすれば面白い。それは彼に高い代價を拂はせるでせうよ。若し貴女が僕より先に彼にお會になつたらさう仰有つて下さい』

彼の平氣さはモルヴァル氏をも怒らせてしまつた。彼は冷笑した。

『カロリン、これ以上言ふ必要はないよ。お前の息子は、道徳上も、政治上と同樣、正しい理由を理解することが斷然出來ないのだよ』

彼女は併しまだ負けたとは思はないで、哀願するやうにつゞけた。

『アメデエ、私に一つのことを約束しておくれ！　私が誤解してゐるのかも知れない。私は嘘をきかされたのかも知れない。或はその反對に、將來お前の眼が開らけるかも知れない。……若し私が誤つてゐたら、私は第一番にあやまります。そしてお前は私がお前のためにこんなことを言つたのだと思つて許してくれるでせう……併し若し私が恐れてゐるやうなことが事實になつて現はれたら、――私はさう信じてゐるが――いつでも私の愛情に頼つておくれ。たとへ意見は違つても私の愛情は決して變りはしませんよ……多分いつかはお前がまつさきに、お前の老ひたお母さんが正しかつたことを認

めて、意見をきかなかつたことを殘念に思ふかでせうよ！……ともかくも私達は、良心が命ずるままをお前に言ひました……』

そして彼女は嘆息した。

『若しお前が、お前を待つてゐたやうな家庭をつくらうと思つたなら、お前は本當に幸福で、同時に私達の凡ての願ひがかなふことになることを思ふと！……誰がお前を待つてゐるか分らないからね……』

『分つてますよ！　それはアントアネット、セッソンです！』

彼は幾度も扉をバタ〳〵させ乍ら、暇を告げようとしたのちに、笑ひ出した。かくも異る心持ちを理解しようとする努力と、かつて母親であり、今日も、ともかくも母親として殘つてゐるこの老婦人に對すると息子としての氣持ちが、彼の怒りと嫌惡とを制した。彼はそれを喜んだ。辛らい不和を避ける方がいいと思つた。彼は機嫌のいい顏をしながらも、憂鬱に、親と子の時代の間に堀られた淵の深さを思つた。殊に母と義父と、彼との間のそれは最近一層深くなつたことをしみ〴〵と思つた。

『さよなら、お母さん、もう一つお言傳がありますが、これはアントアネット、セッソンに……といふより寧ろ彼女の何百萬といふ財産に言つて頂くもので、僕は決してアントアネットとは結婚しないといふことです。そして彼女がドオヴイルに歸つたら、取卷の男達の間から、一人の責任者を選ぶやうに忠告しておやりなさい。彼女はいま、十分はつきり態度を決めなければなりません！……あの女は立派に唄ふでせう。併しあの女は……それよりも立派に踊ります。といふことをあるタンゴの踊手が言つてゐましよ』

『冗談です！　そんなことがあるものですか。』

『さうお考へになりますか？』

そして彼はモルヴァル氏の方に皮肉を向けた。

『それは、悪口といふものは、あらゆるもののやうに、見方によつて變るものだといふことの證據です……では氣持ちよく、高官殿……失禮します、大官殿……何んと言つて貴方をお呼びしていいか全く分りません！』

『同僚と呼んでくれ給へ、代議士君』とモルヴァルは苦笑し乍ら言つた。

彼は政治上の意見が、單にユトピアであるばかりではなく、自分達の階級の利益を裏切りするものゝ如く思はれる、と義子を反對黨員として憎みながらも、彼の成功と才能の前には尙一種の尊敬を拂つてゐた。――彼はまだ若い！　年をとるに從つて、多くの他の人達のやうに彼の思想も變るだらう……

彼一流の辛棒強い哲學をもつて、モルヴァル氏は、アメデエが出て行つた扉を見ながら『待たう！』と言つた

婦人彙報

◇市が產兒制限の相談

東京市では次から次と子供を生んで生活に喘ぐ下層市民のために區役所その他に相談所を設け、警察や方面委員が證明した四人以上の子供のある母親の產兒制限の相談にのることになつて、目下その案を研究中。これは世相がいかに深刻であるかを語るものだが、古い道德觀念から反對するお偉い方も澤山あらうと思はれるが、ぜひ實現して欲しいものである。

◇鰹節を盜んだ少女

雨に降りこめられた自由勞働者の暗い家庭が生んだ哀れな犯罪、東京市外尾久の乾物商梶豐吉方で最近十四歲くらゐの貧しげな少女が鰹節四本を萬引し一緒にきた弟と妹とに渡して立去らうとするところを主人が發見、警察に引渡されたが、係官がきいて見ると、昨今の降りつゞく雨に父が仕事にあぶれ母は一月前から病臥中で、この三日間何も食べてゐない事情が判つた。係官も同情して呼出した父親に引渡したが、この頃頻發するかうした挿話は殆ど數へることが出來ない。考へさせられる事實。

◇失業勞働者の慘事

橫須賀市元海軍々需部雜工加藤千代吉(五六)は九月廿五日午前五時頃、枕を並べて寢てゐた六男廣志(六)七男芳夫(四)次女こと(二)の愛兒三人をつるはしで頭部に一擊を加へ慘殺、女房うら(四一)をも殺害せんとして果さず、自分は便所で縊死した。千代吉は本年七月勤先を解雇され失業中病氣になり一家九人の生活難のために煩悶してゐたが、近く次男長三郎(二〇)が菓子店を開くといふので、自分等や大勢の子供がゐたのでは手足まとひになるだらうと思ひつめた結果であつた。

◇七十六歲の老婆世界一週

高齡七十六歲のお婆さんが世界を漫遊して、こんど意氣揚々ピンピンして歸つてきた。この老婆は京都市の荒井さくさんで、人類學の泰斗鳥居龍藏博士夫人きみ子さんの實母にあたる人。こんどの世界一週は博士の令息龍夫氏が昨年巴里留學中に客死されたのでその思出ふかい孫の遺跡を訪ねたい老ひの一心からであつたと。

◇男子を凌ぐ職業婦人

近來、婦人の職業はだんだん男子の圈內に侵入してきた。アメリカの勞働局婦人部で最近調査したところに依ると、彼地の家庭の召使の數が約百萬人で、これが婦人職業の花形、第二は耕作やその他田舍に働く農業婦人勞働者の七十九萬三千人。次が女教師、それからタイピスト。速記者、クラーク、洗濯婦、販賣係、出納計算人、裁縫師、家政婦、料理人、その次が電話交換手、看護婦、變つたところでは獸醫、水先案內の各々二人下層になつて炭坑の勞働婦人が千四百五十人、波止場人足三百二十三人といふのもある。日本と同じやうに電車の車掌が三百人、郵便配達が三百二十人、行商呼賣人の二千八百名等々、なかなか凄じい勢ではありませんか。

◇悧口な子供と遺傳學

シカゴ大學遺傳學教授山內繁雄博士の歸朝談——統計遺傳學最近の發表によると、卅歲以後で結婚した男女の子供は、卅歲以前に結婚した男女の子供に比べて大體聰明で學校の成績もよい。博士が專門とする實際遺傳學からはこういふ現象はあり得ないといふが、統計が事實で示すのだから仕方がないのだ相だ。結婚難の日本の青年男女には耳よりな話、この理窟でゆくと益々晚婚になりつゝある傾向から見て社會はおひ〳〵人種の改善に向つてゆく筈だが、さて本當はどうだか、生活難から晚婚になり、生活難では子供も思ふやうに教育も出來ない。がとにかく晚婚必しも恐ゆるに足らず、むしろ聰明な子供の欲しい人は卅歲をすぎてから結婚のこと。

◇伊藤野枝さんの忘形見

伊藤野枝、大杉榮夫妻の忘形見魔子ちやんは十三歲となつて九月十六日の兩親の七週忌を迎えた。いまはその名も伊藤眞子と改め、目下は榮氏の弟にあたる勇氏夫妻の養育のもとにすくすくと育つてゐる。眞子ちやんは鶴見小學校の六年生で女學校へはいるために一生懸命勉强中だが作文はずばぬけてうまい。頭がよく本が好きで大人の讀むやうなむづかしいものでも何でも讀む、兩親の記念日を迎へて眞子ちやんは幼心にどんな事を考へてゐるのであらう。

◇世界に乘出した唐人お吉

日本を背景にし日本娘を題材にした歌劇として世界にもてはやされてゐるものは、たゞ一つメリメの「蝶々夫人」(マダム・バタフライ)があるばかりだつたが、こんど紐育市の有名なオペラ劇場メトロポリタン座ではパーシー・ノーエル氏の作詞による大歌劇「唐人

お吉」を遠からず上演することになり、作曲はアメリカに緣の深い山田耕作氏が畢生の努力をこめていま起草中であるが、三幕三時間を要するといふ大物、その中で序曲だけは出來上り、最近米國に持つて行かれた。「蝶々夫人」はプチニの作曲だが、日本人によつて作曲された世界的歌劇はこんどの山田氏のが最初である。

◇華かな女優生活の裏面

帝劇專屬女優といふ華やかな生活の爲に夫と四人の子女のある身でありながらパトロンとともに不義の淫樂に耽つてゐた東日出子こと内藤治子（三八）は夫である內省屬松澤禮三から姦通罪で告訴された。相手のパトロンといふのは魚河岸一流の魚商米倉邦之助（三三）である。日出子はかねて芝居總見の幹事をしてゐた米倉と人眼を忍ぶ仲となり待合等で秘密に逢瀨をつゞけてゐたのを、こんど夫の秘密な搜査によつて發見されるに至つたものであるが、米倉は日出子から相當の金を絞られており彼女はそれによつて虛榮心をみたしてゐたらしい。とはいへ、家庭內における兩性生活の中年のみたされざる惱みが、日出子をさうさしたことも否まれない。

◇太平洋會議出席の四女史

十月下旬京都で開かれる太平洋會議には、各國からおよそ三百人ほどの名士が集まる豫定であるがその中婦人代表者も八十餘名ばかり出席することになつて居る。その中でも英國のリツトルトン女史米國のキヤムストツク女史、オーストラリアのキヤンベル女史等一流の婦人が男性の間に伍して堂々と意見をたゝかはす筈である。日本からはさしあたり東京女子大の安井哲子、女子英學塾の星野愛子女子學院の三谷民子、キリスト教女子青年會の辻松子の四女史が出席して職業婦人の教養、性の問題廢娼運動、婦人勞働問題などを說明協議する事となつた。

◇緊縮行進曲、々、々、

政府が必死になつて叫んでゐる緊縮のこゑは大分利目があるらしく上下を擧げていろんな現象を生んでゐる。田中前内閣にも劣らぬ無產運動の暴壓ぶりは巧に行はれて、新勞農黨の結黨を許可するであらうといふやうな民主主義の口吻で大衆を釣らうとしてゐるが、緊縮政策の利目はことに上流婦人に現れたやうだ。最近大阪市における關西聯合婦人大會では全國から婦人代表を呼んで大會の席上へわざわざ井上藏相の來場を乞ふて緊縮問題を聽き、東京聯合婦人會では首相官邸のきらびやかなホールへ名流中流の婦人が多數參伺、濱口首相、安達內相・井上藏相のこれまた緊縮に對する覺悟を吹きこまれて感激にみちて退場した。

一方丸山警視總監は部下に命じて銀座界隈のカフエーの女給さん達を警察に呼び出し、一場の訓示を試みさせたり、服裝から男子の誘惑に對する心得まで敎へた。そしてカフエーの取締りは嚴重を極め、十一時がすぎると官憲がまはつてきて客の退出策を講じるので主人公は營業が立ち行かぬと陳情に及ぶし、學生の客は片端から檢擧されてリストに載る。ダンスホールも異常に嚴重な取締りで泣言を云つてゐる現狀ではある。

◇女車掌電氣局を襲ふ

九月十二日午前、折からの大豪雨を犯して東京市電圓太郎自働車の婦人車掌數十名が大擧して市電氣局に押よせ、圓太郎課長の部屋にのりこんで、そのために日比谷署から警官卅餘名が馳けつけて檢擧するといふ騷ぎがあつた。ことの起りは澁谷出張所詰の車掌川島かめさんが五六日前切符の賣上代一圓二十六錢を胡魔かしたといふあられもない疑をかけられ、川島さんは過剩金として別に提出する意志であつたのを曲解されたのでそれに友達の車掌さん達が同情しその日、電氣局で開かれる賞罰委員會に示威のため押しよせたものと判つたが、電氣局では突然のことゝてびつくりし、女車掌單獨の示威行動はこれが初めてだと呟いてゐる。その結果はどうなつたか。

◇藤村氏愛兒の外遊

文壇の長老島崎藤村氏の三男蓊助氏は九月二十日東京をたつてドイツへ洋畫の研究に赴いた。同行はプロレタリア文學批評家勝本淸一郎氏である。約三年間彼地に滯在して專心研究して歸られるさうだが、蓊助氏は二十三年の熱情と理智をかね備へたプロレタリア畫家であるが、父藤村氏は深い理解をもつて愛兒の渡歐のために奔走された。蓊助氏がナツプの人であるためその筋から容易な事では旅券の下附がありさうにもなかつたのを、父藤村氏は百方奔走なして「蓊助の一身上に關してはいかなる責任でも一身に引受ける」といふ一札を容れ、氏の眞情が當局を動かしたものであると云ふ。

編輯後記

十月小說號の壯んな好評は私たちを一層勇氣づけてくれます。だからといつて、マンネリズムに墮する事は最も潔しとしないところあくまで潑剌、淸新に。今月號は顏ぶれを全然一變して新人の顏を揃へてみました。筆も表現も幼稚かも知れませんが、見つめやうとした主材をその純朴な動きを見認めて頂けるでせう。新社會相は一種の實話ものですが自ら獨特の物である事を誇り得ると思ひます。

なほ先月、葵イツ子氏の「逆修養」の最後が三字、印刷所の手落ちでけづられてゐました。筆者も讀者も不愉快だつた事とおわびします。(素子)

女人聯盟は至つて丈夫にまるまると肥え太つてゆきます。背丈もめつきり伸びました。それは何と無邪氣な、可愛らしい、そして聰明な子供でありませう。この子が成長してやがて、どんな性格をもち能力を備へ、そしてどんなに潑剌とした若々しい姿で現はれることか、それは偏に皆さんのお力にかゝるものと思はれます。私共は女人藝術とその愛兒聯盟の前途のために、心からの祈願をこめたいと思ひます。十二日の大阪支部發會講演會にはこちらから四人參りますが、私達は綠川靜枝さんと夫君高瀨氏の勞を深く謝してゐます。十八日の當地の大講演會を控へてゐますので、今度は神戶、德島兩支部の發會式を中止し　頂く事になつたのはやむを得ませんが、まア來春の機會を待つ事にいたしませう。では——(秋子)

『女人藝術』の名がこゝかしこの印刷物に散見して、それはもう從前のやうに好奇心の對象としてではなく、その內容に對する關心から問題にされてゐる點が深くなつたのを喜ぶ。先月の新人小說號はよかつたと多くの人が云つてゐる實に時機を得た試みであつた。今月の編輯內容はそのあとを受けての苦心のほどがうかがはれようとおもふ。皆長谷川主幹はじめ若き社人の方々の苦心のあとである。私は自分の鄕里の德島に大いにこの誌の爲に禿筆をふるつておいた。『女人藝術よ盛になれ』倦きずいつまでも私はこれをくりかへさうと思ふ。(花世)

すばらしい秋空を眺めて異口同音に「旅行がしたい。」しかし今日は又雨だ。靑空の下で思ふ存分秋の氣が吸ひたい。

先月十月號の頁が落ちて居たと注意して下さつた讀者がありましたがそう云ふ場合にはお取換しますから本社へ御返送下さい(優子)

雨の多い秋です。

こんどは讀者におねがひ一つ、それは誌代拂込を切手でなさる時はなるたけ一錢五厘か三錢の切手でなすつていたゞきたいといふ事です。お手紙がきて優子さんと二人大喜びであけてみて、二錢切手が陳列されてゐると二人とも顏見合はせて、あら二錢…とぺしやんこになる次第ですから(綠)

大阪女人藝術支部發會式及び講演會は十二日に土佐堀實業會館で開催され、東京本部からは望月百合子、八木秋子、林芙美子、松村喬子の四氏が應援講演にゆかれた十八日には東京の講演會が朝日講堂で本誌に發表したプログラムで開催される。甲府市では女人大衆の愛讀者が勤勞學園の窪田けさ氏の肝入りで二百人からの女工さんたちが集まり　各自の自由感想が述べられる事になつてゐる。本部からは講演者が一人、聽講者が數名行く。その歸途に八木氏の故鄕木曾の紅　を探るよていになつてゐる。生田氏は今　人で木曾路の秋をさぐり名古屋の聯盟支部の方達に逢ひにゆかれた。寢ざめの床から繪ハガキに一氣まぐれの秋の風吹く木曾の山一とよんでよこされた。かく澱むところなく各方面に我々の主張が廣がつてゆきいづこでも大きな手を廣げ胸を張つてむかへられる悅びをどうしたら如實に表し得られるだらう。大阪聯盟の方達がどんなに眞摯な運動をして下さるかは大田洋子氏のビラマキの記事でも知れやう。此事について、綠川靜枝氏は寢食をわすれて奔走されてゐる。新斐いと子氏も大層盡力して下さつてゐる。多謝々々(時雨)

昭和四年十月十五日印刷
昭和四年十一月一日發行(每月一回一日發行)

送料一部壹錢五厘

定價	
1部	40錢
6部	2.30錢
12部	4.50錢

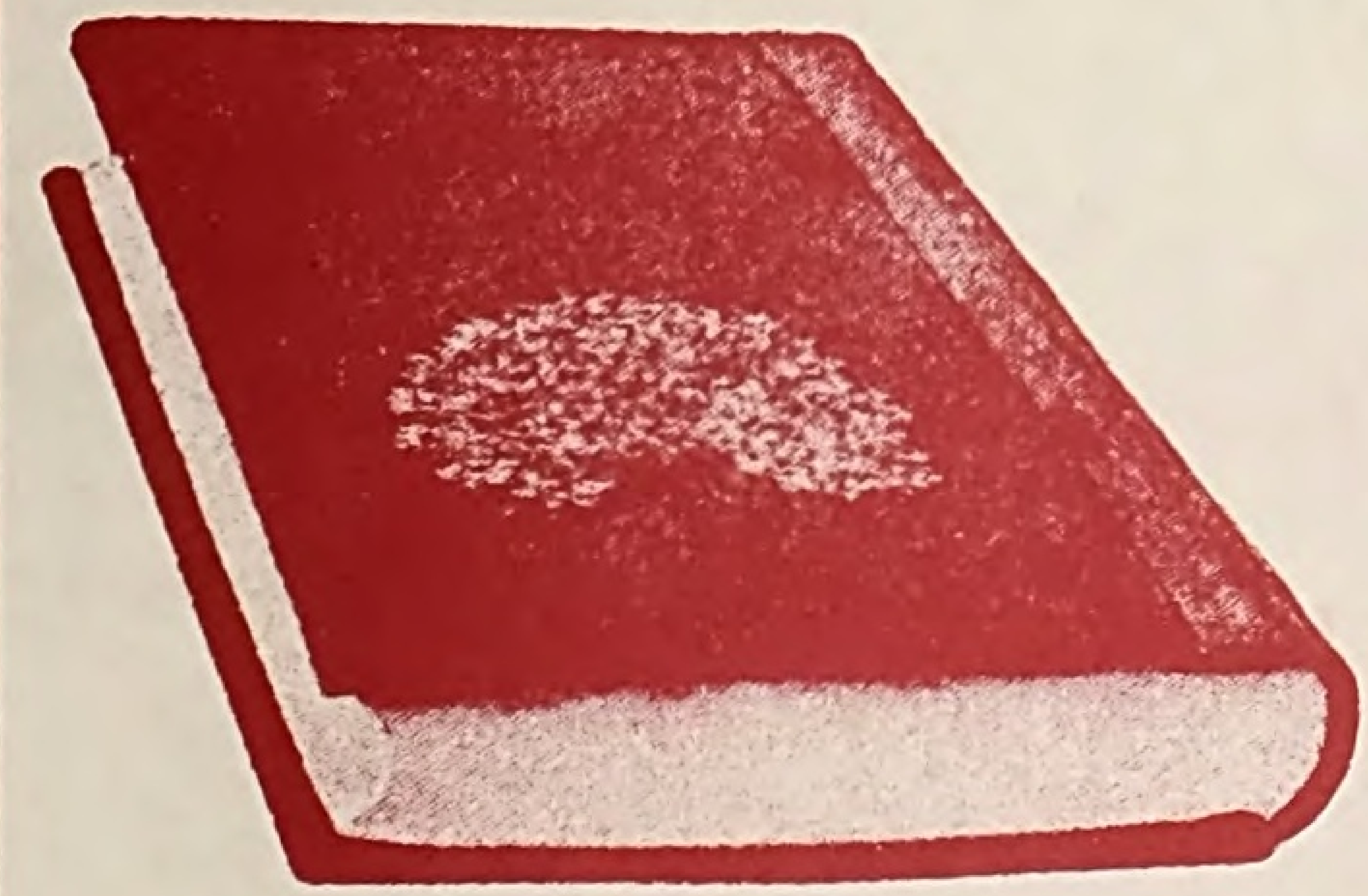
誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
二郵便切手代用は一割増の事。

編輯兼發行者——長谷川時雨
印刷者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂　東海堂　大東館　北隆館　至誠堂

發行所　東京市牛込區左內町三十一地谷
女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京　七五八二五


そろ〳〵お寒くなつて來ました
ヘチマクリームてあなたの
お肌をお護り遊ばせ！
肌あれを防ぎ
粉おしろい下に最もよき
純國產美粧料
ヘチマクリーム
姉妹品
ヘチマコロン
素肌を美しくととのへ
剃刀まけを防ぐ化粧水
定價
ヘチマクリーム 大瓶 七十五錢 中瓶 五十錢 小瓶 三十錢
ヘチマコロン 大瓶 五十錢 小瓶 三十錢
東京日本橋横山町
本舗 天野源七

時雨脚本集 第一輯



――ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするものの苦しさと惱ましさとがあり、それを生き拔かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの憂鬱を見て來た。そして彼女はかなり十分に內省と認識とに月日を費やしたのだつた。その效果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な痼癖に、內なるものを傷けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる。此の集に盛られたものは、多くこの再生期――展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繋けることは慥かに出來る――

三上於菟吉氏序

內容

ミイの生れた朝　暗夜
月に住む人　氷の雨
つくしの空　犬
業火の洗禮　手見奈
北國藥研谷　西の空

定價金貳圓
送料金六錢
本社處女出版の美本です

東京市牛込區左內町三十一
發行 女人藝術社
振替東京七五八三
電話牛込一七八九